

|              |  |        |           |          |     |       |
|--------------|--|--------|-----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12201  | 授業題目   | 日本古典文学論特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義   | 履修開始年次 | 1         | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 福島 尚   |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 演習的に授業を進めるので、テキスト読解についての下調べは必須。  |        |           |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 日本古典文学(説話関連領域を中核とする)についての文献学的研究  |        |           |          |     |       |
| 授業計画         | <p>「説話」(時間的・空間的に伝承される話)と関連する日本古典文学作品を取り上げ、それを文献学的・注釈的に読み解きながら、「説話」が日本古典文学の諸ジャンルに与えた影響を検証し、その言説としての特質を考察する。取り上げる作品については、受講生との相談の上で決定する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション</li> <li>2. 日本古典文学作品の文献学的研究方法(1)本文批評</li> <li>3. 日本古典文学作品の文献学的研究方法(2)注釈的研究</li> <li>4. 日本古典文学作品の文献学的研究方法と文芸批評的研究方法</li> <li>5. 「説話」という言説(1)その伝承性と批評性</li> <li>6. 「説話」という言説(2)文芸の諸ジャンルの地下水脈</li> <li>7. 講義の主対象として取り上げる作品の文献学的解題</li> <li>8. 講義の主対象として取り上げる作品の研究史解説</li> <li>9. 作品ならびにその研究文献の講読(1)</li> <li>10. 作品ならびにその研究文献の講読(2)</li> <li>11. 作品ならびにその研究文献の講読(3)</li> <li>12. 作品ならびにその研究文献の講読(4)</li> <li>13. 作品ならびにその研究文献の講読(5)</li> <li>14. 作品ならびにその研究文献の講読(6)</li> <li>15. まとめ一問題の所在の確認</li> </ol> |        |           |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 日本古典文学の文献学的・注釈的読解能力を高めるとともに、「説話」伝承の有様から窺える社会の中での情報の伝播や、意識・無意識の情報操作の有様などについて理解を深める。   |        |           |          |     |       |
| 参考文献等        | 講義で取り上げる対象は、受講生と相談の上決定するので、開講後指示する。  |        |           |          |     |       |
| 教科書          | 講義で取り上げる対象は、受講生と相談の上決定するので、開講後指示する。  |        |           |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 平常のテキスト読解における受講生の学習態度およびその成果により評価  |        |           |          |     |       |

|              |  |        |           |          |     |       |
|--------------|--|--------|-----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12202  | 授業題目   | 日本文献資料論特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義   | 履修開始年次 | 1         | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 鈴木 隆司  |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |  |        |           |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 中古文学を中心とした日本古典文学についての文献学的研究  |        |           |          |     |       |
| 授業計画         | <p>日本古典文学の中からいくつかの作品を取り上げ、それぞれの作品に即して本文批判、成立問題、出典研究などの文献学上の諸問題を考える。講義に際しては、3回程度を1つのまとまりとして1作品を扱い、1回に1つのテーマを扱う(たとえば、3回の講義で『源氏物語』を扱い、1回目に「源氏物語の本文批判」、2回目に「源氏物語の成立問題」、といった形で講義を進めていく)</p> <p>第1回 オリエンテーション<br/> 第2回 古今和歌集の文献学上の問題<br/> 第3回 古今和歌集の文献学上の問題<br/> 第4回 古今和歌集の文献学上の問題<br/> 第5回 古今和歌集の文献学上の問題<br/> 第6回 伊勢物語の文献学上の問題<br/> 第7回 伊勢物語の文献学上の問題<br/> 第8回 伊勢物語の文献学上の問題<br/> 第9回 伊勢物語の文献学上の問題<br/> 第10回 源氏物語の文献学上の問題<br/> 第11回 源氏物語の文献学上の問題<br/> 第12回 源氏物語の文献学上の問題<br/> 第13回 源氏物語の文献学上の問題<br/> 第14回 源氏物語の文献学上の問題<br/> 第15回 まとめ</p> |        |           |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 講義で扱った作品についての文献学上の問題について、理解を深める。   |        |           |          |     |       |
| 参考文献等        |  |        |           |          |     |       |
| 教科書          | 使用しない。必要な資料はプリントで配布する。   |        |           |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席状況と受講態度(30%)、学期末レポート(70%)  |        |           |          |     |       |

|              |  |        |            |          |     |       |
|--------------|--|--------|------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12203  | 授業題目   | 近代日本語文化論特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義   | 履修開始年次 | 1          | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 田鎖 数馬  |        | 担当教員所属     | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |  |        |            |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 日本近代文学   |        |            |          |     |       |
| 授業計画         | <p>日本近代文学についての優れた論文を書くための準備、という位置付けで講義を行う。まず、先行の研究を紹介し、どこが優れているのか、どこに問題があるのかを考える。それから、文献の調査の仕方、論理的な文章の書き方、などを講義する。また、具体的に作品を取り上げて、それに注釈を加えながら、既存の読みとは異なる新しい読みの可能性を探る。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 ガイダンス</li> <li>2 自筆原稿を用いて読む</li> <li>3 書簡を用いて読む</li> <li>4 メモ書きを用いて読む</li> <li>5 同一作家の二つ以上の作品を比較する</li> <li>6 随筆や評論を用いて読む</li> <li>7 初出本文との異同を調べる</li> <li>8 同時代の資料を調べる</li> <li>9 注釈をつける</li> <li>10 日本近代文学と英文学</li> <li>11 日本近代文学と漢文学</li> <li>12 日本近代文学と古典文学</li> <li>13 先行の論文を批判的に読む</li> <li>14 先行の論文を批判的に読む</li> <li>15 先行の論文を批判的に読む</li> </ol> |        |            |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 文献の調査の仕方、論理的な文章の書き方、などを論文執筆に必要なことをマスターすることができたかどうか。  |        |            |          |     |       |
| 参考文献等        |  |        |            |          |     |       |
| 教科書          | 適宜プリントを配布する。   |        |            |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席及び学期末レポートから総合的に判断する。   |        |            |          |     |       |

|              |  |        |          |          |     |       |
|--------------|--|--------|----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12204  | 授業題目   | 日本語言語論特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義   | 履修開始年次 | 1        | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 山本 秀人  |        | 担当教員所属   | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |  |        |          |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 平安時代～鎌倉時代を中心とする日本語学(特に、訓点資料を含む漢字使用文献、辞書・音義類の研究)  |        |          |          |     |       |
| 授業計画         | <p>平安時代から鎌倉時代を中心とする日本語を対象に、その種々の言語事象、特徴について述べる。その際、その当時の具体的な文献資料の実例をもって説明することを主眼とし、それぞれの言語事象・特徴に関連して、当時の学問(仏教者におけるものを含む)などの言語文化的観点からのアプローチ、意義付けも重視する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 平安時代～鎌倉時代における日本語資料の種類・分類—その1(使用文字:漢文(=漢字文)、平仮名文、漢字片仮名交り文)</li> <li>2. 平安時代～鎌倉時代における日本語資料の種類・分類—その2(用語(=使用語)・文体:漢文訓読文、和文、和漢混淆文)</li> <li>3. 平仮名文「土左日記」の用語と文体</li> <li>4. 平仮名文「源氏物語」の用語と文体</li> <li>5. 漢文と漢文訓読、訓点資料</li> <li>6. 漢文訓読文(「大慈恩寺三蔵法師伝」平安後期・院政期点、「白氏文集」院政期点等)の用語と文体</li> <li>7. 平漢字片仮名交り文「今昔物語集」の用語と文体—その1(和漢混淆文としての全体的位置付け)</li> <li>8. 平漢字片仮名交り文「今昔物語集」の用語と文体—その2(漢文訓読文との関係、和文との関係)</li> <li>9. 訓点資料の分類(漢籍、仏書)とフコト点</li> <li>10. 仏書訓点資料のフコト点と教学</li> <li>11. 辞書の編纂(「和名類聚抄」、「類聚名義抄」、「色葉字類抄」)</li> <li>12. 「和名類聚抄」の内容と日本語学的意義</li> <li>13. 「類聚名義抄」の内容と編纂・改編の様相</li> <li>14. 「類聚名義抄」の日本語学的意義—その1(仏書との関係、漢文訓読との関係)</li> <li>15. 「類聚名義抄」の日本語学的意義—その2(改編の意義、後世への影響)</li> </ol> |        |          |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 文献資料の日本語学的見方、扱い方を修得し、それによって、文献資料による実証的な日本語学の観点と研究方法を知る。  |        |          |          |     |       |
| 参考文献等        |  |        |          |          |     |       |
| 教科書          | 原則として配付プリントによる。  |        |          |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | レポートによるが、状況によっては、筆記試験を課すこともある。   |        |          |          |     |       |

|              |  |        |         |          |     |       |
|--------------|--|--------|---------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12205  | 授業題目   | 比較文化論特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義   | 履修開始年次 | 2       | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 小澤 萬記  |        | 担当教員所属  | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |  |        |         |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 比較文学・比較文化  |        |         |          |     |       |
| 授業計画         | <p>明治期以降の日本の近代化を翻訳との関係で考える。翻訳された文献によって近代日本の諸学問がどのように形成されたのかを見ていく。具体的には、参加者の専門分野にかかわる近代の翻訳文献をそれぞれ取り上げて報告を行い、それを踏まえて討論を行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 インTRODクシヨ</li> <li>2 翻訳語の成立</li> <li>3 万国公法</li> <li>4 西洋事情</li> <li>5 文明論の概略</li> <li>6 まとめ</li> <li>7 学生報告1</li> <li>8 学生報告2</li> <li>9 学生報告3</li> <li>10 学生報告4</li> <li>11 KJ法 1</li> <li>12 KJ法 2</li> <li>13 KJ法 3</li> <li>14 まとめ</li> <li>15 テスト</li> </ol> |        |         |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 日本の近代化を「翻訳」の観点から見ることで、参加者の専門分野の問題を比較文化的観点から見られるようにする。  |        |         |          |     |       |
| 参考文献等        | 『翻訳の思想』岩波書店  |        |         |          |     |       |
| 教科書          | 特になし   |        |         |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 授業での報告、最終レポート。   |        |         |          |     |       |

|              |  |        |           |          |     |       |
|--------------|--|--------|-----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12207  | 授業題目   | 中世日本社会史特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義   | 履修開始年次 | 1         | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 津野 倫明  |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 講義内容および関連文献(論文・著書など)の予習・復習   |        |           |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 日本中～近世初期の政治史   |        |           |          |     |       |
| 授業計画         | <p>豊臣政権期の政治史とくに朝鮮出兵とその国内政治への影響について論じる予定である。具体的には、以下のような内容を計画している。</p> <p>第1回 ガイダンス<br/> 第2回 朝鮮出兵の概要<br/> 第3回 秀吉の構想と当初の部隊編成<br/> 第4回 全州会議と忠清道侵攻<br/> 第5回 井邑会議と全羅道侵攻<br/> 第6回 倭城の普請・在番<br/> 第7回 蔚山の戦い<br/> 第8回 戦線縮小論<br/> 第9回 諸将の帰還<br/> 第10回 大名にとっての慶長の役の意義1<br/> 第11回 大名にとっての慶長の役の意義2<br/> 第12回 大名にとっての慶長の役の意義3<br/> 第13回 朝鮮出兵と秀吉死後の政局1<br/> 第14回 朝鮮出兵と秀吉死後の政局2<br/> 第15回 試験</p> |        |           |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 史料にもとづいて史実を確定する研究方法とその成果を理解する(史料解釈も含む)。  |        |           |          |     |       |
| 参考文献等        | 特に指定しない。   |        |           |          |     |       |
| 教科書          | 特に指定しない。   |        |           |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 史料に関する授業ごとの口頭試問と期末の筆記試験。   |        |           |          |     |       |

|              |   |        |           |          |     |       |
|--------------|---|--------|-----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12208   | 授業題目   | 近世日本社会史特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義  | 履修開始年次 | 1         | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 萩 慎一郎   |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 特に予備知識等は必要としないが、研究内容の固別性と一般化を理解する力を求める。   |        |           |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 近世鉱山社会史の研究・近世社会史の研究   |        |           |          |     |       |
| 授業計画         | <p>近世社会史関係、すなわち鉱山社会または浦社会、地域社会等を講じる。鉱山社会史の場合は、鉱山支配、鉱山の経営構造、鉱山法、社会集団、鉱業技術等、鉱山社会史の諸問題について講じながら、近世社会史の特質を究明する。</p> <p>第1回～ガイダンス<br/> 第2回～近世社会史研究と鉱山社会史<br/> 第3回～近世鉱業の概要<br/> 第4回～近世鉱業の生産過程<br/> 第5回～近世の鉱山支配<br/> 第6回～近世鉱山の経営と鉱山社会<br/> 第7回～金名子「経営」と金掘り<br/> 第8回～鉱山の住民構成と鉱山社会<br/> 第9回～金掘りの社会集団と「鎚親」制<br/> 第10回～近世鉱山法と鉱山社会<br/> 第11回～鉱山の「一揆」と鉱山社会<br/> 第12回～近世の鉱業技術とその伝播<br/> 第13回～鉱山と周辺地域社会<br/> 第14回～鉱山と近世社会<br/> 第15回～講義のまとめと課題。</p> |        |           |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 近世社会史研究の成果を講義内容から学び理解する。  |        |           |          |     |       |
| 参考文献等        | 講義のなかで適宜紹介する。   |        |           |          |     |       |
| 教科書          | 特になし。   |        |           |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 試験またはレポートを課し評価する。   |        |           |          |     |       |

|              |  |        |           |          |     |       |
|--------------|--|--------|-----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12209  | 授業題目   | 近代日本政治史特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義   | 履修開始年次 | 1         | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 小幡 尚   |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |  |        |           |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 日本近代史(行刑史・治安維持法史などを中心とする近代日本刑事政策史研究)   |        |           |          |     |       |
| 授業計画         | <p>日本近代史上の諸問題を資料に基づいて考察する。大正デモクラシー期から敗戦に至る時期を主な検討の対象として、政治過程の変容・法制の変遷などを考察する。とくに、明治憲法を含めた法と社会の動向との関係を考察の中心に据え、そこからそれぞれの時代相を明らかにしていく。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 ガイダンス 授業の進め方について</li> <li>2 「米騒動」について</li> <li>3 「普選運動」について</li> <li>4 「護憲三派内閣」について</li> <li>5 「関東大震災」について</li> <li>6 「震災後の国内状況」について</li> <li>7 「満州事変」について</li> <li>8 「ファシズムの思想と運動」について</li> <li>9 「天皇機関説事件」について</li> <li>10 「日中全面戦争」について</li> <li>11 「国民精神総動員運動」について</li> <li>12 「大政翼賛会」について</li> <li>13 「太平洋戦争」について(開戦をめぐって)</li> <li>14 「太平洋戦争」について(「終戦」をめぐって)</li> <li>15 まとめ</li> </ol> |        |           |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 日本近代史における政治史の諸問題等の概略を理解し、当該研究分野の現在の研究水準がある程度理解すること。また、学術書を正確に読む力を身に付けること。  |        |           |          |     |       |
| 参考文献等        | 授業時間中に適宜紹介する。  |        |           |          |     |       |
| 教科書          | とくに指定しない。授業プリントを配付する。  |        |           |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 学期末のレポートを成績評価の主たる材料とする。  |        |           |          |     |       |

|              |   |        |         |          |     |       |
|--------------|---|--------|---------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12210   | 授業題目   | 地域言語論特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義  | 履修開始年次 | 1       | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 上野 智子   |        | 担当教員所属  | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | とくになし   |        |         |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 方言研究・地名研究   |        |         |          |     |       |
| 授業計画         | <p>高知県の地域言語である高知県方言は、大きく東西の二方言(土佐弁・幡多弁)に分かれる。音韻・文法・語彙の視点から二方言の共通点と相違点を整理し、現在起こっているそれぞれの変化に着目しながら地域言語の動向を探る。</p> <p>第1回 高知県方言について<br/> 第2回 高知県方言の東西差についての従来研究(1)<br/> 第3回 高知県方言の東西差についての従来研究(2)<br/> 第4回 高知県方言の東西差についての従来研究(3)<br/> 第5回 従来研究に欠落している視点(1)<br/> 第6回 従来研究に欠落している視点(2)<br/> 第7回 研究者側の問題(ネイティブかノンネイティブか)となる視点(1)<br/> 第8回 研究者側の問題(ネイティブかノンネイティブか)となる視点(2)<br/> 第9回 1～8回を踏まえての議論<br/> 第10回 音韻面から見た今後の研究の可能性<br/> 第11回 文法面から見た今後の研究の可能性<br/> 第12回 語彙面から見た今後の研究の可能性<br/> 第13回 言語生活面から見た今後の研究の可能性<br/> 第14回 言語史面から見た今後の研究の可能性<br/> 第15回 全体をふりかえっての議論と意見交換</p> |        |         |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 高知県方言についての簡単な解説ができるくらいまでに到達すること。  |        |         |          |     |       |
| 参考文献等        | 高知県方言関係の文献を総合的に網羅すること。  |        |         |          |     |       |
| 教科書          | なし  |        |         |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | レポート  |        |         |          |     |       |

|              |   |        |           |          |     |       |
|--------------|---|--------|-----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12211   | 授業題目   | 地域システム論特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義  | 履修開始年次 | 1         | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 後藤 拓也   |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 高知県を含む日本の農山漁村地域について興味関心を持っていること。  |        |           |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 日本の農山漁村地域システムに関する地理学的研究   |        |           |          |     |       |
| 授業計画         | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス</li> <li>2. 現代の農山漁村地域システムを理解するための概念(1)(アグリビジネス論)</li> <li>3. 現代の農山漁村地域システムを理解するための概念(2)(フードシステム論)</li> <li>4. 現代の農山漁村地域システムを理解するための概念(3)(ブランド化戦略)</li> <li>5. 日本の農山漁村地域システム(1)(グローバル化と農山漁村地域)</li> <li>6. 日本の農山漁村地域システム(2)(企業の農業参入)</li> <li>7. 日本の農山漁村地域システム(3)(グリーンツーリズムの展開)</li> <li>8. 日本の農山漁村地域システム(4)(農産物直売所と地産地消)</li> <li>9. 日本の農山漁村地域システム(5)(地域ブランドの普及)</li> <li>10. 高知県の農山漁村地域システム(1)(グローバル化と農山漁村地域)</li> <li>11. 高知県の農山漁村地域システム(2)(企業の農業参入)</li> <li>12. 高知県の農山漁村地域システム(3)(グリーンツーリズムの展開)</li> <li>13. 高知県の農山漁村地域システム(4)(農産物直売所と地産地消)</li> <li>14. 高知県の農山漁村地域システム(5)(地域ブランドの普及)</li> <li>15. まとめ</li> <li>16. 定期試験</li> </ol> |        |           |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 現代の農山漁村地域システムを理解するための最新の概念を理解する。</li> <li>2. 高知県を含む日本の農山漁村地域がどのような変化を遂げているのかを理解する。</li> </ol>   |        |           |          |     |       |
| 参考文献等        | 参考文献等は授業中に適宜紹介する。   |        |           |          |     |       |
| 教科書          | 特定の教科書は用いない。  |        |           |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 平常点(受講態度)および定期試験の得点によって評価を行う。なお、平常点と定期試験の点数配分は40:60とする。   |        |           |          |     |       |

|              |  |        |         |          |     |       |
|--------------|--|--------|---------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12212  | 授業題目   | 自然環境論特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義   | 履修開始年次 | 1       | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 杉谷 隆   |        | 担当教員所属  | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |  |        |         |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 自然地理学  |        |         |          |     |       |
| 授業計画         | <p>教科書のうち杉谷担当章「環境問題と日本人の環境観」の記載順に講じる。すなわち、</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 環境問題への視野(物質・社会的問題),</li> <li>2. 環境問題への視野(精神的問題),</li> <li>3. 環境に関する議論(自然観論),</li> <li>4. 環境に関する議論(自然破壊の原因論),</li> <li>5. 環境問題略史(戦前期の思想的側面),</li> <li>6. 環境問題略史(戦前期の事件),</li> <li>7. 環境問題略史(戦後期の事件),</li> <li>8. 環境問題略史(自然史研究の発展),</li> <li>9. 環境問題略史(開発反対運動などの社会運動),</li> <li>10. 環境問題略史(高度経済成長期の諸相),</li> <li>11. 環境問題略史(野生生物保護),</li> <li>12. 環境問題略史(バブル期),</li> <li>13. 環境問題略史(バブル期以降),</li> <li>14. 新聞記事にみる国民の関心の変化,</li> <li>15. 筆記試験である。</li> </ol> |        |         |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 環境問題に対して広い視野で考えることができるようになり, 日本がたどってきた道筋について通史的・基礎的な理解を得る。   |        |         |          |     |       |
| 参考文献等        |  |        |         |          |     |       |
| 教科書          | 『国土空間と地域社会』朝倉書店  |        |         |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席と筆記試験による   |        |         |          |     |       |

|              |  |        |        |          |     |       |
|--------------|--|--------|--------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12213  | 授業題目   | 考古学特論  |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義   | 履修開始年次 | 1      | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 清家 章   |        | 担当教員所属 | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |  |        |        |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 弥生時代～古墳時代を中心とした日本考古学の研究  |        |        |          |     |       |
| 授業計画         | <p>学生の研究テーマに沿った専門論文を講読し、なおかつ資料の観察法を学ぶ。今年度は、土器論文・中世山城関係論文を読む。資料観察は発掘調査報告書を読み、その資料提示法を学習する。拓本等の実践的練習も行う。論文購読7回・資料観察6回と予備2回を予定。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 考古学遺跡調査報告書読解</li> <li>2. 考古学遺跡調査報告書読解</li> <li>3. 考古学出土遺物整理法(1)</li> <li>4. 考古学出土遺物整理法(2)</li> <li>5. 中世山城関連論文講読</li> <li>6. 中世山城関連論文講読(2)</li> <li>7. 中世土器研究論文講読(1)</li> <li>8. 中世土器研究論文講読(2)</li> <li>9. 発掘調査現場指導(1)</li> <li>10. 発掘調査現場指導(2)</li> <li>11. 出土遺物観察法(1)</li> <li>12. 出土遺物観察法(2)</li> <li>13. 出土遺物観察法(3)</li> <li>14. 資料見学</li> <li>15. まとめ</li> </ol> |        |        |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 修士論文作成に必要な専攻時代の概要を知る。あるいは、考古学専門書と発掘調査報告書を読んで理解する知識を習得する。   |        |        |          |     |       |
| 参考文献等        |  |        |        |          |     |       |
| 教科書          |  |        |        |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 平常点(出席と発表内容)。  |        |        |          |     |       |

|              |  |        |            |          |     |       |
|--------------|--|--------|------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12251  | 授業題目   | 日本古典文学論演習I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 1          | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 福島 尚   |        | 担当教員所属     | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | テキスト読解についての下調べは必須。   |        |            |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 日本古典文学(説話関連領域を中核とする)についての文献学的研究  |        |            |          |     |       |
| 授業計画         | <p>別記「日本古典文学論特論」での成果をふまえて、特定の日本古典文学作品を対象に、その文献学的・注釈的読解演習をおこなう。授業では研究発表とディスカッションを行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション</li> <li>2. 演習の対象として取り上げる作品の文献学的解題</li> <li>3. 演習の対象として取り上げる作品の研究史</li> <li>4. 演習の対象として取り上げる作品の文献学的・注釈的読解演習(1)</li> <li>5. 演習の対象として取り上げる作品の文献学的・注釈的読解演習(2)</li> <li>6. 演習の対象として取り上げる作品の文献学的・注釈的読解演習(3)</li> <li>7. 演習の対象として取り上げる作品の文献学的・注釈的読解演習(4)</li> <li>8. 演習の対象として取り上げる作品の文献学的・注釈的読解演習(5)</li> <li>9. 演習の対象として取り上げる作品の文献学的・注釈的読解演習(6)</li> <li>10. 演習の対象として取り上げる作品の文献学的・注釈的読解演習(7)</li> <li>11. 演習の対象として取り上げる作品の文献学的・注釈的読解演習(8)</li> <li>12. 演習の対象として取り上げる作品の文献学的・注釈的読解演習(9)</li> <li>13. 演習の対象として取り上げる作品の文献学的・注釈的読解演習(10)</li> <li>14. 演習の対象として取り上げる作品の文献学的・注釈的読解演習(11)</li> <li>15. 演習の対象として取り上げる作品の文献学的・注釈的読解演習(12)</li> </ol> |        |            |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 日本古典文学の文献学的・注釈的読解能力を、受講生自らが調査研究することによって高める。  |        |            |          |     |       |
| 参考文献等        | 演習で取り上げる対象は、受講生と相談の上決定するので、開講後指示する。  |        |            |          |     |       |
| 教科書          | 演習で取り上げる対象は、受講生と相談の上決定するので、開講後指示する。  |        |            |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 平常のテキスト読解における受講生の学習態度およびその成果により評価  |        |            |          |     |       |

|              |  |        |             |          |     |       |
|--------------|--|--------|-------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12252  | 授業題目   | 日本古典文学論演習II |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 2           | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 福島 尚   |        | 担当教員所属      | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 演習的に授業を進めるので、テキスト読解についての下調べは必須。  |        |             |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 日本古典文学(説話関連領域を中核とする)についての文献学的研究  |        |             |          |     |       |
| 授業計画         | <p>特定の日本古典文学作品を対象に、その文献学的・注釈的読解を基礎としてふまえながら、受講生自らが問題を探求し、その解決を試みる演習をおこなう。授業では研究発表とディスカッションを行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 研究課題の明確化—問題の所在を明らかにする(1)</li> <li>2. 研究課題の明確化—問題の所在を明らかにする(2)</li> <li>3. 研究対象に関する発表とディスカッション(1)</li> <li>4. 研究対象に関する発表とディスカッション(2)</li> <li>5. 研究対象に関する発表とディスカッション(3)</li> <li>6. 研究対象に関する発表とディスカッション(4)</li> <li>7. 研究対象に関する発表とディスカッション(5)</li> <li>8. 研究対象に関する発表とディスカッション(6)</li> <li>9. 研究対象に関する発表とディスカッション(7)</li> <li>10. 研究対象に関する発表とディスカッション(8)</li> <li>11. 研究対象に関する発表とディスカッション(9)</li> <li>12. 研究対象に関する発表とディスカッション(10)</li> <li>13. 研究対象に関する発表とディスカッション(11)</li> <li>14. 研究対象に関する発表とディスカッション(12)</li> <li>15. まとめ</li> </ol> |        |             |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 日本古典文学の文献学的・注釈的読解能力を高め、受講生自らが問題を探求し解決する能力を涵養する。  |        |             |          |     |       |
| 参考文献等        | 演習で取り上げる対象は、受講生と相談の上決定するので、開講後指示する。  |        |             |          |     |       |
| 教科書          | 演習で取り上げる対象は、受講生と相談の上決定するので、開講後指示する。  |        |             |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 平常の演習における受講生の態度およびその成果により評価  |        |             |          |     |       |

|              |  |        |             |          |     |       |
|--------------|--|--------|-------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12253  | 授業題目   | 日本文献資料論演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 1           | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 鈴木 隆司  |        | 担当教員所属      | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |  |        |             |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 中古文学を中心とした日本古典文学についての文献学的研究  |        |             |          |     |       |
| 授業計画         | <p>日本文献資料論特論の講義内容を踏まえ、平安朝文学の諸作品やその享受資料に即して、輪番で研究発表を行う。対象とする作品について発表者が準備した発表資料に基づいて、研究発表とディスカッションを行う。</p> <p>第1回 オリエンテーション<br/> 第2回 研究発表とディスカッション<br/> 第3回 研究発表とディスカッション<br/> 第4回 研究発表とディスカッション<br/> 第5回 研究発表とディスカッション<br/> 第6回 研究発表とディスカッション<br/> 第7回 研究発表とディスカッション<br/> 第8回 研究発表とディスカッション<br/> 第9回 研究発表とディスカッション<br/> 第10回 研究発表とディスカッション<br/> 第11回 研究発表とディスカッション<br/> 第12回 研究発表とディスカッション<br/> 第13回 研究発表とディスカッション<br/> 第14回 研究発表とディスカッション<br/> 第15回 総評</p> |        |             |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 日本古典文学を研究する上での文献の扱い方に習熟すること。   |        |             |          |     |       |
| 参考文献等        |  |        |             |          |     |       |
| 教科書          | 使用しない。必要な資料はプリントで配布する。   |        |             |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 発表、出席状況、受講態度(60%)、学期末レポート(40%)   |        |             |          |     |       |

|              |   |        |            |          |     |       |
|--------------|---|--------|------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12254   | 授業題目   | 日本文献資料論演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 2          | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 鈴木 隆司   |        | 担当教員所属     | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |   |        |            |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 中古文学を中心とした日本古典文学についての文献学的研究   |        |            |          |     |       |
| 授業計画         | <p>日本文献資料論特論・日本文献資料論演習Ⅰの内容を踏まえ、平安朝文学の諸作品やその享受資料に即して、輪番で研究発表を行う。対象とする作品について発表者が準備した発表資料に基づいて、研究発表とディスカッションを行う。</p> <p>第1回 オリエンテーション<br/> 第2回 研究発表とディスカッション<br/> 第3回 研究発表とディスカッション<br/> 第4回 研究発表とディスカッション<br/> 第5回 研究発表とディスカッション<br/> 第6回 研究発表とディスカッション<br/> 第7回 研究発表とディスカッション<br/> 第8回 研究発表とディスカッション<br/> 第9回 研究発表とディスカッション<br/> 第10回 研究発表とディスカッション<br/> 第11回 研究発表とディスカッション<br/> 第12回 研究発表とディスカッション<br/> 第13回 研究発表とディスカッション<br/> 第14回 研究発表とディスカッション<br/> 第15回 総評</p> |        |            |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 日本古典文学を研究する上での文献の扱い方に習熟すること。  |        |            |          |     |       |
| 参考文献等        |   |        |            |          |     |       |
| 教科書          | 使用しない。必要な資料はプリントで配布する。  |        |            |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 発表、出席状況、受講態度(60%)、学期末レポート(40%)  |        |            |          |     |       |

|              |   |        |              |          |     |       |
|--------------|---|--------|--------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12255   | 授業題目   | 近代日本語文化論演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 1            | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 田鎖 数馬   |        | 担当教員所属       | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |   |        |              |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 日本近代文学  |        |              |          |     |       |
| 授業計画         | <p>日本近代文学について各自が興味を持っている問題についての調査、発表を行ってもらう。発表に際しては、既存の研究とは異なる新しい視点が出せるようにする。テキストを補足するための資料の提出を要求する。発表に対して議論を重ね、問題の理解を深めていく。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 ガイダンス</li> <li>2 ガイダンス</li> <li>3 資料収集・調査</li> <li>4 資料収集・調査</li> <li>5 資料収集・調査</li> <li>6 資料収集・調査</li> <li>7 資料収集・調査</li> <li>8 資料収集・調査</li> <li>9 資料収集・調査</li> <li>10 学生発表</li> <li>11 学生発表</li> <li>12 学生発表</li> <li>13 学生発表</li> <li>14 学生発表</li> <li>15 まとめ</li> </ol> |        |              |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | <p>独創的な論文を書くための準備ができたかどうか。研究することの意義、面白さを知ることができたかどうか。</p>   |        |              |          |     |       |
| 参考文献等        |   |        |              |          |     |       |
| 教科書          | 適宜プリントを配布する   |        |              |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席及び発表内容から総合的に判断する  |        |              |          |     |       |

|              |  |        |             |          |     |       |
|--------------|--|--------|-------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12256  | 授業題目   | 近代日本語文化論演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 2           | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 田鎖 数馬  |        | 担当教員所属      | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |  |        |             |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 日本近代文学   |        |             |          |     |       |
| 授業計画         | <p>日本近代文学について各自が興味を持っている問題についての調査、発表を行ってもら。発表に際しては、既存の研究とは異なる新しい視点が出せるようにする。テキストを補足するための資料の提出を要求する。発表に対して議論を重ね、問題の理解を深めていく。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 ガイダンス</li> <li>2 ガイダンス</li> <li>3 資料収集・調査</li> <li>4 資料収集・調査</li> <li>5 資料収集・調査</li> <li>6 資料収集・調査</li> <li>7 資料収集・調査</li> <li>8 資料収集・調査</li> <li>9 資料収集・調査</li> <li>10 学生発表</li> <li>11 学生発表</li> <li>12 学生発表</li> <li>13 学生発表</li> <li>14 学生発表</li> <li>15 まとめ</li> </ol> |        |             |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | <p>独創的な論文を書くことための準備ができたかどうか。研究の意義、面白さを知ることができたかどうか。</p>  |        |             |          |     |       |
| 参考文献等        |  |        |             |          |     |       |
| 教科書          | 適宜プリントを配布する  |        |             |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席及び発表内容から総合的に判断する。  |        |             |          |     |       |

|              |   |        |          |          |     |       |
|--------------|---|--------|----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12257   | 授業題目   | 日本語論演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 1        | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 山本 秀人   |        | 担当教員所属   | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |   |        |          |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 平安時代～鎌倉時代を中心とする日本語学(特に、訓点資料を含む漢字使用文献、辞書・音義類の研究)   |        |          |          |     |       |
| 授業計画         | <p>文献資料による実証的な日本語学の研究方法を、具体的な日本語資料に基づいた実際の研究活動を通して身に付ける。具体的には、平安時代後半から鎌倉時代までの、古代語から中世語へ変遷して行く時期に当たる日本語を対象として、日本語学の観点と研究方法とを学ぶ。その方法として、該当する日本語資料の解読作業と、それを通じての何らかの日本語学的観点(受講生自身の希望や関心によるものも含みうる)による研究を受講生各自が行い、一人ずつ数回発表する。その際、教員および他の受講生との質疑応答、教員からの指導を行い、文献資料による実証的な日本語研究の実力を身に付ける。(以下、受講生3名を想定した授業計画とするが、実際の受講生数や受講生各自テーマによって適宜調整して実施する。)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 本演習の計画策定:原則として訓点資料の解読作業を共通テーマとし、受講生の関心や研究テーマもなるべく考慮して、資料の選定を行う(候補:「大慈恩寺三蔵法師伝」平安後期・院政期点、「白氏文集」院政期点、「将門記」院政期点など)。また、各自テーマによる発表も組み込むこととして、今後の発表ローテーション等を策定する。</li> <li>2. 選定資料の概要説明等:前回選定した共通テーマの訓点資料について、テキストの配付、概要説明、分担箇所、解読作業・発表の方法等について説明する。</li> <li>3. 共通テーマの訓点資料解読の発表・質疑応答(受講生A—1回目)</li> <li>4. 共通テーマの訓点資料解読の発表・質疑応答(受講生B—1回目)</li> <li>5. 共通テーマの訓点資料解読の発表・質疑応答(受講生C—1回目)</li> <li>6. 共通テーマの訓点資料解読の発表・質疑応答(受講生A—2回目)</li> <li>7. 共通テーマの訓点資料解読の発表・質疑応答(受講生B—2回目)</li> <li>8. 共通テーマの訓点資料解読の発表・質疑応答(受講生C—2回目)</li> <li>9. 共通テーマの訓点資料の解読についての補い・総括</li> <li>10. 共通テーマの訓点資料に関わる日本語学的研究または各自テーマの発表・質疑応答(受講生A—1回目)</li> <li>11. 共通テーマの訓点資料に関わる日本語学的研究または各自テーマの発表・質疑応答(受講生B—1回目)</li> <li>12. 共通テーマの訓点資料に関わる日本語学的研究または各自テーマの発表・質疑応答(受講生C—1回目)</li> <li>13. 共通テーマの訓点資料に関わる日本語学的研究または各自テーマの発表・質疑応答(受講生A—2回目)</li> <li>14. 共通テーマの訓点資料に関わる日本語学的研究または各自テーマの発表・質疑応答(受講生B—2回目)</li> <li>15. 共通テーマの訓点資料に関わる日本語学的研究または各自テーマの発表・質疑応答(受講生C—2回目)</li> </ol> |        |          |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 修士論文レベルに対応した、文献資料による実証的な日本語学の研究方法と実力を身に付ける。   |        |          |          |     |       |
| 参考文献等        |   |        |          |          |     |       |
| 教科書          | 原則として配布プリントによる。   |        |          |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 授業における課題発表・研究発表の状況による。必要に応じてレポートも課すこともある。   |        |          |          |     |       |

|              |   |        |         |          |     |       |
|--------------|---|--------|---------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12258   | 授業題目   | 日本語論演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 2       | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 山本 秀人   |        | 担当教員所属  | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |   |        |         |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 平安時代～鎌倉時代を中心とする日本語学(特に、訓点資料を含む漢字使用文献、辞書・音義類の研究)   |        |         |          |     |       |
| 授業計画         | <p>日本語論演習Ⅰに引き続いて、文献資料による実証的な日本語学の研究方法を、具体的な日本語資料に基づいた実際の研究活動を通して身に付ける。具体的には、主に、平安時代から鎌倉時代辺りの日本語資料を対象として(状況によっては江戸時代まで範囲を拡大する)、日本語学的観点(原則として受講生自身の研究テーマによるもの)による研究を受講生各自が行い、一人ずつ数回の発表をする。その際、教員および他の受講生との質疑応答、教員からの指導をも行い、文献資料による実証的な日本語研究の実力を身に付ける。(以下、受講生3名を想定した授業計画とするが、実際の受講生数や受講生各自テーマによって適宜調整して実施する。)</p> <p>1. 本演習の計画策定:(江戸時代以前の)日本語資料の解読作業を共通テーマとし、受講生の関心や研究テーマもなるべく考慮して、資料の選定を行う(原則として日本語論演習Ⅰで取り上げたものとは異なるものとし、必ずしも訓点資料に限定しない)。また、各自テーマによる発表も組み込むこととして、今後の発表ローテーション等を策定する。</p> <p>2. 選定資料の概要説明等:前回選定した共通テーマの訓点資料について、テキストの配付、概要説明、分担箇所、解読作業・発表の方法等について説明する。</p> <p>3. 共通テーマの訓点資料解読の発表・質疑応答(受講生A—1回目)</p> <p>4. 共通テーマの訓点資料解読の発表・質疑応答(受講生B—1回目)</p> <p>5. 共通テーマの訓点資料解読の発表・質疑応答(受講生C—1回目)</p> <p>6. 共通テーマの訓点資料解読の発表・質疑応答(受講生A—2回目)</p> <p>7. 共通テーマの訓点資料解読の発表・質疑応答(受講生B—2回目)</p> <p>8. 共通テーマの訓点資料解読の発表・質疑応答(受講生C—2回目)</p> <p>9. 共通テーマの訓点資料の解読についての補い・総括</p> <p>10. 共通テーマの訓点資料に関わる日本語学的研究または各自テーマの発表・質疑応答(受講生A—1回目)</p> <p>11. 共通テーマの訓点資料に関わる日本語学的研究または各自テーマの発表・質疑応答(受講生B—1回目)</p> <p>12. 共通テーマの訓点資料に関わる日本語学的研究または各自テーマの発表・質疑応答(受講生C—1回目)</p> <p>13. 共通テーマの訓点資料に関わる日本語学的研究または各自テーマの発表・質疑応答(受講生A—2回目)</p> <p>14. 共通テーマの訓点資料に関わる日本語学的研究または各自テーマの発表・質疑応答(受講生B—2回目)</p> <p>15. 共通テーマの訓点資料に関わる日本語学的研究または各自テーマの発表・質疑応答(受講生C—2回目)</p> |        |         |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 文献資料による実証的な日本語学の研究方法を身に付け、修士論文の制作に対して十分な実力を付けること。   |        |         |          |     |       |
| 参考文献等        |   |        |         |          |     |       |
| 教科書          | 原則として配布プリントによる。   |        |         |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 授業における研究発表の状況による。必要に応じてレポートも課すこともある。  |        |         |          |     |       |

|              |  |        |           |          |     |       |
|--------------|--|--------|-----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12259  | 授業題目   | 比較文化論演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 1         | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 小澤 萬記  |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |  |        |           |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 比較文学・比較文化  |        |           |          |     |       |
| 授業計画         | <p>柳父章『翻訳語成立事情』をテキストに、いくつかの社会科学用語の成立と意味の変遷について検討する。取り上げる言葉は社会、個人、権利、自由の4つである。一つの語の検討に3時間程度かけて、特に現代におけるこれらのことばの用法に、歴史的な意味の変遷がどのように影響しているのか(あるいはいないのか)を探る。</p> <p>1イントロダクション<br/> 2翻訳語の成立<br/> 3社会<br/> 4個人<br/> 5権利<br/> 6自由<br/> 7まとめ<br/> 8学生報告<br/> 9学生報告2<br/> 10学生報告3<br/> 11学生報告4<br/> 12総括討論1<br/> 13総括討論2<br/> 14まとめ<br/> 15テスト</p> |        |           |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 外来語の問題を参加者の専門分野と結びつけて検討することによって、専門用語の意味をより広い人文社会科学的観点から見られるようにする。  |        |           |          |     |       |
| 参考文献等        |  |        |           |          |     |       |
| 教科書          | 柳父章『翻訳語成立事情』   |        |           |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 授業での報告、最終レポート。   |        |           |          |     |       |

|              |   |        |          |          |     |       |
|--------------|---|--------|----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12260   | 授業題目   | 比較文化論演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 2        | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 小澤 萬記   |        | 担当教員所属   | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |   |        |          |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 比較文学・比較文化   |        |          |          |     |       |
| 授業計画         | <p>比較文化論演習Ⅰの内容を踏まえ明治期以降の翻訳語の歴史を概観する。具体的には、参加者の専門分野にかかわる重要な概念(翻訳語)について報告し、ディスカッションを行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 演習1のまとめ</li> <li>2 基本概念提示</li> <li>3 学生報告1</li> <li>4 学生報告2</li> <li>5 学生報告3</li> <li>6 学生報告4</li> <li>7 討論</li> <li>8 学生報告1</li> <li>9 学生報告2</li> <li>10 学生報告3</li> <li>11 学生報告4</li> <li>12 討論</li> <li>13 まとめ</li> <li>14 展望</li> <li>15 テスト</li> </ol> |        |          |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 「翻訳語」の問題を参加者の専門分野と結びつけて検討することによって、専門用語の意味をより広い人文社会科学的観点から見られるようにする。   |        |          |          |     |       |
| 参考文献等        | 柳父章『翻訳語成立事情』、杉本つとむ『近代日本語の成立』  |        |          |          |     |       |
| 教科書          | 特になし  |        |          |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 授業での報告、最終レポート。  |        |          |          |     |       |

|              |   |        |             |          |     |       |
|--------------|---|--------|-------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12261   | 授業題目   | 中世日本社会史演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 1           | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 津野 倫明   |        | 担当教員所属      | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 史料および関連文献(論文・著書など)に関する予習・復習   |        |             |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 日本中～近世初期の政治史  |        |             |          |     |       |
| 授業計画         | <p>講読する史料にもとづいた口頭発表(史料解釈・関連事項)と議論をおこなう。なお、講読する史料は日本中世から近世初期の政治史に関する記録(公家・武家・僧侶などの日記)あるいは文書とし、これらの解釈・操作の方法を学び、能力として習得することを目指す。具体的には、以下のような内容を計画している。</p> <p>第1回 ガイダンス(講読する史料と分担の決定)<br/> 第2回 史料講読と口頭発表1<br/> 第3回 史料講読と口頭発表2<br/> 第4回 史料講読と口頭発表3<br/> 第5回 史料講読と口頭発表4<br/> 第6回 史料講読と口頭発表5<br/> 第7回 史料講読と口頭発表6<br/> 第8回 第7回までの口頭発表に関する総合的な議論<br/> 第9回 史料講読と口頭発表7<br/> 第10回 史料講読と口頭発表8<br/> 第11回 史料講読と口頭発表9<br/> 第12回 史料講読と口頭発表10<br/> 第13回 史料講読と口頭発表11<br/> 第14回 史料講読と口頭発表12<br/> 第15回 第1回から第14回までの口頭発表に関する総括的な議論</p> |        |             |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 研究史もふまえて、史料を解釈・操作する能力を習得する。   |        |             |          |     |       |
| 参考文献等        | 特に指定しない。  |        |             |          |     |       |
| 教科書          | ガイダンス時に指定。  |        |             |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 史料とこれに関連する諸文献にもとづいた口頭発表。議論への参加。   |        |             |          |     |       |

|              |  |        |            |          |         |
|--------------|--|--------|------------|----------|---------|
| 授業コード        | 12262  | 授業題目   | 中世日本社会史演習Ⅱ | 単位数      | 2       |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 2          | 開講時期     | 1 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 津野 倫明  |        | 担当教員所属     | 人文社会科学専攻 |         |
| 履修における注意点    | 史料および関連文献(論文・著書など)に関する予習・復習  |        |            |          |         |
| 教員研究テーマ      | 日本中～近世初期の政治史   |        |            |          |         |
| 授業計画         | <p>中世日本社会史演習Ⅰを前提として、講読する史料にもとづいた口頭発表(史料解釈・関連事項)と議論をおこなう。なお、講読する史料は日本中世から近世初期の政治史に関する記録(公家・武家・僧侶などの日記)あるいは文書とし、これらの解釈・操作の方法を学び、能力として習得することを目指す。具体的には、以下のような内容を計画している。</p> <p>第1回 ガイダンス(講読する史料と分担の決定)<br/> 第2回 史料講読と口頭発表1<br/> 第3回 史料講読と口頭発表2<br/> 第4回 史料講読と口頭発表3<br/> 第5回 史料講読と口頭発表4<br/> 第6回 史料講読と口頭発表5<br/> 第7回 史料講読と口頭発表6<br/> 第8回 第7回までの口頭発表に関する総合的な議論<br/> 第9回 史料講読と口頭発表7<br/> 第10回 史料講読と口頭発表8<br/> 第11回 史料講読と口頭発表9<br/> 第12回 史料講読と口頭発表10<br/> 第13回 史料講読と口頭発表11<br/> 第14回 史料講読と口頭発表12<br/> 第15回 第1回から第14回までの口頭発表に関する総括的な議論</p> |        |            |          |         |
| 各科目の目標(達成水準) | 研究史もふまえて、史料を解釈・操作する能力を習得する。  |        |            |          |         |
| 参考文献等        | 特に指定しない。   |        |            |          |         |
| 教科書          | ガイダンス時に指定。   |        |            |          |         |
| 成績評価の基準と方法   | 史料とこれに関連する諸文献にもとづいた口頭発表。議論への参加。  |        |            |          |         |

|              |  |        |             |          |     |       |
|--------------|--|--------|-------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12263  | 授業題目   | 近世日本社会史演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 1           | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 荻 慎一郎  |        | 担当教員所属      | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 近世史料の読解力(場合によっては古文書史料の解読)、史料から問題を設定する力を求める。  |        |             |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 近世鉱山社会史の研究・近世社会史の研究  |        |             |          |     |       |
| 授業計画         | <p>藩政史料や農村史料、鉱山史料、浦史料、寺子屋等の庶民文化関係史料等、近世の諸史料を素材として、史料の読解・分析力、研究視点を学び、近世社会史や地域史、文化史の研究方法を修得する。主として鉱山や浦の日記史料を取り扱う。</p> <p>第1回～ガイダンス<br/> 第2回～『梅津政景日記』と近世初期の秋田藩領鉱山<br/> 第3回～『荒谷家文書』と近世中期の秋田藩領鉱山<br/> 第4回～『小貫家文書』と近世後期の秋田藩領鉱山<br/> 第5回～『門屋養安日記』と幕末秋田藩領の鉱山社会<br/> 第6回～『鹿兒島県史料』と近世初期の薩摩藩領鉱山<br/> 第7回～『金山萬留』と近世中期の薩摩藩領鉱山<br/> 第8回～『宗家文書』と近世初期の対馬藩領鉱山<br/> 第9回～『宗家文書』と近世中期の対馬藩領鉱山<br/> 第10回～生野銀山史料と明治初年奥銀谷町の住民構成<br/> 第11回～『歴代公紀』にみる近世初期の土佐藩領の浦<br/> 第12回～『真覚寺日記』にみる幕末土佐藩領の浦社会<br/> 第13回～川北村指し出帳にみる幕末土佐藩領の農村社会<br/> 第14回～『高知藩教育沿革取調』にみる幕末維新期の庶民教育<br/> 第15回～まとめと課題。</p> |        |             |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 史料の分析と問題設定、これに基づき調査研究と成果を発表できる力を育成する。  |        |             |          |     |       |
| 参考文献等        | 進度に応じて適宜、紹介する。   |        |             |          |     |       |
| 教科書          | 特になし。  |        |             |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 課題への取り組み、研究方法の修得水準によって評価する。  |        |             |          |     |       |

|              |  |        |            |          |     |       |
|--------------|--|--------|------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12264  | 授業題目   | 近世日本社会史演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 2          | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 荻 慎一郎  |        | 担当教員所属     | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 近世史料の読解力(場合によっては古文書史料の解読)、史料から問題を設定する力を求める。  |        |            |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 近世鉱山社会史の研究・近世社会史の研究  |        |            |          |     |       |
| 授業計画         | <p>藩政史料や農村史料、鉱山史料、浦史料、寺子屋等の庶民文化関係史料等、近世の諸史料を素材として、史料の読解・分析力、研究視点を学ぶ。近世日本社会史演習Ⅰを踏まえて、近世社会史や地域史、文化史の諸論点を史料に基づき深める。</p> <p>第1回～ガイダンス<br/> 第2回～『真覚寺日記』にみる安政大地震と地域社会<br/> 第3回～『真覚寺日記』にみる浦社会<br/> 第4回～『真覚寺日記』にみる神祭と地域社会<br/> 第5回～『真覚寺日記』にみる庶民の旅<br/> 第6回～『真覚寺日記』にみる金毘羅船旅の様相<br/> 第7回～『真覚寺日記』にみる寺子屋教育<br/> 第8回～『真覚寺日記』にみる地域知識人の社会認識<br/> 第9回～『真覚寺日記』にみる浦社会の生業<br/> 第10回～『島村右馬丞日記』にみる近世社会人の人生儀礼<br/> 第11回～『島村右馬丞日記』にみる近世農村の年中行事<br/> 第12回～『門屋養安日記』にみる鉱山の年中行事<br/> 第13回～『門屋養安日記』にみる鉱山の人生儀礼<br/> 第14回～『真覚寺日記』『島村右馬丞日記』『門屋養安日記』にみる地域社会と医療<br/> 第15回～まとめと課題。</p> |        |            |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 史料の分析と問題設定、これに基づき調査研究と成果を発表できる力を育成する。  |        |            |          |     |       |
| 参考文献等        | 進度に応じて適宜、紹介する。   |        |            |          |     |       |
| 教科書          | 特になし。  |        |            |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 課題への取り組み、研究方法の修得水準によって評価する。  |        |            |          |     |       |

|              |   |        |             |          |     |       |
|--------------|---|--------|-------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12265   | 授業題目   | 近代日本政治史演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 1           | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 小幡 尚  |        | 担当教員所属      | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |   |        |             |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 日本近代史(行刑史・治安維持法史などを中心とする近代日本刑事政策史研究)  |        |             |          |     |       |
| 授業計画         | <p>満州事変から日中戦争にかけての政治過程について、基礎的な史実を確認するとともに、当該期を扱う研究の現時点における水準を理解する。具体的には、下記の二つのテキストを精読していくこととなる。テキストの内容を正確に理解し、両者の比較から、その視角や問題意識を学ぶ。</p> <p>参加者は、毎回テキストの担当部分に関するレジメを作成しなければならない。レジメには、内容の要約、扱われている史実に関する確認、これまでの研究の達成点・問題点などである。授業時間においては、担当教員を含め、参加者全員で討議を行なう。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 ガイダンス 授業の進め方について</li> <li>2 伊香俊哉『戦争の日本史22 満州事変から日中全面戦争へ』(吉川弘文館、2007年)※以下、「伊香本」とする I章</li> <li>3 伊香本 II章</li> <li>4 伊香本 III章</li> <li>5 伊香本 IV章</li> <li>6 伊香本 V章</li> <li>7 伊香本 VI章</li> <li>8 伊香本全体について再検討</li> <li>9 加藤陽子『シリーズ日本近現代史5 満州事変から日中戦争へ』(岩波新書、2007年) ※以下、加藤本とする 1章</li> <li>10 加藤本 2章</li> <li>11 加藤本 3章</li> <li>12 加藤本 4章</li> <li>13 加藤本 5章</li> <li>14 加藤本全体について再検討</li> <li>15 まとめ 満州事変・日中戦争研究の現状と課題について</li> </ol> |        |             |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 満州事変・日中戦争期における政治史の概略を理解し、当該研究分野の現在の研究水準をある程度理解すること。また、学術書を正確に読む力を身に付けること。   |        |             |          |     |       |
| 参考文献等        | 授業時間中に適宜紹介する。   |        |             |          |     |       |
| 教科書          | 伊香俊哉『戦争の日本史22 満州事変から日中全面戦争へ』(吉川弘文館、2007年)<br>加藤陽子『シリーズ日本近現代史5 満州事変から日中戦争へ』(岩波新書、2007年)  |        |             |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 学期末のレポートを成績評価の主たる材料とする。テキストの主旨を正確に捉え、それに対する自身の見解が論理的に述べられているかどうかを採点の重点である。  |        |             |          |     |       |

|              |  |        |            |          |     |       |
|--------------|--|--------|------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12266  | 授業題目   | 近代日本政治史演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 2          | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 小幡 尚   |        | 担当教員所属     | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |  |        |            |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 日本近代史(行刑史・治安維持法史などを中心とする近代日本刑事政策史研究)   |        |            |          |     |       |
| 授業計画         | <p>アジア・太平洋戦争期の政治史を扱った下記テキストの精読を主たる内容とする。テキスト所収の論文を1編ずつ丁寧に読んでいく。</p> <p>参加者は、毎回扱う論文に関するレジメを作成しなければならない。レジメには、論文の要約、論文で扱われている史実に関する確認、これまでの研究の達成点・問題点などである。授業時間においては、担当教員を含め、参加者全員で討議を行なう。</p> <p>1 ガイダンス 授業の進め方について テキスト(吉田裕 [ほか]『岩波講座アジア・太平洋戦争2 戦争の政治学』(岩波書店、2005年))について</p> <p>2 加藤陽子論文(テキスト所収、以下同じなので略す)の検討</p> <p>3 古川隆久論文の検討</p> <p>4 安田浩論文の検討</p> <p>5 瀨藤厚論文の検討</p> <p>6 加瀬和俊論文の検討</p> <p>7 荻野富士夫論文の検討</p> <p>8 北原恵論文の検討</p> <p>9 大串潤児論文の検討</p> <p>10 赤沢史朗論文の検討</p> <p>11 野上元論文の検討</p> <p>12 原田敬一論文の検討</p> <p>13 波田永実論文の検討</p> <p>14 蘇貞姫サラ論文の検討</p> <p>15 まとめ 今後のアジア・太平洋戦争研究のあり方をめぐって</p> |        |            |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | アジア・太平洋戦争期の政治史の概略を理解し、当該研究分野の現在の研究水準をある程度理解すること。また、学術論文を正確に読む力を身に付けること。  |        |            |          |     |       |
| 参考文献等        | 授業時間中に適宜紹介する。  |        |            |          |     |       |
| 教科書          | 吉田裕 [ほか]『岩波講座アジア・太平洋戦争2 戦争の政治学』(岩波書店、2005年)  |        |            |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 学期末のレポートを成績評価の主たる材料とする。テキスト所収論文の主旨を正確に捉え、それに対する自身の見解が論理的に述べられているかどうか採点の重点である。  |        |            |          |     |       |

|              |  |        |           |          |     |       |
|--------------|--|--------|-----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12267  | 授業題目   | 地域言語論演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 1         | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 上野 智子  |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | とくになし  |        |           |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 方言研究・地名研究  |        |           |          |     |       |
| 授業計画         | <p>高知県方言の東ことば(土佐弁)・西ことば(幡多弁)を代表すると思われる地点を数地点(最低各1地点)選び、臨地調査を実施して、二方言の特色を音韻・文法・語彙の視点から整理し、研究発表とディスカッションを行う。</p> <p>第1回 方言研究の概観</p> <p>第2回 どんな現象を対象とするかについての準備(1)</p> <p>第3回 どんな現象を対象とするかについての準備(2)</p> <p>第4回 どんな現象を対象とするかについての準備(3)</p> <p>第5回 どこで実施するかについての検討(1)</p> <p>第6回 どこで実施するかについての検討(2)</p> <p>第7回 どんな方法で行うかについての検討(1)</p> <p>第8回 どんな方法で行うかについての検討(2)</p> <p>第9回 どんな方法で行うかについての検討(3)</p> <p>第10回 期待される成果の予測</p> <p>第11回 質問調査票の作成(1)</p> <p>第12回 質問調査票の作成(2)</p> <p>第13回 質問調査票の作成(3)</p> <p>第14回 調査全般の心得</p> <p>第15回 調査計画</p> |        |           |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 方言調査の実践能力を身につけ、問題点を掘り起こす能力を養う。   |        |           |          |     |       |
| 参考文献等        | 高知県方言の概説をはじめ、方言文献を広く渉猟すること。  |        |           |          |     |       |
| 教科書          | なし   |        |           |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | レポート   |        |           |          |     |       |

|              |   |        |          |          |     |       |
|--------------|---|--------|----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12268   | 授業題目   | 地域言語論演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 2        | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 上野 智子   |        | 担当教員所属   | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | とくになし   |        |          |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 方言研究・地名研究   |        |          |          |     |       |
| 授業計画         | <p>臨地調査を実施した、二方言の特色を音韻・文法・語彙の視点から整理し、研究発表とディスカッションを行う。成果によっては、音韻・アクセント項目、文法項目、語彙項目のいずれかを重点的にとりあげてもよい。</p> <p>第1回 調査結果の整理(1)</p> <p>第2回 調査結果の整理(2)</p> <p>第3回 調査結果の整理(3)</p> <p>第4回 中間発表・報告(1)</p> <p>第5回 調査結果の整理(4)</p> <p>第6回 調査結果の整理(5)</p> <p>第7回 調査結果の整理(6)</p> <p>第8回 中間発表・報告(2)</p> <p>第9回 調査結果の整理から確実に言えることと言えないことの議論</p> <p>第10回 調査結果の整理から確実に言えることと言えないことのまとめ</p> <p>第11回 今回の調査から明らかにできなかったことの整理(1)</p> <p>第12回 今回の調査から明らかにできなかったことの整理(2)</p> <p>第13回 調査計画の再検討</p> <p>第14回 今回の調査結果から明らかにしえた事柄の整理と総括</p> <p>第15回 全体をふりかえっての議論と意見交換</p> |        |          |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 方言調査の実践能力を身につけ、問題点を掘り起こす能力を養う。  |        |          |          |     |       |
| 参考文献等        | 高知県方言の概説をはじめ、方言文献を広く渉猟すること。   |        |          |          |     |       |
| 教科書          | なし  |        |          |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | レポート  |        |          |          |     |       |

|              |  |        |             |          |     |       |
|--------------|--|--------|-------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12269  | 授業題目   | 地域システム論演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 1           | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 後藤 拓也  |        | 担当教員所属      | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 高知県を含む日本の農山漁村地域について興味関心を持っていること。   |        |             |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 日本の農山漁村地域システムに関する地理学的研究  |        |             |          |     |       |
| 授業計画         | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス</li> <li>2. 日本の農山漁村地域に関する文献紹介(1)</li> <li>3. 日本の農山漁村地域に関する文献紹介(2)</li> <li>4. 日本の農山漁村地域に関する文献紹介(3)</li> <li>5. 日本の農山漁村地域に関する文献紹介(4)</li> <li>6. 日本の農山漁村地域に関する研究テーマと調査フィールド発表(1)</li> <li>7. 日本の農山漁村地域に関する研究テーマと調査フィールド発表(2)</li> <li>8. 日本の農山漁村地域に関する研究テーマと調査フィールド発表(3)</li> <li>9. 日本の農山漁村地域に関する研究テーマと調査フィールド発表(4)</li> <li>10. 資料収集および地域調査</li> <li>11. 日本の農山漁村地域に関する調査結果発表(1)</li> <li>12. 日本の農山漁村地域に関する調査結果発表(2)</li> <li>13. 日本の農山漁村地域に関する調査結果発表(3)</li> <li>14. 日本の農山漁村地域に関する調査結果発表(4)</li> <li>15. まとめ</li> </ol> |        |             |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 日本の農山漁村地域に関する地域調査能力(フィールドワーク能力)を習得する。</li> <li>2. 地域調査結果を簡潔かつ的確に報告できるプレゼンテーション能力を習得する。</li> </ol>  |        |             |          |     |       |
| 参考文献等        | 参考文献等は授業中に適宜紹介する。  |        |             |          |     |       |
| 教科書          | 特定の教科書は用いない。   |        |             |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 各回における発表内容およびディスカッションへの貢献度によって評価を行う。   |        |             |          |     |       |

|              |  |        |            |          |     |       |
|--------------|--|--------|------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12270  | 授業題目   | 地域システム論演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 2          | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 後藤 拓也  |        | 担当教員所属     | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 高知県を含む日本の農山漁村地域について興味関心を持っていること。   |        |            |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 日本の農山漁村地域システムに関する地理学的研究  |        |            |          |     |       |
| 授業計画         | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス</li> <li>2. 高知県の農山漁村地域に関する文献紹介(1)</li> <li>3. 高知県の農山漁村地域に関する文献紹介(2)</li> <li>4. 高知県の農山漁村地域に関する文献紹介(3)</li> <li>5. 高知県の農山漁村地域に関する文献紹介(4)</li> <li>6. 高知県の農山漁村地域に関する研究テーマと調査フィールド発表(1)</li> <li>7. 高知県の農山漁村地域に関する研究テーマと調査フィールド発表(2)</li> <li>8. 高知県の農山漁村地域に関する研究テーマと調査フィールド発表(3)</li> <li>9. 高知県の農山漁村地域に関する研究テーマと調査フィールド発表(4)</li> <li>10. 資料収集および地域調査</li> <li>11. 高知県の農山漁村地域に関する調査結果発表(1)</li> <li>12. 高知県の農山漁村地域に関する調査結果発表(2)</li> <li>13. 高知県の農山漁村地域に関する調査結果発表(3)</li> <li>14. 高知県の農山漁村地域に関する調査結果発表(4)</li> <li>15. まとめ</li> </ol> |        |            |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 高知県の農山漁村地域に関する地域調査能力(フィールドワーク能力)を習得する。</li> <li>2. 地域調査結果を簡潔かつ的確に報告できるプレゼンテーション能力を習得する。</li> </ol>   |        |            |          |     |       |
| 参考文献等        | 参考文献等は授業中に適宜紹介する。  |        |            |          |     |       |
| 教科書          | 特定の教科書は用いない。   |        |            |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 各回における発表内容およびディスカッションへの貢献度によって評価を行う。   |        |            |          |     |       |

|              |  |        |           |          |     |       |
|--------------|--|--------|-----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12271  | 授業題目   | 自然環境論演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 1         | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 杉谷 隆   |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 自然環境論特論を受講していること   |        |           |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 自然地理学  |        |           |          |     |       |
| 授業計画         | <p>受講生に自然地理学・環境地理学の範囲内からいくつかのテーマを示すので、各人そのなかから1つを選んで文献調査(学術的なものに限る)を行い、また新聞記事など時事的な資料を収集すること。結果は順番に発表してもらい、受講生全員で討論を交わす。文献調査と時事資料を別に扱うので、各人の発表担当は2巡する。各回の予定は、</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス,</li> <li>2. 資料解題①,</li> <li>3. 資料解題②,</li> <li>4. 文献調査の方法と発表手順の説明,</li> <li>5. 発表者①,</li> <li>6. 発表者②,</li> <li>7. 発表者③,</li> <li>8. 発表者④,</li> <li>9. 中間総括と後半の指針,</li> <li>10. 発表者①,</li> <li>11. 発表者②,</li> <li>12. 発表者③,</li> <li>13. 発表者④,</li> <li>14. 全体的質疑応答,</li> <li>15. 総括</li> </ol> |        |           |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | ある漠然とした問題意識に発して、既存の研究成果を調べ、また現在の社会の状況もにらみながら、具体的な研究テーマにしぼりこんでいく研究手法を身につける。   |        |           |          |     |       |
| 参考文献等        | バックナンバーにあたるべき学術雑誌名などは演習中に指示する。   |        |           |          |     |       |
| 教科書          | なし   |        |           |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席回数、発表内容、討論への参加度を総合的に評価する。  |        |           |          |     |       |

|              |   |        |          |          |     |       |
|--------------|---|--------|----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12272   | 授業題目   | 自然環境論演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 2        | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 杉谷 隆  |        | 担当教員所属   | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 自然環境論特論, 自然環境論演習Ⅰを受講していること  |        |          |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 自然地理学   |        |          |          |     |       |
| 授業計画         | <p>自然環境論演習Ⅰで受講生個々が扱ったテーマについて, さらに課題を絞り込むような文献調査(学術的なものに限る)を行い, また新聞記事など時事的な資料, 公的機関の統計資料などを収集する。結果は順番に発表してもらい, 受講生全員で討論を交わす。各回の予定は,</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス,</li> <li>2. 新聞記事などの調査方法説明,</li> <li>3. 統計書の調査方法説明,</li> <li>4. 学術雑誌の調査方法説明と発表手順の説明,</li> <li>5. 発表者①,</li> <li>6. 発表者②,</li> <li>7. 発表者③,</li> <li>8. 発表者④,</li> <li>9. 中間総括と後半の指針,</li> <li>10. 発表者①,</li> <li>11. 発表者②,</li> <li>12. 発表者③,</li> <li>13. 発表者④,</li> <li>14. 全体的質疑応答,</li> <li>15. 総括</li> </ol> |        |          |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 自分の研究を学問的および社会的状況のなかに位置づけ, かつ限られた期間と資源で成果を出すという, 実践的研究手法を身につける。   |        |          |          |     |       |
| 参考文献等        | バックナンバーにあたるべき学術雑誌名などは演習中に指示する。  |        |          |          |     |       |
| 教科書          | なし  |        |          |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席回数, 発表内容, 討論への参加度を総合的に評価する。   |        |          |          |     |       |

|              |  |        |         |          |     |       |
|--------------|--|--------|---------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12273  | 授業題目   | 考古学演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 1       | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 清家 章   |        | 担当教員所属  | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |  |        |         |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 弥生時代～古墳時代を中心とした日本考古学の研究  |        |         |          |     |       |
| 授業計画         | <p>修士論文のテーマに沿った研究発表を行い、その内容を指導する。また、受講生の研究テーマと関連する論考を精読し、内容を討議する。今年度は福永伸哉著2005『三角縁神獸鏡の研究』大阪大学出版会を講読する予定であるが、受講生によってはこれを変更する場合もある。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. はじめに</li> <li>2. 論文講読</li> <li>3. 論文講読</li> <li>4. 研究発表</li> <li>5. 研究発表</li> <li>6. 論文講読</li> <li>7. 論文講読</li> <li>8. 研究発表</li> <li>9. 論文講読</li> <li>10. 論文講読</li> <li>12. 研究発表</li> <li>13. 研究発表</li> <li>14. 論文講読</li> <li>15. まとめ</li> </ol> |        |         |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 修士論文の基礎的構想を完成する。   |        |         |          |     |       |
| 参考文献等        |  |        |         |          |     |       |
| 教科書          | 福永伸哉2005『三角縁神獸鏡の研究』大阪大学出版会   |        |         |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 平常点(出席と発表内容)。  |        |         |          |     |       |

|              |   |        |        |          |     |       |
|--------------|---|--------|--------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12274   | 授業題目   | 考古学演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 2      | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 清家 章  |        | 担当教員所属 | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |   |        |        |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 弥生時代～古墳時代を中心とした日本考古学の研究   |        |        |          |     |       |
| 授業計画         | <p>考古学演習Ⅰでの成果をふまえ、修士論文のテーマに沿った研究発表を行い、その内容を指導する。修士論文の完成に向けて、資料調査・資料分析方法を深化させる。また、受講生の研究テーマと関連する論考を精読し、内容を討議する。今年度は福永伸哉著2005『三角縁神獣鏡の研究』大阪大学出版会を講読する予定であるが、受講生によってはこれを変更する場合もある。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. はじめに</li> <li>2. 論文講読</li> <li>3. 論文講読</li> <li>4. 研究発表</li> <li>5. 研究発表</li> <li>6. 論文講読</li> <li>7. 論文講読</li> <li>8. 研究発表</li> <li>9. 論文講読</li> <li>10. 論文講読</li> <li>12. 研究発表</li> <li>13. 研究発表</li> <li>14. 論文講読</li> <li>15. まとめ</li> </ol> |        |        |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 修士論文の基礎的構想を完成する。  |        |        |          |     |       |
| 参考文献等        |   |        |        |          |     |       |
| 教科書          | 福永伸哉2005『三角縁神獣鏡の研究』大阪大学出版会  |        |        |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 平常点(出席と発表内容)。   |        |        |          |     |       |

|              |   |        |         |          |     |       |
|--------------|---|--------|---------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12301   | 授業題目   | 産業構造論特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義  | 履修開始年次 | 1       | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 中澤 純治   |        | 担当教員所属  | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 特になし  |        |         |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 地方分権化社会における社会資本整備とマクロ的政策評価に関する研究  |        |         |          |     |       |
| 授業計画         | <p>経済の発展・成長に伴う経済構造の変化を、種々のデータや資料、分析結果を用いて考察を行う。特に、産業構造分析の有力な手段である産業連関分析の手法を用いて、生産技術構造の変化や相互依存関係、経済のサービス化、国際化などの検討を行う。</p> <p>第01講 インTRODクシヨN<br/> 第02講 地域政策と産業連関分析<br/> 第03講 産業連関表の仕組み(1)取引基本表の概念<br/> 第04講 産業連関表の仕組み(2)産業分類の原則<br/> 第05講 産業連関表の仕組み(3)特殊な取り扱いをする部門<br/> 第06講 産業連関表の仕組み(4)様々な産業連関表<br/> 第07講 地域産業連関表の見方(1)経済規模の把握<br/> 第08講 地域産業連関表の見方(2)産業構造の特徴<br/> 第09講 地域産業連関表の見方(3)県際収支と経済成長<br/> 第10講 地域産業連関表の見方(4)経済波及効果の考え方<br/> 第11講 地域産業連関表の推計方法(1)コントロール・トータル<br/> 第12講 地域産業連関表の推計方法(2)県内最終需要<br/> 第13講 地域産業連関表の推計方法(3)移出、移入、バランス調整<br/> 第14講 地域産業連関表の推計方法(4)地域産業連関表の推計の問題点<br/> 第15講 まとめ</p> |        |         |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 産業連関分析の基礎的な考え方を身につける。   |        |         |          |     |       |
| 参考文献等        | 尾崎巖『日本の産業構造』(慶應義塾大学出版会)   |        |         |          |     |       |
| 教科書          | 宮沢健一『産業連関分析入門』(日本経済新聞社)<br>土居英二・浅利一郎・中野親徳『はじめよう地域産業連関分析』(日本評論社)   |        |         |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席(60%)およびレポート(40%)   |        |         |          |     |       |

|              |   |        |           |          |     |       |
|--------------|---|--------|-----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12308   | 授業題目   | 地域流通市場史特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義  | 履修開始年次 | 1         | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 田村 安興   |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 研究室で授業を行う   |        |           |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 地域経済 日本経済史  |        |           |          |     |       |
| 授業計画         | <p>近代日本経済の中で市場流通の発展過程を研究する。また急速に変貌するアジア経済と地域経済の関係を研究する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1.市場経済</li> <li>2.先物取引</li> <li>3.中央卸売市場</li> <li>4.築地市場</li> <li>5.一物一価の法則</li> <li>6.日本の卸売り業者</li> <li>7.欧米の卸売り業者</li> <li>8.タイの卸売り業者</li> <li>9.東南アジアの市場</li> <li>10.中国の市場制度</li> <li>11.市場調査報告①</li> <li>12.市場調査報告②</li> <li>13.市場調査報告③</li> <li>14.市場調査報告④</li> <li>15.まとめ</li> </ol> |        |           |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 論文の読み方と作成を指導する  |        |           |          |     |       |
| 参考文献等        | 田村『日本中央市場史研究』(清文堂)  |        |           |          |     |       |
| 教科書          | 論文等は印刷する  |        |           |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | レポートと発表により評価  |        |           |          |     |       |

|              |  |        |           |           |     |       |
|--------------|--|--------|-----------|-----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12309  | 授業題目   | 地域農業構造論特論 |           | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義   | 履修開始年次 | 1         | 開講時期      | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 飯國 芳明  |        | 担当教員所属    | 黒潮圏総合科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 少なくともミクロ経済学入門レベルは習得していること。   |        |           |           |     |       |
| 教員研究テーマ      | 農業政策の国際比較, 条件不利地域における地域政策  |        |           |           |     |       |
| 授業計画         | <p>経済発展と農業・農業政策の関係を地域から分析し, 将来を展望する。フィールドは北東アジアとし, 日本・韓国・台湾を念頭におく。いずれも農業問題が農業調整期に入っており, 経済成長と農業・環境問題をいかにして調和するかが共通の課題となっている。現在, 日本の政策の焦点は, 担い手への支援集中にあるが, 韓国・台湾ではむしろ農家所得の補填に重点がある。また, 政策手段としては, 直接支払の制度設計が焦点の課題であるとともに, 長期的には地域政策の重要性が増すに違いない。講義では, こうした東北アジアの動向を現地調査及び統計分析, さらに, EUやスイスとの比較しながら説明するとともに, 地域政策の現状や地域の発展に果たす社会関係資本の役割についても検討する。</p> <p>第1回 経済発展と農業・農業政策,<br/> 第2回 日本・韓国・台湾と農業問題の関係Ⅰ,<br/> 第3回 日本・韓国・台湾と農業問題の関係Ⅱ,<br/> 第4回 日本における農業政策の展開,<br/> 第5回 日本の農業政策のあたらな動向,<br/> 第6回 直接支払制度の導入と条件不利地域の保全,<br/> 第7回 EUにおける共通農業政策の展開,<br/> 第8回 欧州における直接支払制度の設計と課題,<br/> 第9回 韓国農業と農業政策の展開,<br/> 第10回 韓国における直接支払制度の現状と課題,<br/> 第11回 台湾における農業問題と農政の課題,<br/> 第12回 貿易の自由化が及ぼす農業へのインパクト,<br/> 第13回 東アジア共同体と農業政策の設計,<br/> 第14回 東アジアにおける農業と環境問題,<br/> 第15回 今後の日本農政のあり方。</p> |        |           |           |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 農業を通して, アジア社会の現状や動態を経済学視点に基づいて分析する能力を養う。   |        |           |           |     |       |
| 参考文献等        | 速水祐次郎他「農業経済論」岩波書店, Lin,N. Social Capital, Oxford Press, 田代洋一『「戦後農政の総決算」の構図』筑波書房。   |        |           |           |     |       |
| 教科書          | 受講生と相談のうえ決定する。   |        |           |           |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 農業問題の捉え方や政策の仕組みに関わるレポートにより評価する。  |        |           |           |     |       |

|              |   |        |         |          |     |       |
|--------------|---|--------|---------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12310   | 授業題目   | 地域社会学特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義  | 履修開始年次 | 1       | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 肖 紅燕  |        | 担当教員所属  | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |   |        |         |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 日本の山村における近代化と文化伝統の変容  |        |         |          |     |       |
| 授業計画         | 山村と国有林<br>①調査地の概要<br>②集落の成立と土地利用<br>③旧藩時代の林政<br>④国有林の成立<br>⑤公有林の成立<br>⑥民有林の成立<br>⑦人口の変遷<br>⑧生産構造とその発展<br>⑨単位生産力<br>⑩交通の発達と林業<br>⑪農家の林野利用<br>⑫林政の確立<br>⑬国有林経営<br>⑭民有林経営<br>⑮山村を安定せしむるもの<br>⑯国有林と地元民の生活 |        |         |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 近代化に伴い、山村の生業の変遷を知ること  |        |         |          |     |       |
| 参考文献等        |   |        |         |          |     |       |
| 教科書          | 宮本常一「山村と国有林」  |        |         |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 毎週の参加、報告及び積極的な意見  |        |         |          |     |       |

|              |   |        |           |           |     |       |
|--------------|---|--------|-----------|-----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12311   | 授業題目   | 地域環境経済論特論 |           | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義  | 履修開始年次 | 1         | 開講時期      | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 新保 輝幸   |        | 担当教員所属    | 黒潮圏総合科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |   |        |           |           |     |       |
| 教員研究テーマ      | 地域資源・地域環境の最適利用に関わる経済学的研究  |        |           |           |     |       |
| 授業計画         | <p>地域におけるさまざまな環境問題とそれに対する政策的対応について、ミクロ経済学や公共経済学の枠組みに基づくモデルを使い、理論的かつ実証的に研究するための基礎を身につけることを目標にする。そのために、ミクロ経済学、公共経済学、環境経済学等の基礎的なテキストから必要部分をピックアップし輪読する。具体的には、おおむね下記のような流れになる。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>0. 顔合わせとオリエンテーション</li> <li>1. 準備(1): 資源配分メカニズムとしての市場(市場の失敗と政府の役割)</li> <li>2. 準備(2): 需要と供給の理論</li> <li>3. 消費者余剰(Consumer Surplus)と生産者余剰: 厚生分析の基礎(1)</li> <li>4. 消費者余剰(Consumer Surplus)と生産者余剰: 厚生分析の基礎(2)</li> <li>5. パレート効率性(Pareto Efficiency)と厚生経済学の基本定理</li> <li>6. 外部性(Externality)の理論(1)</li> <li>7. 外部性(Externality)の理論(2)</li> <li>8. 公共財(Public Goods)の理論(1)</li> <li>9. 公共財(Public Goods)の理論(2)</li> <li>10. 費用便益分析(Cost-Benefit Analysis)</li> <li>11. 環境政策(1)</li> <li>12. 環境政策(2)</li> <li>13. 環境の経済評価(1)</li> <li>14. 環境の経済評価(2)</li> </ol> <p>また、実証研究の要となる計量分析は、基本的に統計学および計量経済学の手法を用いて行われる。受講生の希望がある場合、上記の項目を随時振り替えて、統計学および計量経済学の基礎を基本テキストにより勉強する。</p> |        |           |           |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 環境問題に対する経済的分析手法の理解  |        |           |           |     |       |
| 参考文献等        | その都度紹介する。   |        |           |           |     |       |
| 教科書          | 履修院生と相談のうえ決定する。   |        |           |           |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席および課題によって評価する。  |        |           |           |     |       |

|              |   |        |         |          |     |       |
|--------------|---|--------|---------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12313   | 授業題目   | 公益事業論特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義  | 履修開始年次 | 1       | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 上田 健作   |        | 担当教員所属  | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 特になし  |        |         |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 保健医療分野における非営利組織の日米比較<br>高知県における非営利組織の役割と機能  |        |         |          |     |       |
| 授業計画         | <p>病院機能再編成下における療養型病床病院の機能再編; 現在進みつつある病院機能の再編成は、入院医療と診療所医療(プライマリケア)の機能分化、ならびに入院医療における急性期ケア、回復期ケア、長期ケア等の機能分化を推し進めることを主眼としている。今日まで、療養型病床を中心に経営を行ってきた病院は、その機能を回復期ケアに特化するか、老人介護施設への転換を選択するかを迫られている。本授業では、療養型病床病院の機能再編において看護ケアシステムの再構築が如何になされるべきかを中心課題として検討するとともに、回復期病院への転換を実現する諸条件を考察する。(1)受講生が研究対象とする療養病床病院を事例に、機能再編下における看護ケアシステム再構築の問題点又は課題の明確化。(2)当該課題の解決に向けた病院組織のあり方、看護ケアシステムのあり方、その構築方法の検討を、いくつかのテキストを参考に考える。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス</li> <li>2. わが国の保健医療制度と政策1(医療保険制度改革の動向)</li> <li>3. わが国の保健医療制度と政策2(地域医療連携と制度改革)</li> <li>4. わが国の保険医療制度と政策3[病院の機能分化と連携]</li> <li>5. 病院経営と診療報酬体系1(診療報酬政策の動向)</li> <li>6. 病院経営と診療報酬体系2(診療報酬と病院の機能分化)</li> <li>7. 病院経営と診療報酬体系3(診療報酬と地域医療連携)</li> <li>8. 病院経営と医療の質管理1</li> <li>9. 病院経営と医療の質管理2</li> <li>10. 医療の質管理と看護ケアシステム1(急性期病院を中心に)</li> <li>11. 医療の質管理と看護ケアシステム2[安定期・回復期病院を中心に]</li> <li>12. 回復期病院における看護研修</li> <li>13. 回復期病院経営における看護研修の位置</li> <li>14. 回復期病院における看護研修体制</li> <li>15. まとめ</li> </ol> |        |         |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 病院の機能再編下における看護ケアシステム再構築課題の明確化が具体的事例に即してできれば目標を100%達成。   |        |         |          |     |       |
| 参考文献等        |   |        |         |          |     |       |
| 教科書          | 高橋淑郎編著『医療経営のバランス・スコアカード――ヘルスケアの質向上と戦略的病院経営ツール』生産性出版、2004年その他  |        |         |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 受講生が研究対象とする具体事例について、看護ケアシステム再構築の課題を析出したレポートが作成できれば合格とする。一般論を踏まえたレポートになれば100点。   |        |         |          |     |       |

|              |  |        |            |          |     |       |
|--------------|--|--------|------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12314  | 授業題目   | 日本経済構造分析特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義   | 履修開始年次 | 1          | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 池田 啓実  |        | 担当教員所属     | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | とくになし  |        |            |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 日本経済構造、産業連関分析からみる地域産業政策に関する研究  |        |            |          |     |       |
| 授業計画         | <p>資本主義システムの安定性及び安定要因の解明を行う一方、安定的な経済システム構築のための地域事例として日本経済を取り上げ、そのマクロ的特徴を理論的・実証的に究明する。さらに、地域産業連関構造の解析を通して地方経済の発展の視点から日本経済の再生策にも併せて検討する。</p> <p>第1回 ガイダンス<br/> 第2回 課題設定のための討議①<br/> 第3回 課題設定のための討議②<br/> 第4回 経済構造の定量分析①－相関分析<br/> 第5回 経済構造の定量分析②－回帰分析<br/> 第6回 経済構造の定量分析③－産業連関①・RAS法<br/> 第7回 経済構造の定量分析④－産業連関②・影響力係数の弾性値化<br/> 第8回 経済構造の定性分析①－産業クラスター論①<br/> 第9回 経済構造の定性分析②－産業クラスター論②<br/> 第10回 経済構造の定性分析③－知識創造(SEKI)モデル①<br/> 第11回 経済構造の定性分析④－知識創造(SEKI)モデル②<br/> 第12回 経済構造の定性分析⑤－組織の適応モデル<br/> 第13回 経済構造の定性分析⑦－自己組織化理論<br/> 第14回 経済構造の定性分析⑧－スモールワールド・ネットワーク論<br/> 第15回 課題検証成果の発表</p> |        |            |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 日本経済の構造的特性に関する多様な視点からの分析意義の理解  |        |            |          |     |       |
| 参考文献等        |  |        |            |          |     |       |
| 教科書          | とくになし  |        |            |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 課題レポートの作成及びレポートのプレゼンによる評価  |        |            |          |     |       |

|              |   |        |        |          |     |       |
|--------------|---|--------|--------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12315   | 授業題目   | 財政学特論  |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義  | 履修開始年次 | 1      | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 鈴木 啓之   |        | 担当教員所属 | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 特になし  |        |        |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | テーマ: 1. 財政政策の日独比較研究<br>2. 公信用と財政政策<br>3. 地域政策と財政  |        |        |          |     |       |
| 授業計画         | 日本の財政政策について、①1980年代以降の経済成長政策の手法の変化、②同じ時期の所得再分配政策の変化、③それらを通じた財政全般の変化について講義する。<br>1. 序論——経済成長政策・所得再分配政策と財政に関する基礎知識<br>2. 1970年代までの経済成長政策と所得再分配政策<br>3. 1980年代の財政再建と経済成長政策<br>4. バブル経済と財政政策・経済成長政策<br>5. バブル崩壊後の財政政策・経済成長政策(1)<br>6. バブル崩壊後の財政政策・経済成長政策(2)<br>7. 1980年代の財政再建策と所得再分配政策の転換<br>8. 日本型新自由主義と所得再分配政策(1——福祉・社会保障制度)<br>9. 日本型新自由主義と所得再分配政策(2——政府間関係および地方財政)<br>10. 日本型新自由主義と所得再分配政策(3——税制)<br>11. 近年の好況に関する要因分析<br>12. 所得の分配・再分配と経済成長<br>13. 西・北欧の財政政策と日本の財政政策との国際比較<br>14. グローバリゼーションと財政政策<br>15. まとめ |        |        |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 日本財政の現状を歴史的観点から把握してもらう。   |        |        |          |     |       |
| 参考文献等        | 文献を随時紹介するので、それを予習してもらう。   |        |        |          |     |       |
| 教科書          | 龍昇吉編著『現代の財政金融』日本評論社、他   |        |        |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | レポートで評価する。  |        |        |          |     |       |

|              |   |        |         |          |     |       |
|--------------|---|--------|---------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12318   | 授業題目   | 都市政策論特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義  | 履修開始年次 | 1       | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 石筒 覚  |        | 担当教員所属  | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |   |        |         |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 都市政策、都市問題に関する経済分析   |        |         |          |     |       |
| 授業計画         | <p>日本、アジア、欧米における現代の都市が抱える諸問題の原因を探り、その現状や弊害を経済学的側面から分析する。その上で、今後の都市政策のあり方や都市問題の対策について、事例研究を通じて考察し、それらについての研究発表を実施する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 都市問題の意味</li> <li>2 アジアにおける都市問題と都市政策(1)</li> <li>3 アジアにおける都市問題と都市政策(2)</li> <li>4 アジアにおける都市問題と都市政策(3)</li> <li>5 アジアにおける都市問題と都市政策(4)</li> <li>6 欧州における都市問題と都市政策(1)</li> <li>7 欧州における都市問題と都市政策(2)</li> <li>8 欧州における都市問題と都市政策(3)</li> <li>9 欧州における都市問題と都市政策(4)</li> <li>10 日本における都市問題と都市政策(1)</li> <li>11 日本における都市問題と都市政策(2)</li> <li>12 日本における都市問題と都市政策(3)</li> <li>13 日本における都市問題と都市政策(4)</li> <li>14 これからの都市政策のあり方(1)</li> <li>15 これからの都市政策のあり方(2)</li> </ol> |        |         |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 以下の2点に関して、授業が終了した時点でできるようになっていれば、この授業の目標は達成されたこととなります。1)都市問題の構造を経済理論をベースに理解することができる。2)今後の都市政策のあり方や都市問題の対策を理解することができる。   |        |         |          |     |       |
| 参考文献等        | 適宜指示する。   |        |         |          |     |       |
| 教科書          | 適宜指示する。   |        |         |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 授業参加度および最終レポート。   |        |         |          |     |       |

|              |   |        |        |          |     |       |
|--------------|---|--------|--------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12325   | 授業題目   | 政治学特論  |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義  | 履修開始年次 | 1      | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 上神 貴佳   |        | 担当教員所属 | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 学部教育における専門科目としての政治学を履修済みであることを前提とする。少人数であることが予想されるので、各回のテーマごとに関連する文献を予習し、議論に参加することも求められる。   |        |        |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 現代日本の政党や選挙に関する研究  |        |        |          |     |       |
| 授業計画         | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. イントロダクション</li> <li>2. 「選挙プロセス」の制度とアクター</li> <li>3. 有権者の政治意識</li> <li>4. 有権者の投票行動と政治参加</li> <li>5. 選挙過程における政党1</li> <li>6. 選挙過程における政党2</li> <li>7. 選挙運動</li> <li>8. 連立政権下の政権形成</li> <li>9. 「政策プロセス」の制度とアクター</li> <li>10. 「政策プロセス」の諸理論</li> <li>11. 議題設定: 権力構造と争点形成</li> <li>12. 政策形成: 官僚制と党内調整、連立与党間調整1</li> <li>13. 政策形成: 官僚制と党内調整、連立与党間調整2</li> <li>14. 政策決定: 国会審議</li> <li>15. 政策実施: 実施・評価・フィードバック</li> <li>16. 定期試験</li> </ol> |        |        |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 現代日本の政治プロセスを題材に、政治学が蓄積してきた理論を深く理解し、その応用方法を身に付けることを目標とする。  |        |        |          |     |       |
| 参考文献等        | 適宜、指示する。  |        |        |          |     |       |
| 教科書          | 特になし  |        |        |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 期末試験によって成績を評価する。  |        |        |          |     |       |

|              |   |        |          |          |     |       |
|--------------|---|--------|----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12306   | 授業題目   | 自治体行政法特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義  | 履修開始年次 | 1        | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 赤間 聡  |        | 担当教員所属   | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 形式的な思考を要するのではなく(法)形式論を議論できるように、訓練すること。次に、各自治体の現状を把握するために積極的フィールド調査意欲をもつこと。  |        |          |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 環境法と法源論   |        |          |          |     |       |
| 授業計画         | <p>文献検索、自治体立法や実務の調査研究や基本判例の講読</p> <p>現時点では、環境関連の条例を主眼に置き、国法や中央省庁実務との関連を議論・研究することを内容とするが、テーマの選択などは、顔ぶれを見て相談のうえ決定する。基本、学生の発表をベースに講義を進めるので、プレゼンの覚悟をしておくこと。</p> |        |          |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) |   |        |          |          |     |       |
| 参考文献等        | テーマごとに随時指示する。   |        |          |          |     |       |
| 教科書          | 基本的には使わない   |        |          |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 報告およびレポート   |        |          |          |     |       |

|              |  |        |          |          |     |       |
|--------------|--|--------|----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12320  | 授業題目   | ミクロ経済学特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義   | 履修開始年次 | 1        | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 新井 泰弘  |        | 担当教員所属   | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 英語文献の講読を厭わないこと。また、ミクロ経済学の知識と若干の数学的素養(最適化の一階条件、二階条件、ラグランジュ乗数法の理解)が必要となります。  |        |          |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 知的財産権制度の経済分析、産業組織論、法と経済学、ゲーム理論   |        |          |          |     |       |
| 授業計画         | <p>第一回: イントロダクション、ゲーム理論の基礎①ナッシュ均衡と部分ゲーム完全均衡</p> <p>第二回: ゲーム理論の基礎②部分ゲーム完全均衡</p> <p>第三回: 独占とカルテル①社会厚生損失</p> <p>第四回: 独占とカルテル②カルテルの維持と耐久財独占</p> <p>第五回: 同質財市場①クールノー競争</p> <p>第六回: 同質財市場②ベルトラン競争</p> <p>第七回: 同質財市場③同質財の国際取引</p> <p>第八回: 小テスト&amp;解説</p> <p>第九回: 製品差別化①独占的競争</p> <p>第十回: 製品差別化②ホテルリングモデル</p> <p>第十一回: 産業集積①垂直合併と水平合併</p> <p>第十二回: 産業集積②参入障壁</p> <p>第十三回: 価格戦略 Two part tariff</p> <p>第十四回: 市場戦略 Bundling</p> <p>第十五回: 知的財産制度</p> |        |          |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 産業組織論の基本概念を学ぶ  |        |          |          |     |       |
| 参考文献等        | <p>1) Luis Cabral "Introduction to Industrial Organization" The MIT Press, 2000.</p> <p>2) Massimo Motta "Competition Policy: Theory and Practice" Cambridge University Press, 2004.</p>   |        |          |          |     |       |
| 教科書          | Oz Shy "Industrial Organization: Theory and Applications" The MIT Press, 1996.   |        |          |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | <p>期末試験、及び小テストによって評価します。</p> <p>点数の配分は期末試験が6割、小テストを4割とします。</p>   |        |          |          |     |       |

|              |  |        |           |          |     |       |
|--------------|--|--------|-----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12351  | 授業題目   | 産業構造論演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 1         | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 中澤 純治  |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 特になし   |        |           |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 地方分権化社会における社会資本整備とマクロ的政策評価に関する研究   |        |           |          |     |       |
| 授業計画         | <p>産業構造分析の有力な手段である産業連関分析に関する基礎的な文献を購読する。また、産業連関表を用いて、特定地域の産業構造の変化や生産技術構造の変化などを検討し、研究発表とディスカッションを行う。</p> <p>第01講 インTRODクシヨソ</p> <p>第02講 地域産業連関分析の基礎理論(1)プロダクト・ミックス、非代替定理、線型モデル</p> <p>第03講 地域産業連関分析の基礎理論(2)均衡産出高モデル</p> <p>第04講 地域産業連関分析の基礎理論(3)レオンチェフ逆行列</p> <p>第05講 地域産業連関分析の基礎理論(4)競争輸入型モデル</p> <p>第06講 地域産業連関分析の基礎理論(5)非競争輸入型モデル</p> <p>第07講 地域産業連関分析の基礎理論(6)均衡価格モデル</p> <p>第08講 地域産業連関分析の基礎理論(7)競争移入型地域内産業連関モデル</p> <p>第09講 地域産業連関分析の基礎理論(8)非競争移入型地域間産業連関モデル</p> <p>第10講 地域産業連関分析の基礎理論(9)競争移入型地域間産業連関モデル</p> <p>第11講 産業連関分析と行列</p> <p>第12講 産業連関モデルの作成(1)高知県競争輸入型モデル</p> <p>第13講 産業連関モデルの作成(2)高知県非競争輸入型モデル</p> <p>第14講 産業連関モデルの作成(3)政策効果の違いと問題点</p> <p>第15講 まとめ</p> |        |           |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 産業連関分析の基礎的な分析手法を身につける。   |        |           |          |     |       |
| 参考文献等        | 尾崎巖『日本の産業構造』(慶應義塾大学出版会)  |        |           |          |     |       |
| 教科書          | 藤川清史『産業連関分析入門』(日本評論社)<br>朝倉啓一郎『産業連関計算の新しい展開』(九州大学出版会)  |        |           |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席(60%)およびレポート(40%)  |        |           |          |     |       |

|              |  |        |          |          |     |       |
|--------------|--|--------|----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12352  | 授業題目   | 産業構造論演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 2        | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 中澤 純治  |        | 担当教員所属   | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 特になし   |        |          |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 地方分権化社会における社会資本整備とマクロ的政策評価に関する研究   |        |          |          |     |       |
| 授業計画         | <p>産業構造分析の有力な手段である産業連関分析に関する基礎的な文献を購読する。また、産業連関表を用いて、特定地域の産業構造の変化や生産技術構造の変化などを検討し、研究発表とディスカッションを行う。</p> <p>第01講 インTRODクシヨン<br/> 第02講 高知県経済の分析(1)高知県経済の生産構造の変化<br/> 第03講 高知県経済の分析(2)特化係数からみる高知県経済<br/> 第04講 高知県経済の分析(3)産業政策と経済波及効果<br/> 第05講 産業連関分析の事例研究(1)公共事業と経済波及効果<br/> 第06講 産業連関分析の事例研究(2)大学立地と経済波及効果<br/> 第07講 産業連関分析の事例研究(3)円高と地域経済<br/> 第08講 産業連関分析の事例研究(4)エネルギー消費と地域経済<br/> 第09講 産業連関分析の新しい展開(1)質的産業連関分析<br/> 第10講 産業連関分析の新しい展開(2)環境分析用産業連関表<br/> 第11講 産業連関分析の新しい展開(3)多部門経済モデル<br/> 第12講 産業連関分析の新しい展開(4)小地域産業連関モデル<br/> 第13講 産業連関分析ワーキングペーパーの報告(1)<br/> 第14講 産業連関分析ワーキングペーパーの報告(2)<br/> 第15講 まとめ</p> |        |          |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 産業連関分析を用いて地域経済分析を行うことができる。   |        |          |          |     |       |
| 参考文献等        | 尾崎巖『日本の産業構造』(慶應義塾大学出版会)  |        |          |          |     |       |
| 教科書          | 藤川清史『産業連関分析入門』(日本評論社)<br>朝倉啓一郎『産業連関計算の新しい展開』(九州大学出版会)  |        |          |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席(60%)およびレポート(40%)  |        |          |          |     |       |

|              |   |        |             |          |     |       |
|--------------|---|--------|-------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12365   | 授業題目   | 地域流通市場史演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 1           | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 田村 安興   |        | 担当教員所属      | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 研究室で授業を行う   |        |             |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 地域経済 日本経済史  |        |             |          |     |       |
| 授業計画         | <p>近代日本経済の中で市場流通の発展過程に関する演習を実施する。演習方法は先行研究の論文購読や現地調査により行う。また田村の論文・著書や、社会経済史学会の到達点を確認し、国内外へのフィールドワークを行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1.はじめに</li> <li>2.日本の市場史①</li> <li>3.日本の市場史近世史</li> <li>4.日本の近代市場史</li> <li>5.市場制度の成立</li> <li>6.生鮮食品市場史</li> <li>7.西洋市場流通史</li> <li>8.アジアの市場流通</li> <li>9.流通近代化と日本の特質</li> <li>10.量販店と小売り市場</li> <li>11.卸売りの特質</li> <li>12.市場外流通の増大</li> <li>13.グローバル化と大競争時代</li> <li>14.日本の流通の国際化</li> <li>15.まとめ</li> </ol> |        |             |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 論文の読み方と作成を指導する  |        |             |          |     |       |
| 参考文献等        | 田村『日本中央市場史研究』(清文堂)  |        |             |          |     |       |
| 教科書          | 論文等は印刷する  |        |             |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | レポートと発表により評価  |        |             |          |     |       |

|              |   |        |            |          |     |       |
|--------------|---|--------|------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12366   | 授業題目   | 地域流通市場史演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 2          | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 田村 安興   |        | 担当教員所属     | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 研究室で授業を行う   |        |            |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 地域経済 日本経済史  |        |            |          |     |       |
| 授業計画         | <p>修士論文の指導を演習によって行う。演習方法は先行研究の論文購読や現地調査により行う。また田村の論文・著書や、社会経済史学会の到達点を確認し、国内外へのフィールドワークを行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1.はじめに</li> <li>2.修士論文のテーマの検討</li> <li>3.修士論文報告①</li> <li>4.修士論文報告②</li> <li>5.修士論文報告③</li> <li>6.修士論文報告④</li> <li>7.地域市場調査①</li> <li>8.地域市場調査②</li> <li>9.地域市場調査③</li> <li>10.地域市場調査④</li> <li>11.地域市場調査⑤</li> <li>12.地域市場調査⑥</li> <li>13.調査検討</li> <li>14.修士論文報告</li> <li>15.まとめ</li> </ol> |        |            |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 論文の読み方と作成を指導する  |        |            |          |     |       |
| 参考文献等        | 田村『日本中央市場史研究』(清文堂)  |        |            |          |     |       |
| 教科書          | 論文等は印刷する  |        |            |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | レポートと発表により評価  |        |            |          |     |       |

|              |  |        |             |           |     |       |
|--------------|--|--------|-------------|-----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12367  | 授業題目   | 地域農業構造論演習 I |           | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 1           | 開講時期      | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 飯國 芳明  |        | 担当教員所属      | 黒潮圏総合科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 地域農業構造論特論を受講の上、受講すること。   |        |             |           |     |       |
| 教員研究テーマ      | 農業政策の国際比較, 条件不利地域における地域政策  |        |             |           |     |       |
| 授業計画         | <p>農業政策, とりわけ, 直接支払制度の分析に関わる演習を行う。直接支払制度は, 欧州に始まり現在では東アジア各国に普及している。これらの制度やその展開の比較検討を行いながら, その背景にある国家経済の発展の差異や文化的な基層の違いを明らかにする。また, 今後の制度設計のあり方をミクロ経済学のベースに基づいて考察するほか, 可能な限り計量的な手法を用いて課題に接近するトレーニングを行う。このほか, 日本に固有の営農組織である集落営農の存在や機能を他国と比較分析することで, 農業における組織の役割を検証する。</p> <p>(1)直接支払制度の比較検討ー直接支払制度とは何かー,<br/> (2)欧州における直接支払制度の展開,<br/> (3)スイスにおける直接支払制度の展開とその特徴,<br/> (4)韓国における直接支払制度と特徴,<br/> (5)台湾における直接支払制度と特徴,<br/> (6)日本の直接支払制度 I (品目横断型直接支払)の検討,<br/> (7)日本の直接支払制度 II (農地・水・環境保全対策事業),<br/> (8)構造改善と直接支払制度の関係,<br/> (9)集落営農と直接支払い,<br/> (10)環境保全におけるクロスコンプライアンスの意味,<br/> (11)コメを核とした直接支払制度の設計,<br/> (12)農地保全のためのゾーニングと直接支払,<br/> (13)中山間地域保全のための直接支払試案,<br/> (14)直接支払制度と市場の不完全性,<br/> (15)アジア型直接支払制度の検討</p> |        |             |           |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 直接支払制度を事例にしながら, 国際的な制度比較を経済学的視点から実証的に行うための能力を養う  |        |             |           |     |       |
| 参考文献等        | 岸康彦「世界の直接支払制度」農林統計協会, 韓国農業経済院「北東アジア経済協力体制の創設と三カ国農業への波及効果」ビスタピー・エス  |        |             |           |     |       |
| 教科書          | 岡田昌史「The R Bookーデータ解析環境Rの活用事例集ー」九天社  |        |             |           |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 最終的には, 実証分析をレポートとして提出してもらい, これを評価する。   |        |             |           |     |       |

|              |  |        |            |           |     |       |
|--------------|--|--------|------------|-----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12368  | 授業題目   | 地域農業構造論演習Ⅱ |           | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 2          | 開講時期      | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 飯國 芳明  |        | 担当教員所属     | 黒潮圏総合科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 地域農業構造論特論, 地域農業構造論演習Ⅰを受講の上, 受講すること.  |        |            |           |     |       |
| 教員研究テーマ      | 農業政策の国際比較, 条件不利地域における地域政策  |        |            |           |     |       |
| 授業計画         | <p>直接支払制度は, 農産物市場の自由化に対処し, 国内の農業経営や環境を保全するための主要な手段とされている。しかし, 長期的には地域社会の再編や新たな産業の創出といった地域再生がなければ地域そのものが崩壊する可能性が高い。その意味で, 直接支払制度の後は確固とした地域政策の展開が欠かせない。地域発展については内発的発展論が議論された経緯もあるが, 発展の条件を列挙するだけでその生成については十分な分析が深まらなかった傾向がある。この演習では, 社会関係資本(Social Capital)の役割に着目し, その捉え方と分析方法を特定のフィールドを念頭に展開する。以下は県内にフィールドを設定して, 演習を展開する。</p> <p>(1)フィールドの概要調査,<br/> (2)フィールドの概要と経済状況まとめ,<br/> (3)人口動態の整理と推計,<br/> (4)フィールドにおける農林業の現況,<br/> (5)農業・林業の展望・推計,<br/> (6)コメ自由化のインパクトの推計,<br/> (7)人口減少による産業へのインパクトの推計,<br/> (8)地域の産業構造再編の検討,<br/> (9)直接支払制度の設計(環境支払),<br/> (10)直接支払制度の設計(クロスコンプライアンス),<br/> (11)直接支払制度とリンクした地域政策のあり方,<br/> (12)社会関係資本の再生による地域発展,<br/> (13)総括議論,<br/> (14)地域での討論,<br/> (15)まとめ</p> |        |            |           |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 直接支払制度を事例にしながら, 国際的な制度比較を実証的に行うための能力を養う  |        |            |           |     |       |
| 参考文献等        | アームストロング「互惠と自立の地域政策」, Lin,N. Social Capital, Oxford Press,   |        |            |           |     |       |
| 教科書          | 岡田昌史「The R Book -データ解析環境Rの活用事例集-」九天社   |        |            |           |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 最終的には, 実証分析をレポートとして提出してもらい, これを評価する。   |        |            |           |     |       |

|              |   |        |           |          |         |
|--------------|---|--------|-----------|----------|---------|
| 授業コード        | 12369   | 授業題目   | 地域社会学演習 I | 単位数      | 2       |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 1         | 開講時期     | 2 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 肖 紅燕  |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |         |
| 履修における注意点    |   |        |           |          |         |
| 教員研究テーマ      | 土佐酒造史の変遷—明治期から現在に至るまで—  |        |           |          |         |
| 授業計画         | <p>土佐酒造史の変遷について関連文献を読み、さらに現地調査を踏まえて近代から現代に至るまでの酒造業界の歩みを考える。</p> <p>①ガイダンス<br/> ②文献輪読<br/> ③文献輪読<br/> ④文献輪読<br/> ⑤フィールドワーク・資料収集<br/> ⑥フィールドワーク・資料収集<br/> ⑦フィールドワーク・資料収集<br/> ⑧研究発表・ディスカッション<br/> ⑨研究発表・ディスカッション<br/> ⑩フィールドワーク・資料収集<br/> ⑪フィールドワーク・資料収集<br/> ⑫フィールドワーク・資料収集<br/> ⑬研究発表・ディスカッション<br/> ⑭研究発表・ディスカッション<br/> ⑮総括</p> |        |           |          |         |
| 各科目の目標(達成水準) | 近代化との関連で酒造業界の大きな変化を追うこと   |        |           |          |         |
| 参考文献等        | 地酒屋「土佐の酒袋」  |        |           |          |         |
| 教科書          | 青木隆浩「近代酒造業の地域的展開」   |        |           |          |         |
| 成績評価の基準と方法   | 毎週の参加、報告及び積極的な意見  |        |           |          |         |

|              |   |        |          |          |     |       |
|--------------|---|--------|----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12370   | 授業題目   | 地域社会学演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 2        | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 肖 紅燕  |        | 担当教員所属   | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |   |        |          |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 土佐茶の変遷—明治期から現代に至るまで—  |        |          |          |     |       |
| 授業計画         | <p>土佐茶業史について関連文献を読み、さらに現地調査を踏まえたうえで土佐茶の過去、現在そして未来について考える。</p> <p>①ガイダンス<br/> ②文献輪読<br/> ③文献輪読<br/> ④文献輪読<br/> ⑤フィールドワーク・資料収集<br/> ⑥フィールドワーク・資料収集<br/> ⑦フィールドワーク・資料収集<br/> ⑧研究発表・ディスカッション<br/> ⑨研究発表・ディスカッション<br/> ⑩フィールドワーク・資料収集<br/> ⑪フィールドワーク・資料収集<br/> ⑫フィールドワーク・資料収集<br/> ⑬研究発表・ディスカッション<br/> ⑭研究発表・ディスカッション<br/> ⑮総括</p> |        |          |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 近代化との関連で茶業生産の変遷を追うこと  |        |          |          |     |       |
| 参考文献等        | 茶業組合中央会「土佐茶の百年」   |        |          |          |     |       |
| 教科書          | 角山栄「茶の世界史」  |        |          |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 毎週の参加、報告及び積極的な意見  |        |          |          |     |       |

|              |   |        |             |           |     |       |
|--------------|---|--------|-------------|-----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12371   | 授業題目   | 地域環境経済論演習 I |           | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 1           | 開講時期      | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 新保 輝幸   |        | 担当教員所属      | 黒潮圏総合科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |   |        |             |           |     |       |
| 教員研究テーマ      | 地域資源・地域環境の最適利用に関わる経済学的研究  |        |             |           |     |       |
| 授業計画         | <p>環境問題や環境政策の理論的・実証的研究に関わる研究発表とディスカッションを中心に進める。まずはじめに個々の問題関心について報告してもらい、それを通じて明らかになったそれぞれの関心領域の基礎となる文献を選定する。それらを順次講読するとともに、随時個々の研究の発展について報告してもらい、ディスカッションを行う。たとえば、受講生が2名の場合、大まかな流れは下記のようなになるであろう。</p> <p>0. 顔合わせとオリエンテーション</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 個々の問題関心の報告と文献購読計画の策定</li> <li>2. 文献の輪読(1)</li> <li>3. 文献の輪読(2)</li> <li>4. 文献の輪読(3)</li> <li>5. 文献の輪読(4)</li> <li>6. 文献の輪読(5)</li> <li>7. 文献の輪読(6)</li> <li>8. 研究の中間報告(1)</li> <li>9. 研究の中間報告(2)</li> <li>10. 文献の輪読(7)</li> <li>11. 文献の輪読(8)</li> <li>12. 文献の輪読(9)</li> <li>13. 研究報告(1)</li> <li>14. 研究報告(2)</li> </ol> <p>また、実証研究の要となる計量分析は、基本的にコンピュータおよびそのアプリケーションを用いて行われる。受講生の希望がある場合、それを利用するための基本的な知識・技能を実習を交えて勉強するが、これは上記の内、文献の輪読部分や研究の中間報告部分等を随時振り替える。</p> |        |             |           |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 環境問題に対する経済的分析手法の適用方法の取得   |        |             |           |     |       |
| 参考文献等        | その都度紹介する。   |        |             |           |     |       |
| 教科書          | 履修院生と相談のうえ決定する。   |        |             |           |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席および報告、議論への貢献度等によって評価する。   |        |             |           |     |       |

|              |   |        |            |           |     |       |
|--------------|---|--------|------------|-----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12372   | 授業題目   | 地域環境経済論演習Ⅱ |           | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 2          | 開講時期      | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 新保 輝幸   |        | 担当教員所属     | 黒潮圏総合科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |   |        |            |           |     |       |
| 教員研究テーマ      | 地域資源・地域環境の最適利用に関わる経済学的研究  |        |            |           |     |       |
| 授業計画         | <p>演習Ⅰに続き、環境問題や環境政策の理論的・実証的研究に関わる研究発表とディスカッションを中心に進める。まずはじめに個々の問題関心について報告してもらい、それを通じて明らかになったそれぞれの関心領域の基礎となる文献を選定する。それらを順次講読するとともに、随時個々の研究の発展について報告してもらい、ディスカッションを行う。たとえば、受講生が2名の場合、大まかな流れは下記のようなになるであろう。</p> <p>0. 顔合わせとオリエンテーション</p> <p>1. 個々の問題関心の報告と文献購読計画の策定</p> <p>2. 文献の輪読(1)</p> <p>3. 文献の輪読(2)</p> <p>4. 文献の輪読(3)</p> <p>5. 文献の輪読(4)</p> <p>6. 文献の輪読(5)</p> <p>7. 文献の輪読(6)</p> <p>8. 研究の中間報告(1)</p> <p>9. 研究の中間報告(2)</p> <p>10. 文献の輪読(7)</p> <p>11. 文献の輪読(8)</p> <p>12. 文献の輪読(9)</p> <p>13. 研究報告(1)</p> <p>14. 研究報告(2)</p> <p>また、実証研究の要となる計量分析は、基本的にコンピュータおよびそのアプリケーションを用いて行われる。受講生の希望がある場合、それを利用するための基本的な知識・技能を実習を交えて勉強するが、これは上記の内、文献の輪読部分や研究の中間報告部分等を随時振り替える。</p> |        |            |           |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 環境問題に対する経済的分析手法の適用方法の取得   |        |            |           |     |       |
| 参考文献等        | その都度紹介する。   |        |            |           |     |       |
| 教科書          | 履修院生と相談のうえ決定する。   |        |            |           |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席および報告、議論への貢献度等によって評価する。   |        |            |           |     |       |

|              |   |        |           |          |     |       |
|--------------|---|--------|-----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12375   | 授業題目   | 公益事業論演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 1         | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 上田 健作   |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |   |        |           |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 保健医療分野における非営利組織の日米比較<br>高知県における非営利組織の役割と機能  |        |           |          |     |       |
| 授業計画         | <p>日本の保健医療制度改革論のサーベイを基に地域医療における病診連携及び病病連携のあり方について検討を加える。特に、診療報酬体系による政策誘導が必要とされる地域医療連携の実現にどのような効果を持つのかその有効性を検討する。主にテキストとして選定した文献を中心に議論を深める。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) ガイダンス、</li> <li>2) 『医療経済学の基礎理論と論点』〔第1巻前半〕、</li> <li>3) 『医療経済学の基礎理論と論点』〔第1巻後半〕、</li> <li>4) 『医療保険・診療報酬制度』〔第2巻前半〕、</li> <li>5) 『医療保険・診療報酬制度』〔第2巻後半〕、</li> <li>6) 『保健・医療提供制度』〔第3巻前半〕、</li> <li>7) 『保健・医療提供制度』〔第3巻後半〕、</li> <li>8) 『医療技術・医薬品』〔第4巻前半〕、</li> <li>9) 『医療技術・医薬品』〔第4巻後半〕、</li> <li>10) 『看護とリハビリテーション』〔第5巻前半〕、</li> <li>11) 『看護とリハビリテーション』〔第5巻後半〕、</li> <li>12) 『医療制度改革の国際比較』〔第6巻前半〕、</li> <li>13) 『医療制度改革の国際比較』〔第6巻後半〕、</li> <li>14) まとめの討議 &amp; 研究計画発表、</li> <li>15) まとめの討議と研究計画発表</li> </ol> |        |           |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | <p>議論の結果が修士論文の作成に有効活用できることを目標にする。1) ガイダンス2) 「第1章医療及び健康の認識をめぐって」を題材とする討議13) 「第1章医療及び健康の認識をめぐって」を題材とする討議24) 「第2章健康と疾病の社会的生産」を題材とする討議15) 「第2章健康と疾病の社会的生産」を題材とする討議26) 「第3章健康、疾病、低開発」を題材とする討議7) 「第4章英国資本主義の発達と公衆衛生及び医療」を題材とする討議8) 「第4章英国資本主義の発達と公衆衛生及び医療」を題材とする討議9) 「第5章英国におけるナショナル・ヘルス・サービス」を題材とする討議110) 「第5章英国におけるナショナル・ヘルス・サービス」を題材とする討議211) 「第6章女性、医療、そして社会的制御:NHSの場合」を題材とする討議112) 「第6章女性、医療、そして社会的制御:NHSの場合」を題材とする討議213) 「第7章医療と帝国主義」を題材とする討議14) 健康と医療を巡る問題の総括討議115) 健康と医療を巡る問題の総括討議2</p>   |        |           |          |     |       |
| 教科書          | 講座 医療経済・政策学 1巻～6巻。その他参考文献は適宜取り上げる。  |        |           |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 保健医療制度改革論のサーベイが受講生それぞれの医療・福祉研究にどのようにいかせるかに関するレポートを提出してもらい、そのできによって成績を評価する。レポートの提出=合格(60点)。  |        |           |          |     |       |

|              |   |        |          |          |     |       |
|--------------|---|--------|----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12376   | 授業題目   | 公益事業論演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 2        | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 上田 健作   |        | 担当教員所属   | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |   |        |          |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 保健医療分野における非営利組織の日米比較<br>高知県における非営利組織の役割と機能  |        |          |          |     |       |
| 授業計画         | <p>医療専門職とは何か；医療は、医師を頂点とする医療専門職のヒエラルキーによって担われてきた。このヒエラルキーにおいては医師の権限は絶大であり、その根拠は医師の専門職性によって与えられてきた。また、医師は、患者に対しても絶対的な地位を占めてきた。しかしながら、近年ではこの医師の絶対的地位が揺らぎつつあるといわれている。それは、他の専門職者に対しても、また患者に対してもである。医師に、絶大な権限を付与してきた専門職性とは何か、なぜ今日それが揺らいできているのかを本演習では検討する。この検討を通じて、医療専門職とは何かを理解すると共に、21世紀の医療従事者のあり方を考える。主にテキストを題材に1学期間で読みきる程度のゆっくりとしたテンポで課題を検討する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) ガイダンス</li> <li>2) 「第1章医療及び健康の認識をめぐって」を題材とする討議1</li> <li>3) 「第1章医療及び健康の認識をめぐって」を題材とする討議2</li> <li>4) 「第2章健康と疾病の社会的生産」を題材とする討議1</li> <li>5) 「第2章健康と疾病の社会的生産」を題材とする討議2</li> <li>6) 「第3章健康、疾病、低開発」を題材とする討議</li> <li>7) 「第4章英国資本主義の発達と公衆衛生及び医療」を題材とする討議</li> <li>8) 「第4章英国資本主義の発達と公衆衛生及び医療」を題材とする討議</li> <li>9) 「第5章英国におけるナショナル・ヘルス・サービス」を題材とする討議1</li> <li>10) 「第5章英国におけるナショナル・ヘルス・サービス」を題材とする討議2</li> <li>11) 「第6章女性、医療、そして社会的制御：NHSの場合」を題材とする討議1</li> <li>12) 「第6章女性、医療、そして社会的制御：NHSの場合」を題材とする討議2</li> <li>13) 「第7章医療と帝国主義」を題材とする討議</li> <li>14) 健康と医療を巡る問題の総括討議1</li> <li>15) 健康と医療を巡る問題の総括討議2</li> </ol> |        |          |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 医療における専門職とは何か。医療専門職者の権限の根拠は何かを理解する。受講生の研究に専門職支配論が活かせるようになる。   |        |          |          |     |       |
| 教科書          | エリオット・フリードソン、進藤雄三・宝月誠訳『医療と専門家支配』(恒星社厚生閣)。参考書は適宜紹介。  |        |          |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 医療専門職論が受講生それぞれの医療・福祉研究にどのようにいかせるかに関するレポートを提出してもらい、そのできによって成績を評価する。専門職支配論の概要が理解できていれば合格(60点)。どのように自分の研究に活用できるか明確にできた度合いでそれ以上の成績を評価する。  |        |          |          |     |       |

|              |   |        |              |          |     |       |
|--------------|---|--------|--------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12377   | 授業題目   | 日本経済構造分析演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 1            | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 池田 啓実   |        | 担当教員所属       | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | とくになし   |        |              |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 日本経済構造、産業連関分析からみる地域産業政策に関する研究   |        |              |          |     |       |
| 授業計画         | <p>日本経済構造の特徴および地域経済との関連について文献的研究を追求すると同時に、コンピュータを用いた日本経済構造の解析や産業連関表による地域経済構造の特性についても解明し、これらに関する研究発表とディスカッションを行う。</p> <p>第1回 ガイダンス<br/> 第2回 課題設定のための討議①<br/> 第3回 課題設定のための討議②<br/> 第4回 実証的研究①－高知県中山間地域の実態調査①<br/> 第5回 実証的研究②－高知県中山間地域の実態調査②<br/> 第6回 実証的研究③－高知県中山間地域の実態調査③<br/> 第7回 実証的研究④－調査結果の定量分析①<br/> 第8回 実証的研究⑤－調査結果の定量分析②<br/> 第9回 中間発表－実証的研究成果<br/> 第10回 文献的研究①－産業クラスター論<br/> 第11回 文献的研究②－地域の内発的発展論<br/> 第12回 文献的研究③－スモールワールドネットワーク論<br/> 第13回 分析結果に関する討議①<br/> 第14回 分析結果に関する討議②<br/> 第15回 最終報告</p> |        |              |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 21世紀の日本経済における構造的特性を規定する主要要素の解析  |        |              |          |     |       |
| 参考文献等        |   |        |              |          |     |       |
| 教科書          | とくになし   |        |              |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 演習時のディスカッション内容及び課題レポート(プレゼン含む)による評価   |        |              |          |     |       |

|              |   |        |             |          |     |       |
|--------------|---|--------|-------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12378   | 授業題目   | 日本経済構造分析演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 2           | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 池田 啓実   |        | 担当教員所属      | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | とくになし   |        |             |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 日本経済構造、産業連関分析からみる地域産業政策に関する研究   |        |             |          |     |       |
| 授業計画         | <p>日本経済構造分析演習Ⅰに引き続き、日本経済構造の特徴および地域経済との関連について文献的研究を追求すると同時に、コンピュータを用いた日本経済構造の解析や産業連関表による地域経済構造の特性についても解明し、これらに関する研究発表とディスカッションを行う。</p> <p>第1回 日本経済構造演習Ⅰの振り返り<br/> 第2回 課題設定のための討議①<br/> 第3回 課題設定のための討議②<br/> 第4回 実証的研究①－高知県都市部の中小企業に関する実態調査①<br/> 第5回 実証的研究②－高知県都市部の中小企業に関する実態調査②<br/> 第6回 実証的研究③－高知県都市部の中小企業に関する実態調査③<br/> 第7回 実証的研究④－調査結果の定量分析①<br/> 第8回 実証的研究⑤－調査結果の定量分析②<br/> 第9回 中間発表－実証的研究成果<br/> 第10回 文献的研究①－組織の適応モデル<br/> 第11回 文献的研究②－自己組織化論<br/> 第12回 文献的研究③－自律型人材と組織<br/> 第13回 分析結果に関する討議①<br/> 第14回 分析結果に関する討議②<br/> 第15回 最終報告</p> |        |             |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 21世紀の日本経済における構造的特性を規定する主要要素の解析  |        |             |          |     |       |
| 参考文献等        |   |        |             |          |     |       |
| 教科書          | とくになし   |        |             |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 演習時のディスカッション内容及び課題レポート(プレゼン含む)による評価   |        |             |          |     |       |

|              |  |        |         |          |     |       |
|--------------|--|--------|---------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12379  | 授業題目   | 財政学演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 1       | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 鈴木 啓之  |        | 担当教員所属  | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 特になし   |        |         |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | テーマ: 1. 財政政策の日独比較研究<br>2. 公信用と財政政策<br>3. 地域政策と財政   |        |         |          |     |       |
| 授業計画         | <p>演習 I では、経済成長政策と所得再分配政策の関係について、わが国の事例を中心に実証的研究を行う。受講生には、上記の課題に即した発表を行って頂くほか、学期後半には受講者のテーマに即した研究報告の機会を複数回設けたい。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1970年代までの経済成長政策と所得再分配政策</li> <li>1980年代の財政再建と経済成長政策</li> <li>バブル経済と財政政策・経済成長政策</li> <li>バブル崩壊後の財政政策・経済成長政策(1)</li> <li>バブル崩壊後の財政政策・経済成長政策(2)</li> <li>1980年代の財政再建策と所得再分配政策の転換</li> <li>日本型新自由主義と所得再分配政策(1——福祉・社会保障制度)</li> <li>日本型新自由主義と所得再分配政策(2——政府間関係および地方財政)</li> <li>日本型新自由主義と所得再分配政策(3——税制)</li> <li>近年の好況に関する要因分析</li> <li>所得の分配・再分配と経済成長</li> <li>受講者個人研究報告</li> <li>グローバリゼーションと財政政策</li> <li>まとめ</li> <li>受講者個人研究報告</li> </ol> |        |         |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 財政学的な考え方, 公共政策の理念等を修得していただく  |        |         |          |     |       |
| 参考文献等        | 文献を随時紹介するので、それを予習してもらおう。   |        |         |          |     |       |
| 教科書          | 龍昇吉編著『現代の財政金融』日本評論社、他  |        |         |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 平常点50% レポート50%で評価する。   |        |         |          |     |       |

|              |  |        |        |          |     |       |
|--------------|--|--------|--------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12380  | 授業題目   | 財政学演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 2      | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 鈴木 啓之  |        | 担当教員所属 | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 特になし   |        |        |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | テーマ: 1. 財政政策の日独比較研究<br>2. 公信用と財政政策<br>3. 地域政策と財政   |        |        |          |     |       |
| 授業計画         | <p>演習Ⅱでは、財政学・公共政策論の基本的な理論問題について研究する。受講生には、上記の課題に即した発表を行って頂くほか、学期後半には受講者のテーマに即した研究報告の機会を複数回設けたい。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 序論——「市場の失敗」と「政府の失敗」</li> <li>2. 公共財と準公共財</li> <li>3. 効率と公平</li> <li>4. 経済成長と財政(1)</li> <li>5. 経済成長と財政(2)</li> <li>6. 所得分配と市場経済(1)</li> <li>7. 所得分配と市場経済(2)</li> <li>8. 経費論各論(1——移転的支出)</li> <li>9. 経費論各論(2——投資的支出)</li> <li>10. 租税論各論(1——所得課税)</li> <li>11. 租税論各論(2——法人課税)</li> <li>12. 租税論各論(3——消費課税・資産課税)</li> <li>13. 受講者個人研究報告</li> <li>14. 地方財政調整制度および補助金</li> <li>15. 受講者個人研究報告</li> </ol> |        |        |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 財政学的な考え方, 公共政策の理念等を修得していただく  |        |        |          |     |       |
| 参考文献等        | 文献を随時紹介するので、それを予習してもらおう。   |        |        |          |     |       |
| 教科書          | 龍昇吉編著『現代の財政金融』日本評論社、他  |        |        |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 平常点50% レポート50%で評価する。   |        |        |          |     |       |

|              |   |        |           |          |     |       |
|--------------|---|--------|-----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12385   | 授業題目   | 都市政策論演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 1         | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 石筒 覚  |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |   |        |           |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 都市政策、都市問題に関する経済分析   |        |           |          |     |       |
| 授業計画         | <p>日本、アジア、欧米における都市問題の実情と対策事例に対して、経済理論をベースにした分析を行う。また、現地調査を含めた綿密な研究活動を通じて、実証的な側面からも政策分析を行い、それらについての研究発表とディスカッションを実施する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 都市に関する諸問題の分析手法の検討</li> <li>2 都市問題と都市政策に関する事例研究(1)</li> <li>3 都市問題と都市政策に関する事例研究(2)</li> <li>4 都市問題と都市政策に関する事例研究(3)</li> <li>5 都市問題と都市政策に関する事例研究(4)</li> <li>6 都市問題と都市政策に関する事例研究(5)</li> <li>7 都市問題と都市政策に関する事例研究(6)</li> <li>8 都市問題と都市政策に関する現地調査(1)</li> <li>9 都市問題と都市政策に関する現地調査(2)</li> <li>10 都市問題と都市政策に関する現地調査(3)</li> <li>11 都市問題と都市政策に関する現地調査(4)</li> <li>12 現地調査結果の分析(1)</li> <li>13 現地調査結果の分析(2)</li> <li>14 現地調査結果の分析(3)</li> <li>15 現地調査結果に関する報告</li> </ol> |        |           |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 以下の2点に関して、授業が終了した時点でできるようになっていれば、この授業の目標は達成されたこととなります。1)都市問題の構造を経済理論をベースに理解することができる。2)実証的な側面から政策分析を行うことができる。  |        |           |          |     |       |
| 参考文献等        | 適宜指示する。   |        |           |          |     |       |
| 教科書          | 適宜指示する。   |        |           |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 授業参加度および最終レポート。   |        |           |          |     |       |

|              |   |        |          |          |     |       |
|--------------|---|--------|----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12386   | 授業題目   | 都市政策論演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 2        | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 石筒 覚  |        | 担当教員所属   | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |   |        |          |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 都市政策、都市問題に関する経済分析   |        |          |          |     |       |
| 授業計画         | <p>都市政策論演習Ⅰに引き続き、日本、アジア、欧米における都市問題の実情と対策事例に対して、経済理論をベースにした分析を行う。また、現地調査を含めた綿密な研究活動を通じて、実証的な側面からも政策分析を行い、それらについての研究発表とディスカッションを実施する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 都市に関する諸問題の分析手法の検討</li> <li>2 都市問題と都市政策に関する事例研究(1)</li> <li>3 都市問題と都市政策に関する事例研究(2)</li> <li>4 都市問題と都市政策に関する事例研究(3)</li> <li>5 都市問題と都市政策に関する事例研究(4)</li> <li>6 都市問題と都市政策に関する事例研究(5)</li> <li>7 都市問題と都市政策に関する事例研究(6)</li> <li>8 都市問題と都市政策に関する現地調査(1)</li> <li>9 都市問題と都市政策に関する現地調査(2)</li> <li>10 都市問題と都市政策に関する現地調査(3)</li> <li>11 都市問題と都市政策に関する現地調査(4)</li> <li>12 現地調査結果の分析(1)</li> <li>13 現地調査結果の分析(2)</li> <li>14 現地調査結果の分析(3)</li> <li>15 現地調査結果に関する報告</li> </ol> |        |          |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 以下の2点に関して、授業が終了した時点でできるようになっていれば、この授業の目標は達成されたこととなります。1)都市問題の構造を経済理論をベースに理解することができる。2)実証的な側面から政策分析を行うことができる。  |        |          |          |     |       |
| 参考文献等        | 適宜指示する。   |        |          |          |     |       |
| 教科書          | 適宜指示する。   |        |          |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 授業参加度および最終レポート。   |        |          |          |     |       |

|              |  |        |         |          |     |       |
|--------------|--|--------|---------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12389  | 授業題目   | 政治学演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 1       | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 上神 貴佳  |        | 担当教員所属  | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 参加者は教員が指定する文献を読み、順次、それらについて報告を担当する。その上で適宜、自らの研究テーマについても、中間報告を行ってもらう。政治学的なセンスに加えて、英語読解力とデータ分析能力が必須である。  |        |         |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 現代日本の政党や選挙に関する研究   |        |         |          |     |       |
| 授業計画         | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. イントロダクション</li> <li>2. 文献講読、報告、討論(以下同)</li> <li>3.</li> <li>4.</li> <li>5.</li> <li>6.</li> <li>7.</li> <li>8.</li> <li>9.</li> <li>10.</li> <li>11.</li> <li>12.</li> <li>13.</li> <li>14.</li> <li>15.</li> </ol> |        |         |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 政治学に関する高度な文献を読破し、専門的な知識を深め、論文執筆に役立てることを目標とする。  |        |         |          |     |       |
| 参考文献等        | 適宜、指示する。   |        |         |          |     |       |
| 教科書          | 特になし   |        |         |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 演習における発表と質疑応答、討論を通じて、受講者の目標達成度を評価する。   |        |         |          |     |       |

|              |  |        |        |          |     |       |
|--------------|--|--------|--------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12390  | 授業題目   | 政治学演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 1      | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 上神 貴佳  |        | 担当教員所属 | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 参加者は教員が指定する文献を読み、順次、それらについて報告を担当する。その上で適宜、自らの研究テーマについても、中間報告を行ってもらう。政治学的なセンスに加えて、英語読解力とデータ分析能力が必須である。  |        |        |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 現代日本の政党や選挙に関する研究   |        |        |          |     |       |
| 授業計画         | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. イントロダクション</li> <li>2. 文献講読、報告、討論(以下同)</li> <li>3.</li> <li>4.</li> <li>5.</li> <li>6.</li> <li>7.</li> <li>8.</li> <li>9.</li> <li>10.</li> <li>11.</li> <li>12.</li> <li>13.</li> <li>14.</li> <li>15.</li> </ol> |        |        |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 政治学に関する高度な文献を読破し、専門的な知識を深め、論文執筆に役立てることを目標とする。  |        |        |          |     |       |
| 参考文献等        | 適宜、指示する。   |        |        |          |     |       |
| 教科書          | 特になし   |        |        |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 演習における発表と質疑応答、討論を通じて、受講者の目標達成度を評価する。   |        |        |          |     |       |

|              |  |        |            |          |     |       |
|--------------|--|--------|------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12361  | 授業題目   | 自治体行政法演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 1          | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 赤間 聡   |        | 担当教員所属     | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 形式的な思考を要するのでは(法)形式論を議論できるように、訓練すること。次に、各自治体の現状を把握するために積極的フィールド調査意欲をもつこと。                           |        |            |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 環境法と法源論  |        |            |          |     |       |
| 授業計画         | 地方自治法の内、自治体立法、首長と議会権限を中心に解説、検討。ただし、テーマの選択などは、顔ぶれを見て相談のうえ決定する。基本、学生の発表をベースに講義を進めるので、プレゼンの覚悟をしておくこと。 |        |            |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) |  |        |            |          |     |       |
| 参考文献等        | 随時指示する   |        |            |          |     |       |
| 教科書          | 地方自治法各種解説書。詳細は初回に指示  |        |            |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 報告とレポート  |        |            |          |     |       |

|              |   |        |           |          |     |       |
|--------------|---|--------|-----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12362   | 授業題目   | 自治体行政法演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 1         | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 赤間 聡  |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 形式的な思考を要するのでまずは(法)形式論を議論できるように、訓練すること。次に、各自治体の現状を把握するために積極的フィールド調査意欲をもつこと                 |        |           |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 環境法と法源論   |        |           |          |     |       |
| 授業計画         | 地方自治法の内、住民訴訟を中心に解説、検討。ただし、テーマの選択などは、顔ぶれを見て相談のうえ決定する。基本、学生の発表をベースに講義を進めるので、プレゼンの覚悟をしておくこと。 |        |           |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) |   |        |           |          |     |       |
| 参考文献等        | 随時指示する  |        |           |          |     |       |
| 教科書          | 地方自治法各種解説書。詳細は初回到指示   |        |           |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 報告とレポート   |        |           |          |     |       |

|              |   |        |             |          |         |
|--------------|---|--------|-------------|----------|---------|
| 授業コード        | 12387   | 授業題目   | マイクロ経済学演習 I | 単位数      | 2       |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 1           | 開講時期     | 2 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 新井 泰弘   |        | 担当教員所属      | 人文社会科学専攻 |         |
| 履修における注意点    | 英語文献の講読を厭わないこと。また、マイクロ経済学の知識と若干の数学的素養(最適化の一階条件、二階条件、ラグランジュ乗数法の理解)が必要となります。  |        |             |          |         |
| 教員研究テーマ      | 知的財産権制度の経済分析、産業組織論、法と経済学、ゲーム理論  |        |             |          |         |
| 授業計画         | <p>産業組織論や知的財産権制度の理論研究に関する研究報告とディスカッションを行う。修士論文を執筆するために必要な基礎知識と技術を習得し、修士論文の緻密な研究計画書の作成を目的とする。</p> <p>第一回:研究テーマの策定と計画の立案<br/> 第二回:文献輪読①<br/> 第三回:文献輪読②<br/> 第四回:文献輪読③<br/> 第五回:文献輪読④<br/> 第六回:文献輪読⑤<br/> 第七回:中間報告①<br/> 第八回:中間報告②<br/> 第九回:文献輪読⑥<br/> 第十回:文献輪読⑦<br/> 第十一回:文献輪読⑧<br/> 第十二回:文献輪読⑨<br/> 第十三回:文献輪読⑩<br/> 第十四回:最終報告①<br/> 第十五回:最終報告②</p> |        |             |          |         |
| 各科目の目標(達成水準) | 産業組織論に関する基礎知識を習得し、修士論文の研究計画書を作成すること   |        |             |          |         |
| 参考文献等        | 受講者のテーマに併せて適宜指示する。  |        |             |          |         |
| 教科書          | 特になし。文献輪読を中心に授業を行う。   |        |             |          |         |
| 成績評価の基準と方法   | 文献の輪読と、最後に提出する研究計画書で評価する。   |        |             |          |         |

|              |   |        |           |          |     |       |
|--------------|---|--------|-----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12388   | 授業題目   | ミクロ経済学演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 1         | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 新井 泰弘   |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 英語文献の講読を厭わないこと。また、ミクロ経済学の知識と若干の数学的素養(最適化の一階条件、二階条件、ラグランジュ乗数法の理解)が必要となります。   |        |           |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 知的財産権制度の経済分析、産業組織論、法と経済学、ゲーム理論  |        |           |          |     |       |
| 授業計画         | <p>演習Ⅰと同じく、文献輪読とディスカッションを中心に授業を行う。本講義では、既存の研究結果を踏まえた上で、理論モデルを自身で構築し、オリジナルの研究結果を導き出すことを最終的な目標とする。</p> <p>第一回：修士論文のテーマの策定と計画の立案<br/> 第二回：文献輪読①<br/> 第三回：文献輪読②<br/> 第四回：文献輪読③<br/> 第五回：文献輪読④<br/> 第六回：文献輪読⑤<br/> 第七回：中間報告：既存研究の整理<br/> 第八回：中間報告：理論モデルの報告<br/> 第九回：文献輪読⑥<br/> 第十回：文献輪読⑦<br/> 第十一回：文献輪読⑧<br/> 第十二回：文献輪読⑨<br/> 第十三回：文献輪読⑩<br/> 第十四回：最終報告①<br/> 第十五回：最終報告②</p> |        |           |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 独自に分析に値する問題を発見し、それを経済理論モデルを用いて描写、分析をすることを目標とする。   |        |           |          |     |       |
| 参考文献等        | 受講者のテーマに併せて適宜指示する。  |        |           |          |     |       |
| 教科書          | 特になし。文献輪読を中心に授業を行う。   |        |           |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 文献の輪読と、最後に提出する研究計画書で評価する。   |        |           |          |     |       |

|              |  |        |                 |        |          |   |
|--------------|--|--------|-----------------|--------|----------|---|
| 授業コード        | 12401  | 授業題目   | 文化・コミュニケーション論特論 |        | 単位数      | 2 |
| 授業種別         | 講義   | 履修開始年次 | 1               | 開講時期   | 曜日・時限    |   |
| 担当教員名        | 丸井 一郎  |        |                 | 担当教員所属 | 人文社会科学専攻 |   |
| 履修における注意点    |  |        |                 |        |          |   |
| 教員研究テーマ      | 言語相互行為研究、異文化間コミュニケーション、対照社会文化誌   |        |                 |        |          |   |
| 授業計画         | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 導入</li> <li>2. 言語相互行為としての談話:対象領域の定位</li> <li>3. 言語相互行為の理論の概略</li> <li>4. 言語相互行為の種類(タイプ)と範型(パターン)</li> <li>5. 対面談話の位置づけ</li> <li>6. 言語行為概念と意義目的関連</li> <li>7. 言語相互行為における協調</li> <li>8. 協調の様式</li> <li>9. 個別類型的相互行為原則</li> <li>10. 日独英語などに見る対面談話の組織</li> <li>11. 場面定義・参加様態・参加役割</li> <li>12. 談話組織の基礎</li> <li>13. 競合性と論弁性</li> <li>14. 差異の背景</li> <li>15. まとめ</li> </ol> |        |                 |        |          |   |
| 各科目の目標(達成水準) | 基本概念と概念装置の性質を理解し操作し適用する。事例を収集し分類し分析する。   |        |                 |        |          |   |
| 参考文献等        | 丸井一郎(2006)<br>『言語相互行為の理論のために』、三元社  |        |                 |        |          |   |
| 教科書          |  |        |                 |        |          |   |
| 成績評価の基準と方法   | 毎回の課題、発表、最終レポートを総合して   |        |                 |        |          |   |

|              |   |        |         |          |     |       |
|--------------|---|--------|---------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12402   | 授業題目   | 社会情報論特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義  | 履修開始年次 | 1       | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 遠山 茂樹   |        | 担当教員所属  | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |   |        |         |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 社会情報学、メディア論、Community Informatics<br>地域コミュニティの”活性化”に向けた、ICTの利活用の影響に関する社会学的研究  |        |         |          |     |       |
| 授業計画         | <p>「情報」「メディア」「コミュニケーション」等の基礎概念を整理しつつ社会情報の生成・加工・流通といった社会情報学の基本を理解した上で、メディアの発展に伴う社会変容について、具体的な社会事象の考察を通じた講義を行う。</p> <p>より具体的には、社会とメディアの関係を考察して、ローカルレベルのコミュニティにおける情報化の局面を理論的に考察する。その後、具体的事例を通じて、理論と実践とを理解すると同時に、今後のコミュニティレベルの情報化の在り方について考える。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス</li> <li>2. 社会情報学の基礎:情報、ネットワーク、メディアとは</li> <li>3. メディアと社会(1)</li> <li>4. メディアと社会(2)</li> <li>5. メディアと社会(3)</li> <li>6. メディアと社会(4)</li> <li>7. 地域コミュニティと情報化(1)</li> <li>8. 地域コミュニティと情報化(2)</li> <li>9. 地域コミュニティと情報化(3)</li> <li>10. 地域コミュニティと情報化(4)</li> <li>11. 事例研究:米国編(1)</li> <li>12. 事例研究:米国編(2)</li> <li>13. 事例研究:英国編</li> <li>14. 事例研究:日本編(1)</li> <li>15. 事例研究:日本編(2)</li> <li>16. 期末レポート</li> </ol> |        |         |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 社会における情報の生成・加工・流通の基礎について理解できる</li> <li>1. 社会におけるICTの役割と影響について理解できる</li> <li>2. 最新テクノロジーが構築する社会像や日常生活への浸透について構想できる</li> </ol>  |        |         |          |     |       |
| 参考文献等        | <p>東京大学社会情報研究所編(1999)『社会情報学&lt;1&gt;システム』東京大学出版会<br/> 東京大学社会情報研究所編(1999)『社会情報学&lt;2&gt;メディア』東京大学出版会<br/> Gurstein, Michael eds.(2000) Community Informatics: Enabling Communities With Information and Communications Technologies, Idea Group Pub .</p>  |        |         |          |     |       |
| 教科書          | 授業中に適宜指示する。   |        |         |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 授業貢献度(授業での報告や課題提出など)(50%)、期末レポート(50%)を総合的に判断する。   |        |         |          |     |       |

|              |  |        |                  |          |     |       |
|--------------|--|--------|------------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12403  | 授業題目   | 異文化間コミュニケーション論特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義   | 履修開始年次 | 1                | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | Darren Lingley   |        | 担当教員所属           | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |  |        |                  |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | Intercultural Communication, ELT   |        |                  |          |     |       |
| 授業計画         | <p>この授業では「文化」の概念を捉える方法を検討していく。文化と個人の行動との間の関係に気づくことから始め、文化的要因とコミュニケーションスタイルとの間の関係を明確にし、この関係が異文化間接触にどのような影響を及ぼすのか検討しながら、異文化間接触に関わる内容を言語カリキュラムに取り入れる方法を探究していく。(使用言語: 英語)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Course Introduction</li> <li>2. Unit A: Culture and its meanings</li> <li>3. Unit A: Culture and Stereotypes</li> <li>4. Unit A: Culture contact</li> <li>5. Unit B: Cultural categories</li> <li>6. Unit B: Cultural dimensions</li> <li>7. Unit B: Approaches to Studying ICC</li> <li>8. Unit C: Norms and high cost topics</li> <li>9. Unit C: Cross-cultural Pragmatics</li> <li>10. Unit C: Politeness and face</li> <li>11. Unit C: Grice's co-operative principle</li> <li>12. Unit D: ICC in the EFL classroom I</li> <li>13. Unit D: ICC in the EFL classroom II</li> <li>14. Unit D: ICC in the EFL classroom III</li> <li>15. Course wrap</li> </ol> |        |                  |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | This is an introductory graduate level course in IC Communication. Students will be expected to read a variety of materials relating to culture, intercultural communication and English Language Teaching, and to demonstrate understanding of the readings in a seminar context. Students should be able to identify basic ICC topics and discuss them critically in English.  |        |                  |          |     |       |
| 参考文献等        |  |        |                  |          |     |       |
| 教科書          | Materials and selected readings to be provided.  |        |                  |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | Strong seminar contribution, student-led seminar in an agreed upon area of study and end-of-semester essay.  |        |                  |          |     |       |

|              |   |        |                 |          |     |              |
|--------------|---|--------|-----------------|----------|-----|--------------|
| 授業コード        | 12405   | 授業題目   | 日本語コミュニケーション論特論 |          | 単位数 | 2            |
| 授業種別         | 講義  | 履修開始年次 | 1               | 開講時期     | 前期  | 曜日・時限<br>火 6 |
| 担当教員名        | 奥村 訓代   |        | 担当教員所属          | 人文社会科学専攻 |     |              |
| 履修における注意点    | 言語・異文化・国際交流に興味の有る方  |        |                 |          |     |              |
| 教員研究テーマ      | 多文化共生、コミュニケーション   |        |                 |          |     |              |
| 授業計画         | 第1回目 イントロ、第2回～5回目 言語理論の特徴、第6回～10回目 意思伝達と方法、第11回目～13回目 日本語の特徴、第14回・15回目 まとめと展望 |        |                 |          |     |              |
| 各科目の目標(達成水準) | 言葉と文化と表現の関係を理解する  |        |                 |          |     |              |
| 参考文献等        | 言葉の認知科学辞典(大修館)、認知言語学キーワード事典(研究社)、文化理論用語集(新曜社)                                 |        |                 |          |     |              |
| 教科書          | 言語学の方法(岩波書店)、   |        |                 |          |     |              |
| 成績評価の基準と方法   | 授業態度と口頭試問   |        |                 |          |     |              |

|              |   |        |          |          |     |       |
|--------------|---|--------|----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12406   | 授業題目   | 日本語構造論特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義  | 履修開始年次 | 1        | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 佐野 由紀子  |        | 担当教員所属   | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 特になし  |        |          |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 現代日本語の文法  |        |          |          |     |       |
| 授業計画         | <p>『はじめての人の日本語文法』をテキストとして、日本語文法を様々な側面から考察する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション</li> <li>2～3. 品詞</li> <li>4～5. 格助詞</li> <li>6～8. 活用</li> <li>9～10. ヴォイス</li> <li>11～12. 人称</li> <li>13～14. テンス</li> <li>15. まとめ</li> </ol> |        |          |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 特に日本語教育において必要な文法的知識を身につける。  |        |          |          |     |       |
| 参考文献等        | 適宜紹介する  |        |          |          |     |       |
| 教科書          | 『はじめての人の日本語文法』野田尚史  |        |          |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 課題・発表(60%)、授業への参加度(40%)   |        |          |          |     |       |

|              |   |        |          |          |     |       |
|--------------|---|--------|----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12407   | 授業題目   | 外国語習得論特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義  | 履修開始年次 | 1        | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 今井 典子   |        | 担当教員所属   | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 予習と復習を十分行うこと。   |        |          |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 第二言語習得、タスク(特に、focused taskータスク活動とdictogloss)、英語教育   |        |          |          |     |       |
| 授業計画         | <p>外国語の獲得過程やメカニズムを科学的に解明した上で、認知論的立場から、英語学習・指導理論を構築していきます。</p> <p>第1回: イントロダクション<br/>SLA(第二言語習得)研究(第二言語教育との関係を中心に)を考える(1)</p> <p>第2回: SLA研究(第二言語教育との関係を中心に)を考える(2)習得理論</p> <p>第3回: SLA研究(第二言語教育との関係を中心に)を考える(3)習得理論</p> <p>第4回: 母語習得</p> <p>第5回: バイリンガルの二言語習得を考える</p> <p>第6回: SLAの諸相(1)<br/>認知アプローチから見たSLA、社会文化的アプローチから見たSLA など</p> <p>第7回: SLAの諸相(2)脳科学から見たSLA など</p> <p>第8回: 学習者言語(中間言語: interlanguage)</p> <p>第9回: 学習者要因: 年齢(臨界期仮説)、動機づけ(Motivation)、適性、社会的要因(文化変容仮説)</p> <p>第10回: 教室での言語習得(1)インプット、インターアクション</p> <p>第11回: 教室での言語習得(2)アウトプット、フォーカス・オン・フォーム</p> <p>第12回: 教室での言語習得(3)タスク</p> <p>第13回: 外国語能力の評価、および、テスト</p> <p>第14回: 発表</p> <p>第15回: まとめ</p> |        |          |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 言語習得に関する理論と実際を考察することによって、言語習得、とくに第二言語の習得について理解を深める。   |        |          |          |     |       |
| 参考文献等        | 適宜紹介します。  |        |          |          |     |       |
| 教科書          | 必要に応じ、参考資料や論文を配布します。  |        |          |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席状況と受講態度(課題発表)、および、課題レポートにより、総合的に判断します。  |        |          |          |     |       |

|              |  |        |         |          |       |
|--------------|--|--------|---------|----------|-------|
| 授業コード        | 12409  | 授業題目   | 対照言語論特論 | 単位数      | 2     |
| 授業種別         | 講義   | 履修開始年次 | 1       | 開講時期     | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 岡本 克人  |        | 担当教員所属  | 人文社会科学専攻 |       |
| 履修における注意点    |  |        |         |          |       |
| 教員研究テーマ      | 対照言語学  |        |         |          |       |
| 授業計画         | <p>言語系統が異なっても、2言語(あるいはそれ以上)の言語を比較対象して、それぞれの特徴を浮かび上がらせるのが対照言語学の仕事である。フランス語を中心にすえ、日本語と英語をいわば鏡として、比較対照研究をおこなう。</p> <p>1. 対照言語学とは何か 2. 対照言語学とは何か 3. Charles Bally の紹介 4. Charles Bally の紹介 5. Charles Bally の紹介 6. 仏英語対照研究の紹介 7. 仏英語対照研究の紹介 8. 学生報告 9. 学生報告 10. 日本語の特徴 11. 日本語の特徴 13. 日本語の特徴 14. 学生報告 15. まとめのディスカッション</p> |        |         |          |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 対照言語学とは何かを知り、自力でいくつかの対照できる問題点を見つけ出せるようになること。   |        |         |          |       |
| 参考文献等        | 多数あるので受講時に指示する。  |        |         |          |       |
| 教科書          | とくになし。   |        |         |          |       |
| 成績評価の基準と方法   | 授業における発言、質疑応答の評価とレポート。   |        |         |          |       |

|              |  |        |         |          |     |       |
|--------------|--|--------|---------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12411  | 授業題目   | 英語音声学特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義   | 履修開始年次 | 1       | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 藤崎 好子  |        | 担当教員所属  | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 音声学概論既習者対象   |        |         |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 英語の音体系・音韻現象・音声変化に関する研究   |        |         |          |     |       |
| 授業計画         | <p>英語音声学・英語音韻論の理論的考察を通して、英語教育への応用を前提とした音声研究の検討を行う。</p> <p>第1回:オリエンテーション、既習事項 &amp; 授業計画の確認<br/> 第2回:Linguistic Universals &amp; Phonetic Representation<br/> 第3回:Principles of the Transformational Cycle &amp; Segmental Phonology of English<br/> 第4回:English Phonology &amp; Rules of the Phonological Component<br/> 第5回:Stress Placement &amp; Stress as a Lexical Category<br/> 第6回:Word-Level Phonology &amp; Vowel Alternations<br/> 第7回:Consonant System of English<br/> 第8回:Linguistic Change of the Modern English Vowel System (1)<br/> 第9回:Linguistic Change of the Modern English Vowel System (2)<br/> 第10回:Phonological Theory &amp; Phonetic Framework (1)<br/> 第11回:Phonological Theory &amp; Phonetic Framework (2)<br/> 第12回:Principles of Phonology (1)<br/> 第13回:Principles of Phonology (2)<br/> 第14回:Theory of 'Markedness'<br/> 第15回:総括</p> |        |         |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 音声学から英語音韻論への橋渡しと、英語音声・音韻現象の理論的且つ分析的研究をする。  |        |         |          |     |       |
| 参考文献等        | 初回授業で文献リストを配布する。   |        |         |          |     |       |
| 教科書          | 初回授業で提示する。   |        |         |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 発表(30%)・課題レポート(30%)・学期末試験(40%)により評価を行う。  |        |         |          |     |       |

|              |   |        |          |          |     |       |
|--------------|---|--------|----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12413   | 授業題目   | 言語文化研究特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義  | 履修開始年次 | 1        | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 古閑 恭子   |        | 担当教員所属   | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 毎回前もってテキストを読んでくること。   |        |          |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 言語構造、特に音声・音韻に関する研究、社会における言語の役割に関する研究  |        |          |          |     |       |
| 授業計画         | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション</li> <li>2. テキストの講読とディスカッション(1)</li> <li>3. テキストの講読とディスカッション(2)</li> <li>4. テキストの講読とディスカッション(3)</li> <li>5. テキストの講読とディスカッション(4)</li> <li>6. テキストの講読とディスカッション(5)</li> <li>7. テキストの講読とディスカッション(6)</li> <li>8. テキストの講読とディスカッション(7)</li> <li>9. テキストの講読とディスカッション(8)</li> <li>10. テキストの講読とディスカッション(9)</li> <li>11. テキストの講読とディスカッション(10)</li> <li>12. テキストの講読とディスカッション(11)</li> <li>13. テキストの講読とディスカッション(12)</li> <li>14. テキストの講読とディスカッション(13)</li> <li>15. テキストの講読とディスカッション(14)</li> <li>16. 定期試験</li> </ol> |        |          |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 音声学から英語音韻論への橋渡しと、英語音声・音韻現象の理論的且つ分析的研究をする。   |        |          |          |     |       |
| 参考文献等        | 初回授業で文献リストを配布する。  |        |          |          |     |       |
| 教科書          | 初回授業で提示する。  |        |          |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 発表(30%)・課題レポート(30%)・学期末試験(40%)により評価を行う。   |        |          |          |     |       |

|              |   |        |             |          |     |       |
|--------------|---|--------|-------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12414   | 授業題目   | アメリカ言語文化論特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義  | 履修開始年次 | 1           | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 上岡 克己   |        | 担当教員所属      | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |   |        |             |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | アメリカの自然と文学  |        |             |          |     |       |
| 授業計画         | <p>アメリカの自然・環境と文学・文化とのかかわりについて考察する。今学期は、環境の時代を画し、世界の流れを変えたレイチェル・カーソンを取り上げ、以下の観点から概説する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) レイチェル・カーソンの生涯、</li> <li>(2) レイチェル・カーソンの思想と現代</li> <li>(3) レイチェル・カーソンと緑の文学、</li> <li>(4) レイチェル・カーソンと海の文学</li> <li>(5) 海の三部作</li> <li>(6) 世界を変えた本『沈黙の春』</li> <li>(7) 女性と自然</li> <li>(8) 汚染の言説</li> <li>(9) 環境文学</li> <li>(10) 子供と自然 『センス・オブ・ワンダー』</li> <li>(11) 環境教育の視点</li> <li>(12) 『失われた森』</li> <li>(13) カーソンと環境保護運動</li> <li>(14) カーソンと自然の権利</li> <li>(15) カーソンのメッセージ</li> </ol> |        |             |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | アメリカの環境思想の概略を理解する。  |        |             |          |     |       |
| 参考文献等        | 『アメリカの環境保護運動』 『自然の権利』   |        |             |          |     |       |
| 教科書          | 『レイチェル・カーソン』(ミネルヴァ書房)   |        |             |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席と平常成績、レポートの総合評価   |        |             |          |     |       |

|              |   |        |            |          |     |       |
|--------------|---|--------|------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12415   | 授業題目   | イギリス言語文化特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義  | 履修開始年次 | 1          | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 吉門 牧雄   |        | 担当教員所属     | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |   |        |            |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | イギリス言語文化の特異性とその代表的作品についての研究   |        |            |          |     |       |
| 授業計画         | <p>この授業ではイギリス言語文化の特徴を具体的な文献の講読を通して探求する。イギリスの文化は様々な民族の影響を受けつつ、独特な変遷を経て現在に至っているが、その成立過程を解説しつつ、代表的な作品の読解を行い、イギリス社会の特殊性や日本文化との相違点を明らかにする。</p> <p>第1回 イントロダクション<br/> 第2回 王政復古時代のイングランド考察(一回目)<br/> 第3回 王政復古時代のイングランド考察(二回目)<br/> 第4回 王政復古時代のイングランド考察(三回目)<br/> 第5回 デフォー時代のイングランド考察(一回目)<br/> 第6回 デフォー時代のイングランド考察(二回目)<br/> 第7回 デフォー時代のイングランド考察(三回目)<br/> 第8回 ジョンソン博士時代のイングランド考察(一回目)<br/> 第9回 ジョンソン博士時代のイングランド考察(二回目)<br/> 第10回 ジョンソン博士時代のイングランド考察(三回目)<br/> 第11回 ヴィクトリア朝のイングランド考察(一回目)<br/> 第12回 ヴィクトリア朝のイングランド考察(二回目)<br/> 第13回 ヴィクトリア朝のイングランド考察(三回目)<br/> 第14回 授業の総括<br/> 第15回 期末試験</p> |        |            |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | イギリスの言語文化の特色についての理解を深める。  |        |            |          |     |       |
| 参考文献等        | The Norton Anthology of English Literature (Norton)   |        |            |          |     |       |
| 教科書          | G.M.Trevelyan, English Social History (Pelican Books)   |        |            |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席、授業中の発表や討論、レポート、筆記試験などの結果を総合的に判断して評価する。   |        |            |          |     |       |

|              |  |        |         |          |       |
|--------------|--|--------|---------|----------|-------|
| 授業コード        | 12417  | 授業題目   | ドイツ文化特論 | 単位数      | 2     |
| 授業種別         | 講義   | 履修開始年次 | 1       | 開講時期     | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 斎藤 昌人  |        | 担当教員所属  | 人文社会科学専攻 |       |
| 履修における注意点    |  |        |         |          |       |
| 教員研究テーマ      | ドイツ文化、ドイツ文学  |        |         |          |       |
| 授業計画         | <p>19世紀末から20世紀初頭にかけての、ハプスブルク帝国の首都ウィーンにおける様々な「文化」を見ていく。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) イントロダクション</li> <li>2) 社会的背景I</li> <li>3) 社会的背景II</li> <li>4) 政治的背景</li> <li>5) 反ユダヤ主義</li> <li>6) 文学I</li> <li>7) 文学II</li> <li>8) 「ウィーン分離派」</li> <li>9) 絵画</li> <li>10) 音楽</li> <li>11) ウィーン工房</li> <li>12) 都市建設</li> <li>13) 建築</li> <li>14) まとめ</li> <li>15) (レポートに代える)</li> </ol> |        |         |          |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 19世紀末から20世紀初頭にかけての世紀転換期におけるウィーンの「文化」状況を、相互の関連性の中でとらえ、それを社会的文脈の中に位置づけること。   |        |         |          |       |
| 参考文献等        | その都度指示   |        |         |          |       |
| 教科書          | 特になし   |        |         |          |       |
| 成績評価の基準と方法   | レポート   |        |         |          |       |

|              |  |        |           |          |     |       |
|--------------|--|--------|-----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12418  | 授業題目   | 中国言語文化論特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義   | 履修開始年次 | 1         | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 周 雲喬   |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |  |        |           |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 唐代詩人の研究  |        |           |          |     |       |
| 授業計画         | <p>中国文化においては、輝ける成果をあげたのは唐代の士である。詩の中に民族文化の顕著な特徴が反映されている。唐代の詩歌を学ぶことを通じて、中国言語と文化への理解を深めるのがこの講義の目標である。講義は15回にわたって行う。初唐、盛唐、中唐、晩唐という四つの時期における詩人の作品を選んで、精読していく。初唐では、駱賓王、王勃、楊炯、劉希夷、盛唐では、王維、王昌齡・常建・李白、中唐では錢起・白居易・韓愈・劉禹錫・賈島、晩唐では杜牧・温庭筠・李商隱・韋莊という諸人の詩を取り上げて、解説する予定である。</p> <p>第1回目 駱賓王<br/> 第2回目 王勃<br/> 第3回目 楊炯<br/> 第4回目 劉希夷<br/> 第5回目 王維<br/> 第6回目 王昌齡<br/> 第7回目 李白<br/> 第8回目 錢起<br/> 第9回目 白居易<br/> 第10回目 韓愈<br/> 第11回目 劉禹錫<br/> 第12回目 賈島<br/> 第13回目 杜牧<br/> 第14回目 李商隱<br/> 第15回目 韋莊</p> |        |           |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 唐詩を読解する能力を養うこと   |        |           |          |     |       |
| 参考文献等        | 「中国詩人選集」(岩波書店)   |        |           |          |     |       |
| 教科書          | 最初の授業に指示する。  |        |           |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | レポートによる。   |        |           |          |     |       |

|              |  |        |            |          |     |       |
|--------------|--|--------|------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12419  | 授業題目   | 中国近・現代文学特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義   | 履修開始年次 | 1          | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 高橋 俊   |        | 担当教員所属     | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | とくになし  |        |            |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 中国近・現代文化   |        |            |          |     |       |
| 授業計画         | <p>中国現代文学について概観する。具体的には、以下の通り。</p> <p>第1回 現代文学前夜——〈文学〉に託されたもの——<br/>『天演論』、梁啓超、『新小説』、「小説と群治の関係」、国民国家</p> <p>第2回 文学革命から五四へ<br/>『新青年』、胡適、「文学改良芻議」、陳独秀、周作人、</p> <p>第3回 魯迅の文学(1)——「引き裂かれた社会」の告発——<br/>「摩羅詩力説」、『呐喊』、「狂人日記」、「孔乙己」、「薬」、「故郷」、「阿Q正伝」</p> <p>第4回 魯迅の文学(2)<br/>『彷徨』、「祝福」、「孤独者」、「野草」</p> <p>第5回 文学者たちの誕生——文学研究会・創造社——<br/>茅盾、葉聖陶、王統照、郁達夫、郭沫若、成仿吾</p> <p>第6回 左翼文学の展開——左聯の誕生まで——<br/>創造社、太陽社、丁玲、馮雪峰、茅盾、魯迅、胡風、張天翼、瞿秋白、文芸大衆化</p> <p>第7回 長篇小説の誕生——茅盾「子夜」をめぐる——<br/>リアリズム小説、上海、マスメディア、巴金、老舍</p> <p>第8回 中国における“戦争と文学”——「一・二八事変」と文学——<br/>上海事変、黄震遐、『大晩報』、報告文学</p> <p>第9回 新感覚派の文学——現代中国のモダニストたち——<br/>穆時英、劉呐鷗、施蛰存、『現代』、海派</p> <p>第10回 文壇の〈右〉と〈左〉——新月派から自由人・第三種人へ——<br/>梁実秋、徐志摩、胡秋原、蘇汶、馮雪峰、瞿秋白</p> <p>第11回 魯迅の文学(3)——挫折から論争へ——<br/>マルクス主義、太陽社、創造社、瞿秋白、胡風、『故事新編』</p> <p>第12回 抗戦時期の文学<br/>中華全国文芸界抗敵協会、大後方、民族形式、張天翼、沈從文</p> <p>第13回 人民文学<br/>毛沢東、文芸講話、趙樹理、「小二黒の結婚」、「李有才板話」、「李家莊の変遷」、丁玲、「霞村にいたころ」、「太陽は桑乾河を照らす」</p> <p>第14回 新時期文学<br/>個人主義、改革開放、恋愛、「上海ベイビー」</p> <p>第15回 まとめ——現代中国における〈文学〉の意味——<br/>王曉明、「人文精神論争」、王暉</p> |        |            |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 中国近・現代文学の流れを理解し、意義づける。   |        |            |          |     |       |
| 参考文献等        | 藤井省三『20世紀の中国文学』放送大学教育振興会、2005  |        |            |          |     |       |
| 教科書          | こちらで準備する。  |        |            |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 学期末のレポート(1000字程度):90%、出席状況:10%   |        |            |          |     |       |

|              |  |        |             |          |     |       |
|--------------|--|--------|-------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12420  | 授業題目   | 東アジア言語文化論特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義   | 履修開始年次 | 1           | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 中森 健二  |        | 担当教員所属      | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 特になし   |        |             |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 中国の文学批評について  |        |             |          |     |       |
| 授業計画         | <p>中国の古代・中世における文学批評について考える。『論語』などの思想書にみえる批評、六朝時代の批評書『詩品』『文心雕龍』、空海『文鏡秘府論』に残された唐代の批評などを経て、宋代以降、文学批評は主として「詩話」という形式が用いられることになる。このような流れを概観したうえで、特に「詩話」について考えたい。詩人の言行や片言隻句を対象とした主たる対象とする批評が、宋代以降もなぜ連続と続くことになったのか、その意義は何か、等々を考察したい。</p> <p>第1回 儒家の文学論(1)<br/> 第2回 儒家の文学論(2)<br/> 第3回 諸子百家の文学論(1)<br/> 第4回 諸子百家の文学論(2)<br/> 第5回 『詩品』について(1)<br/> 第6回 『詩品』について(2)<br/> 第7回 『文心雕龍』について(1)<br/> 第8回 『文心雕龍』について(2)<br/> 第9回 唐代の文学論(1)<br/> 第10回 唐代の文学論(2)<br/> 第11回 宋代の詩話について(1)<br/> 第12回 宋代の詩話について(2)<br/> 第13回 宋代の詩話について(3)<br/> 第14回 宋代の詩話について(4)<br/> 第15回 全体のまとめ</p> |        |             |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 中国の文学批評の特質を理解すること。   |        |             |          |     |       |
| 参考文献等        | 授業の進度に応じて提示する。   |        |             |          |     |       |
| 教科書          | プリントして配布。  |        |             |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 小論文による。  |        |             |          |     |       |

|              |  |        |               |          |     |       |
|--------------|--|--------|---------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12421  | 授業題目   | 東アジア古代歴史文化論特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義   | 履修開始年次 | 1             | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 大楠 敦弘  |        | 担当教員所属        | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | とくになし  |        |               |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 中国古代史、統一国家と地域、出土文字資料   |        |               |          |     |       |
| 授業計画         | <p>武器や農具などの出土遺物に見られる製作者について示す銘文を手がかりとして、中国古代、とくに秦漢時代において、いかにしてモノが作られ、そして流通していったのかという「生産と流通」の問題を、それが地域間のいかなる関係や構造のもとに展開したのかという「地域性」の観点から考えてゆく。</p> <p>第1回 イン트로ダクション<br/> 第2回 中国古代考古資料概説<br/> 第3回 中国古代の生産技術<br/> 第4回 秦漢時代の軍事<br/> 第5回 秦漢時代の農業<br/> 第6回 秦漢時代の「地域」<br/> 第7回 秦漢時代における武器<br/> 第8回 秦漢時代における農具<br/> 第9回 秦漢時代における生産組織<br/> 第10回 武器の銘文<br/> 第11回 農具の銘文<br/> 第12回 銘文と生産組織<br/> 第13回 銘文と「地域」<br/> 第14回 銘文と流通<br/> 第15回 まとめ</p> |        |               |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 中国古代史研究の方法論を理解し、個別の問題をその全体像において理解する。   |        |               |          |     |       |
| 参考文献等        | とくになし  |        |               |          |     |       |
| 教科書          | とくになし  |        |               |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席とレポート  |        |               |          |     |       |

|              |   |        |               |          |     |       |
|--------------|---|--------|---------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12422   | 授業題目   | 東アジア近世歴史文化論特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義  | 履修開始年次 | 1             | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 吉尾 寛  |        | 担当教員所属        | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 講義の中で紹介する文献を読むなどして、予習、復習に心がける   |        |               |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | ここ半世紀の日本の明清史研究の方法と課題  |        |               |          |     |       |
| 授業計画         | <p>以下の流れで授業を進める。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 授業の説明</li> <li>2. 戦後日本(～60年代)の明清期社会経済史研究の方法と課題(土地制度を中心に)</li> <li>3. 同前(賦役制度を中心に)</li> <li>4. 同前(商品経済を中心に)</li> <li>5. 小まとめ</li> <li>6. 同前(～70年代)の研究の方法と課題(いわゆる郷紳論について)</li> <li>7. 同前(民衆運動を中心に)</li> <li>8. 小まとめ</li> <li>9. 80年代から90年代の日本の明清期社会経済史研究の方法と課題(社会秩序をめぐる)</li> <li>10. 同前(社会変動をめぐる)</li> <li>11. 同前(宗族をめぐる)</li> <li>12. 小まとめ</li> <li>13. 台湾の研究動向について</li> <li>14. 今日の日本の明清期社会経済史の課題</li> <li>15. テスト</li> </ol> |        |               |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 現在までの日本の明清史研究の動向の基本線を理解できる  |        |               |          |     |       |
| 参考文献等        | 授業の中で適宜紹介する   |        |               |          |     |       |
| 教科書          | 使用せず  |        |               |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 100点を満点として、レポート90点、出欠状況10点。   |        |               |          |     |       |

|              |   |        |                 |          |     |       |
|--------------|---|--------|-----------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12423   | 授業題目   | イギリス近現代史歴史文化論特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 1               | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 川本 真浩   |        | 担当教員所属          | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |   |        |                 |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | イギリス近現代史にかかるテーマを複数とりあげて、イギリス、ヨーロッパ、帝国、世界における政治・経済・文化の諸相について講義する。とくにそれぞれの領域単位を超えたグローバルな観点と現代的な問題意識に密接に関わるような歴史学研究にとりくむために必要な知識ないし理解力を養うことを目的とする。   |        |                 |          |     |       |
| 授業計画         | <p>主として17世紀後半から20世紀初頭にかけてのイギリスおよびイギリス帝国に焦点を合わせつつ、ヨーロッパ史や世界史とのかかわりも意識しながら、次のような内容で講義する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 序論</li> <li>(2) 世界史のなかの「名誉革命」体制</li> <li>(3) 第2次英仏百年戦争のはじまり</li> <li>(4) 第2次英仏百年戦争とイギリスの植民地拡大</li> <li>(5) アメリカ合衆国の独立</li> <li>(6) フランス革命とイギリス</li> <li>(7) ウィーン体制とイギリスの外交</li> <li>(8) イギリスにおける「改革」の時代</li> <li>(9) 1848年革命</li> <li>(10) 万国博覧会の始まりと世界</li> <li>(11) 大不況(1873年～)の時代</li> <li>(12) アフリカ分割</li> <li>(13) 南アフリカ戦争と帝国・ヨーロッパ</li> <li>(14) 第1次世界大戦とイギリス帝国</li> <li>(15) 総括</li> </ol> |        |                 |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 講義で扱う時期のイギリス近現代史に関する専門的な知見を習得し、それを基にグローバルな観点と現代的な問題意識に密接に関わるような研究を遂行するための理解力、思考力、論理構成力、表現力を身につける。   |        |                 |          |     |       |
| 参考文献等        | 授業時間内に理解・消化できなかった事項について、関連文献を用いるなどして自学自習に努める。   |        |                 |          |     |       |
| 教科書          | 教科書は使用しない。講義内容に関わる資料は授業中に配布する。参考図書も授業中に適宜紹介する。  |        |                 |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | (1) 受講態度(出欠を含む)、(2) 小テストまたはレポート、(3) 期末試験により、総合的に評価する。各項目の点数配分は2:3:4の比率を想定しているが、いずれの項目でもおおむね及第点に達することを要する。   |        |                 |          |     |       |

|              |  |        |                   |        |          |   |
|--------------|--|--------|-------------------|--------|----------|---|
| 授業コード        | 12451  | 授業題目   | 文化・コミュニケーション論演習 I |        | 単位数      | 2 |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 1                 | 開講時期   | 曜日・時限    |   |
| 担当教員名        | 丸井 一郎  |        |                   | 担当教員所属 | 人文社会科学専攻 |   |
| 履修における注意点    |  |        |                   |        |          |   |
| 教員研究テーマ      | 言語相互行為研究、異文化間コミュニケーション、対照社会文化誌   |        |                   |        |          |   |
| 授業計画         | <p>特論での議論を深化させ、言語相互行為理論の成立過程、背景、中心事例を確認する。この領域が社会文化とコミュニケーションの研究にどのような意義を有するか考察する。演習参加者が集めた個別事例を深く分析し、研究発表と討論を行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 導入</li> <li>2. 関連文献検討1(談話分析関連)</li> <li>3. 承前</li> <li>4. 承前</li> <li>5. 事例分析1</li> <li>6. 事例分析2</li> <li>7. 関連文献検討2(社会言語学関連)</li> <li>8. 承前</li> <li>9. 承前</li> <li>10. 事例分析3</li> <li>11. 事例分析4</li> <li>12. 関連文献検討3(社会文化理論関連)</li> <li>13. 事例分析5</li> <li>14. 事例分析6</li> <li>15. まとめ</li> </ol> |        |                   |        |          |   |
| 各科目の目標(達成水準) | 基本概念と概念装置を操作し適用する。事例を収集し分類し分析することを通じて概念設定、概念装置の適否を検討する。  |        |                   |        |          |   |
| 参考文献等        | 丸井一郎(2006)<br>『言語相互行為の理論のために』、三元社  |        |                   |        |          |   |
| 教科書          |  |        |                   |        |          |   |
| 成績評価の基準と方法   | 毎回の課題、発表、最終レポートを総合して   |        |                   |        |          |   |

|              |   |        |                  |          |       |
|--------------|---|--------|------------------|----------|-------|
| 授業コード        | 12452   | 授業題目   | 文化・コミュニケーション論演習Ⅱ | 単位数      | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 2                | 開講時期     | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 丸井 一郎   |        | 担当教員所属           | 人文社会科学専攻 |       |
| 履修における注意点    |   |        |                  |          |       |
| 教員研究テーマ      | 言語相互行為研究、異文化間コミュニケーション、対照社会文化誌  |        |                  |          |       |
| 授業計画         | <p>言語相互行為理論関連の問題の中から受講者の研究課題に即して随時テーマを設定する。個別研究動向の検討、事例分析をより深かめつつ、研究発表と討論を行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 導入</li> <li>2. 関連文献検討1</li> <li>3. 承前</li> <li>4. 承前</li> <li>5. 事例分析1</li> <li>6. 事例分析2</li> <li>7. 関連文献検討2</li> <li>8. 承前</li> <li>9. 承前</li> <li>10. 事例分析3</li> <li>11. 事例分析4</li> <li>12. 関連文献検討3</li> <li>13. 事例分析5</li> <li>14. 事例分析6</li> <li>15. まとめ</li> </ol> |        |                  |          |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 受講者の研究課題との関連で、文献・資料を収集し検討することを通じて、自己が依拠する概念、および概念装置の適否を批判的に検討する。  |        |                  |          |       |
| 参考文献等        | 丸井一郎(2006)<br>『言語相互行為の理論のために』、三元社   |        |                  |          |       |
| 教科書          |   |        |                  |          |       |
| 成績評価の基準と方法   | 毎回の課題、発表、最終レポートを総合して  |        |                  |          |       |

|              |  |        |           |          |         |
|--------------|--|--------|-----------|----------|---------|
| 授業コード        | 12453  | 授業題目   | 社会情報論演習 I | 単位数      | 2       |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 1         | 開講時期     | 2 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 遠山 茂樹  |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |         |
| 履修における注意点    |  |        |           |          |         |
| 教員研究テーマ      | 社会情報学、メディア論、Community Informatics<br>地域コミュニティの”活性化”に向けた、ICTの利活用の影響に関する社会学的研究   |        |           |          |         |
| 授業計画         | <p>社会情報論特論を踏まえ、メディア発展と社会変容の関係性について考える。そのためにメディア研究で採用されてきた研究アプローチ等について文献を中心に考察し、社会調査法にも触れながら、分析概念や理論の生成について理解を深める。また、研究発表とディスカッションを行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス</li> <li>2. 社会情報学 文献購読(1)</li> <li>3. 社会情報学 文献購読(2)</li> <li>4. ディスカッション</li> <li>5. 情報社会論 文献購読(1)</li> <li>6. 情報社会論 文献購読(2)</li> <li>7. ディスカッション</li> <li>8. 情報ネットワークと社会 文献購読(1)</li> <li>9. 情報ネットワークと社会 文献購読(2)</li> <li>10. ディスカッション</li> <li>11. コミュニティの情報化 文献購読(1)</li> <li>12. コミュニティの情報化 文献購読(2)</li> <li>13. ディスカッション</li> <li>14. 学生報告(1)</li> <li>15. 学生報告(2)</li> <li>16. 期末レポート</li> </ol> |        |           |          |         |
| 各科目の目標(達成水準) | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 社会情報の基礎概念を理解できる</li> <li>2. 基礎概念を用いて具体的な社会現象を分析できる</li> <li>3. メディアと社会に関係する主題に対して、自らの主張をプレゼンテーションや論文として適切に表現できる。</li> </ol>  |        |           |          |         |
| 参考文献等        | <p>東京大学社会情報研究所編(1999)『社会情報学&lt;1&gt;システム』東京大学出版会<br/> 東京大学社会情報研究所編(1999)『社会情報学&lt;2&gt;メディア』東京大学出版会<br/> Gurstein, Michael eds.(2000) Community Informatics: Enabling Communities With Information and Communications Technologies, Idea Group Pub .</p>   |        |           |          |         |
| 教科書          | 演習中に適宜指示する。  |        |           |          |         |
| 成績評価の基準と方法   | 演習への貢献度(50%)と期末レポート(50%)とを総合的に判断する。  |        |           |          |         |

|              |   |        |          |          |     |       |
|--------------|---|--------|----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12454   | 授業題目   | 社会情報論演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 1        | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 遠山 茂樹   |        | 担当教員所属   | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |   |        |          |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 社会情報学、メディア論、Community Informatics<br>地域コミュニティの”活性化”に向けた、ICTの利活用の影響に関する社会学的研究  |        |          |          |     |       |
| 授業計画         | <p>社会情報論演習Iを踏まえ、社会情報論に関わるテーマのもとで受講生各自がリサーチアクションを明確にし、課題を探求していく。最終的には、主張を明確にして、論拠を示しながら論じられるようにしていく。授業では、学生報告とディスカッションを中心に行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス</li> <li>2. 研究の進め方</li> <li>3. リサーチアクション(1)</li> <li>4. リサーチアクション(2)</li> <li>5. 研究発表とディスカッション(1)</li> <li>6. 研究発表とディスカッション(2)</li> <li>7. 研究発表とディスカッション(3)</li> <li>8. 研究発表とディスカッション(4)</li> <li>9. 研究発表とディスカッション(5)</li> <li>10. 研究発表とディスカッション(6)</li> <li>11. 研究発表とディスカッション(7)</li> <li>12. 研究発表とディスカッション(8)</li> <li>13. 研究発表とディスカッション(9)</li> <li>14. 研究発表とディスカッション(10)</li> <li>15. まとめ</li> </ol> |        |          |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 社会学的基礎概念を駆使して、社会情報に関わる現象を分析できる。</li> <li>2. メディアと社会に関係する主題に対して、自らの関心のもとで問いを設定し、その答えとなる主張を論拠を示しながら記述することができ、修士論文作成につなげてゆけるようになる。</li> </ol>  |        |          |          |     |       |
| 参考文献等        | <p>東京大学社会情報研究所編(1999)『社会情報学&lt;1&gt;システム』東京大学出版会<br/> 東京大学社会情報研究所編(1999)『社会情報学&lt;2&gt;メディア』東京大学出版会<br/> Gurstein, Michael eds.(2000) Community Informatics: Enabling Communities With Information and Communications Technologies, Idea Group Pub .</p>  |        |          |          |     |       |
| 教科書          | 演習中に適宜指示する。   |        |          |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 演習への貢献度(50%)と期末レポート(50%)とを総合的に判断する。   |        |          |          |     |       |

|              |   |        |                   |          |     |       |
|--------------|---|--------|-------------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12455   | 授業題目   | 異文化間コミュニケーション論演習I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 1                 | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | Darren Lingley  |        | 担当教員所属            | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |   |        |                   |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | Intercultural Communication, ELT  |        |                   |          |     |       |
| 授業計画         | <p>「異文化間コミュニケーション論特論」において習得した方法論をオリジナルな研究へと発展させていく方法を探究する。各院生は関心のある特定の領域における先行研究を批判的に検討することから始め、研究発表と討論を行っていきながら、独自の研究を立案し実行することになる。<br/>使用言語: 英語)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Course Introduction</li> <li>2. Unit A: The research field: Challenging theoretical aims</li> <li>3. Unit A: The research field: Pragmatic awareness in instructed learning</li> <li>4. Unit A: The research field: Lingua Franca Communication and CA</li> <li>5. Unit A: The research field: Politeness strategies in speech and writing</li> <li>6. Unit B: From research to teaching: Developing pragmatic competence</li> <li>7. Unit B: From research to teaching: Negotiated interaction</li> <li>8. Unit B: From research to teaching: Closing the conversation</li> <li>9. Unit B: From research to teaching: Authenticity and input</li> <li>10. Unit C: Case studies in ICC I</li> <li>11. Unit C: Case studies in ICC II</li> <li>12. Unit D: ICC in practice I</li> <li>13. Unit D: ICC in practice II</li> <li>14. Unit D: ICC in practice III</li> <li>15. Course wrap</li> </ol> |        |                   |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | Assessable outcomes: By the end of this course, students should be able to critically discuss some of the main ways in which culture is defined and conceptualized, explain what is meant by the dimensions along which it is claimed that cultures are likely to vary and explain ways in which pragmatic norms may vary across cultures.  |        |                   |          |     |       |
| 参考文献等        |   |        |                   |          |     |       |
| 教科書          | Materials and selected readings to be provided.   |        |                   |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | A strong seminar contribution in English is essential to the final grade. Reports and presentations will also be used to assess students.   |        |                   |          |     |       |

|              |   |        |                    |          |     |       |
|--------------|---|--------|--------------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12456   | 授業題目   | 異文化間コミュニケーション論演習II |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 2                  | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | Darren Lingley  |        | 担当教員所属             | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |   |        |                    |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | Intercultural Communication, ELT  |        |                    |          |     |       |
| 授業計画         | <p>Topics to be covered during this course include cultural categories and dimensions, research on intercultural communication, developing intercultural communication and activities for intercultural communication. Students will explore ways in which ICC content can be incorporated in the language curriculum. Students will conduct a directed research project in an area of ICC</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Course Introduction</li> <li>2. Developing Intercultural Communication</li> <li>3. From communicative to intercultural competence</li> <li>4. Moran's ICT framework</li> <li>5. Seelye's six instructional goals</li> <li>6. Bennett's developmental model of intercultural sensitivity</li> <li>7. Experiential and reflective learning</li> <li>8. Designing the ICT curriculum</li> <li>9. ICT cases</li> <li>10. Organizing the curriculum</li> <li>11. Evaluation and assessment in ICC</li> <li>12. Directed Research: Using texts and contexts I</li> <li>13. Directed Research: Using texts and contexts II</li> <li>14. Directed Research: Using texts and contexts III</li> <li>15. Course wrap</li> </ol> |        |                    |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | Assessable outcomes: Students will demonstrate a knowledge of the research traditions used in investigation of ICC, analyse examples of cross-cultural conflict or misunderstanding and explain the implications of findings in ICC research for teaching and learning.   |        |                    |          |     |       |
| 参考文献等        |   |        |                    |          |     |       |
| 教科書          | Materials and selected readings to be provided.   |        |                    |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | Strong seminar contribution in English, a research project (graded on both process and final product) and a presentation based on the research project undertaken.  |        |                    |          |     |       |

|              |  |        |                   |          |     |       |     |
|--------------|--|--------|-------------------|----------|-----|-------|-----|
| 授業コード        | 12459  | 授業題目   | 日本語コミュニケーション論演習 I |          | 単位数 | 2     |     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 1                 | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 | 火 1 |
| 担当教員名        | 奥村 訓代  |        | 担当教員所属            | 人文社会科学専攻 |     |       |     |
| 履修における注意点    | 別になし   |        |                   |          |     |       |     |
| 教員研究テーマ      | 言語・文化・交流そして人   |        |                   |          |     |       |     |
| 授業計画         | <p>第1回目 イントロ<br/> 第2回目～5回目 課題に対するレジメ作成<br/> 第6回目～10回目 PPIによる口頭発表<br/> 第11回目～13回目 課題研究と発表<br/> 第14・15回目 発表会とまとめ</p> |        |                   |          |     |       |     |
| 各科目の目標(達成水準) | 学会発表を目指す   |        |                   |          |     |       |     |
| 参考文献等        | はじめての英語プレゼンテーション(ジャパンタイムズ)、脱「日本語」への視点(三元社)   |        |                   |          |     |       |     |
| 教科書          | 授業時に指導する   |        |                   |          |     |       |     |
| 成績評価の基準と方法   | 毎回の課題と発表   |        |                   |          |     |       |     |

|              |  |        |            |          |     |       |
|--------------|--|--------|------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12461  | 授業題目   | 日本語構造論演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 1          | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 佐野 由紀子   |        | 担当教員所属     | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 特になし   |        |            |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 現代日本語の文法   |        |            |          |     |       |
| 授業計画         | <p>以下の項目について主要文献を読みながら考察する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション</li> <li>2. アスペクト(1)</li> <li>3. アスペクト(2)</li> <li>4. アスペクト(3)</li> <li>5. 連体修飾(1)</li> <li>6. 連体修飾(2)</li> <li>7. 条件節(1)</li> <li>8. 条件節(2)</li> <li>9. モダリティ(1)</li> <li>10. モダリティ(2)</li> <li>11.モダリティ(3)</li> <li>12. 指示語</li> <li>13. 敬語(1)</li> <li>14. 敬語(2)</li> </ol> |        |            |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 特に日本語教育において必要な知識を身につけるとともに、先行研究を批判的に読む力を養う。  |        |            |          |     |       |
| 参考文献等        | 適宜紹介する   |        |            |          |     |       |
| 教科書          | 特になし   |        |            |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 課題・発表(60%)、授業への参加度(40%)  |        |            |          |     |       |

|              |   |        |           |          |     |       |
|--------------|---|--------|-----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12462   | 授業題目   | 日本語構造論演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 2         | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 佐野 由紀子  |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 特になし  |        |           |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 現代日本語の文法  |        |           |          |     |       |
| 授業計画         | <ul style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション</li> <li>2. 用例検索の仕方について</li> <li>3. コーパスを用いた研究の紹介(1)</li> <li>4. コーパスを用いた研究の紹介(2)</li> <li>5. コーパスを用いた研究の紹介(3)</li> <li>6～14. 分析、研究発表</li> <li>15. まとめ</li> </ul> |        |           |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 先行研究を批判的に読み、自ら分析する力を身に付ける。  |        |           |          |     |       |
| 参考文献等        | 適宜紹介する  |        |           |          |     |       |
| 教科書          | 特になし  |        |           |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 課題・発表(60%)、授業への参加度(40%)   |        |           |          |     |       |

|              |  |        |            |          |     |       |
|--------------|--|--------|------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12463  | 授業題目   | 外国語習得論演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 1          | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 今井 典子  |        | 担当教員所属     | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | ディスカッションにおいて、自分の意見を持って参加できるよう、事前に準備しておくこと。予習と復習を十分行うこと。  |        |            |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 第二言語習得、タスク(特に、focused taskータスク活動とdictogloss)、英語教育  |        |            |          |     |       |
| 授業計画         | <p>第二言語習得 (SLA) をめぐる論文を取り上げ検討する。<br/> 特論の講義をさらに発展させ、様々な論文を講読しディスカッションを行い考えを深化させる。<br/> また、受講生の研究テーマと関連する論考を精読し、内容を検討する。</p> <p>第1回目: イントロダクション<br/> 第2回目: 論文の講読とディスカッション(1)<br/> 第3回目: 論文の講読とディスカッション(2)<br/> 第4回目: 論文の講読とディスカッション(3)<br/> 第5回目: 課題発表とディスカッション(1)<br/> 第6回目: 論文の講読とディスカッション(4)<br/> 第7回目: 論文の講読とディスカッション(5)<br/> 第8回目: 論文の講読とディスカッション(6)<br/> 第9回目: 課題発表とディスカッション(2)<br/> 第10回目: 論文の講読とディスカッション(7)<br/> 第11回目: 論文の講読とディスカッション(8)<br/> 第12回目: 課題発表とディスカッション(3)<br/> 第13回目: 論文の講読とディスカッション(9)<br/> 第14回目: 論文の講読とディスカッション(10)<br/> 第15回目: まとめ</p> |        |            |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 言語習得に関する理論と実際を考察することによって、言語習得、とくに第二言語の習得について理解を深め、修士論文の研究をより深化させる。   |        |            |          |     |       |
| 参考文献等        | 適宜紹介します。   |        |            |          |     |       |
| 教科書          | 授業最初のイントロダクションで、受講生の研究分野に参考となる論文をいくつか紹介し、その中より選択します。   |        |            |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席状況と受講態度(討議への参加状況)、課題発表の発表内容、および、課題レポートにより、総合的に判断します。   |        |            |          |     |       |

|              |  |        |           |          |     |       |
|--------------|--|--------|-----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12464  | 授業題目   | 外国語習得論演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 2         | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 今井 典子  |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | ディスカッションにおいて、自分の意見を持って参加できるよう、事前に準備しておくこと。予習と復習を十分行うこと。  |        |           |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 第二言語習得、タスク(特に、focused taskータスク活動とdictogloss)、英語教育  |        |           |          |     |       |
| 授業計画         | <p>第二言語習得(SLA)をめぐる論文を取り上げ検討する。<br/> 様々な論文を講読しディスカッションを行い考えを深化させる。また、受講生の研究テーマと関連する論考を精読し、内容を検討する。<br/> 修士論文のテーマに沿った研究発表を行い、その内容を指導する。</p> <p>第1回目: イントロダクション<br/> 第2回目: 論文の講読とディスカッション(1)<br/> 第3回目: 論文の講読とディスカッション(2)<br/> 第4回目: 論文の講読とディスカッション(3)<br/> 第5回目: 研究発表とディスカッション(1)<br/> 第6回目: 論文の講読とディスカッション(4)<br/> 第7回目: 論文の講読とディスカッション(5)<br/> 第8回目: 論文の講読とディスカッション(6)<br/> 第9回目: 研究発表とディスカッション(2)<br/> 第10回目: 論文の講読とディスカッション(7)<br/> 第11回目: 論文の講読とディスカッション(8)<br/> 第12回目: 研究発表とディスカッション(3)<br/> 第13回目: 論文の講読とディスカッション(9)<br/> 第14回目: 論文の講読とディスカッション(10)<br/> 第15回目: まとめ</p> |        |           |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 言語習得に関する理論と実際を考察することによって、言語習得、とくに第二言語の習得について理解を深め、修士論文の研究をより深化させ、完成をめざす。   |        |           |          |     |       |
| 参考文献等        | 適宜紹介します。   |        |           |          |     |       |
| 教科書          | 授業最初のイントロダクションで、受講生の研究分野に参考となる論文をいくつか紹介し、その中より選択します。   |        |           |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席状況と受講態度(討議への参加状況)、研究発表の発表内容、および、課題レポートにより、総合的に判断します。   |        |           |          |     |       |

|              |   |        |          |          |       |
|--------------|---|--------|----------|----------|-------|
| 授業コード        | 12467   | 授業題目   | 対照言語論演習I | 単位数      | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 1        | 開講時期     | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 岡本 克人   |        | 担当教員所属   | 人文社会科学専攻 |       |
| 履修における注意点    |   |        |          |          |       |
| 教員研究テーマ      | 対照言語学   |        |          |          |       |
| 授業計画         | <p>対照言語学の具体的研究を、フランス語を中心に、日本語、英語を視野に入れておこなう。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 対照言語学とは何か</li> <li>2. 対照言語学とは何か</li> <li>3. 名詞中心のフランス語</li> <li>4. 動詞中心の日本語・英語</li> <li>5. 学生の発表</li> <li>6. 学生の発表</li> <li>7. オノマトペ</li> <li>8. オノマトペ</li> <li>9. オノマトペ</li> <li>10. 学生の発表</li> <li>11. 学生の発表</li> <li>12. 「なる」と「する」</li> <li>13. 「なる」と「する」</li> <li>14. 学生の発表</li> <li>15. まとめのディスカッション</li> </ol> |        |          |          |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 対照言語学的な具体的問題を研究発表できるようになること。  |        |          |          |       |
| 参考文献等        | 折に触れて指示する。  |        |          |          |       |
| 教科書          | とくになし。  |        |          |          |       |
| 成績評価の基準と方法   | 発表とレポート。  |        |          |          |       |

|              |   |        |           |          |       |   |
|--------------|---|--------|-----------|----------|-------|---|
| 授業コード        | 12468   | 授業題目   | 対照言語論演習II |          | 単位数   | 2 |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 2         | 開講時期     | 曜日・時限 |   |
| 担当教員名        | 岡本 克人   |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |       |   |
| 履修における注意点    |   |        |           |          |       |   |
| 教員研究テーマ      | 対照言語学   |        |           |          |       |   |
| 授業計画         | <p>対照言語学の具体的研究を、フランス語を中心に、日本語、英語を視野に入れておこなう。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 対照言語学とは何か(再考)</li> <li>2. 対照言語学とは何か(再考)</li> <li>3. 学生の発表</li> <li>4. 学生の発表</li> <li>5. 仏英語の俳句</li> <li>6. 日本語の俳句</li> <li>7. 俳句的表現とは何か</li> <li>8. 「もの」と「こと」</li> <li>9. 「もの」と「こと」</li> <li>10. 学生の発表</li> <li>11. 学生の発表</li> <li>12. ことばの遊び(掛詞等)</li> <li>13. ことばの遊び</li> <li>14. 学生の発表</li> <li>15. まとめのディスカッション</li> </ol> |        |           |          |       |   |
| 各科目の目標(達成水準) | 対照言語学的な具体的問題を考察し、論文が書けるようにする。   |        |           |          |       |   |
| 参考文献等        | 随時、指示する。  |        |           |          |       |   |
| 教科書          | 特になし。   |        |           |          |       |   |
| 成績評価の基準と方法   | 発表とレポート類。   |        |           |          |       |   |

|              |   |        |           |          |         |
|--------------|---|--------|-----------|----------|---------|
| 授業コード        | 12471   | 授業題目   | 英語音声学演習 I | 単位数      | 2       |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 1         | 開講時期     | 2 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 藤崎 好子   |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |         |
| 履修における注意点    | 音声学概論既習者対象  |        |           |          |         |
| 教員研究テーマ      | 英語の音体系・音韻現象・音声変化に関する研究  |        |           |          |         |
| 授業計画         | <p>1950年代から現在までの各種音韻理論の先行研究を通して、音韻論と音声学の関係について考察する。</p> <p>第1回:オリエンテーション、既習事項&amp;授業計画の確認<br/> 第2回:先行研究論文購読(1)<br/> 第3回:先行研究論文購読(1)<br/> 第4回:先行研究論文購読(1)<br/> 第5回:先行研究論文購読(1)<br/> 第6回:先行研究論文購読(2)<br/> 第7回:先行研究論文購読(2)<br/> 第8回:先行研究論文購読(2)<br/> 第9回:先行研究論文購読(2)<br/> 第10回:先行研究論文購読(3)<br/> 第11回:先行研究論文購読(3)<br/> 第12回:先行研究論文購読(3)<br/> 第13回:先行研究論文購読(3)<br/> 第14回:総括[1]<br/> 第15回:総括(2)</p> |        |           |          |         |
| 各科目の目標(達成水準) | 音声学から英語音韻論への橋渡しと、英語音声・音韻現象の理論的且つ分析的研究をする。   |        |           |          |         |
| 参考文献等        | 初回授業で文献リストを配布する。  |        |           |          |         |
| 教科書          | 初回授業で提示する。  |        |           |          |         |
| 成績評価の基準と方法   | 発表(30%)・課題レポート(30%)・学期末試験(40%)により評価を行う。   |        |           |          |         |

|              |   |        |          |          |         |
|--------------|---|--------|----------|----------|---------|
| 授業コード        | 12472   | 授業題目   | 英語音声学演習Ⅱ | 単位数      | 2       |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 2        | 開講時期     | 1 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 藤崎 好子   |        | 担当教員所属   | 人文社会科学専攻 |         |
| 履修における注意点    | 音声学概論既習者対象  |        |          |          |         |
| 教員研究テーマ      | 英語の音体系・音韻現象・音声変化に関する研究  |        |          |          |         |
| 授業計画         | <p>「英語音声学Ⅰ」を踏まえ、Generative Phonology, Natural Phonology, Lexical Phonology, Autosegmental Phonology,等の各音韻理論について考察する。</p> <p>第1回:オリエンテーション、既習事項&amp;授業計画の確認<br/> 第2回:Generative Phonology理論(1)<br/> 第3回:Generative Phonology理論(2)<br/> 第4回:Generative Phonology理論(3)<br/> 第5回:Natural Phonology理論(1)<br/> 第6回:Natural Phonology理論(2)<br/> 第7回:Natural Phonology理論(3)<br/> 第8回:Lexical Phonology理論(1)<br/> 第9回:Lexical Phonology理論(2)<br/> 第10回:Lexical Phonology理論(3)<br/> 第11回:Autosegmental Phonology理論(1)<br/> 第12回:Autosegmental Phonology理論(2)<br/> 第13回:Autosegmental Phonology理論(3)<br/> 第14回:総括(1)<br/> 第15回:総括(2)</p> |        |          |          |         |
| 各科目の目標(達成水準) | 音声学から英語音韻論への橋渡しと、英語音声・音韻現象の理論的且つ分析的研究をする。   |        |          |          |         |
| 参考文献等        | 初回授業で文献リストを配布する。  |        |          |          |         |
| 教科書          | 初回授業で提示する。  |        |          |          |         |
| 成績評価の基準と方法   | 発表(30%)・課題レポート(30%)・学期末試験(40%)により評価を行う。   |        |          |          |         |

|              |   |        |            |          |     |       |
|--------------|---|--------|------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12475   | 授業題目   | 言語文化研究演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 1          | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 古閑 恭子   |        | 担当教員所属     | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 自分の発表だけでなく他の受講生の発表についても、適切なコメントができるように事前に下調べをしてくること。  |        |            |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 言語構造、特に音声・音韻に関する研究、社会における言語の役割に関する研究  |        |            |          |     |       |
| 授業計画         | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション</li> <li>2. 研究発表とディスカッション(1)</li> <li>3. 研究発表とディスカッション(2)</li> <li>4. 研究発表とディスカッション(3)</li> <li>5. 研究発表とディスカッション(4)</li> <li>6. 研究発表とディスカッション(5)</li> <li>7. 研究発表とディスカッション(6)</li> <li>8. 研究発表とディスカッション(7)</li> <li>9. 研究発表とディスカッション(8)</li> <li>10. 研究発表とディスカッション(9)</li> <li>11. 研究発表とディスカッション(10)</li> <li>12. 研究発表とディスカッション(11)</li> <li>13. 研究発表とディスカッション(12)</li> <li>14. 研究発表とディスカッション(13)</li> <li>15. 研究発表とディスカッション(14)</li> </ol> |        |            |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 言語文化研究特論の内容を踏まえ、各受講生の関心に基づく研究発表を輪番で行う。その過程で、言語文化研究に関する問題や方法論の理解を深める。  |        |            |          |     |       |
| 参考文献等        | 受講生と相談の上決定する。   |        |            |          |     |       |
| 教科書          | 受講生と相談の上決定する。   |        |            |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席、授業態度、発表内容を総合的に評価する。  |        |            |          |     |       |

|              |   |        |           |          |     |       |
|--------------|---|--------|-----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12476   | 授業題目   | 言語文化研究演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 2         | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 古閑 恭子   |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 自分の発表だけでなく他の受講生の発表についても、適切なコメントができるように事前に下調べをしてくること。  |        |           |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 言語構造、特に音声・音韻に関する研究、社会における言語の役割に関する研究  |        |           |          |     |       |
| 授業計画         | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション</li> <li>2. 研究発表とディスカッション(1)</li> <li>3. 研究発表とディスカッション(2)</li> <li>4. 研究発表とディスカッション(3)</li> <li>5. 研究発表とディスカッション(4)</li> <li>6. 研究発表とディスカッション(5)</li> <li>7. 研究発表とディスカッション(6)</li> <li>8. 研究発表とディスカッション(7)</li> <li>9. 研究発表とディスカッション(8)</li> <li>10. 研究発表とディスカッション(9)</li> <li>11. 研究発表とディスカッション(10)</li> <li>12. 研究発表とディスカッション(11)</li> <li>13. 研究発表とディスカッション(12)</li> <li>14. 研究発表とディスカッション(13)</li> <li>15. 研究発表とディスカッション(14)</li> </ol> |        |           |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 言語文化研究特論の内容を踏まえ、各受講生の関心に基づく研究発表を輪番で行う。その過程で、言語文化研究に関する問題や方法論の理解を深める。  |        |           |          |     |       |
| 参考文献等        | 受講生と相談の上決定する。   |        |           |          |     |       |
| 教科書          | 受講生と相談の上決定する。   |        |           |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席、授業態度、発表内容を総合的に評価する。  |        |           |          |     |       |

|              |  |        |               |          |     |       |
|--------------|--|--------|---------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12477  | 授業題目   | アメリカ言語文化論演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 1             | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 上岡 克己  |        | 担当教員所属        | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |  |        |               |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | アメリカの自然と文学   |        |               |          |     |       |
| 授業計画         | <p>アメリカの自然と文学の関係を考察する。特に重要だと思われる作家・作品に焦点をあてて、探究する。今学期はアメリカのネイチャーライティングの代表作であるヘンリー・デイヴィッド・ソロー『ウォールデン—森の生活』を取り上げ、以下の観点から考察する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 現代文明を問い直す(a)「経済」</li> <li>(2) 現代文明を問い直す(b)「経済」</li> <li>(3) 現代文明を問い直す(c)「経済」</li> <li>(4) 生の証を刻む「住んだ場所とすんだ目的」</li> <li>(5) 古典の重要性「読書」</li> <li>(6) 新しい自然観「音」、「孤独」</li> <li>(7) 簡素な生活「マメ畑」</li> <li>(8) 高き想い「湖」</li> <li>(9) 「より高い法則」</li> <li>(10)「動物の隣人たち」</li> <li>(11)冬の4章</li> <li>(12)再生としての「春」</li> <li>(13)自己覚醒の書「むすび」</li> <li>(14)ネイチャーライティングとしての『ウォールデン』</li> <li>(15)『ウォールデン』の可能性</li> </ol> |        |               |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | アメリカの環境思想の概略が理解できることを目標とする。  |        |               |          |     |       |
| 参考文献等        | 『アメリカの環境保護運動』 『自然の権利』  |        |               |          |     |       |
| 教科書          | Henry Davit Thoreau, Walden. ソロー『森の生活』(岩波文庫)   |        |               |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席、平常成績、レポートの総合評価  |        |               |          |     |       |

|              |  |        |              |          |     |       |
|--------------|--|--------|--------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12478  | 授業題目   | アメリカ言語文化論演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 2            | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 上岡 克己  |        | 担当教員所属       | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |  |        |              |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | アメリカの自然と文学   |        |              |          |     |       |
| 授業計画         | <p>アメリカの自然と文学の関係を考察する。特に重要だと思われる作家・作品に焦点をあてて、探究する。今学期はアメリカのネイチャーライティングの代表作であるアルド・レオポルド『野生のうたが聞こえる』を取り上げ、以下の観点から考察する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) ネイチャーライティングと自然史(a)「砂土地方の四季」</li> <li>(2) ネイチャーライティングと自然史(b)「砂土地方の四季」</li> <li>(3) ネイチャーライティングと自然史(c)「砂土地方の四季」</li> <li>(4) 環境倫理学の書「リョコウバトの記念碑について」</li> <li>(5) 環境倫理学の書「山の身になって考える」</li> <li>(6) 自然保護を考える「自然保護の美学」</li> <li>(7) 自然保護を考える「アメリカ文化における野生生物」</li> <li>(8) 原生自然「残された宝」</li> <li>(9) 「レクリエーションのための原生自然」</li> <li>(10) 「科学のための原生自然」</li> <li>(11) 「野生生物のための原生自然」</li> <li>(12) 土地倫理「倫理拡張の筋道」</li> <li>(13) 共同体の概念」</li> <li>(14) 「生態学的な良心」</li> <li>(15) ネイチャーライティングとしての『野生のうたが聞こえる』</li> </ol> |        |              |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | アメリカの環境思想の概略が理解できることを目標とする。  |        |              |          |     |       |
| 参考文献等        | 『アメリカの環境保護運動』『自然の権利』   |        |              |          |     |       |
| 教科書          | Aldo Leopold, A Sand County Almanac. レオポルド『野生のうたが聞こえる』(講談社学術文庫)  |        |              |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席、平常成績、レポートの総合評価  |        |              |          |     |       |

|              |  |        |               |          |     |       |
|--------------|--|--------|---------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12479  | 授業題目   | イギリス言語文化論演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 1             | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 吉門 牧雄  |        | 担当教員所属        | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |  |        |               |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | イギリス言語文化の特異性とその代表的作品についての研究  |        |               |          |     |       |
| 授業計画         | <p>この授業では、イギリス文化を深く理解する上で欠かすことのできない言語作品を政治、宗教、思想、文学などの広い分野にわたり読解することを通して、イギリス社会の特徴を探求する。</p> <p>第1回 イントロダクション<br/> 第2回 ヴィクトリア朝の歴史的背景の考察(一回目)<br/> 第3回 ヴィクトリア朝の歴史的背景の考察(二回目)<br/> 第4回 ヴィクトリア朝の文学的背景の考察(一回目)<br/> 第5回 ヴィクトリア朝の文学的背景の考察(二回目)<br/> 第6回 アルフレッド・テニスの英詩研究(一回目)<br/> 第7回 アルフレッド・テニスの英詩研究(二回目)<br/> 第8回 ロバート・ブラウニング英詩研究(一回目)<br/> 第9回 ロバート・ブラウニング英詩研究(二回目)<br/> 第10回 マシュー・アーノルドの散文研究(一回目)<br/> 第11回 マシュー・アーノルドの散文研究(二回目)<br/> 第12回 ウォルター・ペイターの散文研究(一回目)<br/> 第13回 ウォルター・ペイターの散文研究(二回目)<br/> 第14回 授業の総括<br/> 第15回 期末試験</p> |        |               |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | イギリス言語文化の特異性を幅広く理解する。  |        |               |          |     |       |
| 参考文献等        | A. ブリッグス 『ヴィクトリア朝の人々』 (ミネルヴァ書房)  |        |               |          |     |       |
| 教科書          | Walter Houghton ed., Victorian Poetry and Poetics (Houghton Mifflin Company)   |        |               |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席、授業中の発表や討論、レポート、筆記試験などの結果を総合的に判断して評価する。  |        |               |          |     |       |

|              |   |        |              |          |     |       |
|--------------|---|--------|--------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12480   | 授業題目   | イギリス言語文化論演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 2            | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 吉門 牧雄   |        | 担当教員所属       | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |   |        |              |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | イギリス言語文化の特異性とその代表的作品についての研究   |        |              |          |     |       |
| 授業計画         | <p>この授業では、「イギリス言語文化演習Ⅰ」を踏まえて、イギリス文化をさらに深く理解するために、歴史的視点を導入しつつ、イギリス社会の諸問題を考察し、研究発表と討論を行う。</p> <p>第1回 イントロダクション<br/> 第2回 ヴィクトリア朝の教育思想考察(一回目)<br/> 第3回 ヴィクトリア朝の教育思想考察(二回目)<br/> 第4回 ヴィクトリア朝の教育思想考察(三回目)<br/> 第5回 ヴィクトリア朝の政治思想考察(一回目)<br/> 第6回 ヴィクトリア朝の政治思想考察(二回目)<br/> 第7回 ヴィクトリア朝の政治思想考察(三回目)<br/> 第8回 ヴィクトリア朝の文学思潮考察(一回目)<br/> 第9回 ヴィクトリア朝の文学思潮考察(二回目)<br/> 第10回 ヴィクトリア朝の文学思潮考察(三回目)<br/> 第11回 ヴィクトリア朝の日常生活考察(一回目)<br/> 第12回 ヴィクトリア朝の日常生活考察(二回目)<br/> 第13回 ヴィクトリア朝の日常生活考察(三回目)<br/> 第14回 授業の総括<br/> 第15回 期末試験</p> |        |              |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | イギリス文化の諸問題をさらに深く理解する。   |        |              |          |     |       |
| 参考文献等        | 川北稔編『イギリス史』(山川出版社)  |        |              |          |     |       |
| 教科書          | Herbert Tucker ed., A Companion to Victorian Literature & Culture (Blackwell Publishers)  |        |              |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席、授業中の発表や討論、レポート、筆記試験などの結果を総合的に判断して評価する。   |        |              |          |     |       |

|              |   |        |           |          |     |       |
|--------------|---|--------|-----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12483   | 授業題目   | ドイツ文化論演習Ⅰ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 1         | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 斎藤 昌人   |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |   |        |           |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | ドイツ文化、ドイツ文学   |        |           |          |     |       |
| 授業計画         | <p>19世紀末から20世紀初頭にかけての、ハプスブルク帝国の首都ウィーンにおける様々な「文化」をとりあげ、参加者が調査・報告をおこない、理解を深めていく。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) イントロダクション</li> <li>2) 社会的背景</li> <li>3) 政治的背景</li> <li>4) 反ユダヤ主義</li> <li>5) 論点の整理Ⅰ</li> <li>6) 文学</li> <li>7) 「ウィーン分離派」</li> <li>8) 絵画</li> <li>9) 音楽</li> <li>10) 論点の整理Ⅱ</li> <li>11) 「ウィーン工房」</li> <li>12) 都市建設</li> <li>13) 建築</li> <li>14) まとめ</li> <li>15) (レポートに代える)</li> </ol> |        |           |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 19世紀末から20世紀初頭にかけての世紀転換期におけるウィーンの「文化」状況を、相互の関連性の中でとらえ、それを社会的文脈の中に位置づけること。  |        |           |          |     |       |
| 参考文献等        | その都度指示  |        |           |          |     |       |
| 教科書          | 特になし  |        |           |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 報告とレポート   |        |           |          |     |       |

|              |  |        |            |          |     |       |
|--------------|--|--------|------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12484  | 授業題目   | ドイツ文化論演習II |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 2          | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 斎藤 昌人  |        | 担当教員所属     | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |  |        |            |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | ドイツ文化、ドイツ文学  |        |            |          |     |       |
| 授業計画         | <p>19世紀におけるドイツにおける「民族概念」を、学生の報告をまじえ、様々な観点から検証していく。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) イントロダクション</li> <li>2) 歴史</li> <li>3) 近代化</li> <li>4) 都市</li> <li>5) 都市建設</li> <li>6) 反ユダヤ主義</li> <li>7) 郷土文学</li> <li>8) コロニー/菜食主義</li> <li>9) 体操/裸体文化</li> <li>10) 「健康」</li> <li>11) 家族・ジェンダー</li> <li>12) ワンダーフォーゲル運動</li> <li>13) 優生思想</li> <li>14) まとめ</li> <li>15) (レポートに代える)</li> </ol> |        |            |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 19世紀におけるドイツ民族概念の形成を、ひとつの全体像として捉え、その後のナチズムとの関連の中に位置づけること。   |        |            |          |     |       |
| 参考文献等        | その都度指示   |        |            |          |     |       |
| 教科書          | 特になし   |        |            |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 報告とレポート  |        |            |          |     |       |

|              |  |        |             |          |     |       |
|--------------|--|--------|-------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12485  | 授業題目   | 中国言語文化論演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 1           | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 周 雲喬   |        | 担当教員所属      | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |  |        |             |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 中国語新語彙研究   |        |             |          |     |       |
| 授業計画         | <p>近年中国の中に新しい言葉を作り上げたことが注目を浴びている。これは文学、政治、科学など多くの領域に及んでいるのが現状である。このような、新たな語彙を学習することは、現代中国語を理解するのに欠かせないことと考えている。この演習は、新たな言葉に関する中国語の資料を読んで、各自が発表することによって授業を進めていく。</p> <p>第一回 中国語新語の現状に関する資料調査<br/> 第二回 中国語新語の現状に関する資料調査<br/> 第三回 中国語新語の現状に関する資料調査<br/> 第四回 中国語新語の現状に関する資料調査<br/> 第五回 中国語新語の現状に関する資料調査<br/> 第六回 中国語新語に関する資料の読解<br/> 第七回 中国語新語に関する資料の読解<br/> 第八回 中国語新語に関する資料の読解<br/> 第九回 中国語新語に関する資料の読解<br/> 第十回 中国語新語に関する分類について<br/> 第十一回 中国語新語に関する分類について<br/> 第十二回 中国語新語に関する分類について<br/> 第十三回 中国語新語に関する分類について<br/> 第十四回 中国語新語に関する分類について<br/> 第十五回 まとめ</p> |        |             |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 中国語への理解を深めること。   |        |             |          |     |       |
| 参考文献等        |  |        |             |          |     |       |
| 教科書          | 最初の授業に指示する。  |        |             |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | レポートによる。   |        |             |          |     |       |

|              |   |        |            |          |     |       |
|--------------|---|--------|------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12486   | 授業題目   | 中国言語文化論演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 2          | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 周 雲喬  |        | 担当教員所属     | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |   |        |            |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 中国語新語彙研究  |        |            |          |     |       |
| 授業計画         | <p>前期の授業の実績を踏まえ、引き続き新たな言葉に関する文章を翻訳し、各自が発表することで、授業を進めていく。</p> <p>第一回 中国語の中に現存する日本語の調査<br/> 第二回 中国語の中に現存する日本語の調査<br/> 第三回 中国語の中に現存する日本語の調査<br/> 第四回 中国語の中に現存する日本語の調査<br/> 第五回 中国語の中に現存する日本語の調査<br/> 第六回 中国語新語に関する研究資料の翻訳<br/> 第七回 中国語新語に関する研究資料の翻訳<br/> 第八回 中国語新語に関する研究資料の翻訳<br/> 第九回 中国語新語に関する研究資料の翻訳<br/> 第十回 中国語新語に関する研究資料の翻訳<br/> 第十一回 調査と研究成果の発表<br/> 第十二回 調査と研究成果の発表<br/> 第十三回 調査と研究成果の発表<br/> 第十四回 調査と研究成果の発表<br/> 第十五回 調査と研究成果の発表</p> |        |            |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 中国語への理解を深めること。  |        |            |          |     |       |
| 参考文献等        |   |        |            |          |     |       |
| 教科書          | 最初の授業に指示する。   |        |            |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | レポートによる。  |        |            |          |     |       |

|              |   |        |               |          |     |       |
|--------------|---|--------|---------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12487   | 授業題目   | 中国近・現代文化論演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 1             | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 高橋 俊  |        | 担当教員所属        | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | とくになし   |        |               |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 中国近・現代文化  |        |               |          |     |       |
| 授業計画         | <p>中国の現代文学作家の作品を鑑賞する。具体的には、張愛玲「伝奇」を読む。張愛玲は、現代中国を代表する女性作家。半植民地下におかれた上海・香港で、独自の境地から、多くの作品を執筆した。彼女の作品を読むことで、中国現代文学についての理解を深め、ならびに中国語読解のレベルをあげる。具体的には、以下の通り。</p> <p>第1回 ガイダンス、役割分担<br/> 第2回 「金鎖記」(1)<br/> 第3回 「金鎖記」(2)<br/> 第4回 「金鎖記」(3)<br/> 第5回 「花調」(1)<br/> 第6回 「花調」(2)<br/> 第7回 「花調」(3)<br/> 第8回 「留情」(1)<br/> 第9回 「留情」(2)<br/> 第10回 「留情」(3)<br/> 第11回 「桂花蒸」(1)<br/> 第12回 「桂花蒸」(2)<br/> 第13回 「紅薔薇白薔薇」(1)<br/> 第14回 「紅薔薇白薔薇」(2)<br/> 第15回 まとめ</p> |        |               |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 現代中国文学についての理解を深め、作品の読解力を上げ、ならびに中国語のレベルアップを狙う。   |        |               |          |     |       |
| 参考文献等        | 邵迎建『伝奇文学と流言人生』(お茶の水書房、2002)   |        |               |          |     |       |
| 教科書          | こちらで準備する。   |        |               |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | ふだんの授業態度・読解度:50%、学期末のレポート:50%   |        |               |          |     |       |

|              |   |        |              |          |     |       |
|--------------|---|--------|--------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12488   | 授業題目   | 中国近・現代文化論演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 2            | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 高橋 俊  |        | 担当教員所属       | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | とくになし   |        |              |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 中国近・現代文化  |        |              |          |     |       |
| 授業計画         | <p>中国現代文学に関する中国語の評論を読む。具体的には、『中国現代文学研究叢刊』のなかから論文をピックアップし、内容をまとめた上で、批判的に検討する。受講者は、この論文では何が主張され、それに何が問題なのかについて、検討し、主張する能力が求められる。</p> <p>第1回 ガイダンス、役割分担<br/> 第2回 汪暉「中国的現代性問題」<br/> 第3回 陳平原「中国私学伝統」<br/> 第4回 孟悦「上海近代印刷文化」<br/> 第5回 李欧梵「“批評空間”的開設」<br/> 第6回 王德威「被抑圧的現代性」<br/> 第7回 劉禾「国民性理論質疑」<br/> 第8回 王曉明「一部雑誌与一個“社団”」<br/> 第9回 陳思和「民間的浮沈」<br/> 第10回 錢理群「“流亡者文学”的心理」<br/> 第11回 張旭東「論中国当代批評話語」<br/> 第12回 黃子平「病的隱喻与文学生産」<br/> 第13回 孟悦「中国文学“現代性”」<br/> 第14回 劉禾「民俗学与現代通俗文芸」<br/> 第15回 まとめ</p> |        |              |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 現代中国文学の最新の論文を読むことで、当該分野の研究に対する視野を持つ。  |        |              |          |     |       |
| 参考文献等        | 吉田富夫『中国現代文学史』(朋友書店、1996)  |        |              |          |     |       |
| 教科書          | こちらで準備する。   |        |              |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | ふだんの授業態度・読解度:50%、学期末のレポート:50%   |        |              |          |     |       |

|              |   |        |               |          |     |       |
|--------------|---|--------|---------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12489   | 授業題目   | 東アジア言語文化論演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 1             | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 中森 健二   |        | 担当教員所属        | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 特になし  |        |               |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 日本における中国文学の受容をめぐって(1)   |        |               |          |     |       |
| 授業計画         | <p>日本において、中国文学、主に古典文学がどのように受容されてきたのかを考える。日本人の手になる漢詩・漢文はもとより、この範囲にとどまることなく、ひろく日本文学全体の問題として、中国文学との関連をみてゆく。</p> <p>第1回 「文字を必要としなかった社会」について<br/> 第2回 漢字の流入、東アジア漢字文化圏の成立<br/> 第3回 『古事記』『日本書紀』『万葉集』の成立<br/> 第4回 『万葉集』の漢字表記をめぐって<br/> 第5回 『懷風藻』について<br/> 第6回 討論<br/> 第7回 遣唐使をめぐって(1)<br/> 第8回 遣唐使をめぐって(2)—空海『文鏡秘府論』について<br/> 第9回 平安時代における『文選』『白氏文集』の受容(1)<br/> 第10回 平安時代における『文選』『白氏文集』の受容(2)<br/> 第11回 『本朝文粹』について<br/> 第12回 鎌倉時代の漢文学<br/> 第13回 南北朝時代の漢文学<br/> 第14回 室町時代の漢文学<br/> 第15回 全体のまとめ</p> |        |               |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 日本における中国文学受容の実態を理解すること。   |        |               |          |     |       |
| 参考文献等        | 授業の進度に応じて指示する。  |        |               |          |     |       |
| 教科書          | プリントして配布。   |        |               |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 小論文による。   |        |               |          |     |       |

|              |  |        |              |          |     |       |
|--------------|--|--------|--------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12490  | 授業題目   | 東アジア言語文化論演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 2            | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 中森 健二  |        | 担当教員所属       | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 特になし   |        |              |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 日本における中国文学の受容をめぐって(2)  |        |              |          |     |       |
| 授業計画         | <p>東アジア言語文化論演習Ⅰの作業を続けながら、さらに日・中における研究成果を幅広く精読吸収しつつ、日・中の文学作品理解の相違点などを明らかにすることで、両国における文学のあり方・意義などについて考えたい。</p> <p>第1回 江戸時代の漢文学(1)<br/> 第2回 江戸時代の漢文学(2)<br/> 第3回 江戸時代の漢文学(3)<br/> 第4回 江戸時代の漢文学(4)<br/> 第5回 討論<br/> 第6回 明治時代の漢文学(1)<br/> 第7回 明治時代の漢文学(2)<br/> 第8回 明治時代の漢文学(3)<br/> 第9回 明治時代の漢文学(4)<br/> 第10回 討論<br/> 第11回 大正時代以降の漢文学・中国文学(1)<br/> 第12回 大正時代以降の漢文学・中国文学(2)<br/> 第13回 東アジア漢字文化圏の盛衰(1)<br/> 第14回 東アジア漢字文化圏の盛衰(2)<br/> 第15回 全体のまとめ</p> |        |              |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 日本における中国文学受容の実態を理解するとともに、日・中の文学に関する比較文学的な視野を身につけること。   |        |              |          |     |       |
| 参考文献等        | 授業の進度に応じて提示する。   |        |              |          |     |       |
| 教科書          | プリントして配布。  |        |              |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 小論文による。  |        |              |          |     |       |

|              |   |        |                |          |     |       |
|--------------|---|--------|----------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12491   | 授業題目   | 東アジア古代歴史文化論演習I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 1              | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 大橋 敦弘   |        | 担当教員所属         | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | とくになし   |        |                |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 中国古代史、統一国家と地域、出土文字資料  |        |                |          |     |       |
| 授業計画         | <p>馬王堆出土『戦国縦横家書』を『戦国策』や『史記』などの文献資料と比較・対照しながら読解してゆくことで、中国・戦国時代中期における外交関係の具体相を復原すると同時に、この時代の歴史資料のあり方について考える。研究発表とディスカッションを行う。</p> <p>第1回 イン트로ダクション<br/> 第2回 戦国時代史概説<br/> 第3回 戦国時代の資料<br/> 第4回 『戦国縦横家書』1～3章<br/> 第5回 『戦国縦横家書』4章<br/> 第6回 『戦国縦横家書』5章<br/> 第7回 『戦国縦横家書』6, 7章<br/> 第8回 『戦国縦横家書』8, 9章<br/> 第9回 『戦国縦横家書』10章<br/> 第10回 『戦国縦横家書』11, 12章<br/> 第11回 『戦国縦横家書』13章<br/> 第12回 『戦国縦横家書』14章<br/> 第13回 研究発表とディスカッション・1<br/> 第14回 研究発表とディスカッション・2<br/> 第15回 まとめ</p> |        |                |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 中国古代史における文献資料、出土文字資料の基本的な史料操作を修得する。   |        |                |          |     |       |
| 参考文献等        | とくになし   |        |                |          |     |       |
| 教科書          | とくになし   |        |                |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席とレポート   |        |                |          |     |       |

|              |  |        |                 |          |     |       |
|--------------|--|--------|-----------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12492  | 授業題目   | 東アジア古代歴史文化論演習II |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 2               | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 大橋 敦弘  |        | 担当教員所属          | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | とくになし  |        |                 |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 中国古代史、統一国家と地域、出土文字資料   |        |                 |          |     |       |
| 授業計画         | <p>江陵張家山出土漢簡「二年律令」に見られる津関令の検討・分析を通じて、前漢初期の統一国家体制における郡国制支配の実態、および国家的な交通制度や情報伝達体制などについて考える。研究発表とディスカッションを行う。</p> <p>第1回 イン트로ダクション<br/> 第2回 前漢時代史概説<br/> 第3回 江陵張家山出土漢簡「二年律令」について<br/> 第4回 津関令講読・1<br/> 第5回 津関令講読・2<br/> 第6回 津関令講読・3<br/> 第7回 津関令講読・4<br/> 第8回 津関令講読・5<br/> 第9回 津関令講読・6<br/> 第10回 津関令講読・7<br/> 第11回 郡国制支配の実態<br/> 第12回 交通制度と情報伝達体制<br/> 第13回 研究発表とディスカッション・1<br/> 第14回 研究発表とディスカッション・2<br/> 第15回 まとめ</p> |        |                 |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 中国古代史における出土文字資料による研究方法を修得する。   |        |                 |          |     |       |
| 参考文献等        | とくになし  |        |                 |          |     |       |
| 教科書          | とくになし  |        |                 |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席とレポート  |        |                 |          |     |       |

|              |   |        |                   |          |     |       |
|--------------|---|--------|-------------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12493   | 授業題目   | 東アジア近世歴史文化論特論演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 1                 | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 吉尾 寛  |        | 担当教員所属            | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | <p>今回の授業で講読する史料・論文を必ず事前に読解しておく</p>  |        |                   |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 中国・明代の地域社会に関する諸問題   |        |                   |          |     |       |
| 授業計画         | <p>標記のテーマについて当該時代の地方史料を読解する。明代には、地域社会(州・県等)の公的課題(賦役負担・土地所有・治安維持等に関する)に主体的に関わり、その解決に尽力した士大夫(処士・郷紳等)が多数見出される。日本・中国の代表的研究成果も参照しながら、そうした士大夫の手になる文書を精読し、当該時代の地域社会の課題について具体的に検証する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 授業の説明</li> <li>2. 史料の講読</li> <li>3. 史料の講読</li> <li>4. 史料の講読</li> <li>5. 従前の読了部分についての討議(人物の特徴など)</li> <li>6. 史料の講読</li> <li>7. 史料の講読</li> <li>8. 史料の講読</li> <li>9. 従前の読了部分についての討議(地域社会の具体的課題について)</li> <li>10. 史料の講読</li> <li>11. 史料の講読</li> <li>12. 史料の講読</li> <li>13. 従前の読了部分についての討議(撰者の問題意識について)</li> <li>14. 講読した史料全体についての討議(時代の特徴について)</li> <li>15. テスト</li> </ol> |        |                   |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 中国近世の地方史料を読解する技法を修得するとともに、当該時代の地域社会の課題について具体的に理解できる。  |        |                   |          |     |       |
| 参考文献等        | 授業の中で適宜紹介する   |        |                   |          |     |       |
| 教科書          | 使用せず  |        |                   |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 平常点   |        |                   |          |     |       |

|              |   |        |                |          |     |       |
|--------------|---|--------|----------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12494   | 授業題目   | 東アジア近世歴史文化論演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 2              | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 吉尾 寛  |        | 担当教員所属         | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | <p>今回の授業で講読する史料・論文を必ず事前に読解しておく</p>  |        |                |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 中国・清代の地域社会と同時代の日本人の中国観  |        |                |          |     |       |
| 授業計画         | <p>標記のテーマについて当該時代の行政文書(档案)を読解しながら進める。州・県等の公的課題(賦役負担・土地所有・治安維持等)に対する清朝の地方・中央官庁の対応のあり方を実証的に検討するとともに、主に19世紀後半以降、同時代の日本人(内藤湖南等)がかかる対応をいかに評価し、またその評価が彼等の中国観にどのような影響をあたえたのかについて考察する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 授業の説明</li> <li>2. 档案史料の説明</li> <li>3. 『宮中档』の上記テーマに関する部分の講読</li> <li>4. 『宮中档』の上記テーマに関する部分の講読</li> <li>5. 『宮中档』の上記テーマに関する部分の講読</li> <li>6. 従前の読解部分についての討議(官僚と地域社会・住民との関係について)</li> <li>7. 内藤湖南『清朝史通論』等の関係著作の解題</li> <li>8. 内藤湖南『清朝衰亡論』の該当部分の講読</li> <li>9. 同『清朝史通論』の該当部分の講読</li> <li>10. 同『支那論』の該当部分の講読</li> <li>11. 従前3書を通してみえる湖南の中国観の特徴</li> <li>12. 内藤湖南論について(増淵龍夫)</li> <li>12. 内藤湖南論について(谷川道雄)</li> <li>13. 清代の地域社会の特徴についての討議</li> <li>14. 清代の地域社会のありかたをふまえた日本人の中国観の特徴についての討議</li> <li>15. テスト</li> </ol> |        |                |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 中国近世の行政文書を読解する技法を修得するとともに、同時代の日本人の中国観のもつ特徴・課題を具体的に理解できる。  |        |                |          |     |       |
| 参考文献等        | 授業の中で適宜紹介する   |        |                |          |     |       |
| 教科書          | 使用せず  |        |                |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 平常点   |        |                |          |     |       |

|              |  |        |                  |        |          |       |
|--------------|--|--------|------------------|--------|----------|-------|
| 授業コード        | 12495  | 授業題目   | イギリス近現代歴史文化論演習 I |        | 単位数      | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 1                | 開講時期   | 2        | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 川本 真浩  |        |                  | 担当教員所属 | 人文社会科学専攻 |       |
| 履修における注意点    |  |        |                  |        |          |       |
| 教員研究テーマ      | 受講者全員で近現代イギリス都市史研究にかかる英語文献(論文集)を講読したうえで、その内容について論評・討論する。近現代イギリス都市史を本国社会のみならず、ヨーロッパ史、イギリス帝国史、世界史に及ぶ観点から考察し、議論する力を養うことを目的とする。  |        |                  |        |          |       |
| 授業計画         | <p>次の文献を講読し、その内容について、論評・討論をおこなう。<br/> Martin Daunton(ed.), The Cambridge Urban History of Britain, volume III 1840-1950, Cambridge, 2000.</p> <p>授業初回に各受講者の担当部分(章)を割り当てる。該当部分について、まず担当者が内容紹介及び論評を行う。担当者以外の受講者も事前に内容を把握した上で授業に参加し、担当者による内容紹介・論評を基に全員で議論を重ねていく。取り扱う項目(章)は次のとおりである。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1)都市ネットワーク</li> <li>(2)港湾都市</li> <li>(3)人口移動</li> <li>(4)公害問題</li> <li>(5)交通機関と都市環境</li> <li>(6)中央政府と都市</li> <li>(7)都市行政機能の変化</li> <li>(8)都市有用性の経済学</li> <li>(9)社会サービス</li> <li>(10)都市構造と都市文化</li> <li>(11)都市の居住形態</li> <li>(12)産業化と都市経済</li> <li>(13)都市の労働市場</li> <li>(14)都市の出生率・死亡率</li> <li>(15)都市と消費社会</li> </ol> |        |                  |        |          |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 近現代イギリス都市史研究に関する専門的知識を習得し、それを基にグローバルな観点と現代的な問題意識に密接に関わるような研究を遂行するための理解力、思考力、論理構成力、表現力を身につける。   |        |                  |        |          |       |
| 参考文献等        | 担当部分の準備は言うまでもなく、そうでない部分についても、十分な予習が必要である。  |        |                  |        |          |       |
| 教科書          | Martin Daunton(ed.), The Cambridge Urban History of Britain, volume III 1840-1950, Cambridge, 2000.  |        |                  |        |          |       |
| 成績評価の基準と方法   | (1)受講態度(出欠を含む)、(2)担当部分の発表内容、(3)討論の内容により、総合的に評価する。各項目の点数配分は2:5:4の比率を想定しているが、いずれの項目でもおおむね及第点に達することを要する。  |        |                  |        |          |       |

|              |   |        |                 |          |     |       |
|--------------|---|--------|-----------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12496   | 授業題目   | イギリス近現代歴史文化論演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 2               | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 川本 真浩   |        | 担当教員所属          | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |   |        |                 |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 受講者全員で近代イギリス帝国史研究にかかる英語文献(論文集)を講読したうえで、その内容について論評・討論する。近代イギリス帝国史を帝国・植民地社会のみならず、イギリス国内史、ヨーロッパ史、世界史に及ぶ観点から考察し、議論する力を養うことを目的とする。   |        |                 |          |     |       |
| 授業計画         | <p>次の文献を講読し、その内容について、論評・討論をおこなう。<br/> <i>Andrew Porter(ed.), The Oxford History of British Empire, volume III The Nineteenth Century, Oxford, 1999.</i></p> <p>授業初回に各受講者の担当部分(章)を割り当てる。該当部分について、まず担当者が内容紹介及び論評を行う。担当者以外の受講者も事前に内容を把握した上で授業に参加し、担当者による内容紹介・論評を基に全員で議論を重ねていく。取り扱う項目(章)は次のとおりである。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 経済と帝国: 本国の文脈から</li> <li>(2) 経済と帝国: 周縁と帝国経済</li> <li>(3) 帝国移民</li> <li>(4) アフリカ、アジア、南太平洋からの人口移動</li> <li>(5) 本国の政策及び貿易と非公式帝国</li> <li>(6) イギリスとラテンアメリカ</li> <li>(7) イギリスと中国</li> <li>(8) 帝国統治体制</li> <li>(9) 信託統治、反奴隷、人道主義</li> <li>(10) 宗教と帝国</li> <li>(11) 帝国拡大と科学技術</li> <li>(12) 本国文化に対する帝国のインパクト</li> <li>(13) 探検活動と帝国</li> <li>(14) 帝国防衛問題</li> <li>(15) 帝国の政治経済学</li> </ol> |        |                 |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 近代イギリス帝国史研究に関する専門的知識を習得し、それを基にグローバルな観点と現代的な問題意識に密接に関わるような研究を遂行するための理解力、思考力、論理構成力、表現力を身につける。   |        |                 |          |     |       |
| 参考文献等        | 担当部分の準備は言うまでもなく、そうでない部分についても、十分な予習が必要である。   |        |                 |          |     |       |
| 教科書          | Andrew Porter(ed.), <i>The Oxford History of British Empire, volume III The Nineteenth Century</i> , Oxford, 1999.  |        |                 |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | (1) 受講態度(出欠を含む)、(2) 担当部分の発表内容、(3) 討論の内容により、総合的に評価する。各項目の点数配分は2:5:4の比率を想定しているが、いずれの項目でもおおむね及第点に達することを要する。  |        |                 |          |     |       |

|              |  |        |         |          |     |       |
|--------------|--|--------|---------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12501  | 授業題目   | 国際経済論特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義   | 履修開始年次 | 1       | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 大石 達良  |        | 担当教員所属  | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |  |        |         |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 日本企業の国際展開  |        |         |          |     |       |
| 授業計画         | <p>この授業では国際経済に関する現状と基礎的理論を学ぶ。授業は、基本的なテキストを用い、テキスト学習、質疑応答、討論を行う。主な内容は以下の通り。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) イントロダクション①国際経済の現状、</li> <li>(2) イントロダクション②国際化する日本経済の現状、</li> <li>(3) 国際貿易①世界貿易と日本貿易の現状、</li> <li>(4) 国際貿易②国際貿易理論、</li> <li>(5) 通商システム①自由貿易体制と通商問題の現状、</li> <li>(6) 通商システム②国際経済政策理論、</li> <li>(7) 企業のグローバル化①企業の海外展開の現状、</li> <li>(8) 企業のグローバル化②直接投資理論・多国籍企業理論、</li> <li>(9) 外国為替①外国為替市場と為替レートの現状、</li> <li>(10) 外国為替②外国為替理論、</li> <li>(11) 国際収支①国際収支の現状、</li> <li>(12) 国際収支②国際収支理論・国際マクロ経済理論、</li> <li>(13) 国際金融①国際金融市場と国際資金移動の現状、</li> <li>(14) 国際金融②国際資金移動理論、</li> <li>(15) 総まとめ、評価。</li> </ol> |        |         |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 国際経済の現実および国際経済理論に関する基礎的な知識を得ること。   |        |         |          |     |       |
| 参考文献等        |  |        |         |          |     |       |
| 教科書          | 伊藤元重『ゼミナール国際経済入門(改訂第3版)』日本経済新聞社、2005年  |        |         |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 授業中の議論への参加状況によって評価。  |        |         |          |     |       |

|              |  |        |         |          |     |       |      |
|--------------|--|--------|---------|----------|-----|-------|------|
| 授業コード        | 12503  | 授業題目   | 移行経済論特論 |          | 単位数 | 2     |      |
| 授業種別         | 講義   | 履修開始年次 | 1       | 開講時期     | 1学期 | 曜日・時限 | 木・1限 |
| 担当教員名        | 塩原 俊彦  |        | 担当教員所属  | 人文社会科学専攻 |     |       |      |
| 履修における注意点    | なし   |        |         |          |     |       |      |
| 教員研究テーマ      | ロシア地域論、権力論、資源論、軍事研究  |        |         |          |     |       |      |
| 授業計画         | <p>移行経済諸国の体制移行問題を考察する。英語の論文を読んで、内容を吟味する。世界最高水準の学問レベルを検証し、その問題点を探る。毎回、テキストを指定し、その内容のまとめ、問題点の発表を課す。移行経済諸国のうち、とくにロシアを考察対象とするが、カザフスタン、ウクライナとの比較など、比較経済研究に重点を置く。なお、19-20年度科学研究費補助金による研究に合わせて、「ロシアと中国の資源・軍事関係をめぐる総合的研究」にとくに力を入れたい。</p> |        |         |          |     |       |      |
| 各科目の目標(達成水準) | 世界最高水準の研究  |        |         |          |     |       |      |
| 参考文献等        | <p>いずれも拙著。『パイプラインの政治経済学』(法政大学出版局、2007年)、『ロシア資源産業の「内部」』(アジア経済研究所、2006年)、『ロシア経済の真実』(東洋経済新報社、2005年)、『現代ロシアの経済構造』(慶應義塾大学出版会、2004年)、『ロシアの軍需産業』(岩波書店、2003年)</p>  |        |         |          |     |       |      |
| 教科書          | なし。必要に応じて指定。   |        |         |          |     |       |      |
| 成績評価の基準と方法   | レポート内容と討論姿勢。   |        |         |          |     |       |      |

|              |   |        |             |          |     |       |
|--------------|---|--------|-------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12506   | 授業題目   | 西洋社会経済思想史特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義  | 履修開始年次 | 1           | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 森 直人  |        | 担当教員所属      | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 履修に当たって必要な知識等は要求しないが、学部卒業程度の社会思想史の知識があることが望ましい。   |        |             |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 「文明」の概念の意味内容と作用についての研究。特に18世紀スコットランドの哲学者デイヴィッド・ヒュームの「文明」に関わる思想の研究。  |        |             |          |     |       |
| 授業計画         | <p>この講義では、「文明」の概念、特に日本の近代化におけるその意味内容と歴史的な役割について検討する。その目的は、参加者がこの「文明」の概念に対する多様な視点、特に批判的な視点と思想的な視点を理解すること、さらにその視点からグローバル化する世界の政治・経済・社会・文化・教育についての問題を独自に考察できるようになること、この二点にある(ただし、具体的なテーマについては、参加者の関心や要望に応じて変更する場合がある)。</p> <p>授業は、具体的には次のような流れで行われる。参加者は、事前に割り当てられた課題文を読み、実際の授業時には、その文章に基づいて教員からの解説と参加者との間での議論を行う。課題文は、Sources of Japanese Tradition 2nd edition, vol.2 (Columbia University Press, 2006)から抜粋して使用する。どの時代のどのような思想を扱うかについては、参加者と相談の上決定するが、現在のところは幕末から明治初期の思想を対象とする予定である。</p> <p>具体的な講義計画は以下の通り。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>履修ガイダンス: 授業のテーマ、目的、評価方法等の説明</li> <li>テキスト第二巻第一部序文から</li> <li>テキスト第34章「鎖国と維新をめぐる論争」から(1)</li> <li>テキスト第34章「鎖国と維新をめぐる論争」から(2)</li> <li>テキスト第34章「鎖国と維新をめぐる論争」から(3)</li> <li>テキスト第35章「明治維新」から(1)</li> <li>テキスト第35章「明治維新」から(2)</li> <li>テキスト第35章「明治維新」から(3)</li> <li>中間まとめ</li> <li>テキスト第36章「文明と啓蒙」から(1)</li> <li>テキスト第36章「文明と啓蒙」から(2)</li> <li>テキスト第36章「文明と啓蒙」から(3)</li> <li>テキスト第37章「民衆の諸権利と立憲主義」から(1)</li> <li>テキスト第37章「民衆の諸権利と立憲主義」から(2)</li> <li>まとめ</li> </ol> |        |             |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | ①「文明」の概念についての多角的な(特に批判的かつ思想的な)視点を身に着けること、②そうした視点からグローバル化する世界の「文明」のあり方(政治・経済・社会・文化・教育のあり方)を独自に検討できるようになること。  |        |             |          |     |       |
| 参考文献等        | 授業中に指示する。   |        |             |          |     |       |
| 教科書          | Sources of Japanese Tradition 2nd edition, vol.2, compiled by WM. Theodore de Bary et al. (Columbia University Press, 2006)   |        |             |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 上の二つの達成水準に即して、①授業中の議論(50%)、および②期末レポート(50%)を質的評価・絶対評価にて評価する。議論に関しては、テキストの理解度、多角的な視点の習得、口頭での立論及び対話の能力を評価する。期末レポートに関しては、レポートに必要な形式・論理構造および着眼点と立論内容の独自性・信頼性に基づいて評価を行う。  |        |             |          |     |       |

|              |  |        |         |          |     |       |
|--------------|--|--------|---------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12508  | 授業題目   | 経営管理論特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義   | 履修開始年次 | 1       | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 中川 香代  |        | 担当教員所属  | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |  |        |         |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 現代企業の経営管理の課題   |        |         |          |     |       |
| 授業計画         | <p>下記のテーマについて講義を行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 企業の経営管理・人事労務管理の考え方</li> <li>2 日本企業の人事労務管理</li> <li>3 採用管理</li> <li>4 企業内労働市場のもとでの配置・キャリア管理</li> <li>5 人事考課と能力開発</li> <li>6 組織・職務・配置管理</li> <li>7 賃金管理</li> <li>8 福利厚生</li> <li>9 労働時間とワーク・ライフ・バランス</li> <li>10 雇用管理と多様な雇用形態</li> <li>11 労使関係管理</li> <li>12 経営分析</li> <li>13 社会的責任マネジメント(CSR)</li> <li>14 トヨタ生産方式のしくみと課題</li> <li>15 日欧(とくに英国)企業経営・人事労務管理・労使関係の比較</li> </ol> |        |         |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 現代企業の課題を考察するのに必要な経営管理の理論と思考力を身につける。  |        |         |          |     |       |
| 参考文献等        | 随時案内する   |        |         |          |     |       |
| 教科書          | 初回の講義で案内する   |        |         |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 授業貢献度 50%      レポートおよび試験 50%   |        |         |          |     |       |

|              |  |        |           |          |     |       |
|--------------|--|--------|-----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12509  | 授業題目   | 比較会計制度論特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義   | 履修開始年次 | 1         | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 山内 高太郎   |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 会計学の基礎を理解し、中級簿記以上の知識を有していること。  |        |           |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 会計の国際化とその影響－アメリカ財務会計基準、国際会計基準を中心に－   |        |           |          |     |       |
| 授業計画         | <p>本講義は、国際会計基準の各国における収斂と採用が進む中で、国際会計基準と日本の会計基準の違いとその基礎となる会計理論について分析を行い、その影響を明らかにすることを目的としている。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション(授業の進め方等についての説明)</li> <li>2. 日本の会計基準とその理論1</li> <li>3. 日本の会計基準とその理論2</li> <li>4. 日本の会計基準とその理論3</li> <li>5. 日本の会計基準とその理論4</li> <li>6. アメリカの会計基準とその理論1</li> <li>7. アメリカの会計基準とその理論2</li> <li>8. アメリカの会計基準とその理論3</li> <li>9. アメリカの会計基準とその理論4</li> <li>10. 国際会計基準審議会の歴史と影響の拡大</li> <li>11. 国際会計基準とその理論1</li> <li>12. 国際会計基準とその理論2</li> <li>13. 国際会計基準とその理論3</li> <li>14. 国際会計基準とその理論4</li> <li>15. 国際会計基準とその理論5</li> </ol> |        |           |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 日本とアメリカの会計基準の設定方法や理論的な違いを理解し、国際会計基準導入の影響を理解する。   |        |           |          |     |       |
| 参考文献等        | <a href="https://www.asb.or.jp/asb/">https://www.asb.or.jp/asb/</a> (企業会計基準委員会)<br><a href="http://www.fasb.org/">http://www.fasb.org/</a> (アメリカ財務会計基準審議会)<br><a href="http://www.iasb.org/">http://www.iasb.org/</a> (国際会計基準審議会)  |        |           |          |     |       |
| 教科書          | テキスト:伊藤邦雄著『ゼミナール 現代会計入門』(日本経済新聞社)<br>企業会計基準委員会HP ( <a href="https://www.asb.or.jp">https://www.asb.or.jp</a> )   |        |           |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席・報告(50%)とレポート(50%)の総合評価  |        |           |          |     |       |

|              |  |        |         |          |     |       |
|--------------|--|--------|---------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12510  | 授業題目   | 財務会計論特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義   | 履修開始年次 | 1       | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 伊丹 清   |        | 担当教員所属  | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 中級程度の簿記の知識を有していることが望ましい。   |        |         |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 金融商品会計 公正価値会計  |        |         |          |     |       |
| 授業計画         | <p>テキストに沿って予習をしておいてもらい、講義では要点の解説ならびに議論という形で行う。<br/>なお、各回の講義予定は、以下の通りである。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1)本講義の進め方についてのガイダンス</li> <li>2)日本の会計基準・会計処理(1)</li> <li>3)日本の会計基準・会計処理(2)</li> <li>4)日本の会計基準・会計処理(3)</li> <li>5)日本の会計基準・会計処理(4)</li> <li>6)日本の会計基準・会計処理(5)</li> <li>7)日本の会計基準・会計処理(6)</li> <li>8)日本の会計基準・会計処理(7)</li> <li>9)日本の会計基準・会計処理(8)</li> <li>10)日本の会計基準・会計処理(9)</li> <li>11)日本の会計基準・会計処理(10)</li> <li>12)日本の会計基準・会計処理(11)</li> <li>13)日本の会計基準・会計処理(12)</li> <li>14)日本の会計基準・会計処理(13)</li> <li>15)総括とレポート提出</li> </ol> |        |         |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 日本の会計基準・会計処理の概略を理解する   |        |         |          |     |       |
| 参考文献等        |  |        |         |          |     |       |
| 教科書          | <p>テキスト:伊藤邦雄著『ゼミナール 現代会計入門』(日本経済新聞社)<br/> 企業会計基準委員会HP(<a href="https://www.asb.or.jp">https://www.asb.or.jp</a>)</p>   |        |         |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席・報告(50%)とレポート(50%)の総合評価  |        |         |          |     |       |

|              |   |        |        |          |     |       |
|--------------|---|--------|--------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12512   | 授業題目   | 経済法特論  |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義  | 履修開始年次 | 1      | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 横川 和博   |        | 担当教員所属 | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |   |        |        |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 独占禁止法制、中小企業法制、消費者保護法制   |        |        |          |     |       |
| 授業計画         | <p>次の項目につき、順次、研究を行う。</p> <p>1. 経済法制の概略、2. 独占禁止法制の地域経済における意義、3. 違法な共同行為と不公正な取引方法、4. 知的財産権の概略、5. 特許法制と地域経済、6. 著作権と中小企業。以上の検討をふまえて、地域社会の実態の検証を行い、諸問題の解決法を究明する。あわせて、諸外国の制度について検証する。講義順序の詳細は以下のとおり。</p> <p>①経済法とはなにか、<br/> ②独占禁止法の意義と目的、<br/> ③独占禁止法と地域経済、<br/> ④共同行為と不公正な取引方法、<br/> ⑤知的財産権と独占禁止法、<br/> ⑥特許権、<br/> ⑦著作権、<br/> ⑧不正競争防止法、<br/> ⑨消費者法の概略、<br/> ⑩特定商取引法、<br/> ⑪消費者契約法、<br/> ⑫消費者法と地域経済、<br/> ⑬消費者法と中小企業、<br/> ⑭事例研究、<br/> ⑮まとめ</p> |        |        |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 制度の概略を学ぶとともに、実証分析および政策提言を行う能力を身に付ける。  |        |        |          |     |       |
| 参考文献等        | 別途指示。   |        |        |          |     |       |
| 教科書          | なし。   |        |        |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 授業時間における研究に対する積極的関わりの度合いと、時間外における資料収集や実態調査などの取り組みについて総合的に評価する。  |        |        |          |     |       |

|              |   |        |           |          |     |       |
|--------------|---|--------|-----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12515   | 授業題目   | 中国経済発展論特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義  | 履修開始年次 | 1         | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 佐野 健太郎  |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |   |        |           |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 現代中国経済の実証的研究、株価決定理論   |        |           |          |     |       |
| 授業計画         | <p>今、上海総合株価指数の日々の変動を、世界中の投資家やエコノミストが注目しています。バブル経済期に入ったと言われている中国経済を、以下の順序で検討する予定。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 中国経済の構造、</li> <li>2 中国共産党の成長戦略、</li> <li>3 過剰な設備投資と輸出依存、</li> <li>4 人民元高とドル買い介入、</li> <li>5 過剰流動性の発生、</li> <li>6 上海総合株価指数の急上昇、</li> <li>7 選択枝の限られた金融政策、</li> <li>8 人民元切り上げの是非、</li> <li>9 国有企業改革の進展、 1)財政支出から銀行融資へ、</li> <li>10 国有企業改革の進展 2)現場への権限の委譲、</li> <li>11 国有企業改革の進展 3)銀行融資から株式発行へ、</li> <li>12 金融市場改革の進展、1)商業銀行の預金獲得戦略、</li> <li>13 金融市場改革進展 2)非流通株の流通株への転換、</li> <li>14 金融市場改革進展 3)短期金融市場の整備、</li> <li>15 まとめ。</li> </ol> |        |           |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 修士論文を作成するうえで必要な基礎学力を身につけることを目標にします。   |        |           |          |     |       |
| 参考文献等        |   |        |           |          |     |       |
| 教科書          | 開講時に受講者と相談して決めます。   |        |           |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席と報告などで評価します。  |        |           |          |     |       |

|              |   |        |            |        |          |       |      |
|--------------|---|--------|------------|--------|----------|-------|------|
| 授業コード        | 12517   | 授業題目   | アジア経済社会論特論 |        | 単位数      | 2単位   |      |
| 授業種別         | 講義  | 履修開始年次 | 1          | 開講時期   | 1学期      | 曜日・時限 | 金曜1限 |
| 担当教員名        | 岩佐 和幸   |        |            | 担当教員所属 | 人文社会科学専攻 |       |      |
| 履修における注意点    |   |        |            |        |          |       |      |
| 教員研究テーマ      | アジア経済社会論  |        |            |        |          |       |      |
| 授業計画         | <p>アジア経済をめぐる最新のトピックならびに理論的動向について、代表的な文献を素材に検討する。今回は、「構造改革」のバックボーンとなっている「新自由主義」をめぐる分析的な著作を取り上げ、その内容・視角を検討することにした。あわせて、輪読と並行して、参加者個々の研究発表を随時盛り込むことを予定している。なお、毎年参加者が多様であることから、関心・進捗度に応じて、それにふさわしいテキストを選択することも考慮に入れたい。</p> <p>1 オリエンテーション<br/> 2～7 1冊目輪読・議論<br/> 8 各自研究発表<br/> 9～14 2冊目輪読・議論<br/> 15 各自研究発表</p> |        |            |        |          |       |      |
| 各科目の目標(達成水準) | アジア経済をめぐる理論・現状について、構造的に理解し、自らの研究の指針とすることができるようになること。  |        |            |        |          |       |      |
| 参考文献等        | 適宜指示する。   |        |            |        |          |       |      |
| 教科書          | 候補は、以下の通りである。D. ハーヴェイ『ニューインペリアリズム』青木書店、2005年、D. ハーヴェイ『新自由主義』作品社、2007年、G.Rodan & K.Hewison(eds.), Neoliberalism and Conflict in Asia after 9/11, Routledge, 2006, R.Robison (ed.), The Neoliberal Revolution, Palgrave, 2006.  |        |            |        |          |       |      |
| 成績評価の基準と方法   | 出席・発表ならびに講義への参加状況をもとに総合評価。  |        |            |        |          |       |      |

|              |   |        |                |        |          |       |      |
|--------------|---|--------|----------------|--------|----------|-------|------|
| 授業コード        | 12521   | 授業題目   | ラテンアメリカ経済社会論特論 |        | 単位数      | 2単位   |      |
| 授業種別         | 講義  | 履修開始年次 | 1              | 開講時期   | 1学期      | 曜日・時限 | 金曜1限 |
| 担当教員名        | 中西 三紀   |        |                | 担当教員所属 | 人文社会科学専攻 |       |      |
| 履修における注意点    | 常に問題意識を持って講義に臨むこと。  |        |                |        |          |       |      |
| 教員研究テーマ      | ラテンアメリカの経済・経済史、農業<br>チリの経済・経済史、農業・農村史、社会  |        |                |        |          |       |      |
| 授業計画         | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーリング</li> <li>2. 19世紀後半の世界経済構造とラテンアメリカ経済(1)</li> <li>3. 19世紀後半の世界経済構造とラテンアメリカ経済(2)</li> <li>4. 世界大恐慌とラテンアメリカ経済(1)</li> <li>5. 世界大恐慌とラテンアメリカ経済(2)</li> <li>6. 世界大恐慌とラテンアメリカ経済(3)</li> <li>7. 第二次世界大戦後のラテンアメリカ経済(1)</li> <li>8. 第二次世界大戦後のラテンアメリカ経済(2)</li> <li>9. 第二次世界大戦後のラテンアメリカ経済(3)</li> <li>10. 累積債務危機とラテンアメリカ経済の構造変化(1)</li> <li>11. 累積債務危機とラテンアメリカ経済の構造変化(2)</li> <li>12. 累積債務危機とラテンアメリカ経済の構造変化(3)</li> <li>13. 累積債務危機とラテンアメリカ経済の構造変化(4)</li> <li>14. グローバリゼーション下のラテンアメリカ経済(1)</li> <li>15. グローバリゼーション下のラテンアメリカ経済(2)</li> <li>16. グローバリゼーション下のラテンアメリカ経済(3)</li> </ol> |        |                |        |          |       |      |
| 各科目の目標(達成水準) | ラテンアメリカの社会経済構造の変遷および世界経済構造においてラテンアメリカが占める位置に留意しつつ、19世紀から今日に至るまでのラテンアメリカの資本主義的発展について理解すること。  |        |                |        |          |       |      |
| 参考文献等        | <p>ビクター・バルマス＝トーマス著/田中高他訳『ラテンアメリカ経済史』名古屋大学出版会、2001年。</p> <p>エドゥアルド・ガレーノ著/大久保光夫訳『収奪された大地』新評論、1986年。</p> <p>今井圭子編『ラテンアメリカ開発の思想』日本経済評論社、2004年。</p> <p>クリストバル・カイ著/吾郷健二監訳『ラテンアメリカ従属論の系譜』大村書店、2002年。</p> <p>等、必要に応じて講義中に紹介する。</p>  |        |                |        |          |       |      |
| 教科書          | 特に指定しない。<br>上記参考文献を各自にて有効に活用すること。   |        |                |        |          |       |      |
| 成績評価の基準と方法   | 期末に提出するレポートにて判断する。  |        |                |        |          |       |      |

|              |   |        |           |        |          |       |
|--------------|---|--------|-----------|--------|----------|-------|
| 授業コード        | 12522   | 授業題目   | 事業システム論特論 |        | 単位数      | 2単位   |
| 授業種別         | 講義  | 履修開始年次 | 1         | 開講時期   | 1        | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 中道 一心   |        |           | 担当教員所属 | 人文社会科学専攻 |       |
| 履修における注意点    |   |        |           |        |          |       |
| 教員研究テーマ      | 事業システムの優位性、産業競争力、イノベーションモデルに関する研究   |        |           |        |          |       |
| 授業計画         | <p>企業の競争優位の源泉として、個々の企業が作り上げてきた事業の仕組み(事業システム)に着目する。企業が事業システムを設計する際、どのようなことに注意を払ってきたのかを具体的に考察するとともに、その注意が持つ経済学、経営学の理論に絡めて学習する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション</li> <li>2. 事業システムの設計パラメータ</li> <li>3. 事業システムの設計思想</li> <li>4. 事業システムの設計原理</li> <li>5. 事業システムの理論的枠組み</li> <li>6. 事業システムの経済分析</li> <li>7. 事業システムの社会的分析</li> <li>8. 事業システムの工学的分析</li> <li>9. 事業システムの心理学的分析</li> <li>10. 事業システムの動態</li> <li>11. トヨタ自動車の事業システム</li> <li>12. セブン-イレブンの事業システム</li> <li>13. ワールドの事業システム</li> <li>14. ヤマト運輸の事業システム</li> <li>15. まとめ</li> </ol> |        |           |        |          |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 事業システムの優位性に関する議論を日本の代表的な企業の事例をもとに理解することができること。  |        |           |        |          |       |
| 参考文献等        | 必要時に逐次提示する。   |        |           |        |          |       |
| 教科書          | 加護野忠男・井上達彦[2004]『事業システム戦略』有斐閣。<br>大野耐一[1978]『トヨタ生産方式—脱規模の経営をめざして』ダイヤモンド社。<br>門田安弘[2006]『トヨタ プロダクションシステム—その理論と体系』ダイヤモンド社。  |        |           |        |          |       |
| 成績評価の基準と方法   | 講義への参加度(100%)   |        |           |        |          |       |

|              |   |        |           |          |     |       |
|--------------|---|--------|-----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12551   | 授業題目   | 国際経済論演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 1         | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 大石 達良   |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |   |        |           |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 日本企業の国際展開   |        |           |          |     |       |
| 授業計画         | <p>「環境問題と国際経済」を中心テーマに、その理論を学び、現状分析を行う。授業は以下の内容で行うことを計画している。</p> <p>(1) イントロダクション: 国際的環境問題、<br/> (2) 環境問題と社会、<br/> (3) 環境問題と経済学、<br/> (4) 環境問題と政治学、<br/> (5) 環境問題と京都メカニズム、<br/> (6) 環境問題と貿易、<br/> (7) 環境問題と直接投資、<br/> (8) 環境問題と企業のグローバル化、<br/> (9) 環境問題と労働力移動、<br/> (9) 環境問題と国際金融、<br/> (10) 環境問題と政府開発援助、<br/> (11) 環境問題と発展途上国、<br/> (12) 環境問題と先進国、<br/> (13) 環境問題と国際的取り組み、<br/> (14) 環境問題と国際紛争、<br/> (15) まとめ、評価。</p> |        |           |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 地球環境問題を、国際経済の理論を用いて分析できるようになること。  |        |           |          |     |       |
| 参考文献等        |   |        |           |          |     |       |
| 教科書          | 森田恒幸・天野明弘編『地球環境問題とグローバル・コミュニティ』岩波書店、2002年   |        |           |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 予習状況、授業中の議論への参加状況、期末の口頭試問によって評価。評価のウェイトは予習・授業参加が7割、口頭試問が3割。   |        |           |          |     |       |

|              |   |        |          |          |     |       |
|--------------|---|--------|----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12552   | 授業題目   | 国際経済論演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 2        | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 大石 達良   |        | 担当教員所属   | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |   |        |          |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 日本企業の国際展開   |        |          |          |     |       |
| 授業計画         | <p>「環境問題と国際経済」を中心テーマに、国際的な環境問題に関する理論検討と現状分析を行う。授業は、前半で環境問題を考えるにあたっての根本的問題について検討し、後半で環境問題と国際経済の具体的な問題について検討する。具体的には、以下の内容で行うことを計画している。</p> <p>【1】環境問題の分析方法に関する検討<br/> (1)環境問題と環境研究、<br/> (2)環境問題における問題設定、<br/> (3)環境問題における事例研究、<br/> (4)環境問題における経済モデル、<br/> (5)環境問題におけるデータ、<br/> (6)環境問題におけるフィールド研究、<br/> (7)環境問題における分析と意思決定、</p> <p>【2】環境問題と国際経済に関する検討<br/> (8)環境問題と国際貿易、<br/> (9)環境問題と対外直接投資、<br/> (10)環境問題とグローバル企業、<br/> (11)環境問題と労働力移動、<br/> (12)環境問題と国際金融、<br/> (13)環境問題と発展途上国の持続的発展、<br/> (14)環境問題と国際的南北問題、<br/> (15)まとめ、評価。</p> |        |          |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 地球環境問題を、国際経済の理論を用いて分析できるようになること。  |        |          |          |     |       |
| 参考文献等        |   |        |          |          |     |       |
| 教科書          | 石弘之編『環境学の技法』(東京大学出版会、2002年)、柳憲一郎ほか編著『多面的環境問題』(ぎょうせい、2006年)  |        |          |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 予習状況、授業中の議論への参加状況、期末の口頭試問によって評価。評価のウエイトは予習・授業参加が7割、口頭試問が3割。   |        |          |          |     |       |

|              |  |        |           |          |     |       |     |
|--------------|--|--------|-----------|----------|-----|-------|-----|
| 授業コード        | 12555  | 授業題目   | 移行経済論演習 I |          | 単位数 | 2     |     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 1         | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 | 金1限 |
| 担当教員名        | 塩原 俊彦  |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |     |       |     |
| 履修における注意点    | 英語に精通していることが望ましい   |        |           |          |     |       |     |
| 教員研究テーマ      | ロシア地域研究  |        |           |          |     |       |     |
| 授業計画         | ガイダンス後、研究成果の報告を3回程度、行ってもらう。英語文献を必ず読破すること。  |        |           |          |     |       |     |
| 各科目の目標(達成水準) | 英語文献を読みこなす力を養う。  |        |           |          |     |       |     |
| 参考文献等        | 拙稿(Oversights in Russia's Corporate Governance: The Case of the Oil and Gas Industry, Dependent on Oil and Gas: Russia's Integration into the World Economy, <i>Slavic Research Center</i> , Hokkaido University, pp. 85-114)など。 |        |           |          |     |       |     |
| 教科書          | なし   |        |           |          |     |       |     |
| 成績評価の基準と方法   | 報告と授業態度で判定。  |        |           |          |     |       |     |

|              |  |        |          |          |     |       |     |
|--------------|--|--------|----------|----------|-----|-------|-----|
| 授業コード        | 12556  | 授業題目   | 移行経済論演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 2        | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 | 金1限 |
| 担当教員名        | 塩原 俊彦  |        | 担当教員所属   | 人文社会科学専攻 |     |       |     |
| 履修における注意点    | 英語に精通していることが望ましい   |        |          |          |     |       |     |
| 教員研究テーマ      | ロシア地域研究  |        |          |          |     |       |     |
| 授業計画         | ガイダンス後、研究成果の報告を3回程度、行ってもら。英語文献を必ず読破すること。   |        |          |          |     |       |     |
| 各科目の目標(達成水準) | 英語文献を読みこなす力を養う。  |        |          |          |     |       |     |
| 参考文献等        | 拙稿(Oversights in Russia's Corporate Governance: The Case of the Oil and Gas Industry, Dependent on Oil and Gas: Russia's Integration into the World Economy, <i>Slavic Research Center</i> , Hokkaido University, pp. 85-114)など。 |        |          |          |     |       |     |
| 教科書          | なし   |        |          |          |     |       |     |
| 成績評価の基準と方法   | 報告と授業態度で判定。  |        |          |          |     |       |     |

|              |   |        |               |          |     |       |
|--------------|---|--------|---------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12561   | 授業題目   | 西洋社会経済思想史演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 1             | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 森 直人  |        | 担当教員所属        | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 西洋社会経済思想史特論を履修すること。文献の調査に対して関心と意欲を持ち続けること。  |        |               |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 「文明」の概念の意味内容と作用についての研究。特に18世紀スコットランドの哲学者デイヴィッド・ヒュームの「文明」に関わる思想の研究。  |        |               |          |     |       |
| 授業計画         | <p>この講義では、「文明」の概念、特に日本の近代化におけるその意味内容と歴史的な役割について検討する。その目的は、参加者がこの「文明」の概念に対する多様な視点、特に批判的な視点と思想史的な視点を理解すること、その視点からグローバル化する世界の政治・経済・社会・文化・教育についての問題を独自に考察できるようになること、さらに独自に一次文献を読解して以上のテーマに関わる立論を行えるようになること、この三点にある(ただし、具体的なテーマについては、参加者の関心や要望に応じて変更する場合がある)。</p> <p>授業は、具体的には次のような流れで行われる。参加者は、西洋社会経済思想史特論のテキスト、Sources of Japanese Tradition 2nd edition, vol.2 (Columbia University Press, 2006)を参照し、関連性のある一次文献を選択し、その文献に関する先行研究を調査しつつ、その文献を読み進め、レポートを作成する。教員は、研究計画の作成、先行研究の調査、文献の読解、アウトラインの作成、レポートの執筆等に関して必要な指導を行う。</p> <p>具体的な授業計画は以下の通り。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>履修ガイダンス: 授業のテーマ、目的、評価方法等の説明</li> <li>テキストの検討と一次文献の選択</li> <li>研究計画の作成</li> <li>先行研究の調査(1)</li> <li>先行研究の調査(2)</li> <li>先行研究の調査(3)</li> <li>先行研究のまとめと問題の絞り込み</li> <li>中間まとめ</li> <li>選択した一次文献の解釈(1)</li> <li>選択した一次文献の解釈(2)</li> <li>選択した一次文献の解釈(3)</li> <li>選択した一次文献の解釈(4)</li> <li>最終的なアウトラインの作成</li> <li>期末レポートの作成</li> <li>期末レポートへのフィードバック、まとめ</li> </ol> |        |               |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | ①「文明」の概念に対する多様な視点、特に批判的な視点と思想史的な視点を理解すること、②その視点からグローバル化する世界の政治・経済・社会・文化・教育についての問題を独自に考察できるようになること、③さらに独自に日本語の一次文献を読解して以上のテーマに関わる立論を行えるようになること。  |        |               |          |     |       |
| 参考文献等        | 参加者の関心に即して、授業中に指示する。  |        |               |          |     |       |
| 教科書          | Sources of Japanese Tradition 2nd edition, vol.2, compiled by WM. Theodore de Bary et al. (Columbia University Press, 2006)   |        |               |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 上の二つの達成水準に即して、①授業中の議論(50%)、および②期末レポート(50%)を質的評価・絶対評価にて評価する。研究の進め方に関しては、研究計画の妥当性、先行研究の調査能力、問題の設定・意義付け・絞り込みの適切性、一次文献の解釈の独自性と妥当性から評価する。期末レポートに関しては、レポートに必要な形式・論理構造および着眼点と立論内容の独自性・信頼性に基づいて評価を行う。   |        |               |          |     |       |

|              |   |        |              |          |     |       |
|--------------|---|--------|--------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12562   | 授業題目   | 西洋社会経済思想史演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 2            | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 森 直人  |        | 担当教員所属       | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 西洋社会経済思想史特論、および西洋社会経済思想史演習Ⅰを履修すること。文献の調査に対して関心と意欲を持ち続けること。  |        |              |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 「文明」の概念の意味内容と作用についての研究。特に18世紀スコットランドの哲学者デイヴィッド・ヒュームの「文明」に関わる思想の研究。  |        |              |          |     |       |
| 授業計画         | <p>この講義では、「文明」の概念、特に日本の近代化におけるその意味内容と歴史的な役割について検討する。その目的は、参加者がこの「文明」の概念に対する多様な視点、特に批判的な視点と思想史的な視点を理解すること、その視点からグローバル化する世界の政治・経済・社会・文化・教育についての問題を独自に考察できるようになること、さらに独自に一次文献を読解して以上のテーマに関わる立論を行えるようになること、この三点にある(ただし、具体的なテーマについては、参加者の関心や要望に応じて変更する場合がある)。</p> <p>この授業は「西洋社会経済思想史演習Ⅰ」で既に執筆しているレポートの再検討と書き直しに充てられる。具体的には、そのレポートの再検討に基づき、再び研究計画を作成し、関連する諸研究の調査(より幅広く、対象とする一次文献の歴史的背景の調査なども含む)、および対象とする一次文献の再解釈(また可能であれば関連する他の一次文献との比較対照など)の形で、より専門性の高い論文の執筆を目指す。</p> <p>具体的な授業計画は以下の通り。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>履修ガイダンス: 授業のテーマ、目的、評価方法等の説明</li> <li>テキストの検討と一次文献の選択</li> <li>研究計画の作成</li> <li>関連する研究の調査(1)</li> <li>関連する研究の調査(2)</li> <li>関連する研究の調査(3)</li> <li>関連する研究のまとめと問題の絞り込み</li> <li>中間まとめ</li> <li>選択した一次文献の解釈(1)</li> <li>選択した一次文献の解釈(2)</li> <li>選択した一次文献の解釈(3)</li> <li>選択した一次文献の解釈(4)</li> <li>最終的なアウトラインの作成</li> <li>論文の作成</li> <li>論文へのフィードバック、まとめ</li> </ol> |        |              |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | ①「文明」の概念に対する多様な視点、特に批判的な視点と思想史的な視点を理解すること、②その視点からグローバル化する世界の政治・経済・社会・文化・教育についての問題を独自に考察できるようになること、③さらに独自に一次文献を読解して以上のテーマに関わる立論を行えるようになること。  |        |              |          |     |       |
| 参考文献等        | 参加者の関心に即して、授業中に指示する。  |        |              |          |     |       |
| 教科書          | Sources of Japanese Tradition 2nd edition, vol.2, compiled by WM. Theodore de Bary et al. (Columbia University Press, 2006)   |        |              |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 上の二つの達成水準に即して、①授業中の議論(50%)、および②論文(50%)を質的評価・絶対評価にて評価する。研究の進め方に関しては、研究計画の妥当性、先行研究の調査能力、問題の設定・意義付け・絞り込みの適切性、一次文献の解釈の独自性と妥当性から評価する。論文に関しては、論文に必要な形式・論理構造および着眼点と立論内容の独自性・信頼性に基づいて評価を行う。   |        |              |          |     |       |

|              |  |        |           |          |     |       |
|--------------|--|--------|-----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12565  | 授業題目   | 経営管理論演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 1         | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 中川 香代  |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |  |        |           |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 現代企業の経営管理の課題   |        |           |          |     |       |
| 授業計画         | <p>下記、テーマについての特論講義に基づき、文献および実地調査等を行い報告書を作成する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 企業経営に関する実地調査の方法について</li> <li>2 「ワーク・ライフ・バランス」についての先行研究と議論の整理</li> <li>3 「ワーク・ライフ・バランス」についての課題の検討</li> <li>4 調査目的・調査対象・調査項目の選定と調査計画策定と調査方法について</li> <li>5 企業調査(1)</li> <li>6 調査結果に関する報告と議論 報告書の記述方法について</li> <li>7「ダイバシティ」と「ワーク・ライフ・バランス」についての先行研究と議論の整理</li> <li>8 日本の雇用管理と「ワーク・ライフ・バランス」についての先行研究と議論の整理</li> <li>9 日本企業の経営と「ワーク・ライフ・バランス」の先行研究と議論の整理</li> <li>11 欧州の企業経営・人事労務管理・労使関係、「ワーク・ライフ・バランス」の比較</li> <li>12 経営分析の方法について</li> <li>13 経営分析と生産性、および「ワーク・ライフ・バランス」との関連について考察</li> <li>14 企業調査(2)</li> <li>15 調査結果の報告と論文のまとめ方について</li> </ol> |        |           |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 現代企業の課題を調査するのに必要な方法と思考力を身につける。   |        |           |          |     |       |
| 参考文献等        | 随時案内する   |        |           |          |     |       |
| 教科書          | 初回の講義で案内する   |        |           |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 授業貢献度 50%      レポートおよび試験 50%   |        |           |          |     |       |

|              |   |        |          |          |     |       |
|--------------|---|--------|----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12566   | 授業題目   | 経営管理論演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 2        | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 中川 香代   |        | 担当教員所属   | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 教員研究テーマ      | 現代企業の経営管理の課題  |        |          |          |     |       |
| 授業計画         | <p>下記、テーマについて、特論講義に基づき、文献および実地調査等を行い報告書を作成する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 現代の日本企業の課題に関する先行研究についての議論と整理</li> <li>2 企業のCSR(社会的責任)に関する先行研究についての議論と整理</li> <li>3 各自が選定した課題の検討</li> <li>4 調査目的・調査対象・調査項目の選定と調査計画策定と調査方法について</li> <li>5 企業調査(1)</li> <li>6 調査結果に関する報告と議論 報告書の検討</li> <li>7 日本企業の経営課題に関する先行研究と議論の整理</li> <li>8 比較研究のデータ収集と調査計画の策定について</li> <li>9 日欧企業の経営管理の比較に関する先行研究と議論の整理</li> <li>10 各自の調査内容に関する報告と議論、分析と考察</li> <li>11 欧州の企業経営・人事労務管理・労使関係に関する調査</li> <li>12 上記に関する報告と議論、分析と考察</li> <li>13 調査目的・調査対象・調査項目の選定と調査計画の策定</li> <li>14 企業調査(2)</li> <li>15 調査結果の報告と論文のまとめ方について</li> </ol> |        |          |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 現代企業の課題を考察するのに必要な経営管理の理論と思考力を身につける。   |        |          |          |     |       |
| 参考文献等        | 随時案内する  |        |          |          |     |       |
| 教科書          | 初回の講義で案内する  |        |          |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 授業貢献度 50%      レポートおよび試験 50%  |        |          |          |     |       |

|              |   |        |             |          |     |       |
|--------------|---|--------|-------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12567   | 授業題目   | 比較会計制度論演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 1           | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 山内 高太郎  |        | 担当教員所属      | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修上の注意点      | 会計学の基礎を理解し、中級簿記以上の知識を有していること。比較会計制度論において基礎的な説明を行うので 比較会計制度論を受講していることが望ましい。  |        |             |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 会計の国際化とその影響ーアメリカ財務会計基準、国際会計基準を中心にー  |        |             |          |     |       |
| 授業計画         | <p>国際会計基準に関する先行研究から国際会計基準の影響力の拡大過程を理解し、各国における導入の問題点を明らかにすることを目的としている。また、財務諸表分析により企業が会計の国際化にどのように対応しているか調査、検討を行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション(授業の進め方等についての説明)</li> <li>2. 国際会計基準に関する先行研究1</li> <li>3. 国際会計基準に関する先行研究2</li> <li>4. 国際会計基準に関する先行研究3</li> <li>5. 国際会計基準に関する先行研究4</li> <li>6. 国際会計基準の各国における収斂、採用状況と問題点1</li> <li>7. 国際会計基準の各国における収斂、採用状況と問題点2</li> <li>8. 国際会計基準の各国における収斂、採用状況と問題点3</li> <li>9. 国際会計基準の各国における収斂、採用状況と問題点4</li> <li>10. 国際会計基準の各国における収斂、採用状況と問題点5</li> <li>11. 国際会計基準の各国における収斂、採用状況と問題点6</li> <li>12. 財務諸表分析1</li> <li>13. 財務諸表分析2</li> <li>14. 財務諸表分析3</li> <li>15. プレゼンテーション</li> </ol> |        |             |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 国際会計基準導入の問題点を理解し、問題点を明らかにするために必要な能力を身につける。  |        |             |          |     |       |
| 参考文献等        | 第1回目の授業で指示する。   |        |             |          |     |       |
| 教科書          | 第1回目の授業で指示する。   |        |             |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席と議論への参加度合50%、レポート50%  |        |             |          |     |       |

|              |   |        |            |          |     |       |
|--------------|---|--------|------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12568   | 授業題目   | 比較会計制度論演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 2          | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 山内 高太郎  |        | 担当教員所属     | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修上の注意点      | 会計学の基礎を理解し、中級簿記以上の知識を有していること。   |        |            |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 会計の国際化とその影響－アメリカ財務会計基準、国際会計基準を中心に－  |        |            |          |     |       |
| 授業計画         | <p>国際会計基準導入における問題点のひとつとして公正価値測定があげられる。下記のテーマについて調査、議論を行うことで、公正価値測定の方法を理解し、アメリカ会計基準、国際会計基準、日本会計基準における公正価値測定の導入状況と相違について明らかにすることを目的としている。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション(授業の進め方等についての説明)</li> <li>2. 概念ステートメントにおける公正価値測定1</li> <li>3. 概念ステートメントにおける公正価値測定2</li> <li>4. 概念ステートメントにおける公正価値測定3</li> <li>5. 金融商品会計1</li> <li>6. 金融商品会計2</li> <li>7. 金融商品会計3</li> <li>8. リース会計1</li> <li>9. リース会計2</li> <li>10. 年金会計1</li> <li>11. 年金会計2</li> <li>12. 年金会計3</li> <li>13. 公正価値測定の損益への影響1</li> <li>14. 公正価値測定の損益への影響2</li> <li>15. プレゼンテーション</li> </ol> |        |            |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 公正価値測定と関連する会計基準について理解し、その問題点を理論的に明らかにする。  |        |            |          |     |       |
| 参考文献等        | 第1回目の授業で指示する。   |        |            |          |     |       |
| 教科書          | 第1回目の授業で指示する。   |        |            |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席と議論への参加度合50%、レポート50%  |        |            |          |     |       |

|              |   |        |           |          |     |       |
|--------------|---|--------|-----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12569   | 授業題目   | 財務会計論演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 1         | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 伊丹 清  |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修上の注意点      | 中級程度の簿記の知識を有していることが望ましい。また、財務会計論特論を履修済みであることが望ましい。  |        |           |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 金融商品会計 公正価値会計   |        |           |          |     |       |
| 授業計画         | <p>本演習では、国際会計基準審議会 (IASB) と世界で最初に基準設定団体が公表したアメリカ財務会計基準審議会 (FASB) の会計概念フレームワークについて学習する。なお、演習は、予習をしてもらい、その報告の後、要点の解説ならびに議論を行う。</p> <p>なお、各回の演習予定は、以下の通りである。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 本講義の進め方についてのガイダンス</li> <li>2) 国際会計基準審議会「財務報告に関する概念フレームワーク」(1)</li> <li>3) 国際会計基準審議会「財務報告に関する概念フレームワーク」(2)</li> <li>4) 国際会計基準審議会「財務報告に関する概念フレームワーク」(3)</li> <li>5) 国際会計基準審議会「財務報告に関する概念フレームワーク」(4)</li> <li>6) アメリカ財務会計基準審議会「財務会計諸概念に関するステートメント」(1)</li> <li>7) アメリカ財務会計基準審議会「財務会計諸概念に関するステートメント」(2)</li> <li>8) アメリカ財務会計基準審議会「財務会計諸概念に関するステートメント」(3)</li> <li>9) アメリカ財務会計基準審議会「財務会計諸概念に関するステートメント」(4)</li> <li>10) アメリカ財務会計基準審議会「財務会計諸概念に関するステートメント」(5)</li> <li>11) アメリカ財務会計基準審議会「財務会計諸概念に関するステートメント」(6)</li> <li>12) アメリカ財務会計基準審議会「財務会計諸概念に関するステートメント」(7)</li> <li>13) アメリカ財務会計基準審議会「財務会計諸概念に関するステートメント」(8)</li> <li>14) アメリカ財務会計基準審議会「財務会計諸概念に関するステートメント」(9)</li> <li>15) 総括とレポート提出</li> </ol> |        |           |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 会計基準設定の基礎となっている会計概念フレームワークの概略を理解する  |        |           |          |     |       |
| 教科書          | <p>平松一夫・広瀬義州共訳『FASB財務会計の諸概念(増補版)』(中央経済社)</p> <p>IFRS財団編 企業会計基準委員会・公益財団法人財務基準機構監訳『国際財務報告基準(IFRS)2012』(中央経済社)</p>   |        |           |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席・報告(50%)とレポート(50%)の総合評価   |        |           |          |     |       |

|              |   |        |          |          |     |       |
|--------------|---|--------|----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12570   | 授業題目   | 財務会計論演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 2        | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 伊丹 清  |        | 担当教員所属   | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修上の注意点      | 中級程度の簿記の知識を有していることが望ましい。また、財務会計論特論を履修済みであることが望ましい。  |        |          |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 金融商品会計 公正価値会計   |        |          |          |     |       |
| 授業計画         | <p>本演習では、金融商品会計と減損会計を取り上げ、そこで使用される公正価値測定について学習する。また、両会計の基礎をなす会計理論との関係についても学習する。なお、演習は、予習をしてもらい、それを報告してもらった後、要点の解説ならびに議論を行う。なお、各回の講義予定は、以下の通りである。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1)教材についての説明と、本演習の進め方についてのガイダンス</li> <li>2)公正価値測定(1)</li> <li>3)公正価値測定(2)</li> <li>4)公正価値測定(3)</li> <li>5)金融商品会計(1)</li> <li>6)金融商品会計(2)</li> <li>7)金融商品会計(3)</li> <li>8)金融商品会計(4)</li> <li>9)金融商品会計(5)</li> <li>10)減損会計(1)</li> <li>11)減損会計(2)</li> <li>12)減損会計(3)</li> <li>13)減損会計(4)</li> <li>14)減損会計(5)</li> <li>15)総括とレポート提出</li> </ol> |        |          |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 金融商品会計と減損会計における公正価値測定と両基準設定の基礎となる理論との関係について理解する。  |        |          |          |     |       |
| 教科書          | 授業で指示する。  |        |          |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席・報告(50%)とレポート(50%)の総合評価   |        |          |          |     |       |

|              |  |        |         |          |     |       |
|--------------|--|--------|---------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12573  | 授業題目   | 経済法演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 1       | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 横川 和博  |        | 担当教員所属  | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修上の注意点      |  |        |         |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 独占禁止法制、中小企業法制、消費者保護法制  |        |         |          |     |       |
| 授業計画         | <p>まず、独占禁止法制と知的財産権法の制度的概略を検討した上で、実態分析を行い、問題の所在を明らかにする。さらに、英国及び米国について同様の作業を行い、比較法的検証をくわえる。次ぎに、これらの分野において、学生の研究テーマとの接合を試みる。最終的には、地域社会を前提としたフィールド設定を行い、そこにおける制度設計の試案作成を試みることを目標とする。詳細な進行予定は以下のとおり。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①独占禁止法の概略、</li> <li>②中小企業法制の概略1、</li> <li>③中小企業法制の概略2、</li> <li>④中小企業法制の概略3、</li> <li>⑤消費者保護法制概略1、</li> <li>⑥消費者保護法制概略2、</li> <li>⑦ケーススタディ1</li> <li>⑧ケーススタディ2</li> <li>⑨ケーススタディ3</li> <li>⑩ケーススタディ4</li> <li>⑪ケーススタディ5</li> <li>⑫ケーススタディ6</li> <li>⑬ケーススタディ7</li> <li>⑭ケーススタディ8</li> <li>⑮まとめ</li> </ol> |        |         |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 制度の実証的検証能力および制度設計の能力をあわせて獲得する。   |        |         |          |     |       |
| 参考文献等        | 別途指示。  |        |         |          |     |       |
| 教科書          | なし。  |        |         |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 授業時における学習のみならず、それ以外の時間における資料収集・実態調査など活動の評価もあわせて行う。   |        |         |          |     |       |

|              |   |        |        |          |     |       |
|--------------|---|--------|--------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12574   | 授業題目   | 経済法演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 2      | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 横川 和博   |        | 担当教員所属 | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |   |        |        |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 独占禁止法制、中小企業法制、消費者保護法制   |        |        |          |     |       |
| 授業計画         | <p>演習Ⅰにおける研究をふまえ、さらに個別的研究テーマに応じた研究を行う。その際、独占禁止法制、中小企業法制、消費者保護法制および知的財産権の制度的趣旨および制度のかかえる諸問題の検証を適宜行い、あわせて地域社会における具体的事例の検証も行う。最終的には、個別研究テーマとこれらとの接合および制度設計の検討も行う。各自の研究テーマに応じて、以下のように進行させる。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①ガイダンス</li> <li>②各人の研究テーマのプレゼンテーション</li> <li>③各人の研究テーマのプレゼンテーション</li> <li>④各人の研究テーマのプレゼンテーション</li> <li>⑤各テーマと法制度とのかかわりの整理</li> <li>⑥各テーマと法制度とのかかわりの整理</li> <li>⑦各テーマと法制度とのかかわりの整理</li> <li>⑧比較法的検証</li> <li>⑨比較法的検証</li> <li>⑩比較法的検証</li> <li>⑪地域経済都の関わりについての検証</li> <li>⑫地域経済都の関わりについての検証</li> <li>⑬研究結果のプレゼンテーション</li> <li>⑭研究結果のプレゼンテーション</li> <li>⑮研究結果のプレゼンテーション</li> </ol> |        |        |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 制度の趣旨を客観的に理解する能力、実証的に検証する能力及び制度設計能力の獲得をめざす。   |        |        |          |     |       |
| 参考文献等        | 別途指示。   |        |        |          |     |       |
| 教科書          | なし。   |        |        |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 授業時における学習のみならず、時間外における資料収集や実態調査などへの関わりもあわせて評価する。  |        |        |          |     |       |

|              |   |        |             |          |     |       |
|--------------|---|--------|-------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12579   | 授業題目   | 中国経済発展論演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 1           | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 佐野 健太郎  |        | 担当教員所属      | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |   |        |             |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 現代中国経済の実証的研究、株価決定理論   |        |             |          |     |       |
| 授業計画         | <p>本演習では、中国の経済発展過程を分析するのに必要と思われる、マクロ経済学の考え方を、以下の順序で検討する予定。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 マクロ経済学とは、</li> <li>2 マクロ経済学における需要と供給、</li> <li>3 有効需要と乗数メカニズム、</li> <li>4 貨幣の機能、</li> <li>5 マクロ経済政策、</li> <li>6 インフレと失業、</li> <li>7 財政政策のマクロ経済分析、</li> <li>8 経済成長と経済発展、</li> <li>9 IS-LM分析、</li> <li>10 物価の決定、</li> <li>11 国際金融と国際マクロ経済学、</li> <li>12 ミクロ経済学とは、</li> <li>13 需要と供給、</li> <li>14 市場取引と資源配分、</li> <li>15 まとめ。</li> </ol> |        |             |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 修士論文を作成するうえで必要な基礎学力を身につけることを目標にします。   |        |             |          |     |       |
| 参考文献等        |   |        |             |          |     |       |
| 教科書          | 開講時に、受講生と相談しながら決めます。  |        |             |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席と報告などで評価します。  |        |             |          |     |       |

|              |  |        |            |          |     |       |
|--------------|--|--------|------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12580  | 授業題目   | 中国経済発展論演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 2          | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 佐野 健太郎   |        | 担当教員所属     | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |  |        |            |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 現代中国経済の実証的研究、株価決定理論  |        |            |          |     |       |
| 授業計画         | <p>マクロ・コントロールという観点から、中国の金融経済と実物経済を、以下の順序で検討する予定。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 中国経済のマクロ・コントロール、 <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 中国人民銀行による金融政策、 <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 預金・貸出基準金利、</li> <li>2) 預金準備率操作、</li> </ol> </li> <li>2. 3) 公開市場操作、</li> <li>4. 4) 外国為替市場への介入、</li> </ol> </li> <li>5. (2) 株価・地価と金融政策、</li> <li>6. マクロ・コントロールと実物経済、 <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 企業改革、 <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 取締役会の強化、</li> <li>2) 流通株主の発言力強化、</li> </ol> </li> <li>8. 3) 利益拡大を目標にした企業経営、</li> <li>9. 4) 過剰流動性と過剰投資、</li> </ol> </li> <li>10. (2) 金融引き締めとその限界、</li> <li>11. マクロ・コントロールと対外経済、 <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 過剰投資の功罪、 <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 合弁工場建設による国を挙げての技術吸収、</li> <li>2) 余剰人員吸収の受け皿、</li> <li>3) 輸出依存、</li> <li>4) 人民元高とドル買い介入、</li> </ol> </li> <li>(2) 過剰投資と金融引き締め</li> </ol> </li> </ol> |        |            |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 修士論文を作成するうえで必要な基礎学力を身につけることを目標にします。  |        |            |          |     |       |
| 参考文献等        |  |        |            |          |     |       |
| 教科書          | 開講時に受講生と相談しながら決定します。   |        |            |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席と報告などにより評価します。   |        |            |          |     |       |

|              |  |        |              |        |          |       |      |
|--------------|--|--------|--------------|--------|----------|-------|------|
| 授業コード        | 12583  | 授業題目   | アジア経済社会論演習 I |        | 単位数      | 2単位   |      |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 1            | 開講時期   | 2学期      | 曜日・時限 | 金曜1限 |
| 担当教員名        | 岩佐 和幸  |        |              | 担当教員所属 | 人文社会科学専攻 |       |      |
| 履修における注意点    |  |        |              |        |          |       |      |
| 教員研究テーマ      | アジア経済社会論   |        |              |        |          |       |      |
| 授業計画         | <p>「アジア経済社会論特論」につづき、アジア経済をめぐる最新のトピックならびに理論的動向について、代表的な文献を素材に検討する。特に、「構造改革」のバックボーンとなっている「新自由主義」をめぐる分析的な著作を取り上げ、その内容・視角を検討することにしたい。あわせて、輪読と並行して、参加者個々の研究発表を随時盛り込むことを予定している。なお、毎年参加者が多様であることから、関心・進捗度に応じて、それにふさわしいテキストを選択することも考慮に入れたい。</p> <p>1 オリエンテーション<br/> 2～7 1冊目輪読・議論<br/> 8 各自研究発表<br/> 9～14 2冊目輪読・議論<br/> 15 各自研究発表</p> |        |              |        |          |       |      |
| 各科目の目標(達成水準) | アジア経済をめぐる理論・現状について、構造的に理解し、自らの研究の指針とすることができるようになること。   |        |              |        |          |       |      |
| 参考文献等        | 適宜指示する。  |        |              |        |          |       |      |
| 教科書          | 候補は、以下の通りである。D. ハーヴェイ『ニューインペリアリズム』青木書店、2005年、D. ハーヴェイ『新自由主義』作品社、2007年、G.Rodan & K.Hewison(eds.), Neoliberalism and Conflict in Asia after 9/11, Routledge, 2006, R.Robison (ed.), The Neoliberal Revolution, Palgrave, 2006.   |        |              |        |          |       |      |
| 成績評価の基準と方法   | 出席・発表ならびに講義への参加状況をもとに総合評価。   |        |              |        |          |       |      |

|              |   |        |             |          |     |       |      |
|--------------|---|--------|-------------|----------|-----|-------|------|
| 授業コード        | 12584   | 授業題目   | アジア経済社会論演習Ⅱ |          | 単位数 | 2単位   |      |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 2           | 開講時期     | 1学期 | 曜日・時限 | 金曜2限 |
| 担当教員名        | 岩佐 和幸   |        | 担当教員所属      | 人文社会科学専攻 |     |       |      |
| 履修における注意点    |   |        |             |          |     |       |      |
| 教員研究テーマ      | アジア経済社会論  |        |             |          |     |       |      |
| 授業計画         | <p>「アジア経済社会論演習Ⅰ」につづき、アジア経済をめぐる最新のトピックならびに理論的動向について、代表的な文献を素材に検討する。ここでは、各国別の政治経済学的アプローチの研究動向に注目し、参加者の研究対象国・地域に関する文献を各自取り上げてもらう予定である。あわせて、輪読と並行して、参加者個々の研究発表を随時盛り込むことを予定している。なお、毎年参加者が多様であることから、関心・進捗度に応じて、それにふさわしいテキストを選択することも考慮に入れたい。</p> <p>1 オリエンテーション<br/> 2～7 1冊目輪読・議論(参加者の人数に応じて、報告は隔週ごとにローテーションで行う)<br/> 8 各自研究発表<br/> 9～14 2冊目輪読・議論<br/> 15 各自研究発表</p> |        |             |          |     |       |      |
| 各科目の目標(達成水準) | アジア経済をめぐる理論・現状について、構造的に理解し、自らの研究の指針とすることができるようになること。  |        |             |          |     |       |      |
| 参考文献等        | 適宜指示する。   |        |             |          |     |       |      |
| 教科書          | 候補は、以下の通りである。G. ロダン『シンガポール工業化の政治経済学』三一書房、1992年、J. ジェスターソン『エスニシティと経済』クレイン、2003年、M.Hart-Landsberg & P.Burkett, China and Socialism, Monthly Review Press, 2005, M.Hart-Landsberg et al. (eds.), Marxist Perspectives on South Korea in the Global Economy, Ashgate, 2007.   |        |             |          |     |       |      |
| 成績評価の基準と方法   | 出席・発表ならびに講義への参加状況をもとに総合評価。  |        |             |          |     |       |      |

|              |  |        |                  |          |     |       |
|--------------|--|--------|------------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12587  | 授業題目   | ラテンアメリカ経済社会論演習 I |          | 単位数 | 2単位   |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 1                | 開講時期     | 2学期 | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 中西 三紀  |        | 担当教員所属           | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | <p>ラテンアメリカ経済社会論特論を受講していること。<br/> 英語で書かれた社会科学系の文献を読解できる英語力を必要とする。<br/> スペイン語の読解能力を有していればなお望ましい。<br/> 第1回の講義にて担当および報告日を決定するので、受講を希望する者は必ず出席すること。</p>   |        |                  |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | <p>ラテンアメリカの経済・経済史、農業<br/> チリの経済・経済史、農業・農村史、社会</p>  |        |                  |          |     |       |
| 授業計画         | <p>1. オリエンテーリング：下記文献一覧より、受講生の問題意識に基づき担当箇所・報告日を決定する。<br/> 2. 報告担当者による発表とディスカッション<br/> 3. 報告担当者による発表とディスカッション<br/> 4. 報告担当者による発表とディスカッション<br/> 5. 報告担当者による発表とディスカッション<br/> 6. 報告担当者による発表とディスカッション<br/> 7. 報告担当者による発表とディスカッション<br/> 8. 報告担当者による発表とディスカッション<br/> 9. 報告担当者による発表とディスカッション<br/> 10. 報告担当者による発表とディスカッション<br/> 11. 報告担当者による発表とディスカッション<br/> 12. 報告担当者による発表とディスカッション<br/> 13. 報告担当者による発表とディスカッション<br/> 14. 報告担当者による発表とディスカッション<br/> 15. 報告担当者による発表とディスカッション</p>  |        |                  |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | <p>ラテンアメリカの経済発展に関する文献を購読し、ラテンアメリカの現状に対する理解を深めるとともに、そうした現実から構築された理論を検討し理解すること。</p>  |        |                  |          |     |       |
| 参考文献等        | <p>今井圭子編『ラテンアメリカ開発の思想』日本経済評論社、2004年。<br/> クリストバル・カイ著/吾郷健二監訳『ラテンアメリカ従属論の系譜』大村書店、2002年。<br/> アンドレ・G・フランク著/西川潤約『世界資本主義とラテンアメリカ』岩波書店、1978年。<br/> Anibal Pinto Santa-Cruz, Chile: Un caso de desarrollo frustrado, Universitaria de Santiago, 1996.<br/> Osvaldo Sunkel, <i>Development from Within</i>, Rienner, Boulder &amp; London, 1993.<br/> Fernando Ignacio Leiva, <i>Latin American Neostructuralism</i>, Univ. of Minnesota Press, 2008.<br/> E. Hershburg, F. Rosen (eds.), <i>Latin America after Neoliberalism</i>, The New Press, 2006.<br/> 等、受講生の問題意識に応じて第1回講義時に紹介する。</p> |        |                  |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | <p>研究発表の内容、ディスカッションへの参加度合い、期末に提出するレポートから総合的に判断する。</p>  |        |                  |          |     |       |

|              |  |        |                 |          |     |       |
|--------------|--|--------|-----------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12588  | 授業題目   | ラテンアメリカ経済社会論演習Ⅱ |          | 単位数 | 2単位   |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 2               | 開講時期     | 1学期 | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 中西 三紀  |        | 担当教員所属          | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | ラテンアメリカ経済社会論特論を受講していること。<br>英語で書かれた社会科学系の文献を読解できる英語力を必要とする。<br>スペイン語の読解能力を有していればなお望ましい。<br>第1回の講義にて担当および報告日を決定するので、受講を希望する者は必ず出席すること。  |        |                 |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | ラテンアメリカの経済・経済史、農業<br>チリの経済・経済史、農業・農村史、社会   |        |                 |          |     |       |
| 授業計画         | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーリング: 下記文献一覧より、受講生の問題意識に基づき担当箇所・報告日を決定する。</li> <li>2. 報告担当者による発表とディスカッション</li> <li>3. 報告担当者による発表とディスカッション</li> <li>4. 報告担当者による発表とディスカッション</li> <li>5. 報告担当者による発表とディスカッション</li> <li>6. 報告担当者による発表とディスカッション</li> <li>7. 報告担当者による発表とディスカッション</li> <li>8. 報告担当者による発表とディスカッション</li> <li>9. 報告担当者による発表とディスカッション</li> <li>10. 報告担当者による発表とディスカッション</li> <li>11. 報告担当者による発表とディスカッション</li> <li>12. 報告担当者による発表とディスカッション</li> <li>13. 報告担当者による発表とディスカッション</li> <li>14. 報告担当者による発表とディスカッション</li> <li>15. 報告担当者による発表とディスカッション</li> </ol>            |        |                 |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | ラテンアメリカの経済発展に関する文献を購読し、ラテンアメリカの現状に対する理解を深めるとともに、そうした現実から構築された理論を検討し理解すること。   |        |                 |          |     |       |
| 参考文献等        | <p>今井圭子編『ラテンアメリカ開発の思想』日本経済評論社、2004年。<br/> クリストバル・カイ著/吾郷健二監訳『ラテンアメリカ従属論の系譜』大村書店、2002年。<br/> アンドレ・G・フランク著/西川潤約『世界資本主義とラテンアメリカ』岩波書店、1978年。<br/> Anibal Pinto Santa-Cruz, Chile: Un caso de desarrollo frustrado, Universitaria de Santiago, 1996.<br/> Osvaldo Sunkel, <i>Development from Within</i>, Rienner, Boulder &amp; London, 1993.<br/> Fernando Ignacio Leiva, <i>Latin American Neostructuralism</i>, Univ. of Minnesota Press, 2008.<br/> E. Hershburg, F. Rosen (eds.), <i>Latin America after Neoliberalism</i>, The New Press, 2006.<br/> 等、受講生の問題意識に応じて第1回講義時に紹介する。</p> |        |                 |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 研究発表の内容、ディスカッションへの参加度合い、期末に提出するレポートから総合的に判断する。   |        |                 |          |     |       |

|              |   |        |             |          |     |       |
|--------------|---|--------|-------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12589   | 授業題目   | 事業システム論演習 I |          | 単位数 | 2単位   |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 1           | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 中道 一心   |        | 担当教員所属      | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |   |        |             |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 事業システムの優位性、産業競争力、イノベーションモデルに関する研究   |        |             |          |     |       |
| 授業計画         | <p>日本の産業競争力や競争優位性に関する議論をもとに、多様な事業システムの存在を確認する。その際、産業特性とそこで優位性を獲得する道筋を合わせて把握する。加えて、受講生が関心を持つ企業や組織について、事業システムの観点から分析、研究発表してもらい、ディスカッションを行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション</li> <li>2. 日本の競争力を再考する</li> <li>3. 日本の二大主力産業のこれまで(自動車、エレクトロニクス)</li> <li>4. 日本企業低迷の本質</li> <li>5. 意味的価値という視点</li> <li>6. 模倣されない組織能力とは</li> <li>7. デジタルカメラ産業</li> <li>8. 携帯電話産業</li> <li>9. 半導体産業</li> <li>10. 自動車産業</li> <li>11. 家庭用ゲーム産業</li> <li>12. 日本企業のこれから</li> <li>13. 受講生の研究報告</li> <li>14. 受講生の研究報告</li> <li>15. まとめ</li> </ol> |        |             |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 日本の産業競争力や競争優位性に関する議論をもとに、事業システムの優位性と産業特性との関連性を理解できるようになること。   |        |             |          |     |       |
| 教科書          | 必要時に逐次提示する。   |        |             |          |     |       |
| 参考文献等        | 青島矢一／武石彰／マイケル・A・クスマノ[2010]『メイド・イン・ジャパンは終わるのか』東洋経済新報社。<br>延岡健太郎[2011]『価値づくり経営の論理』日本経済新聞出版社。  |        |             |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 講義への参加度(100%)   |        |             |          |     |       |

|              |   |        |            |        |          |       |
|--------------|---|--------|------------|--------|----------|-------|
| 授業コード        | 12590   | 授業題目   | 事業システム論演習Ⅱ |        | 単位数      | 2単位   |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 2          | 開講時期   | 1        | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 中道 一心   |        |            | 担当教員所属 | 人文社会科学専攻 |       |
| 履修における注意点    |   |        |            |        |          |       |
| 教員研究テーマ      | 事業システムの優位性、産業競争力、イノベーションモデルに関する研究   |        |            |        |          |       |
| 授業計画         | <p>アジアの産業競争力や競争優位性に関する議論をもとに、多様な事業システムの存在を確認する。その際、産業特性とそこで優位性を獲得する道筋を合わせて把握する。加えて、受講生が関心を持つ企業や組織について、事業システムの観点から分析、研究発表してもらい、ディスカッションを行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション</li> <li>2. アジアの鉄鋼業(1)</li> <li>3. アジアの鉄鋼業(2)</li> <li>4. アジアの鉄鋼業(3)</li> <li>5. アジアの鉄鋼業(4)</li> <li>6. アジアの二輪車産業(1)</li> <li>7. アジアの二輪車産業(2)</li> <li>8. アジアの二輪車産業(3)</li> <li>9. アジアの二輪車産業(4)</li> <li>10. アジアのIT機器産業(1)</li> <li>11. アジアのIT機器産業(2)</li> <li>12. アジアのIT機器産業(3)</li> <li>13. 受講生の研究報告</li> <li>14. 受講生の研究報告</li> <li>15. まとめ</li> </ol> |        |            |        |          |       |
| 各科目の目標(達成水準) | アジアの産業競争力や競争優位性に関する議論をもとに、事業システムの優位性と産業特性との関連性を理解できるようになること。  |        |            |        |          |       |
| 教科書          | 必要時に逐次提示する。   |        |            |        |          |       |
| 参考文献等        | 佐藤創編著[2008]『アジア諸国の鉄鋼業—発展と変容—』アジア経済研究所。<br>佐藤百合/大原盛樹[2006]『アジアの二輪車産業—地場企業の勃興と産業発展ダイナミズム—』アジア経済研究所。   |        |            |        |          |       |
| 成績評価の基準と方法   | 講義への参加度(100%)   |        |            |        |          |       |

|              |  |        |           |          |     |       |
|--------------|--|--------|-----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12602  | 授業題目   | 西洋近代思想論特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義   | 履修開始年次 | 1         | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 角 忍  |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 特になし。  |        |           |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 西洋近代思想   |        |           |          |     |       |
| 授業計画         | <p>西洋近代思想の成り立つ哲学的基礎を究明する。そのため、西洋において人間・世界( )・神がそれぞれどのように考えられ、またその三者の相互関係がどのように捉えられているかを代表的思想に即して見ていく。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 西洋思想の基本性格</li> <li>2. 中世から近代への移行</li> <li>3. 近代思想の一般的性格</li> <li>4. ルネサンス</li> <li>5. 宗教改革</li> <li>6. 近代自然科学</li> <li>7. デカルト</li> <li>8. スピノザ, ライプニッツ</li> <li>9. イギリス経験論</li> <li>10. 啓蒙思想</li> <li>11. ルソー</li> <li>12. カント</li> <li>13. ドイツ観念論(フィヒテ, シェリング)</li> <li>14. ドイツ観念論(ヘーゲル)</li> <li>15. 西洋近代と現代世界</li> </ol> |        |           |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 西洋近代思想において、人間の見方、世界の見方、神の見方が連動していることを理解すること  |        |           |          |     |       |
| 参考文献等        | 授業のなかでそのつど指示する。  |        |           |          |     |       |
| 教科書          | 特に指定しない。   |        |           |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 期末のレポートの成績による。   |        |           |          |     |       |

|              |  |        |            |          |     |       |
|--------------|--|--------|------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12603  | 授業題目   | 環境・生命倫理論特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義   | 履修開始年次 | 1          | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 小澤 照彦  |        | 担当教員所属     | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 特になし   |        |            |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | プラグマティズム研究   |        |            |          |     |       |
| 授業計画         | <p>現代の生命倫理および環境倫理のバックボーンとなっている代表的な倫理的アプローチを検討する。本年度は生命医療倫理に関する倫理的アプローチに焦点を絞り、以下の諸点について論述する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 生命医療倫理</li> <li>2. 倫理理論と道徳的ジレンマ</li> <li>3. さまざまなタイプの倫理理論: 功利主義</li> <li>4. さまざまなタイプの倫理理論: カント主義</li> <li>5. さまざまなタイプの倫理理論: 性格倫理</li> <li>6. さまざまなタイプの倫理理論: 自由主義倫理</li> <li>7. さまざまなタイプの倫理理論: 共同体主義</li> <li>8. さまざまなタイプの倫理理論: ケアの倫理</li> <li>9. さまざまなタイプの倫理理論: 決疑論</li> <li>10. 自律尊重: インフォームド・コンセント</li> <li>11. 無危害: 選択的治療と義務的治療</li> <li>12. 仁恵: パターナリズム</li> <li>13. 正義: 機会均等と医療資源の配分</li> <li>14. 医療専門家と患者の関係</li> <li>15. 道徳的理想</li> </ol> |        |            |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 医療倫理の基本的な道徳的ジレンマに関する理解。  |        |            |          |     |       |
| 参考文献等        | ビーチャム、トム・L. / チルドレス、ジェイムズ・F. ; 『生命医学倫理』第三版、永安幸正 / 立木教夫 監訳、成文堂、1997年、等。   |        |            |          |     |       |
| 教科書          | 資料を配付。   |        |            |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席率(2/3以上の出席)(40%)とレポートの成績(60%)によって評価する。   |        |            |          |     |       |

|              |   |        |         |          |     |       |
|--------------|---|--------|---------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12604   | 授業題目   | 応用倫理学特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義  | 履修開始年次 | 1       | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 岩佐 光広   |        | 担当教員所属  | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 特にないが、講義への積極的な参加を求める。   |        |         |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 生命倫理学の人類学的再考、ラオスおよび在日ラオス系定住者の文化人類学的研究   |        |         |          |     |       |
| 授業計画         | <p>日本語で書かれた応用倫理学の文献を読みながら、応用倫理学の基本的なアプローチについて学ぶ。なお、他に関心のある文献等がある場合には相談に応じる。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. イントロダクション(授業の概要の説明)</li> <li>2. 倫理学と「応用」倫理学</li> <li>3. 科学技術を問う</li> <li>4. 応用形而上学</li> <li>5. 越境する形而上学</li> <li>6. 応用現象学</li> <li>7. 環境から生活圏へ</li> <li>8. 現代社会を哲学する</li> <li>9. パブリック・アフェアーズ</li> <li>10. 市民と向き合う哲学</li> <li>11. 応用倫理の新展開</li> <li>12. 応用哲学史</li> <li>13. ディスカッション</li> <li>14. ディスカッション</li> <li>15. まとめ</li> </ol> |        |         |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 応用倫理学が対象とする課題と基礎的なアプローチを理解すること。   |        |         |          |     |       |
| 参考文献等        | 有福孝岳編、1999、『エチカとは何か：現代倫理学入門』、ナカニシヤ出版。   |        |         |          |     |       |
| 教科書          | 戸田山和久/出口康夫編、2011、応用哲学を学ぶ人のために、世界思想社。  |        |         |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | ディスカッション、期末レポートをもとに総合的に理解度を評価する   |        |         |          |     |       |

|              |  |        |         |          |     |       |
|--------------|--|--------|---------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12605  | 授業題目   | 人間存在論特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義   | 履修開始年次 | 1       | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 武藤 整司  |        | 担当教員所属  | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 積極的な態度で参加すること  |        |         |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 人間性をめぐる問題、とくにフランス・モラリストの視点を重視したテーマを扱う。時代や洋の東西を問わず、幅広く人間存在を問題にする。   |        |         |          |     |       |
| 授業計画         | <p>人間存在を多角的な観点から検討する。さまざまなテキストを用いる場合がある。主として、人間存在を巡って、政治・経済・宗教・学問・教育・産業・文化・慣習などの側面を押さえつつ、多角的な考察の方法を身に着ける。人間存在の多様性に対応するためである。文学と哲学の中間領域を主な考察対象にするので、受講生には幅広い知識を身に着けようとする心構えが必要である。</p> <p>第1回 講義のイントロダクション<br/> 第2回 ジェンダー論の歴史(1)<br/> 第3回 ジェンダー論の歴史(2)<br/> 第4回 ジェンダー論の歴史(3)<br/> 第5回 『両性平等論』(1)<br/> 第6回 『両性平等論』(2)<br/> 第7回 『両性平等論』(3)<br/> 第8回 『両性平等論』(4)<br/> 第9回 『両性平等論』(5)<br/> 第10回 『両性平等論』(6)<br/> 第11回 『両性平等論』(7)<br/> 第12回 『両性平等論』(8)<br/> 第13回 『両性平等論』(9)<br/> 第14回 『両性平等論』(10)<br/> 第15回 講義のまとめ</p> |        |         |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | テーマの深い理解。  |        |         |          |     |       |
| 参考文献等        | 適宜、講義中に指示。   |        |         |          |     |       |
| 教科書          | 必要があれば、その都度指示する。   |        |         |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 平常点で評価することもあるが、原則としてレポートを課す。   |        |         |          |     |       |

|              |   |        |        |          |     |       |
|--------------|---|--------|--------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12606   | 授業題目   | 宗教思想特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義  | 履修開始年次 | 1      | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 安藤 恵崇   |        | 担当教員所属 | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 特になし  |        |        |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 宗教哲学および宗教学・神話学  |        |        |          |     |       |
| 授業計画         | <p>宗教思想の類型を過去・現時・未来という3つの時間性によって考えてみたい。過去を問題にする形態は伝統的社会的死と再生の儀礼神話などを通して考える。現材を契機とする者として仏教やウパニシャッドを、未来を契機とする者としてユダヤ・キリスト教・イスラム教および浄土思想を取り上げる。</p> <p>第1回 インTRODクシヨン<br/> 第2回 時間体験と宗教的超越の構図1<br/> 第3回 時間体験と宗教的超越の構図2<br/> 第4回 時間体験と宗教的超越の構図3<br/> 第5回 未来を契機とする諸宗教—ユダヤ・キリスト教 イスラム教1<br/> 第6回 未来を契機とする諸宗教—ユダヤ・キリスト教 イスラム教2<br/> 第7回 未来を契機とする諸宗教—ユダヤ・キリスト教 イスラム教3<br/> 第8回 未来を契機とする諸宗教—ユダヤ・キリスト教 イスラム教4<br/> 第9回 過去を契機とする伝統的社会的宗教 神話と儀礼の構造1<br/> 第10回 過去を契機とする伝統的社会的宗教 神話と儀礼の構造2<br/> 第11回 過去を契機とする伝統的社会的宗教 神話と儀礼の構造3<br/> 第12回 過去を契機とする伝統的社会的宗教 神話と儀礼の構造4<br/> 第13回 宗教的超越の共通の本質1<br/> 第14回 宗教的超越の共通の本質2<br/> 第15回 まとめ</p> |        |        |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 諸々の類型の固有の性格を理解すること  |        |        |          |     |       |
| 参考文献等        | 講義にて示す。   |        |        |          |     |       |
| 教科書          | 特につかわない。  |        |        |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 4000字以上のレポートをもって評価する。   |        |        |          |     |       |

|              |  |        |         |          |     |       |
|--------------|--|--------|---------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12608  | 授業題目   | 認知心理学特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義   | 履修開始年次 | 1       | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 池田 和夫  |        | 担当教員所属  | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |  |        |         |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 家族構造の認知および人間の認知過程に関する心理学的研究  |        |         |          |     |       |
| 授業計画         | <p>この授業は、次のような事項に関する講義を行い(各項につき2時限)、人間の認知過程に関する主要な理論を概観する。</p> <p>第1回 認知心理学とは<br/> 第2回 認知心理学の歴史<br/> 第3回 認知心理学的アプローチ<br/> 第4回 認知心理学の方法論<br/> 第5回 視覚的認知過程-1(形態の認知)<br/> 第6回 視覚的認知過程-2(色覚)<br/> 第7回 視覚的認知過程-3(空間立体視)<br/> 第8回 聴覚的認知過程-1(音の認知)<br/> 第9回 聴覚的認知過程-2(音声の認知)<br/> 第10回 高次認知過程-1(スキーマ)<br/> 第11回 高次認知過程-2(記憶の諸相)<br/> 第12回 高次認知過程-3(記憶の変容と忘却)<br/> 第13回 社会的認知過程-1(対人認知)<br/> 第14回 社会的認知過程-2(社会的推論)<br/> 第15回 家族構造の認知</p> |        |         |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 認知心理学に関する一般的事項を理解する。   |        |         |          |     |       |
| 参考文献等        | 授業において、随時紹介する。   |        |         |          |     |       |
| 教科書          | 特に用いない。資料としてプリントを適宜配布する。   |        |         |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席およびレポートの結果に基づき総合的に評価する。  |        |         |          |     |       |

|              |   |        |         |          |     |       |
|--------------|---|--------|---------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12609   | 授業題目   | 発達心理学特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義  | 履修開始年次 | 1       | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 塩坪 いく子  |        | 担当教員所属  | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 予習・復習を十分にすること   |        |         |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 乳幼児期の空間認知と言語発達  |        |         |          |     |       |
| 授業計画         | <p>乳幼児期の空間認知および言語発達に関する基本的な先行研究を紹介した上で、この分野の最先端の研究について、問題点を検討し今後の展開を考える。</p> <p>第1回：認知発達研究の歴史と問題<br/> 第2回：空間認知に関する発達の研究の歴史<br/> 第3回：自己の身体と外部世界の認識－乳児期（1）<br/> 第4回：自己の身体と外部世界の認識－乳児期（2）<br/> 第5回：幼児期の空間認知<br/> 第6回：空間認知の異常と発達の研究<br/> 第7回：空間認知の発達の研究の発表とディスカッション<br/> 第8回：言語獲得に関する発達の研究の歴史 — ピアジェ、ヴィゴツキー、スキナー、チョムスキー<br/> 第9回：言語音の獲得（1） — 聴覚<br/> 第10回：言語音の獲得（2） — 発声<br/> 第11回：コミュニケーション行動の基礎（1） — 社会的相互関係の発達<br/> 第12回：コミュニケーション行動の基礎（2） — 社会的認知能力の発達<br/> 第13回：言語能力の基礎（1） — シンボル、表象<br/> 第14回：言語能力の基礎（2） — 模倣<br/> 第15回：言語獲得に関する発達の研究の発表とディスカッション</p> |        |         |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | この分野の基本的な研究の内容と技法を理解すること。   |        |         |          |     |       |
| 参考文献等        | 随時紹介  |        |         |          |     |       |
| 教科書          | 特になし  |        |         |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | レポート  |        |         |          |     |       |

|              |  |        |         |          |     |       |
|--------------|--|--------|---------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12610  | 授業題目   | 社会心理学特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義   | 履修開始年次 | 1       | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 増田 匡裕  |        | 担当教員所属  | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | Consent of Instructor  |        |         |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 親しい対人関係の発達過程におけるコミュニケーション／喪失の社会心理学   |        |         |          |     |       |
| 授業計画         | <p>まず、感情に関する基礎的な知見を説明します。その後、特定の感情に注目し、感情の喚起やその後に生起する行動について概観します。その際、感情や行動以外にも、その社会事象との関連も含めて論じます。その中で、様々な研究手法や分析手法に関しても考察していきます。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション</li> <li>2. 感情に関する4つの視点Ⅰ（進化と生理）</li> <li>3. 感情に関する4つの視点Ⅱ（認知と社会的構成）</li> <li>4. 感情の分類</li> <li>5. 感情と発達</li> <li>6. 感情の測定方法</li> <li>7. 感情の表出と制御</li> <li>8. 怒りと攻撃行動の関係</li> <li>9. 怒りの喚起に関わる要因</li> <li>10. 怒りの表出</li> <li>11. 怒りの表出に関わる要因</li> <li>12. 怒りと許し</li> <li>13. 感情と犯罪</li> <li>14. 感情と社会</li> <li>15. 総括</li> </ol> |        |         |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 現代の社会心理学の基礎的な知識、特に過去20年の間に発達した基礎的な理論を英語で概観すること。  |        |         |          |     |       |
| 参考文献等        | 授業中に適宜指示する。  |        |         |          |     |       |
| 教科書          | Textbook: Kruglanski, A.W. & Higgins E.T (Eds.) (2003) Social Psychology: A General Reader (Key Readings in Social Psychology). Psychology Press.  |        |         |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 試験4回(英文マルチプルチョイスと和文論述各2回)の合計点  |        |         |          |     |       |

|              |  |        |         |          |     |       |
|--------------|--|--------|---------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12611  | 授業題目   | 感情心理学特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義   | 履修開始年次 | 1       | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 日比野 桂  |        | 担当教員所属  | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 心理学に関する基礎的な知識を有していることが前提となります。   |        |         |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 感情経験および感情喚起に伴う行動に関する心理学的研究   |        |         |          |     |       |
| 授業計画         | <p>まず、感情に関する基礎的な知見を説明します。その後、特定の感情に注目し、感情の喚起やその後に生起する行動について概観します。その際、感情や行動以外にも、その社会事象との関連も含めて論じます。その中で、様々な研究手法や分析手法に対しても考察していきます。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション</li> <li>2. 感情に関する4つの視点Ⅰ（進化と生理）</li> <li>3. 感情に関する4つの視点Ⅱ（認知と社会的構成）</li> <li>4. 感情の分類</li> <li>5. 感情と発達</li> <li>6. 感情の測定方法</li> <li>7. 感情の表出と制御</li> <li>8. 怒りと攻撃行動の関係</li> <li>9. 怒りの喚起に関わる要因</li> <li>10. 怒りの表出</li> <li>11. 怒りの表出に関わる要因</li> <li>12. 怒りと許し</li> <li>13. 感情と犯罪</li> <li>14. 感情と社会</li> <li>15. 総括</li> </ol> |        |         |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 感情心理学に関する基礎的な知識と研究実施方法の習得。   |        |         |          |     |       |
| 参考文献等        | 授業内で必要に応じて紹介予定   |        |         |          |     |       |
| 教科書          | 授業内で必要に応じて紹介予定   |        |         |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席状況、参加態度、レポートなどに基づき、総合的に評価します。  |        |         |          |     |       |

|              |  |        |         |          |         |
|--------------|--|--------|---------|----------|---------|
| 授業コード        | 12613  | 授業題目   | 言語意味論特論 | 単位数      | 2       |
| 授業種別         | 講義   | 履修開始年次 | 1       | 開講時期     | 1 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 加藤 勉   |        | 担当教員所属  | 人文社会科学専攻 |         |
| 履修における注意点    | 言語の意味論的研究に興味を持っていること。  |        |         |          |         |
| 教員研究テーマ      | 英語の複数名詞句および総称性の意味論的研究。   |        |         |          |         |
| 授業計画         | <p>言語における意味の問題を、英語を中心に扱いながら講義する。語彙的な意味論から文の意味論へと話を進め、語と指示対象の関係、文レベルの意味の決定と定式化の問題、文と文の間の意味関係などについて講義を行う。また、言語の持つ文字通りの意味ばかりではなく、メタファーを中心とする様々な比喩的意味についても講義をする。</p> <p>第1回 「授業の計画と概要」について<br/> 第2回 「語の意味関係」について<br/> 第3回 「意味の成分分析」について<br/> 第4回 「文の意味」について<br/> 第5回 「文の意味関係」について<br/> 第6回 「命題論理」について<br/> 第7回 「述語論理」について<br/> 第8回 「内包と外延」について<br/> 第9回 「可能世界意味論」について<br/> 第10回 「認知意味論」について<br/> 第11回 「古典的範疇」について<br/> 第12回 「範疇化とプロトタイプ効果」について<br/> 第13回 「メタファー論」について<br/> 第14回 「語用論」について<br/> 第15回 「発話行為」について</p> |        |         |          |         |
| 各科目の目標(達成水準) | 言語の意味を研究するために必要とされる基礎的知識を身につける。  |        |         |          |         |
| 参考文献等        | 授業ごとに適宜紹介する。   |        |         |          |         |
| 教科書          | プリントを配布する。   |        |         |          |         |
| 成績評価の基準と方法   | 期末レポートに基づいて評価する。   |        |         |          |         |

|              |  |        |         |          |     |       |
|--------------|--|--------|---------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12614  | 授業題目   | 言語文法論特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義   | 履修開始年次 | 1       | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 西尾 美穂  |        | 担当教員所属  | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 特になし   |        |         |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 通時的統語論   |        |         |          |     |       |
| 授業計画         | <p>『はじめての人の言語学』をテキストとして、言語学一般の基礎を学ぶ。対象言語は英語と日本語を中心とする。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 音の並び方／母音・子音・半母音</li> <li>2 音素／発音</li> <li>3 鼻音・有声音・無声音／音素と発音</li> <li>4 拍／リズム</li> <li>5 濁音／発音の変化</li> <li>6 単語の構造</li> <li>7 和語／漢語／カタカナ語</li> <li>8 複合語の発音</li> <li>9 形態素</li> <li>10 活用</li> <li>11 時制</li> <li>12 補部と付加部</li> <li>13 助詞</li> <li>14 受身と使役</li> <li>15 試験</li> </ol> |        |         |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 言語学一般の基礎知識を身につけること。  |        |         |          |     |       |
| 参考文献等        |  |        |         |          |     |       |
| 教科書          | 『はじめての人の言語学』 上山あゆみ著 くろしお出版   |        |         |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 受講態度と期末試験により総合的に評価する。  |        |         |          |     |       |

|              |   |        |             |          |     |       |
|--------------|---|--------|-------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12651   | 授業題目   | 西洋近代思想論演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 1           | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 角 忍   |        | 担当教員所属      | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 特になし。   |        |             |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 西洋近代思想  |        |             |          |     |       |
| 授業計画         | <p>西洋近代哲学の基本的テキストをいくつか選んで読みながら、「近代」という時代の意味を再検討を加え、研究発表とディスカッションを行う。併せて、文明論的観点から西洋と日本との比較考察を行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. イントロダクション(テキストの紹介, 解説)</li> <li>2. テキストの読解</li> <li>3. 発表とディスカッション</li> <li>4. テキストの読解</li> <li>5. 発表とディスカッション</li> <li>6. テキストの読解</li> <li>7. 発表とディスカッション</li> <li>8. テキストの読解</li> <li>9. 発表とディスカッション</li> <li>10. テキストの読解</li> <li>11. 発表とディスカッション</li> <li>12. テキストの読解</li> <li>13. 発表とディスカッション</li> <li>14. ディスカッション</li> <li>15. 総括</li> </ol> |        |             |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 近代思想の精確な把握。   |        |             |          |     |       |
| 参考文献等        | 授業のなかで指示する。   |        |             |          |     |       |
| 教科書          | そのつど指定する。   |        |             |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 期末のレポートの成績による。  |        |             |          |     |       |

|              |   |        |            |          |     |       |
|--------------|---|--------|------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12652   | 授業題目   | 西洋近代思想論演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 2          | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 角 忍   |        | 担当教員所属     | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 特になし。   |        |            |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 西洋近代思想  |        |            |          |     |       |
| 授業計画         | <p>演習Iを踏まえたうえで、西洋近代哲学の基本的テキストを読みながら「近代」という時代の意味を再検討を加え、研究発表とディスカッションを行う。併せて、文明論的観点から西洋と日本との比較考察を行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. イントロダクション(テキストの紹介, 解説)</li> <li>2. テキストの読解</li> <li>3. 発表とディスカッション</li> <li>4. テキストの読解</li> <li>5. 発表とディスカッション</li> <li>6. テキストの読解</li> <li>7. 発表とディスカッション</li> <li>8. テキストの読解</li> <li>9. 発表とディスカッション</li> <li>10. テキストの読解</li> <li>11. 発表とディスカッション</li> <li>12. テキストの読解</li> <li>13. 発表とディスカッション</li> <li>14. ディスカッション</li> <li>15. 総括</li> </ol> |        |            |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 西洋近代思想の精確な把握。   |        |            |          |     |       |
| 参考文献等        | 授業のなかで指示する。   |        |            |          |     |       |
| 教科書          | そのつど指定する。   |        |            |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 期末のレポートの成績による。  |        |            |          |     |       |

|              |  |        |          |          |         |
|--------------|--|--------|----------|----------|---------|
| 授業コード        | 12655  | 授業題目   | 応用倫理演習 I | 単位数      | 2       |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 1        | 開講時期     | 2 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 岩佐 光広  |        | 担当教員所属   | 人文社会科学専攻 |         |
| 履修における注意点    | 応用倫理学特論を受講していることが望ましい。<br>英語で書かれた文献を読む英語力を必要とする。   |        |          |          |         |
| 教員研究テーマ      | 生命倫理学の人類学的再考、ラオスおよび在日ラオス系定住者の文化人類学的研究  |        |          |          |         |
| 授業計画         | <p>応用倫理学の代表的な論文を読み、応用倫理学の基本的なアプローチとその問題性について検討する。下記の教科書から受講生の関心にもとづき論文を選び輪読する。なお、他に関心のある文献等がある場合には相談に応じる。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. イントロダクション(授業の概要の説明と報告分担の決定)</li> <li>2. 担当者による報告とディスカッション</li> <li>3. 担当者による報告とディスカッション</li> <li>4. 担当者による報告とディスカッション</li> <li>5. 担当者による報告とディスカッション</li> <li>6. 担当者による報告とディスカッション</li> <li>7. 担当者による報告とディスカッション</li> <li>8. 担当者による報告とディスカッション</li> <li>9. 担当者による報告とディスカッション</li> <li>10. 担当者による報告とディスカッション</li> <li>11. 担当者による報告とディスカッション</li> <li>12. 担当者による報告とディスカッション</li> <li>13. 担当者による報告とディスカッション</li> <li>14. 担当者による報告とディスカッション</li> <li>15. 担当者による報告とディスカッション</li> </ol> |        |          |          |         |
| 各科目の目標(達成水準) | 基礎的な文献を読み、応用倫理学の基本的なアプローチとその問題点について理解すること  |        |          |          |         |
| 参考文献等        | 有福孝岳編、1999、『エチカとは何か：現代倫理学入門』、ナカニシヤ出版。<br>戸田山和久/出口康夫編、2011、応用哲学を学ぶ人のために、世界思想社。  |        |          |          |         |
| 教科書          | Earl R., Winkler and Jerrold R. Coombs eds., 1993, Applied Ethics: A Reader, Blackwell.  |        |          |          |         |
| 成績評価の基準と方法   | 各報告、ディスカッション、期末レポートをもとに総合的に理解度を評価する  |        |          |          |         |

|              |   |        |          |          |     |       |
|--------------|---|--------|----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12656   | 授業題目   | 応用倫理学演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 2        | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 岩佐 光広   |        | 担当教員所属   | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 応用倫理学演習Ⅰを受講していることが望ましい。<br>英語で書かれた文献を読む英語力を必要とする。   |        |          |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 生命倫理学の人類学的再考、ラオスおよび在日ラオス系定住者の文化人類学的研究   |        |          |          |     |       |
| 授業計画         | <p>生命倫理学は応用倫理学の代表的な領域の一つであるが、近年、哲学・倫理学以外の人文・社会科学の領域からの批判的再考が進められている。人類学・社会学・歴史学からの生命倫理学への批判点を理解し、従来のものとは異なるアプローチの可能性を探る。下記の教科書から受講生の関心にもとづき論文を選び輪読する。なお、他に関心のある文献等がある場合には相談に応じる。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. イントロダクション(授業の概要の説明と報告分担の決定)</li> <li>2. 担当者による報告とディスカッション</li> <li>3. 担当者による報告とディスカッション</li> <li>4. 担当者による報告とディスカッション</li> <li>5. 担当者による報告とディスカッション</li> <li>6. 担当者による報告とディスカッション</li> <li>7. 担当者による報告とディスカッション</li> <li>8. 担当者による報告とディスカッション</li> <li>9. 担当者による報告とディスカッション</li> <li>10. 担当者による報告とディスカッション</li> <li>11. 担当者による報告とディスカッション</li> <li>12. 担当者による報告とディスカッション</li> <li>13. 担当者による報告とディスカッション</li> <li>14. 担当者による報告とディスカッション</li> <li>15. 担当者による報告とディスカッション</li> </ol> |        |          |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 従来の生命倫理学のアプローチの利点と問題性を理解し、それとは異なる代替的なアプローチの可能性を理解すること。  |        |          |          |     |       |
| 参考文献等        | <p>有福孝岳編、1999、『エチカとは何か：現代倫理学入門』、ナカニシヤ出版。<br/> 戸田山和久/出口康夫編、2011、応用哲学を学ぶ人のために、世界思想社。<br/> Earl R., Winkler and Jerrold R. Coombs eds., 1993, Applied Ethics: A Reader, Blackwell.</p>   |        |          |          |     |       |
| 教科書          | George Weisz ed., 1990, Social Science Perspectives on Medical Ethics, Kluwer Academic Publishers.  |        |          |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 各報告、ディスカッション、期末レポートをもとに総合的に理解度を評価する   |        |          |          |     |       |

|                           |   |        |           |          |         |                  |                            |                           |                            |                           |                            |                           |                            |                           |                            |                           |             |                           |  |                           |  |                           |  |
|---------------------------|---|--------|-----------|----------|---------|------------------|----------------------------|---------------------------|----------------------------|---------------------------|----------------------------|---------------------------|----------------------------|---------------------------|----------------------------|---------------------------|-------------|---------------------------|--|---------------------------|--|---------------------------|--|
| 授業コード                     | 12657   | 授業題目   | 人間存在論演習 I | 単位数      | 2       |                  |                            |                           |                            |                           |                            |                           |                            |                           |                            |                           |             |                           |  |                           |  |                           |  |
| 授業種別                      | 演習  | 履修開始年次 | 1         | 開講時期     | 2 曜日・時限 |                  |                            |                           |                            |                           |                            |                           |                            |                           |                            |                           |             |                           |  |                           |  |                           |  |
| 担当教員名                     | 武藤整司  |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |         |                  |                            |                           |                            |                           |                            |                           |                            |                           |                            |                           |             |                           |  |                           |  |                           |  |
| 履修における注意点                 | 積極的な態度で参加すること   |        |           |          |         |                  |                            |                           |                            |                           |                            |                           |                            |                           |                            |                           |             |                           |  |                           |  |                           |  |
| 教員研究テーマ                   | 人間性をめぐる問題、とくにフランス・モラリストの視点を重視。ただし、時代や洋の東西を問わず、幅広く「人間存在論」を捉える。   |        |           |          |         |                  |                            |                           |                            |                           |                            |                           |                            |                           |                            |                           |             |                           |  |                           |  |                           |  |
| 授業計画                      | <p>原則として、テキストを精読してゆく。テキストは、J.S.Mill, <i>The Subjection of Women</i>, 1869. 原文と現代語訳(ない場合は原文のみ)を併せ読むことによって、著者の意図を探るとともに、テキストが発表された当時の状況を考察する。また、政治・経済・宗教・学問・教育・産業・文化・慣習などの側面を押さえつつ、多角的な考察の方法を身に着ける。人間存在の多様性に対応するためである。</p> <p>なお、この演習は I であるが、必ずしも II と関連するわけではない。</p> <table> <tr> <td>第1回 演習のイントロダクション</td> <td>第10回 Chapter 2 (p.143-145)</td> </tr> <tr> <td>第2回 Chapter 1 (p.119-121)</td> <td>第11回 Chapter 2 (p.146-148)</td> </tr> <tr> <td>第3回 Chapter 1 (p.122-124)</td> <td>第12回 Chapter 2 (p.149-151)</td> </tr> <tr> <td>第4回 Chapter 1 (p.125-127)</td> <td>第13回 Chapter 2 (p.152-154)</td> </tr> <tr> <td>第5回 Chapter 1 (p.128-130)</td> <td>第14回 Chapter 2 (p.155-157)</td> </tr> <tr> <td>第6回 Chapter 1 (p.131-133)</td> <td>第15回 演習のまとめ</td> </tr> <tr> <td>第7回 Chapter 1 (p.134-136)</td> <td></td> </tr> <tr> <td>第8回 Chapter 1 (p.137-139)</td> <td></td> </tr> <tr> <td>第9回 Chapter 1 (p.140-142)</td> <td></td> </tr> </table> |        |           |          |         | 第1回 演習のイントロダクション | 第10回 Chapter 2 (p.143-145) | 第2回 Chapter 1 (p.119-121) | 第11回 Chapter 2 (p.146-148) | 第3回 Chapter 1 (p.122-124) | 第12回 Chapter 2 (p.149-151) | 第4回 Chapter 1 (p.125-127) | 第13回 Chapter 2 (p.152-154) | 第5回 Chapter 1 (p.128-130) | 第14回 Chapter 2 (p.155-157) | 第6回 Chapter 1 (p.131-133) | 第15回 演習のまとめ | 第7回 Chapter 1 (p.134-136) |  | 第8回 Chapter 1 (p.137-139) |  | 第9回 Chapter 1 (p.140-142) |  |
| 第1回 演習のイントロダクション          | 第10回 Chapter 2 (p.143-145)  |        |           |          |         |                  |                            |                           |                            |                           |                            |                           |                            |                           |                            |                           |             |                           |  |                           |  |                           |  |
| 第2回 Chapter 1 (p.119-121) | 第11回 Chapter 2 (p.146-148)  |        |           |          |         |                  |                            |                           |                            |                           |                            |                           |                            |                           |                            |                           |             |                           |  |                           |  |                           |  |
| 第3回 Chapter 1 (p.122-124) | 第12回 Chapter 2 (p.149-151)  |        |           |          |         |                  |                            |                           |                            |                           |                            |                           |                            |                           |                            |                           |             |                           |  |                           |  |                           |  |
| 第4回 Chapter 1 (p.125-127) | 第13回 Chapter 2 (p.152-154)  |        |           |          |         |                  |                            |                           |                            |                           |                            |                           |                            |                           |                            |                           |             |                           |  |                           |  |                           |  |
| 第5回 Chapter 1 (p.128-130) | 第14回 Chapter 2 (p.155-157)  |        |           |          |         |                  |                            |                           |                            |                           |                            |                           |                            |                           |                            |                           |             |                           |  |                           |  |                           |  |
| 第6回 Chapter 1 (p.131-133) | 第15回 演習のまとめ   |        |           |          |         |                  |                            |                           |                            |                           |                            |                           |                            |                           |                            |                           |             |                           |  |                           |  |                           |  |
| 第7回 Chapter 1 (p.134-136) |   |        |           |          |         |                  |                            |                           |                            |                           |                            |                           |                            |                           |                            |                           |             |                           |  |                           |  |                           |  |
| 第8回 Chapter 1 (p.137-139) |   |        |           |          |         |                  |                            |                           |                            |                           |                            |                           |                            |                           |                            |                           |             |                           |  |                           |  |                           |  |
| 第9回 Chapter 1 (p.140-142) |   |        |           |          |         |                  |                            |                           |                            |                           |                            |                           |                            |                           |                            |                           |             |                           |  |                           |  |                           |  |
| 各科目の目標(達成水準)              | テキストの深い理解。  |        |           |          |         |                  |                            |                           |                            |                           |                            |                           |                            |                           |                            |                           |             |                           |  |                           |  |                           |  |
| 参考文献等                     | 適宜、演習中に指示。  |        |           |          |         |                  |                            |                           |                            |                           |                            |                           |                            |                           |                            |                           |             |                           |  |                           |  |                           |  |
| 教科書                       | 参加学生と相談して決める。   |        |           |          |         |                  |                            |                           |                            |                           |                            |                           |                            |                           |                            |                           |             |                           |  |                           |  |                           |  |
| 成績評価の基準と方法                | 平常点で評価。場合によってはレポートを課す。  |        |           |          |         |                  |                            |                           |                            |                           |                            |                           |                            |                           |                            |                           |             |                           |  |                           |  |                           |  |

|                  |   |        |          |          |     |       |                  |                  |                  |                   |                 |                   |                  |                   |                  |                   |                  |             |                  |             |                  |  |
|------------------|---|--------|----------|----------|-----|-------|------------------|------------------|------------------|-------------------|-----------------|-------------------|------------------|-------------------|------------------|-------------------|------------------|-------------|------------------|-------------|------------------|--|
| 授業コード            | 12658   | 授業題目   | 人間存在論演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |                  |                  |                  |                   |                 |                   |                  |                   |                  |                   |                  |             |                  |             |                  |  |
| 授業種別             | 演習  | 履修開始年次 | 2        | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |                  |                  |                  |                   |                 |                   |                  |                   |                  |                   |                  |             |                  |             |                  |  |
| 担当教員名            | 武藤 整司   |        | 担当教員所属   | 人文社会科学専攻 |     |       |                  |                  |                  |                   |                 |                   |                  |                   |                  |                   |                  |             |                  |             |                  |  |
| 履修における注意点        | 積極的な態度で参加すること   |        |          |          |     |       |                  |                  |                  |                   |                 |                   |                  |                   |                  |                   |                  |             |                  |             |                  |  |
| 教員研究テーマ          | 人間性をめぐる問題、とくにフランス・モラリストの視点を重視。ただし、時代や洋の東西を問わず、幅広く「人間存在論」を捉える。   |        |          |          |     |       |                  |                  |                  |                   |                 |                   |                  |                   |                  |                   |                  |             |                  |             |                  |  |
| 授業計画             | <p>原則として、テキストを精読してゆく。テキストは、F. Poulain de la Barre, <i>De L'Egalite des Deux Sexes</i>, 1673.</p> <p>原文と現代語訳(ない場合は原文のみ)を併せ読むことによって、著者の意図を探るとともに、テキストが発表された当時の状況を考察する。また、政治・経済・宗教・学問・教育・産業・文化・慣習などの側面を押さえつつ、多角的な考察の方法を身に着ける。人間存在の多様性に対応するためである。</p> <p>なお、この演習はⅡであるが、必ずしもⅠと連関するわけではない。</p> <table border="0"> <tr> <td>第1回 演習のイントロダクション</td> <td>第9回 第一部(p.30-32)</td> </tr> <tr> <td>第2回 緒言・序文(p.6-9)</td> <td>第10回 第一部(p.33-35)</td> </tr> <tr> <td>第3回 序文(p.10-12)</td> <td>第11回 第一部(p.36-38)</td> </tr> <tr> <td>第4回 第一部(p.15-17)</td> <td>第12回 第一部(p.39-41)</td> </tr> <tr> <td>第5回 第一部(p.18-20)</td> <td>第13回 第一部(p.42-43)</td> </tr> <tr> <td>第6回 第一部(p.21-23)</td> <td>第14回 第二部の展望</td> </tr> <tr> <td>第7回 第一部(p.24-26)</td> <td>第15回 演習のまとめ</td> </tr> <tr> <td>第8回 第一部(p.27-29)</td> <td></td> </tr> </table> |        |          |          |     |       | 第1回 演習のイントロダクション | 第9回 第一部(p.30-32) | 第2回 緒言・序文(p.6-9) | 第10回 第一部(p.33-35) | 第3回 序文(p.10-12) | 第11回 第一部(p.36-38) | 第4回 第一部(p.15-17) | 第12回 第一部(p.39-41) | 第5回 第一部(p.18-20) | 第13回 第一部(p.42-43) | 第6回 第一部(p.21-23) | 第14回 第二部の展望 | 第7回 第一部(p.24-26) | 第15回 演習のまとめ | 第8回 第一部(p.27-29) |  |
| 第1回 演習のイントロダクション | 第9回 第一部(p.30-32)  |        |          |          |     |       |                  |                  |                  |                   |                 |                   |                  |                   |                  |                   |                  |             |                  |             |                  |  |
| 第2回 緒言・序文(p.6-9) | 第10回 第一部(p.33-35)   |        |          |          |     |       |                  |                  |                  |                   |                 |                   |                  |                   |                  |                   |                  |             |                  |             |                  |  |
| 第3回 序文(p.10-12)  | 第11回 第一部(p.36-38)   |        |          |          |     |       |                  |                  |                  |                   |                 |                   |                  |                   |                  |                   |                  |             |                  |             |                  |  |
| 第4回 第一部(p.15-17) | 第12回 第一部(p.39-41)   |        |          |          |     |       |                  |                  |                  |                   |                 |                   |                  |                   |                  |                   |                  |             |                  |             |                  |  |
| 第5回 第一部(p.18-20) | 第13回 第一部(p.42-43)   |        |          |          |     |       |                  |                  |                  |                   |                 |                   |                  |                   |                  |                   |                  |             |                  |             |                  |  |
| 第6回 第一部(p.21-23) | 第14回 第二部の展望   |        |          |          |     |       |                  |                  |                  |                   |                 |                   |                  |                   |                  |                   |                  |             |                  |             |                  |  |
| 第7回 第一部(p.24-26) | 第15回 演習のまとめ   |        |          |          |     |       |                  |                  |                  |                   |                 |                   |                  |                   |                  |                   |                  |             |                  |             |                  |  |
| 第8回 第一部(p.27-29) |   |        |          |          |     |       |                  |                  |                  |                   |                 |                   |                  |                   |                  |                   |                  |             |                  |             |                  |  |
| 各科目の目標(達成水準)     | テキストの深い理解。  |        |          |          |     |       |                  |                  |                  |                   |                 |                   |                  |                   |                  |                   |                  |             |                  |             |                  |  |
| 参考文献等            | 適宜、演習中に指示。  |        |          |          |     |       |                  |                  |                  |                   |                 |                   |                  |                   |                  |                   |                  |             |                  |             |                  |  |
| 教科書              | 参加学生と相談して決める。   |        |          |          |     |       |                  |                  |                  |                   |                 |                   |                  |                   |                  |                   |                  |             |                  |             |                  |  |
| 成績評価の基準と方法       | 平常点で評価。場合によってはレポートを課す。  |        |          |          |     |       |                  |                  |                  |                   |                 |                   |                  |                   |                  |                   |                  |             |                  |             |                  |  |

|              |   |        |          |          |     |       |
|--------------|---|--------|----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12659   | 授業題目   | 宗教思想演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 1        | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 安藤 恵崇   |        | 担当教員所属   | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 特になし  |        |          |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 宗教哲学および宗教学・神話学  |        |          |          |     |       |
| 授業計画         | <p>ベルクソン『道徳と宗教の二源泉』を精読する。1回目は説明で、次回から調べて報告してもらう。また途中で研究の進展について報告する回を設定する。</p> <p>第1回 イン트로ダクション テキストとベルクソン哲学の概観 担当決め<br/> 第2回 テキストの輪読(1)冒頭からはじめる<br/> 第3回 テキストの輪読(2)<br/> 第4回 テキストの輪読(3)<br/> 第5回 テキストの輪読(4)<br/> 第6回 研究の中間報告<br/> 第7回 テキストの輪読(5) 続き<br/> 第8回 テキストの輪読(6)<br/> 第9回 テキストの輪読(7)<br/> 第10回 テキストの輪読(8)<br/> 第11回 テキストの輪読(9)<br/> 第12回 テキストの輪読(10)<br/> 第13回 テキストの輪読(11)<br/> 第14回 テキストの輪読(12)<br/> 第15回 研究の報告</p> |        |          |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | テキストの内容を著者の意図に沿って精読する   |        |          |          |     |       |
| 参考文献等        | 講義にて示す。   |        |          |          |     |       |
| 教科書          | 特につかわない。  |        |          |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 4000字以上のレポートをもって評価する。   |        |          |          |     |       |

|              |  |        |         |          |     |       |
|--------------|--|--------|---------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12660  | 授業題目   | 宗教思想演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 2       | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 安藤 恵崇  |        | 担当教員所属  | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 特になし   |        |         |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 宗教哲学および宗教学・神話学   |        |         |          |     |       |
| 授業計画         | <p>ベルクソン『道徳と宗教の二源泉』を精読する。1回めは説明で、次回から調べて報告してもらう。また途中で研究の進展について報告する回を設定する。</p> <p>第1回 イン트로ダクション テキストとベルクソン哲学の概観 担当決め<br/> 第2回 テキストの輪読(1)冒頭からはじめる<br/> 第3回 テキストの輪読(2)<br/> 第4回 テキストの輪読(3)<br/> 第5回 テキストの輪読(4)<br/> 第6回 研究の中間報告<br/> 第7回 テキストの輪読(5) 続き<br/> 第8回 テキストの輪読(6)<br/> 第9回 テキストの輪読(7)<br/> 第10回 テキストの輪読(8)<br/> 第11回 テキストの輪読(9)<br/> 第12回 テキストの輪読(10)<br/> 第13回 テキストの輪読(11)<br/> 第14回 テキストの輪読(12)<br/> 第15回 修士論文発表会の予行演習</p> |        |         |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | テキストの内容を著者の意図に沿って精読する  |        |         |          |     |       |
| 参考文献等        | 講義にて示す。  |        |         |          |     |       |
| 教科書          | 特につかわない。   |        |         |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 4000字以上のレポートをもって評価する。  |        |         |          |     |       |

|              |   |        |           |          |     |       |
|--------------|---|--------|-----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12663   | 授業題目   | 認知心理学演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 1         | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 池田 和夫   |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |   |        |           |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 家族構造の認知および人間の認知過程に関する心理学的研究   |        |           |          |     |       |
| 授業計画         | <p>認知心理学に関する最新の研究成果を検討する。これを通じて、人間の認知様式の特徴やそれに影響を及ぼす諸要因について考察し、研究発表とディスカッションを行う。</p> <p>第1回 視覚的認知過程に関する研究成果の発表とディスカッション(1)<br/> 第2回 視覚的認知過程に関する研究成果の発表とディスカッション(2)<br/> 第3回 視覚的認知過程に関する研究成果の発表とディスカッション(3)<br/> 第4回 聴覚的認知過程に関する研究成果の発表とディスカッション(1)<br/> 第5回 聴覚的認知過程に関する研究成果の発表とディスカッション(1)<br/> 第6回 聴覚的認知過程に関する研究成果の発表とディスカッション(2)<br/> 第7回 聴覚的認知過程に関する研究成果の発表とディスカッション(3)<br/> 第8回 注意に関する研究成果の発表とディスカッション<br/> 第9回 スキーマに関する研究成果の発表とディスカッション<br/> 第10回 記憶に関する研究成果の発表とディスカッション(1)<br/> 第11回 記憶に関する研究成果の発表とディスカッション(2)<br/> 第12回 記憶に関する研究成果の発表とディスカッション(2)<br/> 第13回 対人認知に関する研究成果の発表とディスカッション<br/> 第14回 社会的推論に関する研究成果の発表とディスカッション<br/> 第15回 家族構造の認知に関する研究成果の発表とディスカッション</p> |        |           |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 最新の認知心理学研究の動向を把握し、諸問題を考察する。   |        |           |          |     |       |
| 参考文献等        | 授業において、随時紹介する。  |        |           |          |     |       |
| 教科書          | 特に用いない。資料としてプリントを適宜配布する。  |        |           |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席、研究発表・ディスカッションおよびレポートの結果に基づき総合的に評価する。   |        |           |          |     |       |

|              |  |        |          |          |     |       |
|--------------|--|--------|----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12664  | 授業題目   | 認知心理学演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 2        | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 池田 和夫  |        | 担当教員所属   | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 認知心理学演習Ⅰを履修していることが望ましい。  |        |          |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 家族構造の認知および人間の認知過程に関する心理学的研究  |        |          |          |     |       |
| 授業計画         | <p>認知心理学演習Ⅰの成果を受けて、認知心理学に関するテーマをさらに深く探求する。この演習では、次のような認知心理学的問題について論考する。</p> <p>第1回 視覚的認知過程に関する研究成果の発表とディスカッション(1)<br/> 第2回 視覚的認知過程に関する研究成果の発表とディスカッション(2)<br/> 第3回 視覚的認知過程に関する研究成果の発表とディスカッション(3)<br/> 第4回 聴覚的認知過程に関する研究成果の発表とディスカッション(1)<br/> 第5回 聴覚的認知過程に関する研究成果の発表とディスカッション(1)<br/> 第6回 聴覚的認知過程に関する研究成果の発表とディスカッション(2)<br/> 第7回 聴覚的認知過程に関する研究成果の発表とディスカッション(3)<br/> 第8回 注意に関する研究成果の発表とディスカッション<br/> 第9回 スキーマに関する研究成果の発表とディスカッション<br/> 第10回 記憶に関する研究成果の発表とディスカッション(1)<br/> 第11回 記憶に関する研究成果の発表とディスカッション(2)<br/> 第12回 記憶に関する研究成果の発表とディスカッション(2)<br/> 第13回 対人認知に関する研究成果の発表とディスカッション<br/> 第14回 社会的推論に関する研究成果の発表とディスカッション<br/> 第15回 家族構造の認知に関する研究成果の発表とディスカッション</p> |        |          |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 最新の認知心理学研究の動向を把握し、諸問題を考察する。  |        |          |          |     |       |
| 参考文献等        | 授業において、随時紹介する。   |        |          |          |     |       |
| 教科書          | 特に用いない。資料としてプリントを適宜配布する。   |        |          |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席、研究発表・ディスカッションおよびレポートの結果に基づき総合的に評価する。  |        |          |          |     |       |

|              |   |        |           |          |     |       |
|--------------|---|--------|-----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12665   | 授業題目   | 発達心理学演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 1         | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 塩坪 いく子  |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 関連する文献を十分読むこと   |        |           |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 乳幼児期の空間認知と言語発達  |        |           |          |     |       |
| 授業計画         | <p>乳幼児期の空間認知および言語発達に関する研究の中で、受講学生の研究分野と関連する文献を読みながら、その分野の研究の概要を把握し、新たな研究の展開を検討する。</p> <p>第1回： 学生の学問的関心を確認した上で指導方法を決定する。<br/>以下のトピックに関する文献を読み、その内容に関してディスカッションを行う。ただし、学生の関心に応じて取り上げられるトピックや内容が変更される可能性はある。</p> <p>第2回： 空間認知研究の歴史と発達の研究の重要性<br/>第3回： 自己の身体と外部世界の認識－乳児期（1）<br/>第4回： 自己の身体と外部世界の認識－乳児期（2）<br/>第5回： 幼児期の空間認知<br/>第6回： 空間認知の異常と発達の研究<br/>第7回： 空間認知に関する研究計画の発表とディスカッション<br/>第8回： 言語獲得に関する発達の研究の歴史 — ピアジェ、ヴィゴツキー、スキナー、チョムスキー<br/>第9回： 言語音の獲得（1） — 聴覚<br/>第10回： 言語音の獲得（2） — 発声<br/>第11回： コミュニケーション行動の基礎（1） — 社会的相互関係の発達<br/>第12回： コミュニケーション行動の基礎（2） — 社会的認知能力の発達<br/>第13回： 言語能力の基礎（1） — シンボル、表象<br/>第14回： 言語能力の基礎（2） — 模倣<br/>第15回： 言語獲得に関する研究計画の発表とディスカッション</p> |        |           |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 必要な文献を読破し、研究内容を正確に把握した上で、新たな問題の提起を可能とすること。  |        |           |          |     |       |
| 参考文献等        | 随時紹介  |        |           |          |     |       |
| 教科書          | 特になし  |        |           |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | レポート  |        |           |          |     |       |

|              |  |        |          |          |     |       |
|--------------|--|--------|----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12666  | 授業題目   | 発達心理学演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 2        | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 塩坪 いく子   |        | 担当教員所属   | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 関連する文献を十分読むこと  |        |          |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 乳幼児期の空間認知と言語発達   |        |          |          |     |       |
| 授業計画         | <p>乳幼児期の空間認知および言語発達に関する研究の中で、受講学生の研究分野と関連する先行研究を踏まえ、自身の研究計画を立案し実行する。</p> <p>第1回： 学生の学問的関心および指導方法の確認<br/> 第2回： 関連する研究分野の研究紹介とディスカッション<br/> 第3回： 関連研究の紹介とディスカッション (1)<br/> 第4回： 研究トピックの発表とディスカッション (1)<br/> 第5回： 研究トピックの発表とディスカッション (2)<br/> 第6回： 研究計画の発表とディスカッション (1)<br/> 第7回： 研究計画の発表とディスカッション (2)<br/> 第8回： 先行研究のまとめとディスカッション<br/> 第9回： 関連研究の紹介とディスカッション (2)<br/> 第10回： 研究の中間報告とディスカッション (1)<br/> 第11回： 研究の中間報告とディスカッション (2)<br/> 第12回： 関連研究の紹介とディスカッション(3)<br/> 第13回： 研究の中間報告ディスカッション (3)<br/> 第14回： 関連研究の紹介とディスカッション(4)<br/> 第15回： 研究報告とディスカッション</p> |        |          |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 実験的研究の計画を立案し実行すること   |        |          |          |     |       |
| 参考文献等        | 随時紹介   |        |          |          |     |       |
| 教科書          | 特になし   |        |          |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | レポート   |        |          |          |     |       |

|              |  |        |           |          |         |
|--------------|--|--------|-----------|----------|---------|
| 授業コード        | 12667  | 授業題目   | 社会心理学演習 I | 単位数      | 2       |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 1         | 開講時期     | 2 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 増田 匡裕  |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |         |
| 履修における注意点    | Consent of Instructor  |        |           |          |         |
| 教員研究テーマ      | 親しい対人関係の発達過程におけるコミュニケーション／喪失の社会心理学   |        |           |          |         |
| 授業計画         | <p>感情心理学に関するさまざまな研究論文を発表・ディスカッションする中で、研究結果をまとめ、理解を深めます。従来の研究により検討された要因以外にも、感情に影響する要因やその機序について考察します。それらをふまえた上で、研究計画を立案します。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション</li> <li>2. 題材とする感情、発表論文の選択</li> <li>3. 論文の発表とディスカッション I</li> <li>4. 論文の発表とディスカッション II</li> <li>5. 論文の発表とディスカッション III</li> <li>6. 論文の発表とディスカッション IV</li> <li>7. 論文の発表とディスカッション V</li> <li>8. 論文の発表とディスカッション VI</li> <li>9. 論文の発表とディスカッション VII</li> <li>10. 論文の発表とディスカッション VIII</li> <li>11. 論文の発表とディスカッション IX</li> <li>12. 要因図の作成</li> <li>13. 仮説の設定</li> <li>14. 研究計画の立案</li> <li>15. 総括</li> </ol> |        |           |          |         |
| 各科目の目標(達成水準) | 対人関係研究の重要トピックを学際的な視点から理解すること   |        |           |          |         |
| 参考文献等        | 適宜指示する   |        |           |          |         |
| 教科書          | Hendrick, C. & Hendrick, S.S. (2000). <u>Close relationships: A sourcebook</u> . Thousand Oaks, CA: Sage.  |        |           |          |         |
| 成績評価の基準と方法   | 発表40%とリサーチプロポーザル60%  |        |           |          |         |

|              |   |        |          |          |     |       |
|--------------|---|--------|----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12668   | 授業題目   | 社会心理学演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 2        | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 増田 匡裕   |        | 担当教員所属   | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | Consent of Instructor   |        |          |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 親しい対人関係の発達過程におけるコミュニケーション／喪失の社会心理学  |        |          |          |     |       |
| 授業計画         | <p>感情心理学に関する先行研究の知見をまとめ、研究計画を立案します。立案した計画に基づいた研究を実施し、そのデータを分析します。さらに、研究の意義を考えながら、分析によりデータをまとめ、結果を考察します。これらを通して、感情心理学における研究の位置づけについて検討します。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション</li> <li>2. 題材とする感情の選択</li> <li>3. 論文の発表とディスカッションⅠ</li> <li>4. 論文の発表とディスカッションⅡ</li> <li>5. 論文の発表とディスカッションⅢ</li> <li>6. 先行研究の知見のまとめ</li> <li>7. 研究計画の立案</li> <li>8. 研究実施準備Ⅰ</li> <li>9. 研究実施準備Ⅱ</li> <li>10. 分析方法の検討</li> <li>11. 分析の実施</li> <li>12. 研究結果のまとめ</li> <li>13. 結果より得られる知見の考察Ⅰ</li> <li>14. 結果より得られる知見の考察Ⅱ</li> <li>15. 総括</li> </ol> |        |          |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 対人関係研究の重要トピックの中から修士論文研究課題を決め、リサーチプロポーザルを書き上げること   |        |          |          |     |       |
| 参考文献等        | 適宜指示する  |        |          |          |     |       |
| 教科書          | 専門誌(英文) Journal of Social & Personal Relationshipsなど  |        |          |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 発表25%とリサーチプロポーザル75%   |        |          |          |     |       |

|              |   |        |           |          |     |       |
|--------------|---|--------|-----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12669   | 授業題目   | 感情心理学演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 1         | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 日比野 桂   |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 感情心理学特論を履修した学生を対象とする。   |        |           |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 感情経験および感情喚起に伴う行動に関する心理学的研究  |        |           |          |     |       |
| 授業計画         | <p>感情心理学に関するさまざまな研究論文を発表・ディスカッションする中で、研究結果をまとめ、理解を深めます。従来の研究により検討された要因以外にも、感情に影響する要因やその機序について考察します。それらをふまえた上で、研究計画を立案します。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション</li> <li>2. 題材とする感情, 発表論文の選択</li> <li>3. 論文の発表とディスカッション I</li> <li>4. 論文の発表とディスカッション II</li> <li>5. 論文の発表とディスカッション III</li> <li>6. 論文の発表とディスカッション IV</li> <li>7. 論文の発表とディスカッション V</li> <li>8. 論文の発表とディスカッション VI</li> <li>9. 論文の発表とディスカッション VII</li> <li>10. 論文の発表とディスカッション VIII</li> <li>11. 論文の発表とディスカッション IX</li> <li>12. 要因図の作成</li> <li>13. 仮説の設定</li> <li>14. 研究計画の立案</li> <li>15. 総括</li> </ol> |        |           |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 感情心理学に関する具体的な研究計画の立案  |        |           |          |     |       |
| 参考文献等        | 授業内で必要に応じて紹介予定  |        |           |          |     |       |
| 教科書          | 授業内で必要に応じて紹介予定  |        |           |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席状況, 参加態度, レポートなどに基づき, 総合的に評価します。  |        |           |          |     |       |

|              |   |        |          |          |     |       |
|--------------|---|--------|----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12670   | 授業題目   | 感情心理学演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 2        | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 日比野 桂   |        | 担当教員所属   | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 感情心理学特論および感情心理学演習Ⅰを履修した学生を対象とする。  |        |          |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 感情経験および感情喚起に伴う行動に関する心理学的研究  |        |          |          |     |       |
| 授業計画         | <p>感情心理学に関する先行研究の知見をまとめ、研究計画を立案します。立案した計画に基づいた研究を実施し、そのデータを分析します。さらに、研究の意義を考えながら、分析によりデータをまとめ、結果を考察します。これらを通して、感情心理学における研究の位置づけについて検討します。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション</li> <li>2. 題材とする感情の選択</li> <li>3. 論文の発表とディスカッションⅠ</li> <li>4. 論文の発表とディスカッションⅡ</li> <li>5. 論文の発表とディスカッションⅢ</li> <li>6. 先行研究の知見のまとめ</li> <li>7. 研究計画の立案</li> <li>8. 研究実施準備Ⅰ</li> <li>9. 研究実施準備Ⅱ</li> <li>10. 分析方法の検討</li> <li>11. 分析の実施</li> <li>12. 研究結果のまとめ</li> <li>13. 結果より得られる知見の考察Ⅰ</li> <li>14. 結果より得られる知見の考察Ⅱ</li> <li>15. 総括</li> </ol> |        |          |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 感情心理学に関する研究実施および分析  |        |          |          |     |       |
| 参考文献等        | 授業内で必要に応じて紹介予定  |        |          |          |     |       |
| 教科書          | 授業内で必要に応じて紹介予定  |        |          |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席状況、参加態度、レポートなどに基づき、総合的に評価します。   |        |          |          |     |       |

|              |  |        |           |          |     |       |
|--------------|--|--------|-----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12673  | 授業題目   | 言語意味論演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 1         | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 加藤 勉   |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 言語の意味論的研究を行う予定であること。   |        |           |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 英語の複数名詞句および総称性の意味論的研究。   |        |           |          |     |       |
| 授業計画         | <p>Alan Cruise (2004). <i>Meaning in Language: An Introduction to Semantics and Pragmatics</i> (2nd ed.) の第1章 Introduction から第4章 Compositionality を読み、授業中に発表とディスカッションを行う。発表とディスカッションを通して、言語の意味論的研究においてもっとも基本となる考え方を整理し、言語的意味にかかわる事象を考察に必要な考え方を身につける。</p> <p>第1回 「授業の計画と概要」について<br/> 第2回 「言語の性質と意味研究」について<br/> 第3回 「論理的意味」について<br/> 第4回 「量化」について<br/> 第5回 「意味のタイプ」について<br/> 第6回 「記述的意味」について<br/> 第7回 「意味の構成性」について<br/> 第8回 「意味の構成性の限界」について<br/> 第9回 「語の意味の性質」について<br/> 第10回 「語彙的意味論の主要問題」について<br/> 第11回 「語の意味の多様性」について<br/> 第12回 「語の意味と概念」について<br/> 第13回 「意味関係の特質」について<br/> 第14回 「意味的包含と同一性」について<br/> 第15回 「意味的除外と対立」について</p> |        |           |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 論文作成に必要な基礎的知識を身につける。   |        |           |          |     |       |
| 参考文献等        | 授業ごとに適宜紹介する。   |        |           |          |     |       |
| 教科書          | プリントを配布する。   |        |           |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 授業への参加態度と、期末レポートを総合的に評価する。   |        |           |          |     |       |

|              |  |        |          |          |     |       |
|--------------|--|--------|----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12674  | 授業題目   | 言語意味論演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 2        | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 加藤 勉   |        | 担当教員所属   | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 言語の意味論的研究を行う予定であること。   |        |          |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 英語の複数名詞句および総称性の意味論的研究。   |        |          |          |     |       |
| 授業計画         | <p>Alan Cruise (2004). <i>Meaning in Language: An Introduction to Semantics and Pragmatics</i> (2nd ed.) の第5章 Introduction to lexical semantics から第9章 Pragmatic relations of exclusion and opposition を読み、授業中に発表とディスカッションを行う。発表とディスカッションを通して、言語の意味論的研究においてもっとも基本となる語彙の意味論の考え方を理解し、語の意味と概念の関係の考察を経て、語用論的な考え方までを理解する。</p> <p>第1回 「授業の計画と概要」について<br/> 第2回 「語の相互関係」について<br/> 第3回 「意味の拡張」について<br/> 第4回 「メタファーとメトニミー」について<br/> 第5回 「語の共起」について<br/> 第6回 「語彙的分解」について<br/> 第7回 「名詞(句)の文法的意味」について<br/> 第8回 「動詞の文法的意味」について<br/> 第9回 「指示」について<br/> 第10回 「直示」について<br/> 第11回 「発話行為」について<br/> 第12回 「発話内行為」について<br/> 第13回 「会話の含意」について<br/> 第14回 「ポライトネス」について<br/> 第15回 「関連性理論」について</p> |        |          |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 論文作成に必要な考え方と方法論を身につける。   |        |          |          |     |       |
| 参考文献等        | 授業ごとに適宜紹介する。   |        |          |          |     |       |
| 教科書          | プリントを配布する。   |        |          |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 授業への参加態度と、期末レポートを総合的に評価する。   |        |          |          |     |       |

|              |   |        |          |          |         |
|--------------|---|--------|----------|----------|---------|
| 授業コード        | 12675   | 授業題目   | 言語文法論演習I | 単位数      | 2       |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 1        | 開講時期     | 2 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 西尾 美穂   |        | 担当教員所属   | 人文社会科学専攻 |         |
| 履修における注意点    | 特になし  |        |          |          |         |
| 教員研究テーマ      | 通時的統語論  |        |          |          |         |
| 授業計画         | <p>Historical Linguisticsをテキストとして、通時的言語研究の概要を学ぶ。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 Introduction</li> <li>2 Sound Change</li> <li>3 Borrowing</li> <li>4 Analogical Change</li> <li>5 The Comparative Method and Linguistic Reconstruction</li> <li>6 Linguistic Classification</li> <li>7 Models of Linguistic Change</li> <li>8 Internal Reconstruction</li> <li>9 Semantic Change and Lexical Change</li> <li>10 Syntactic Change</li> <li>11 Explaining Linguistic Change</li> <li>12 Areal Linguistic</li> <li>13 Distant Genetic Relationship</li> <li>14 Philology: The Role of Written Records</li> <li>15 Linguistic Prehistory</li> </ol> |        |          |          |         |
| 各科目の目標(達成水準) | 通時的言語研究の基礎知識を身につける。   |        |          |          |         |
| 参考文献等        |   |        |          |          |         |
| 教科書          | Historical Linguistics Lyle Campbell 2nd ed MIT Press   |        |          |          |         |
| 成績評価の基準と方法   | 受講態度と期末試験により総合的に評価する。   |        |          |          |         |

|              |  |        |           |          |         |
|--------------|--|--------|-----------|----------|---------|
| 授業コード        | 12676  | 授業題目   | 言語文法論演習II | 単位数      | 2       |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 2         | 開講時期     | 1 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 西尾 美穂  |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |         |
| 履修における注意点    | 特になし   |        |           |          |         |
| 教員研究テーマ      | 通時的統語論   |        |           |          |         |
| 授業計画         | <p>Diachronic Syntaxをテキストとして先生文法の枠組みに通時的言語研究の方法を学ぶ。</p> <p>1 Comparative and Historical Syntax in the Principles and Parameters Approach: UG and variation in grammatical systems</p> <p>2 Verb-movement parameters</p> <p>3 Wh-movement</p> <p>4 Types of Syntactic Change: Reanalysis</p> <p>5 Argument Structure</p> <p>6 Word-order change</p> <p>7 Acquisition, Learnability, and Syntactic Change: First-Language Acquisition from a Principles-and-Parameters Perspective</p> <p>8 The Changing Trigger</p> <p>9 Cue-driven Parameter-Resetting</p> <p>10 Markedness and Complexity: The Concept of Markedness</p> <p>11 The Subset Principle</p> <p>12 Markedness and Inflectional Morphology</p> <p>13 The Dynamics of Syntactic Change: Gradualness</p> <p>14 Drift</p> <p>15 Reconstruction</p> |        |           |          |         |
| 各科目の目標(達成水準) | 生成文法の枠組みによる通時的統語論研究の方法を理解する。   |        |           |          |         |
| 参考文献等        |  |        |           |          |         |
| 教科書          | Diachronic Syntax Ian Roberts Oxford UP  |        |           |          |         |
| 成績評価の基準と方法   | 受講態度と期末試験により総合的に評価する。  |        |           |          |         |

|              |   |        |           |          |     |       |
|--------------|---|--------|-----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12701   | 授業題目   | アメリカ文学論特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義  | 履修開始年次 | 1         | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 藤吉 清次郎  |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |   |        |           |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 人種・宗教・ジェンダーから見るアメリカ小説についての研究  |        |           |          |     |       |
| 授業計画         | <p>宗教・政治・ジェンダー・人種などの観点から、アメリカン・ルネッサンス来の文学作品群に考察を加えていく。具体的には、ホーソーン、ソロー、エマソン、メルヴィルなどの代表的な作品を対象とするが、それらの作品の特質を明確にするために当時の大衆小説も紹介する。その過程において、フーコーの理論を援用しながら、自己形成の在り方を検証する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. イントロダクション</li> <li>2. "Young Goodman Brown"</li> <li>3. "Young Goodman Brown"</li> <li>4. "Young Goodman Brown" の評論</li> <li>5. "The Birthmark"</li> <li>6. "Roger Malvin's Burial"</li> <li>7. The Scarlet Letter</li> <li>8. The Scarlet Letter</li> <li>9. "Nature"</li> <li>10. Moby-Dick</li> <li>11. Moby-Dick</li> <li>12. Pierre</li> <li>13. Billy Budd</li> <li>14. The Wide, Wide World</li> <li>15. Uncle Tom's Cabin</li> </ol> |        |           |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 様々な観点から文学作品に考察を加える過程において、方法論意識と批評力を養成する。  |        |           |          |     |       |
| 参考文献等        | The Cambridge History of American Literature Vol. 2   |        |           |          |     |       |
| 教科書          | テキストにはプリントを使う。第一回目の授業で説明する。   |        |           |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 2/3以上の出席と、課題・レポートによって総合的に判断する。  |        |           |          |     |       |

|              |   |        |           |          |     |       |
|--------------|---|--------|-----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12703   | 授業題目   | イギリス文学論特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義  | 履修開始年次 | 1         | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 宗 洋   |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 特になし。   |        |           |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | ヴィクトリア朝からモダニズムの時期におけるイギリス文学文化   |        |           |          |     |       |
| 授業計画         | <p>イギリス文学特論においては、世紀転換期における空想科学小説、ゴシック小説、冒険小説の流行を当時の時代状況と照らし合わせながら、解説していく。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. イントロダクション</li> <li>2. ヴィクトリア朝時代の状況</li> <li>3. ヴィクトリア朝時代からエドワード朝時代へ</li> <li>4. 『タイム・マシン』</li> <li>5. 『透明人間』</li> <li>6. 『モロー博士の島』</li> <li>7. 『ドラキュラ』</li> <li>8. 『黄金虫』</li> <li>9. 『洞窟の女王』</li> <li>10. 『失われた世界』</li> <li>11. 『宝島』</li> <li>12. グラント・アレンの小説</li> <li>13. 『密偵』</li> <li>14. 風刺小説</li> <li>15. まとめ</li> </ol> |        |           |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 世紀転換期における空想科学小説、ゴシック小説、冒険小説の流行を時代・文化のなかで考える知識を身につけること。  |        |           |          |     |       |
| 参考文献等        | 特になし  |        |           |          |     |       |
| 教科書          | 特になし。読むべき本は初回にプリントで指示する。  |        |           |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | テーマに沿った4000字のレポートを2度課す。そのレポートの内容と出席。  |        |           |          |     |       |

|              |  |        |           |          |     |       |
|--------------|--|--------|-----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12706  | 授業題目   | 西洋思想文化論特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義   | 履修開始年次 | 1         | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 高橋 克己  |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 健康第一を旨に体調を整え授業を休まないよう努力する点   |        |           |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 西洋思想史  |        |           |          |     |       |
| 授業計画         | <p>紀元1世紀の重要文献である『新約聖書』の中の『ヨハネ福音書』1・1-11を、ラテン語文法の基礎知識の整理も兼ねて、まず400年頃のヒエローニムスによる羅訳、つまり後1546年ローマ・カトリック教会が公会議で正典として公認した『ウルガータ聖書』で読み、ラテン語訳で理解可能な範囲において、principiumやverbumやvita等を掴む。次に同じ『ヨハネ福音書』1・1-11の原典を、古代ギリシア語文法の基礎知識の整理も兼ねて、特にラテン語で汲み尽くせない豊かな言葉、ΑΡΧΗやΛΟΓΟΣやΖΩΗ等を重視し、また羅訳ではfactum estと同じ完了過去で片付けられているが、原典ギリシア語では第二アオリスト過去ΕΓΕΝΕΤΟと完了過去ΓΕΓΟΝΕΝで別に表現されている動詞の相にも着目して、注意深く読む。更にΑΡΧΗとΛΟΓΟΣとの関連で重要な『創世記』1・1-10をも同様に、ラテン語文法の基礎知識の整理も兼ねて『ウルガータ聖書』で読み、かつ紀元前3世紀以降翻訳された『70人訳ギリシア語聖書』で古代ギリシア語文法の基礎知識の整理も兼ねて注意深く読む。更にΑΡΧΗやΛΟΓΟΣやΖΩΗ等に関連する古代ギリシア語文献(ヘレニズム期から西ローマ帝国滅亡476年頃まで)に触れてゆく。例えばアリストテレスの『形而上学』983B-988A等々。</p> <p>(1)『ヨハネ福音書』1・1-11と『創世記』1・1-10の和訳(岩波文庫; 1954年-1955年刊[プロテスタント]日本聖書協会『聖書』; 1987年刊・新[カトリック・プロテスタント]共同訳『聖書』)読解。<br/> (2)『ヨハネ福音書』1・1-3ラテン語文(400年頃のヒエローニムスによる羅訳『ウルガータ聖書』)読解。<br/> (3)『ヨハネ福音書』1・4-7ラテン語文(400年頃のヒエローニムスによる羅訳『ウルガータ聖書』)読解。<br/> (4)『ヨハネ福音書』1・8-11ラテン語文(400年頃のヒエローニムスによる羅訳『ウルガータ聖書』)読解。<br/> (5)『ヨハネ福音書』1・1-3原典ギリシア語文読解。<br/> (6)『ヨハネ福音書』1・4-7原典ギリシア語文読解。<br/> (7)『ヨハネ福音書』1・8-11原典ギリシア語文読解。<br/> (8)『創世記』1・1-2ラテン語文(400年頃のヒエローニムスによる羅訳『ウルガータ聖書』)読解。<br/> (9)『創世記』1・3-5ラテン語文(400年頃のヒエローニムスによる羅訳『ウルガータ聖書』)読解。<br/> (10)『創世記』1・6-10ラテン語文(400年頃のヒエローニムスによる羅訳『ウルガータ聖書』)読解。<br/> (11)『創世記』1・1-2(『70人訳ギリシア語聖書』)読解。<br/> (12)『創世記』1・3-5(『70人訳ギリシア語聖書』)読解。<br/> (13)『創世記』1・6-10(『70人訳ギリシア語聖書』)読解。<br/> (14)アリストテレスの『形而上学』983B-988A和訳(岩波文庫・上・32頁-48頁)読解。<br/> (15)アリストテレスの『形而上学』983B-988A原典ギリシア文(1960年復刻・1831年刊・Bekker版)検討。</p> |        |           |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | ヘレニズム期から西ローマ帝国滅亡476年頃までの西洋思想の基本概念を学ぶ   |        |           |          |     |       |
| 参考文献等        | 授業計画の文面に示された原典ギリシア語・ラテン語の文献  |        |           |          |     |       |
| 教科書          | 授業計画の文面に示された原典ギリシア語・ラテン語の和訳文献  |        |           |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 根気良く授業に出席し、毎回学習する内容を自分できちんと整理してゆく能力を評価。  |        |           |          |     |       |

|              |   |        |           |          |     |       |
|--------------|---|--------|-----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12708   | 授業題目   | 現代大衆文化論特論 |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 講義  | 履修開始年次 | 1         | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 山下 興作   |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 特になし  |        |           |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 大衆文化 演劇論 アートマネジメント  |        |           |          |     |       |
| 授業計画         | <p>主としてアメリカの映画、演劇、音楽、マンガ等に代表される現代大衆文化をできるだけ幅広く概観し、その特徴を明らかにしていく。また、それと並行して、日本の大衆文化との比較を試み、異文化理解に資するとともに、そこから国の枠を超えた現代という時代の特色を浮き彫りにしていくことを目指す。本年は特にハリウッドの歴史に焦点をあて、次の項目について順次講義する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. ハリウッド前史</li> <li>2. ハリウッドの始まり</li> <li>3. サイレントの全盛</li> <li>4. トーキーの登場</li> <li>5. 物語の複層化と技巧の前景化</li> <li>6. 第2次世界大戦とハリウッド</li> <li>7. 「赤狩り」の影響</li> <li>8. 50年代のハリウッド</li> <li>9. アメリカン・ニュー・シネマの登場</li> <li>10. ベトナム戦争とハリウッド</li> <li>11. 「スター作家」たちの活躍</li> <li>12. イベント化する映画</li> <li>13. 新たな作家主義</li> <li>14. メガコングロマリット化</li> <li>15. 物語への回帰</li> </ol> |        |           |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 日米他の現代大衆文化に関する基礎知識を習得し、基本的な概念を理解すること  |        |           |          |     |       |
| 参考文献等        | 授業中に、おって指示する  |        |           |          |     |       |
| 教科書          | 必要に応じて、プリントを配布する  |        |           |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席状況、及び学期末に告示する課題の提出により評価する   |        |           |          |     |       |

|              |  |        |             |          |       |     |
|--------------|--|--------|-------------|----------|-------|-----|
| 授業コード        | 12709  | 授業題目   | フランス文芸思潮論特論 |          | 単位数   | 2単位 |
| 授業種別         | 講義   | 履修開始年次 | 1           | 開講時期     | 曜日・時限 |     |
| 担当教員名        | 大西 宗夫  |        | 担当教員所属      | 人文社会科学専攻 |       |     |
| 履修における注意点    |  |        |             |          |       |     |
| 教員研究テーマ      | フランスの思想と文学。  |        |             |          |       |     |
| 授業計画         | <p>フランスの思想と文学の歴史をたどり、17世紀のデカルト、18世紀のルソー、19世紀のボードレールやランボー、20世紀のブルーストなどを参考にしながら、20世紀の構造主義の中でも特にジャック・ラカンの精神分析を考えたい。</p> <p>1 イントロダクション<br/> 2 デカルト<br/> 3 ルソー<br/> 4 ボードレール<br/> 5 ランボー<br/> 6 プルースト<br/> 7 ソシュール<br/> 8 ラカン<br/> 9 ラカン<br/> 10 ラカン<br/> 11 学生報告<br/> 12 学生報告<br/> 13 学生報告<br/> 14 学生報告<br/> 15 まとめ</p> |        |             |          |       |     |
| 各科目の目標(達成水準) | フランスの思想と文学を通して構造主義やラカンの精神分析に見方や考え方を身につける。  |        |             |          |       |     |
| 参考文献等        | 必要に応じて授業中に指示する。  |        |             |          |       |     |
| 教科書          | 特になし。  |        |             |          |       |     |
| 成績評価の基準と方法   | 授業中の報告。最終レポート。   |        |             |          |       |     |

|              |   |        |           |          |     |       |
|--------------|---|--------|-----------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12710   | 授業題目   | イギリス詩学論特論 |          | 単位数 | 2単位   |
| 授業種別         | 講義  | 履修開始年次 | 1         | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 関 良子  |        | 担当教員所属    | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |   |        |           |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 19世紀イギリス文化・文学に見られる中世主義の研究<br>英国の文学・芸術・文化に表出された時代表象に関する研究  |        |           |          |     |       |
| 授業計画         | <p>14世紀チョーサーから20世紀モダニズム詩人、21世紀現代詩人に至るまでの、英語で書かれた詩をいくつか鑑賞し、イギリス詩学が時代を経てどのように変化していったかを辿る。また、英語の文体の変遷をも視野に入れる。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション</li> <li>2. 中世詩人: ジェフリー・チョーサー</li> <li>3. ルネサンス詩人: ウィリアム・シェイクスピア、フィリップ・シドニー、エドモンド・スペンサー</li> <li>4. ルネサンス詩人: ウィリアム・シェイクスピア、フィリップ・シドニー、エドモンド・スペンサー</li> <li>5. 形而上詩人: ジョン・ダン、ジョージ・ハーバート、アンドリュー・マーヴェル</li> <li>6. 形而上詩人: ジョン・ダン、ジョージ・ハーバート、アンドリュー・マーヴェル</li> <li>7. 新古典主義詩人: アレクサンダー・ポープ、ジョン・ドライデン</li> <li>8. 新古典主義詩人: アレクサンダー・ポープ、ジョン・ドライデン</li> <li>9. ロマン主義詩人: W・ブレイク、W・ワーズワース、J・キーツ、P・B・シェリー</li> <li>10. ロマン主義詩人: W・ブレイク、W・ワーズワース、J・キーツ、P・B・シェリー</li> <li>11. ヴィクトリア朝詩人: アルフレッド・テニスン、ロバート・ブラウニング、マシュー・アーノルド</li> <li>12. 唯美主義詩人: A・C・スウィンバーン、オスカー・ワイルド、W・B・イェイツ</li> <li>13. モダニズム詩人: T・S・エリオット、ディラン・トマス、エズラ・パウンド、E・E・カミングス</li> <li>14. 現代詩人: シェイマス・ヒーニー、シルヴィア・プラス、ポール・マルドゥーン</li> <li>15. 総括</li> </ol> |        |           |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 14世紀～21世紀に英語で書かれた詩を鑑賞することで、イギリス詩学の変遷を理解する</li> <li>・ 英語で詩を味読するための感性と英語読解能力を身につける</li> </ul>  |        |           |          |     |       |
| 参考文献等        | <p>松浦 暢 編訳『英詩の歓び―青春、そして夢と追憶』(平凡社ライブラリー, 2000年)<br/> 松浦 暢 編訳『英詩を愉しむ―光と風と夢』(平凡社ライブラリー, 1997年)<br/> その他、随時紹介する。</p>  |        |           |          |     |       |
| 教科書          | <p>平井正穂 編『イギリス名詩選』(岩波文庫, 1990年)<br/> 亀井俊介, 川本皓嗣 編『アメリカ名詩選』(岩波文庫, 1993年)<br/> 加えて、ハンドアウトを配布する。</p>   |        |           |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | <p>授業時のディスカッションへの積極的な貢献(30%)<br/> 期末試験(70%)</p>   |        |           |          |     |       |

|              |   |        |            |          |     |       |
|--------------|---|--------|------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12751   | 授業題目   | アメリカ文学論演習I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 1          | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 藤吉 清次郎  |        | 担当教員所属     | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |   |        |            |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 人種、宗教、ジェンダーから観るアメリカ小説についての研究  |        |            |          |     |       |
| 授業計画         | <p>アメリカ文学を代表する作品(ホーソン、メルヴィル、フォークナー、モリソン、マラマッドなど)を題材にアメリカ文学・文化の特質を学ぶ。この授業では、アメリカ北部作家、南部作家、西部作家はもちろんのこと、ユダヤ系、アフリカ系、アジア系などの作家の作品を講読することによって、アメリカ文学についての全般的な基礎知識の習得を目指す。授業では研究発表とディスカッションを行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. イントロダクション</li> <li>2. Invisible Man( Ralph Ellison)</li> <li>3. The Assistantの前半部(Malamud)</li> <li>4. The Assistantの後半部</li> <li>5. Belovedの前半部(Morrison)</li> <li>6. Belovedの後半部</li> <li>7. The Sot-Weed Factorの前半部(Barth)</li> <li>8. The Sot- Weed Factorの後半部</li> <li>9. Giovanni's Room(Baldwin)</li> <li>10. Catch-22(Heller)</li> <li>11. City of Glass (Auster)</li> <li>12. White Noiseの前半部(Dellio)</li> <li>13. White Noiseの後半部</li> <li>14. アフリカ系作家の評論講読</li> <li>15. ユダヤ系作家の評論講読</li> </ol> |        |            |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 1. 英語の読解力を養成する。2. アメリカ文学作品への理解を深める。3. 批評力を養成する。   |        |            |          |     |       |
| 参考文献等        | The Cambridge History of American Literatureのシリーズ   |        |            |          |     |       |
| 教科書          | 第一回目の授業で説明するが、テキストにはノートン版のアンソロジーを使う。  |        |            |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 授業での貢献度(十分な予習と授業での発言)と課題・レポートによって総合的に判断する。  |        |            |          |     |       |

|              |  |        |             |          |     |       |
|--------------|--|--------|-------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12752  | 授業題目   | アメリカ文学論演習II |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 2           | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 藤吉 清次郎   |        | 担当教員所属      | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |  |        |             |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 人種、宗教、ジェンダーから観るアメリカ小説についての研究   |        |             |          |     |       |
| 授業計画         | <p>アメリカ文学を代表する作品を緻密に読解することによって、アメリカ文学の本質に迫りたい。テキストばかりでなく、そのテキストを生み出した時代背景(時代的な文脈)にも十分な検証を加える。具体的には、北部(メルヴィル)、西部(トゥエイン)、南部(フォークナー、オコナー)、現代作家(エリクソン)などの作品を読むが、その際文学批評力も養成したい。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1.イントロダクション</li> <li>2.Adventures of Huckleberry Finn の前半部</li> <li>3.Adventures of Huckleberry Finnの後半部</li> <li>4. Tours of the Black Clockの前半部</li> <li>5. Tours of the Black Clockの後半部</li> <li>6. Arc d' X の前半部</li> <li>7. Arc d' X の後半部</li> <li>8. Light in August の前半部</li> <li>9. Light in August の後半部</li> <li>10. Wise Blood の前半部</li> <li>11. Wise Blood の後半部</li> <li>12. Moby-Dick の主要部分の抜粋</li> <li>13"Benito Cereno"</li> <li>14."Bartleby"</li> <li>15.まとめ</li> </ol> |        |             |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 1. 英文を正確に読む力を養成する。2. アメリカ文学作品への理解を深める。3. 批評力を養成する。   |        |             |          |     |       |
| 参考文献等        | The Cambridge History of American Literature のシリーズ   |        |             |          |     |       |
| 教科書          | 第一回目の授業で説明するが、ノートン版のアンソロジーを使う予定である。  |        |             |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 授業への貢献度(十分な予習と授業での発言)と課題・レポートによって総合的に判断する。   |        |             |          |     |       |

|              |  |        |            |          |     |       |
|--------------|--|--------|------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12755  | 授業題目   | イギリス文学論演習I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 1          | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 宗 洋  |        | 担当教員所属     | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 特になし   |        |            |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | ヴィクトリア朝からモダニズムの時期におけるイギリス文学文化  |        |            |          |     |       |
| 授業計画         | <p>Evelyn Waughの<i>Decline and Fall</i>を精読する。担当者はあらかじめ、指定された箇所の訳を教員にE-mailで提出しておくこと。授業はその翻訳の妥当性等を参加者で議論していく。授業では英文翻訳において必要な辞書類、参考書類等も指示する。また学生には、<i>Decline and Fall</i>に関する批評の発表もおこなってもらい、それも参加学生との間で議論する。学期末には4000字のレポートを提出してもらう。おおよその進度は次のとおり。</p> <p>第1回イントロダクション、<br/> 第2回Vocation、<br/> 第3回Lanabba Castle、<br/> 第4回Captain Grimes、<br/> 第5回Mr Prenndergast、<br/> 第6回Discipline、<br/> 第7回Conduct、<br/> 第8回Philbrick、<br/> 第9回The Sports、<br/> 第10回The Sports-continued、<br/> 第11回Post Mortem、<br/> 第12回Philbrick-continued、<br/> 第13回The Agony of Captain Grimes、<br/> 第14回The Passing of a Public School Man、<br/> 第15回King's Thursday</p> |        |            |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 英語の精読技術の向上、文学作品の批評能力の向上  |        |            |          |     |       |
| 参考文献等        | ここでは書ききれないので、授業で指示する。  |        |            |          |     |       |
| 教科書          | Evelyn Waugh, <i>Decline and Fall</i> . Penguin Books  |        |            |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 授業への貢献度(出席含む)、発表内容、学期末の4000字のレポートの内容を総合して評価する。   |        |            |          |     |       |

|              |  |        |             |          |     |       |
|--------------|--|--------|-------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12756  | 授業題目   | イギリス文学論演習II |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 2           | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 宗 洋  |        | 担当教員所属      | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 特になし   |        |             |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | ヴィクトリア朝からモダニズムの時期におけるイギリス文学文化  |        |             |          |     |       |
| 授業計画         | <p>Virginia Woolf, <i>Mrs Dalloway</i>を精読する。担当者はあらかじめ、指定された箇所の訳を教員にE-mailで提出しておくこと。授業はその翻訳の妥当性等を参加者で議論していく。授業では英文翻訳において必要な辞書類、参考書類等も指示する。また学生には、<i>Mrs Dalloway</i>に関する批評の発表もおこなってもらい、それも参加学生との間で議論する。学期末には4000字のレポートを提出してもらう。おおよその進度は次のとおりである。</p> <p>第1回イントロダクション、<br/> 第2回5ページ終わりまで、<br/> 第3回10ページ終わりまで、<br/> 第4回15ページ終わりまで、<br/> 第5回20ページ終わりまで、<br/> 第6回25ページ終わりまで、<br/> 第7回30ページ終わりまで、<br/> 第8回35ページ終わりまで、<br/> 第9回40ページ終わりまで、<br/> 第10回45ページ終わりまで、<br/> 第11回50ページ終わりまで、<br/> 第12回55ページ終わりまで、<br/> 第13回60ページ終わりまで、<br/> 第14回65ページ終わりまで、<br/> 第15回70ページ終わりまで</p> |        |             |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 英語の精読技術の向上、文学作品の批評能力の向上  |        |             |          |     |       |
| 参考文献等        | ここでは書ききれないので、授業で指示する。  |        |             |          |     |       |
| 教科書          | Virginia Woolf, <i>Mrs Dalloway</i> with an Introduction and Notes by Elaine Showalter. Penguin Classics   |        |             |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 授業への貢献度(出席含む)、発表内容、学期末の4000字のレポートの内容を総合して評価する。   |        |             |          |     |       |

|              |   |        |            |          |     |       |
|--------------|---|--------|------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12759   | 授業題目   | 西洋思想文化論演習Ⅰ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 1          | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 高橋 克己   |        | 担当教員所属     | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 健康第一を旨に体調を整え授業を休まないよう努力する点  |        |            |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 西洋思想史   |        |            |          |     |       |
| 授業計画         | <p>ΛΟΓΟΣやΝΟΥΣやΥΛΗやΦΥΣΙΣ等に関連する古代ギリシア語・ラテン語文献(ヘレニズム期から西ローマ帝国滅亡476年頃まで)に触れてゆく。例えば、ヘーラクレイトスのΛΟΓΟΣ(出典:『ディオゲネース・ラーエルティオス』9・7-10)、プラトーン著『ティーマイオス』27C以下の創世神話(特に48AのΑΝΑΓΚΗとΝΟΥΣ)、ストア派ゼーノンのΛΟΓΟΣやΥΛΗやΦΥΣΙΣ(出典:『ディオゲネース・ラーエルティオス』7・52以下)、ヘブライ語聖書に収録されなかった『70人訳ギリシア語聖書』所収『知恵(の書)』9・1のΛΟΓΟΣ、これに影響され、かつプラトーン哲学を聖書解釈に活用したユダヤ教徒ピロンの『創世記註解』24の「神のΛΟΓΟΣ」等々。以上以外にもプラトーン学派ブルータルコス著『イーシスとオシーリス』372E-373CのΛΟΓΟΣやΥΛΗ、『ヘルメース文書』1の「神のΛΟΓΟΣ」やΝΟΥΣやΥΛΗやΦΥΣΙΣ、プローティエーノスの『エネアデス』3・5・7-9のΛΟΓΟΣやΝΟΥΣやΥΛΗ、アウグスティヌス著『告白』7・9のΛΟΓΟΣ(verbum)や『告白』11.5のΥΛΗ(materia)等々にも話題を広げる。</p> <p>(1)ΛΟΓΟΣやΝΟΥΣやΥΛΗやΦΥΣΙΣ等に関連する古代ギリシア語文献(ヘレニズム期から西ローマ帝国滅亡476年頃まで)紹介。<br/> (2)ΛΟΓΟΣやΝΟΥΣやΥΛΗやΦΥΣΙΣ等に関連する古代ラテン語文献(ヘレニズム期から西ローマ帝国滅亡476年頃まで)紹介。<br/> (3)ヘーラクレイトスのΛΟΓΟΣ・その1(出典:『ディオゲネース・ラーエルティオス』9・7)読解。<br/> (4)ヘーラクレイトスのΛΟΓΟΣ・その2(出典:『ディオゲネース・ラーエルティオス』9・8)読解。<br/> (5)ヘーラクレイトスのΛΟΓΟΣ・その3(出典:『ディオゲネース・ラーエルティオス』9・9)読解。<br/> (6)ヘーラクレイトスのΛΟΓΟΣ・その4(出典:『ディオゲネース・ラーエルティオス』9・10)読解。<br/> (7)プラトーン著『ティーマイオス』27C以下の創世神話を読解(特に48AのΑΝΑΓΚΗとΝΟΥΣを中心に)。<br/> (8)ストア派ゼーノンのΛΟΓΟΣやΥΛΗやΦΥΣΙΣ(出典:『ディオゲネース・ラーエルティオス』7・52ff.)読解。<br/> (9)ヘブライ語聖書に収録されなかった『70人訳ギリシア語聖書』所収『知恵(の書)』9・1読解(ΛΟΓΟΣを中心に)。<br/> (10)『ヘルメース文書』1読解(「神のΛΟΓΟΣ」やΝΟΥΣやΥΛΗやΦΥΣΙΣを中心に)。<br/> (11)プローティエーノス著『エネアデス』3・5・7読解(ΛΟΓΟΣやΝΟΥΣやΥΛΗを中心に)。<br/> (12)プローティエーノス著『エネアデス』3・5・8読解(ΛΟΓΟΣやΝΟΥΣやΥΛΗを中心に)。<br/> (13)プローティエーノス著『エネアデス』3・5・9読解(ΛΟΓΟΣやΝΟΥΣやΥΛΗを中心に)。<br/> (14)アウグスティヌス著『告白』7・9読解(ΛΟΓΟΣ:verbumを中心に)。<br/> (15)アウグスティヌス著『告白』11.5読解(ΥΛΗ:materiaを中心に)。</p> |        |            |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | ヘレニズム期から西ローマ帝国滅亡476年頃までの西洋思想の基本概念を学ぶ  |        |            |          |     |       |
| 参考文献等        | 授業計画の文面に示された原典ギリシア語・ラテン語の文献   |        |            |          |     |       |
| 教科書          | 授業計画の文面に示された原典ギリシア語・ラテン語の和訳文献   |        |            |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 根気良く授業に出席し、毎回学習する内容を自分できちんと整理してゆく能力を評価。   |        |            |          |     |       |

|              |   |        |            |          |     |       |
|--------------|---|--------|------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12760   | 授業題目   | 西洋思想文化論演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 2          | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 高橋 克己   |        | 担当教員所属     | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 健康第一を旨に体調を整え授業を休まないよう努力する点  |        |            |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 西洋思想史   |        |            |          |     |       |
| 授業計画         | <p>いきなり原典ギリシア語は登攀困難で学生なら誰でも尻込みするので、まず定評ある英訳(1913年刊・希英対訳Loeb古典叢書『ユリアーヌス作品集:Works』第1巻・353頁以下奇数頁435頁迄)を礎にして内容を整理する所から始める。この作業ですら既に、専ら和訳文献のみ読んで手際よく論文を書く今日の慣行に馴染んだ頭脳には相当手間がかかり、格好の基礎訓練となる。この土台を踏まえ、『ヘーリオス頌』の重要な文脈に見当をつけ、この要所を一步一步ギリシア語で押さえながら、原典(1964年刊・希仏対訳Budé古典叢書『ユリアーヌス全集:OEvres complètes』第2巻・第2部・100頁から138頁の右段)の理解を深めてゆく。例えば、NOEΠON(ノエロン)とかMEΣON(メソン)などの鍵語を留意する。</p> <p>(1)新プラトーン学派イアムプリコスの影響下にあった4世紀中葉の(あくまで体制キリスト教側から見た)背教者ユリアーヌス・通観その1(和訳ギボン著ローマ史21章)。<br/> (2)ユリアーヌス・通観その2(和訳ギボン著ローマ史22章)。<br/> (3)ユリアーヌス・通観その3(和訳ギボン著ローマ史23章)。<br/> (4)ユリアーヌス・通観その4(和訳ギボン著ローマ史24章)。<br/> (5)ユリアーヌスの主著『ヘーリオス頌』(EΙΣΤΟΝΒΑΣΙΛΕΑΗΛΙΟΝ)希英対訳(1913年刊・希英対訳Loeb古典叢書『ユリアーヌス作品集:Works』第1巻・352頁-359頁・読解)。<br/> (6)『ヘーリオス頌』希英対訳『ユリアーヌス作品集』第1巻・360頁-367頁・読解。<br/> (7)『ヘーリオス頌』希英対訳『ユリアーヌス作品集』第1巻・368頁-375頁・読解。<br/> (8)『ヘーリオス頌』希英対訳『ユリアーヌス作品集』第1巻・376頁-383頁・読解。<br/> (9)『ヘーリオス頌』希英対訳『ユリアーヌス作品集』第1巻・384頁-391頁・読解。<br/> (10)『ヘーリオス頌』希英対訳『ユリアーヌス作品集』第1巻・392頁-399頁・読解。<br/> (11)『ヘーリオス頌』希英対訳『ユリアーヌス作品集』第1巻・400頁-407頁・読解。<br/> (12)『ヘーリオス頌』希英対訳『ユリアーヌス作品集』第1巻・408頁-415頁・読解。<br/> (13)『ヘーリオス頌』希英対訳『ユリアーヌス作品集』第1巻・416頁-425頁・読解。<br/> (14)『ヘーリオス頌』希英対訳『ユリアーヌス作品集』第1巻・426頁-435頁・読解。<br/> (15)ホメーロス著『イーリアス』第23歌・第574句「メソン」・アリストテレーズ著『ニーコマコス倫理学』(1106B「メソテース」・1132A「メソン」)・古代ギリシア語70人訳聖書『申命記』5・5「メソン」・新約聖書ギリシア語原典の「メソテース」・読解</p> |        |            |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | ヘレニズム期から西ローマ帝国滅亡476年頃までの西洋思想の基本概念を踏まえて、ユリアーヌス著『ヘーリオス頌』の理解を深める。  |        |            |          |     |       |
| 参考文献等        | 授業計画の文面に示された原典ギリシア語文献と、その英訳。  |        |            |          |     |       |
| 教科書          | 授業計画の文面に示された原典ギリシア語文献と、その英訳。  |        |            |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 根気良く授業に出席し、毎回学習する内容を自分できちんと整理してゆく能力を評価。   |        |            |          |     |       |

|              |   |        |             |          |     |       |
|--------------|---|--------|-------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12763   | 授業題目   | 現代大衆文化論演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 1           | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 山下 興作   |        | 担当教員所属      | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 特になし  |        |             |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 大衆文化 演劇論 アートマネジメント  |        |             |          |     |       |
| 授業計画         | <p>主としてアメリカの映画、演劇、音楽、マンガ等に代表される現代大衆文化の具体的事例について、討論を行う。それにより、異文化に対する理解力を深化すると同時に、日本の身近な事例との比較を通じ、国あるいは文化圏を超えた大衆文化の特質について考える。</p> <p>本年は特に映画作品への様々なアプローチ方法を学んだ後、学生によるその実践を試みたい。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 人物伝的アプローチとは</li> <li>2. 人物伝的アプローチの実践</li> <li>3. 作品成立史的アプローチとは</li> <li>4. 作品成立史的アプローチの実践</li> <li>5. 作家主義的アプローチとは</li> <li>6. 作家主義的アプローチの実践</li> <li>7. 物語論的アプローチとは</li> <li>8. 物語論的アプローチの実践</li> <li>9. スター論的アプローチとは</li> <li>10. スター論的アプローチの実践</li> <li>11. 演技論的アプローチとは</li> <li>12. 演技論的アプローチの実践</li> <li>13. 社会文化論的アプローチとは</li> <li>14. 社会文化論的アプローチの実践</li> <li>15. まとめ</li> </ol> |        |             |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 日米他の現代大衆文化の基礎的な知見を踏まえ、具体的な事例について論理的に議論できる力を養う   |        |             |          |     |       |
| 参考文献等        | 授業中に、おって指示する  |        |             |          |     |       |
| 教科書          | 必要に応じて、プリントを配布する  |        |             |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席状況、及び学期末に告示する課題の提出により評価する   |        |             |          |     |       |

|              |   |        |            |          |     |       |
|--------------|---|--------|------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12764   | 授業題目   | 現代大衆文化論演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 2          | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 山下 興作   |        | 担当教員所属     | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    | 特になし  |        |            |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 大衆文化 演劇論 アートマネジメント  |        |            |          |     |       |
| 授業計画         | <p>現代大衆文化論演習Ⅰによる成果を踏まえながら、具体的事例についての学生の調査報告に基づき、討論を行う。それにより、異文化に対する理解力をさらに深めるとともに、現代大衆文化の特質をより深く考察し、自らが生きる時代の特徴を明らかにする力を養う。</p> <p>本年は特にいくつかのハリウッド映画を中心にいくつかの作品をカルチュラル・スタディーズの観点から読み解いていく。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 家族 『ハリー・ポッターと賢者の石』</li> <li>2. アイデンティティ 『市民ケーン』</li> <li>3. 子供 『オリバー・ツイスト』</li> <li>4. 女性 『ピアノ・レッスン』</li> <li>5. セクシュアリティ 『M.バタフライ』</li> <li>6. 演劇 『恋に落ちシェイクスピア』</li> <li>7. メディア 『トゥルーマン・ショウ』</li> <li>8. スポーツ 『ミリオンダラー・ベイビー』</li> <li>9. 音楽 『戦場のピアニスト』</li> <li>10. ホロコースト 『シンドラーのリスト』</li> <li>11. 人種 『遠い夜明け』</li> <li>12. ディアスポラ 『パリ・テキサス』</li> <li>13. 暴力 『羊たちの沈黙』</li> <li>14. クイア 『エイリアン3』</li> <li>15. サイバーパンク 『ブレードランナー』</li> </ol> |        |            |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | 日米他の現代大衆文化の具体的な事例について論理的かつ洞察力に富む議論ができる力を養う  |        |            |          |     |       |
| 参考文献等        | 授業中に、おって指示する  |        |            |          |     |       |
| 教科書          | 必要に応じて、プリントを配布する  |        |            |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 出席状況、及び学期末に告示する課題の提出により評価する   |        |            |          |     |       |

|            |  |        |               |          |     |       |
|------------|--|--------|---------------|----------|-----|-------|
| 授業コード      | 12765  | 授業題目   | フランス文芸思潮論演習 I |          | 単位数 | 2単位   |
| 授業種別       | 演習   | 履修開始年次 | 1             | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名      | 大西 宗夫  |        | 担当教員所属        | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点  |  |        |               |          |     |       |
| 教員研究テーマ    | フランスの思想と文学   |        |               |          |     |       |
| 授業計画       | <p>フランスの思想と文学の重要なテキストを原文で実際に読み進める。フランス語の読解力を向上させるとともに、フランスの思想や文学についての洞察を深める。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 インTRODクシヨ</li> <li>2 学生発表1</li> <li>3 学生発表2</li> <li>4 学生発表3</li> <li>5 学生発表4</li> <li>6 学生発表5</li> <li>7 学生発表6</li> <li>8 学生発表7</li> <li>9 学生発表8</li> <li>10 学生発表9</li> <li>11 学生発表10</li> <li>12 学生発表11</li> <li>13 学生発表12</li> <li>14 学生発表13</li> <li>15 まとめ</li> </ol> |        |               |          |     |       |
| 各科目の目標     | フランスの思想や文学のテキストが原文で読め、内容を正確に理解できるようにする。  |        |               |          |     |       |
| 参考文献等      | 授業中に必要に応じて指示する。  |        |               |          |     |       |
| 教科書        | プリント配布   |        |               |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法 | 授業中の発表   |        |               |          |     |       |

|              |  |        |              |          |     |       |
|--------------|--|--------|--------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12766  | 授業題目   | フランス文芸思潮論演習Ⅱ |          | 単位数 | 2単位   |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 2            | 開講時期     | 1   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 大西 宗夫  |        | 担当教員所属       | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |  |        |              |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | フランスの思想と文学。  |        |              |          |     |       |
| 授業計画         | <p>フランスの思想や文学のテキストを原文で読み、より高度な読解力、理解力をめざす。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 イントロダクション</li> <li>2 学生発表1</li> <li>3 学生発表2</li> <li>4 学生発表3</li> <li>5 学生発表4</li> <li>6 学生発表5</li> <li>7 学生発表6</li> <li>8 学生発表7</li> <li>9 学生発表8</li> <li>10 学生発表9</li> <li>11 学生発表10</li> <li>12 学生発表11</li> <li>13 学生発表12</li> <li>14 学生発表13</li> <li>15 まとめ</li> </ol> |        |              |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | フランス語の読解力を向上させ、フランスの思想や文学の正確な理解力を養う。   |        |              |          |     |       |
| 参考文献等        | 授業中に必要に応じて指示。  |        |              |          |     |       |
| 教科書          | プリント配布   |        |              |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | 授業中の発表。  |        |              |          |     |       |

|              |  |        |             |          |     |       |
|--------------|--|--------|-------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12767  | 授業題目   | イギリス詩学論演習 I |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習   | 履修開始年次 | 1           | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 関 良子   |        | 担当教員所属      | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |  |        |             |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 19世紀イギリス文化・文学に見られる中世主義の研究<br>英国の文学・芸術・文化に表出された時代表象に関する研究   |        |             |          |     |       |
| 授業計画         | <p>ルネサンス、王政復古期、新古典主義、ロマン主義の各時代における詩学論議を精読し、時代ごとに変遷する詩の社会的役割を考察する。研究発表とディスカッションを中心に授業を進める。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション</li> <li>2. Philip Sidney, "Defence of Poesie" (1595)</li> <li>3. Philip Sidney, "Defence of Poesie" (1595)</li> <li>4. Philip Sidney, "Defence of Poesie" (1595)</li> <li>5. John Dryden, "An Essay of Dramatick Poesie" (1688)</li> <li>6. John Dryden, "An Essay of Dramatick Poesie" (1688)</li> <li>7. John Dryden, "An Essay of Dramatick Poesie" (1688)</li> <li>8. Alexander Pope, "Essay on Criticism" (1711)</li> <li>9. Alexander Pope, "Essay on Criticism" (1711)</li> <li>10. William Wordsworth &amp; Samuel Taylor Coleridge, Preface to the "Lyrical Ballads" (1800)</li> <li>11. William Wordsworth &amp; Samuel Taylor Coleridge, Preface to the "Lyrical Ballads" (1800)</li> <li>12. William Wordsworth &amp; Samuel Taylor Coleridge, Preface to the "Lyrical Ballads" (1800)</li> <li>13. Percy Bysshe Shelley, "A Defence of Poetry" (1840)</li> <li>14. Percy Bysshe Shelley, "A Defence of Poetry" (1840)</li> <li>15. 総括</li> </ol> |        |             |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ イギリス詩論を歴史的に考察することで、時代ごとに変遷する詩の社会的役割を理解する</li> <li>・ それをもとに、現代における文学・文化の社会的役割について、自分自身の意見を形成する</li> </ul>  |        |             |          |     |       |
| 参考文献等        | 随時紹介する。  |        |             |          |     |       |
| 教科書          | ハンドアウトを配布する。(The Norton Anthology of English Literature / 2vols.を使用)   |        |             |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | <p>授業時の研究発表(30%)<br/> 授業時のディスカッションへの積極的な貢献(20%)<br/> 期末レポート(50%)</p>   |        |             |          |     |       |

|              |   |        |            |          |     |       |
|--------------|---|--------|------------|----------|-----|-------|
| 授業コード        | 12768   | 授業題目   | イギリス詩学論演習Ⅱ |          | 単位数 | 2     |
| 授業種別         | 演習  | 履修開始年次 | 1          | 開講時期     | 2   | 曜日・時限 |
| 担当教員名        | 関 良子  |        | 担当教員所属     | 人文社会科学専攻 |     |       |
| 履修における注意点    |   |        |            |          |     |       |
| 教員研究テーマ      | 19世紀イギリス文化・文学に見られる中世主義の研究<br>英国の文学・芸術・文化に表出された時代表象に関する研究  |        |            |          |     |       |
| 授業計画         | <p>19世紀から20世紀にかけての詩学論議を精読し、時代ごとに変遷する詩の社会的役割を考察する。研究発表とディスカッションを中心に授業を進める。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション</li> <li>2. Thomas Love Peacock, "The Four Ages of Poetry" (1820)</li> <li>3. Matthew Arnold, Preface to the 1853 Poems</li> <li>4. Matthew Arnold, Preface to the 1853 Poems</li> <li>5. Robert Buchanan, "The Fleshly School of Poetry" (1871)</li> <li>6. Robert Buchanan, "The Fleshly School of Poetry" (1871)</li> <li>7. A. C. Swinburne, "Under the Microscope" (1872)</li> <li>8. A. C. Swinburne, "Under the Microscope" (1872)</li> <li>9. Walter Pater, Conclusion to "The Renaissance" (1873)</li> <li>10. Oscar Wilde, "The Decay of Lying" (1889)</li> <li>11. T. S. Eliot, "Tradition and the Individual Talent" (1920)</li> <li>12. T. S. Eliot, "Tradition and the Individual Talent" (1920)</li> <li>13. F. R. Leavis, "New Bearings in English Poetry" (1932)</li> <li>14. F. R. Leavis, "New Bearings in English Poetry" (1932)</li> <li>15. 総括</li> </ol> |        |            |          |     |       |
| 各科目の目標(達成水準) | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ イギリス詩論を歴史的に考察することで、時代ごとに変遷する詩の社会的役割を理解する</li> <li>・ それをもとに、現代における文学・文化の社会的役割について、自分自身の意見を形成する</li> </ul>   |        |            |          |     |       |
| 参考文献等        | 随時紹介する。   |        |            |          |     |       |
| 教科書          | ハンドアウトを配布する。( <i>The Norton Anthology of English Literature</i> / 2vols.を使用)  |        |            |          |     |       |
| 成績評価の基準と方法   | <p>授業時の研究発表(30%)<br/> 授業時のディスカッションへの積極的な貢献(20%)<br/> 期末レポート(50%)</p>  |        |            |          |     |       |